

対人援助学の里程標

サトウタツヤ

(立命館大学)



なんの因果か因縁か、学問の歴史に興味をもち、研究を始めて早くも 20 年。対人援助学会のメルマガでも歴史を連載することになりました。

動機の一つは歴史というものに興味を持つ人が増えてほしい、ということにあります。多くの人は中学や高校の歴史の授業の結果アレルギーをもっているようで、歴史と聞くだけで拒絶反応を示したりします。年号や出来事を覚えるだけなんて面白くないし大変、というわけです。この連載では、細かな年号にこだわるのではなく、出来事の大きな流れについて考えたり共感したり時には反感を感じてほしいと思います。

最近、私は臨床心理学史の執筆を行っているのですが(書き始めたのは 5 年前! 終わらない・・・orz)、臨床心理学史の論文や本を読んでいると、前史がシャルコーからはじまることが多いということに気づきました。なぜか。フロイトの精神分析とその流れをくむ心理療法が臨床心理学の主流だという意識が強いからです。しかし、このような考え方は過去のものになるべきかと思われまふ。フロイトの精神分析が多くの功績をあげたことは否定しませんが、現在の臨床心理学は決して精神分析だけで語ることはできないはずでふ。

そこで初回はライトナー・ウィトマー (Lightner Witmer; 1867 - 1956) をとりあげてみましょう。彼こ

そが Psychological clinic を創設し、Clinical psychology という言葉を作り上げた人だからです。

ウィトマーは 1867 年 6 月 28 日、フィラデルフィアに生まれました。アメリカでは南北戦争 (American



Civil War, 1861 - 1865) 直後、日本で言えば明治に改元される直前ということになります。ペンシルベニア大学を 21 才で卒業したあと、二年間教職につきました。その後大学院に入学を決意しましたが、その時の専攻は哲学で

した。ところが、ジェームズ・マクィーン・キャテルが赴任してきたことにより、専攻を心理学に変更しました。このキャテルという人物はドイツのヴントのもとで学び、個人差の研究を心理学に導入したことで知られています。ところが、そのキャテルがコロンビア大学に異動してしまい、ウィトマーは「ハシゴを外された」状態に陥ります。そこで彼が選んだのがドイツへの留学でした。ライプツィヒ大学に留学し実験心理学を学び博士号を取得したのです (1892)。帰国した彼はキャテルが異動した後のペンシルベニア大学に戻り心理学を教えることになりました。1894 年には児童心理学の講義を担当したことが分かっています。

そして 1896 年には同大学に世界初の

「psychological clinic（心理学的クリニック）」を創設したのです。そして大学院生の訓練システムも整えていきました。さらに、1907年には『Psychological Clinic』という雑誌を創刊するにいたります。

彼は「clinical」な心理学にどのような意味を込めていたのでしょうか。彼が自ら『Psychological Clinic』の創刊号に執筆した論文（Witmer, 1907）を見てみましょう。

ウィトマーは「clinical」という語を臨床医学から借りたものであるとした上で、医学において「clinical」は、単に場所を示す言葉ではなく、それ以前の哲学的・説教的な医学から脱却する時の方法を示していたと述べています。医学においても患者さんの状態を顧みないで診察治療をしていた時期があったのであり、それを打破するための「clinical」概念だったのです。心理学においても「clinical」が重要だということを彼は以下のように述べます。

While the term ‘clinical’ has been borrowed from medicine, clinical psychology is not a medical psychology.

これを日本語にしてみれば

‘臨床’という語は医学から借りてきた語ではあるが、臨床心理学は医学的心理学とは異なる。

ということになります。しかし、この文章をどう理解するか、チマチマした話ですが、この文書にこそ、ウィトマーの心意気が現れているのです。

アメリカにおける医学的心理学というのは、今日では精神医学に合流してしまった流れです。従って、ウィトマーは医学とは一線を画したいと思っていたと思われます。実際、彼が対象にしていたのは失読症もしくは読字障害の子どもたちでした。

さらに臨床心理学は、哲学的思索に由来する心理学的・教育学的原理への異議申し立てであり、実験室の結果を教室の子どもたちに直接に適用しようとする心理学への異議申し立てである（Witmer, 1907）。

という文章もあります。

これまで、ウィトマーの臨床心理学や心理学クリ

ニックはあまり評価されていませんでした。それは精神分析やカウンセリングという方法と少し異なっていたからだと思われます。対人援助という光のあてかたをするなら、もう一度、異なる評価が可能になるかもしれません。

Witmer, L. 1907 Clinical Psychology. Psychological Clinic, 1, 1-9.

写真の出典：ペンシルバニア大学アーカイブ

<http://www.archives.upenn.edu/home/archives.html>

対人援助学の里程標

2

サトウタツヤ

(立命館大学)



藤哉会(とうさいかい)の思い出 随伴性とは縁である

今回はモノローグ。

本稿を慶應義塾大学名誉教授・故佐藤方哉(さとうまさや)先生に捧げます。

多くの方がご存じの事故について改めて語ることにはしませんが、方哉先生は2010年8月23日(月)帰宅途中、京王新宿駅での不慮の事故により急逝されました。星槎大学長を務めていらっしゃいました。所属大学も違うし直接の弟子でもないし行動分析系と認知されてない私が、どこかに追悼文を発表する機会はないと思われそうです。なので「対人援助学の里程標」の第二回を謹んで方哉先生の追悼にあてたいと思います。これもまた、一つの対人援助学の里程標になると信じて。

私は学部・修士課程と育児の悩み研究をして

いましたが、大学院博士課程に入ってから関連研究や心理学というシステムに疑問を抱き、アンチ本質主義の一つの可能性としての行動分析に興味をもちました。折から、春木豊先生が東京都立大学(現・首都大学東京)の学部の非常勤講師に来ていたので畏友・渡邊芳之と共に受講。博士課程1年の時(1987年)です。その後、春木先生に紹介されて行動分析学会などに参加。佐藤方哉、茨木俊夫先生その他のみなさんの知己を得ることができました。その下の世代として、小野浩一、藤健一、望月昭、長谷川芳典、坂上貴之、山本淳一、杉山尚子の諸先生、若いところでは、中島定彦、武藤崇ほかの諸先生。

佐藤方哉先生には、名前の漢字表記が似ていることを殊のほか喜んでいただき「藤哉会(とうさいかい)」を結成しました。「佐藤×哉」会です。渡邊芳之といっしょにご自宅に招かれるということもありました。ご自宅はピンクの洋館で書庫が立派だったことを覚えています。

渡邊芳之によれば、行動分析や動物実験について殆ど知らない私たちを方哉先生が慶應義塾大学の研究室見学に招いてくれたのがきっかけ。その後の酒席で若い私たちが「～はバカだ」「～の研究はひどい」という話をする「え～バカなんだ!」「あの人もバカなの?」と大層喜んでくださり、君たち面白いので家で飲もうということになったのだ、ということらしいです(ちなみに、日本大学名誉教授・大村政男先生ともこんな感じで仲良くしてもらうようになりました)。この時いっしょにいたのが現在関西学院大学にいる中島定彦。

また、1992年、同志社大学で行われた日本心理学会の際に行われた「基礎心理学会 VS 動物心理学会のソフトボール対抗戦」に方哉先生の代わりに出場したというようなことがありました(私は両学会の会員ではありませんが、名前の似ている私を代理に指定してくれたのです)。「名前が似てるから代わりに出てきて」みたいな感じでした。京都御所で行われたソフトボール大会に出場しました。ちなみに、この時、私は京都大学霊長類研究所の松沢哲郎さんを初めて間近で見たのです。レフティでフォームが実に決まっていました。このことは後にお会いした時に本人にも確認しましたが、確かに、このソフトボール対戦に松沢さんは出ていたとのこと。

さらに、行動科学会(だったか、その前身の異常行動研究会だったか)のウィンターカンファレンスの企画を一つ任されたときに、杉山尚子さんと共に(スキーもしないのに)参加してもらったのも良い思い出です。方哉先生は若手の勝手な企画に応えてくれたわけです。

その当時、行動分析学会や関連する学会において、動物実験をやらない理論系の人間は珍しかったということもあってか、多くの人に好意的に迎えてもらったと思っています。行動分析

学会で出会った藤健一、望月昭、武藤崇、のみなさんとは、何と後に同僚になりました。望月さんは当時、愛知県心身障害者コロニーにお勤めで、「マルモネット」なんてのをやってました。当時も今も変わらないといえば変わらない。今、対人援助学会にいるのも、このエッセイを書いているのも、元をただせばこうした随伴性のなせる業なのかもしれません。随伴性?なんのこっちゃ?という人はいないと思いますが、方哉先生はスキナーを追悼して、「自覚せざる仏教徒としてのスキナー ―随伴性とは縁である」という小文を『行動分析学研究』に寄稿しています。この小文の英語タイトルは「Contingency as "en": Skinner is an unaware Buddhist」です。Contingencyの訳が随伴性というのはおかしいではないか、ということ、方哉先生と話したことがあります。その時、丁寧に色々とおっしゃっていて、詳しくは覚えていませんが、訳すときに偶という文字を入れるべきだという人も(方哉先生も含めて)多かったのだけでも、結果的に随伴性という訳語が定着した、ということでした。今、Contingencyは偶有性と訳されている分野もあります。行動分析でもこの機会に、偶有性は無理でも、偶を入れた訳語を考えてもいいのかもしれません。

個人的にはあと一つ、ウソについて考察した論文(人は何をウソと考えるか)が好きですね。今、雨が降っているとして、それを知らずに、雨は降っていない、と言ったらウソになるか。今、雨が降っていないとして、それを知らずに、雨は降っていない、と言ったらウソになるか。ウソについて多角的に、言語行動分析的に考察した論文で、今でも時々学生に紹介したりしています。

学恩を受けた慶應義塾大学や帝京大学の学生や院生の皆さんから見れば「ふざけんなー!」という話かもしれません。ちょっとだけ名前が

似ているからって良い気になるな！みたいな。
しかし、方哉先生を始めとする多くの方々が、
見ず知らずの若かった私（と渡邊芳之）に対し
て与えてくれたご厚情というのは決して忘れる
ことはできないし、方哉先生を含む多くの人が、
出身大学などという小さなことは無視して、
色々と教えてくれたことには感謝の言葉しかあ
りません。現在の私のもとにも、突然見ず知ら
ずの人から「複線径路・等至性モデル（TEM）
について教えてください」みたいなメールが来
たりしますが、決して無視する気にはなれない
のは、かつて私が院生だった頃に接してくれた
多くの人々のことが私を作ってくれたと思って
いるからです。もちろん、私の恩師・詫摩武俊
先生を中心とする東京都立大学心理学研究室の
おおらかな雰囲気があったのことで、この
ことについて語ればまた長くなりますが、いず
れにせよ、所属する大学の人からしか教えを受
けてはいけない、というのでは「随伴性は縁で
ある」の精神に反します。科学社会学という学
問の中では、所属する大学以外のネットワーク
のことを「Invisible College（見えない大学）」
という概念で表します。まさにそうした環境で
自分の知りたいことを次々と最良の環境で学べ
たことを嬉しく懐かしく思います。立命館大学
の学部ゼミ（サトゼミ）のモットーである「緩
やかなネットワーク、軽やかなフットワーク」
というのも、方哉先生ほかのエスプリを受けて
いるのだと思います。

私個人のことについて言えば、心理学史や質
的心理学を推進することにも同じような
「Invisible College（見えない大学）」があっ
たわけですが、本稿でそれを語ると二倍三倍に
なりますので、いつか機会があれば、と思います。
この文章を読むみなさんが、所属機関、という
狭い枠に囚われずに、様々な活動ができる環境
に恵まれているならば、望外の幸せです。

次回は予告しておきます。次回はメアリー・
カバー・ジョーンズ。メアリー・ポピンズみた
いでリズムの良い名前です。行動療法の母、と
呼ばれている人です。対人援助学の里程標の第
二回で扱おうと思っていたのですが、あまりに
衝撃的なニュースが飛び込んできたので、追悼
文とさせていただき、メアリー・カバー・ジョ
ーンズについては次回ということにさせてくだ
さい。

改めて佐藤方哉先生のご冥福をお祈りいたし
ます。

はるか西方の極楽浄土でゆっくりお休みくだ
さい。時に、ナーガールジュナやヴィトゲンシ
ュタイン、そしてもちろんスキナーと、沈黙の
言葉を交わして。

関連文献

佐藤方哉 1991 自覚せざる仏教徒としての
スキナー：随伴性とは縁である 行動分析学
研究 5(2), 107

佐藤方哉 1996 人は何をウソと考えるか. 言
語, 25, 28-33.

サトウタツヤ・松原洋子・望月昭 2010 草
の根『対人援助学』——パソコン通信時代の研
究者と当事者の連携を振り返る 望月 昭・サト
ウ タツヤ・中村 正・武藤 崇 編『対人援助学
の可能性——「助ける科学」の創造と展開』,
福村出版

対人援助学の里程標

3

サトウタツヤ

(立命館大学)



メアリー・カバー・ジョーンズ.

行動療法の母

今回はメアリー・カバー・ジョーンズ。メアリー・ポピンズみたいでリズムの良い名前です。メアリー・カバー・ジョーンズ (Mary Cover Jones ; 1896 - 1987) は、Cover 家に生まれ、Mary という名を受けました。大学卒業後の 1919 年、ニューヨークで行われていた週末講座でワトソンの講義を受けました。この講義はワトソンの有名なアルバート坊やの実験も含んでいました。

ワトソンと共にこの実験を行い後に妻となるロザリー・レイナーはメアリーと同じ大学を出た友人でした。メアリーはこのワトソンの講義に触発されてコロンビア大学で修士号を得ることになります(1920)。同年結婚し、以後、メア

リー・カバー・ジョーンズと名乗ることになりました。

(図・若き日のメアリー)



メアリーは 1923 年から、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ（教育学部）の教育研究インスティテュートで研究助手となり、有名なピーター坊やの研究 (Jones, 1924) を行うことになります。この時、既にアカデミックな世界からは引退を余儀なくされていたワトソンが指導にあたりました。ワトソンはこの時期、コロンビア大学においてある財団の基金を得て児童研究のコンサルタントとして所属していたのです (Rutherford, 2001)。

さて、ピーターは白ウサギ恐怖であった。メアリーは様々な恐怖低減手続を用いていましたが、結果として最も有効だったのは「直接的条件づけ」、つまり、白ウサギと共に食べ物を提示することにより恐怖症が低減したと報告しました。ただしこの研究はそれほど注目されず、ウォルピの精力的な活動のもと行動療法が体系化されはじめた 1960 年代に注目を集めることになります。1970 年代にメアリーのことを「行動療法の母」と呼びはじめたのもウォルピでした。

さて、1927 年、メアリーは夫の異動に伴う形で、Institute for Child Welfare at the University of California の研究助手となり、Oakland Growth Study (OGS) colored the rest of career に従事し、生涯発達心理学の発展にも力をそそぎました。そして 1987 年にカリフォルニアで死去しました。



さて、三回ほど「対人援助学の里程標」というタイトルで歴史を書いてきましたが、今回で終了します。歴史は書いている量のわりに調べる時間がかかりすぎるのでエッセイにします。

「対人援助学&心理学の縦横無尽」というタイ

トルで時に歴史のことも書くことにしたいと思っています。相変わらずのご愛顧を。

文献

Jones, M.C. (1924). A laboratory study of fear: The case of Peter. *Pedagogical Seminary*, 31, 308-315.

Rutherford, A. (2001). Introduction to "A Laboratory Study of Fear: The Case of Peter" Mary Cover Jones (1924).

<http://psychclassics.asu.edu/Jones/intro.htm>

対人援助学&心理学の縦横無尽（１）

顔文字とエモティコン



サトウタツヤ@立命館大学

対人援助学の里程標から、タイトルを変更しました。タイトルを変えたら縦横無尽に書けるようになるかといえば、もちろん、そんな夢のようなことはありませんでした。苦しい時のビネ頼み（知能検査のアルフレッド・ビネのこと）とも思いましたが、それでは何のために、里程標という歴史がらみのタイトルから変えたのか分からないので、少し歴史を離れてみることにします。

文化心理学という領域があります。文化と人の相互影響過程を研究する領域です。北海道大学の結城雅樹先生が面白い実験をしています。下の図を見てください。



顔文字と呼ばれるものです。私の使っているワープロ・フロントエンドプロセッサ ATOK では「かおもじ」と入れると、<(^_^)>だったり(^_^)/だったり、登録されているほど、日本でも定着しています。英語圏ではエモティコン（Emoticon）と呼びます。感情＋アイコンということだと思います。

左と右で何が違うのでしょうか？顔の向き？もちろんそれもありますが、それよりも、顔の表情を何で作っているか、に注目してみてください。私たちが日頃見慣れている左の顔文字は目が笑っている。右側のエモティコンは口が笑っている。つまり、日本のものは目が笑い、英語圏のものは口が笑っているのです。先の結城先生たちは、いろいろな顔文字を日米の大学生に見せて、表情を評定してもらいました。左側の顔文字についての評定を見てみると、日本の大学生はうれしそうだと評定したのに対し、アメリカの大学生は、ニュートラル（中性）と評定したといえます。つまり、顔から何を読み取るかが文化によって異なると示唆されるのです。

次に一つ実際の写真を見てみましょう。この写真は 2010 年に慶應義塾大学で行われた日本パーソナリティ心理学会において、筆者の恩師である詫摩武俊先生とそのかつての門下生たちです。教え子といっても、それぞれ年をとっています。中央が詫摩先生です。こちらから見て右の男性は堀正先生（群馬大学）、手前左の男性は中村真先生（川村学園女子大

学)。堀先生は口元を見ると一文字に結んでいます、ピースサインをしてお茶目です。日本ではピースサインが笑顔の代わりなのかもしれません。中村先生は口を閉じ、しかし目を最大限の大きくあけてにこやかな表情を演出しています。詫摩先生は穏やかに微笑んでいます、やはり口を開けてはいません。一人だけ歯を見せているのが不肖の弟子たる私です。この年になっても歯を見せて「不肖ぶり」を発揮しています。中学の野球部で、「笑ってるんじゃない！」といって先輩からビンタされたことを思い出しましたが、それもこういう理由だったのでしょう。



もう一つ。次の写真はイタリアのコスプレイヤーです。今やコスプレは世界の文化。「ストリート・ファイター・2」から、チュン・リー。



可愛らしいけど、何かぎこちない。それはピースサイン。この方は、日本人が写真を撮る時に、口を開けていないこと、指を二本出すこと、について知識を持っているのでしょうか。だから、そうした方が「日本人らしくなる」と分かっているのだと思います。しかし、指を二本出せばいいってものではないし、目が笑ってない。だから、私たちが見ると不思議な感じに見えてしまうのではないのでしょうか。

文化は空気のようなモノだ、と言います。私たちは空気の存在に気づかないように、文化の存在には気づかない。しかし、今回のような比較をしてみると、確かに存在していることがわかります。比較文化心理学の研究はそうしたことを私たちに気づかせてくれます。ただし、比較文化心理学は二つの文化の差異をことさらに大きく見せてしまうという副作用があります。あまりに大きな差があるとその違いに絶望してしまうかもしれません。そもそも、私たちは最初からこうした文化を身につけていたわけではなく、成長過程で身につけてきたはずです。ですから、文化 A と文化 B がこう違う、というような研究だけではなく、その獲得を時間にそったプロセスとして描く研究が求められ始めています。そうした研究のことを「文化心理学」と呼ぶことがあります。ロシアの心理学者・ヴィゴツキーに遡るもので、コール、ワーチ、エンゲストローム、ヴァルシナーといった人たちが作っている流れです。比較に基づかない文化心理学の可能性は今後広がっていくでしょう。拙著『TEM で始める質的研究』も文化やプロセスを重視する流れの中で具体的な方法論を構築していこうとしている、と理解することが可能なのかもしれません。

文献

サトウタツヤ（編著） 2009 TEM で始める質的研究 誠信書房

Yuki et. al. 2007 Are the windows to the soul the same in the East and West? Cultural differences in using the eyes and mouth as cues to recognize emotions in Japan and the United States, Journal of Experimental Social Psychology, 43(2): 303-311.

HP <http://www.francescadani.com/cosplay/chunli/imagepages/image4.html>

対人援助学&心理学の縦横無尽(2)

大震災に思う

- 1)助動詞「る・らる」をめぐるポリティックス
- 2)単線性物語としてのナントカ神話



サトウタツヤ@立命館大学

対人援助学の里程標から、タイトルを変更して2回目。今回はやはり地震から連想したことを書かせてもらいます。

1) 助動詞「る・らる」を巡るポリティックス

3. 11の東日本大震災以降、私たちの認識が大きく変わったと言われる。そして、15年前におきた阪神・淡路大震災の時のことも様々な形で思い起こされ、語られることになった。

開催するかどうか慎重に検討された春の選抜高校野球大会では、創志学園高校（岡山）の野山慎介主将が選手宣誓をおこなった。

宣誓。

私たちは16年前、阪神・淡路大震災の年に生まれました。

今、東日本大震災で、多くの尊い命が奪われ、私たちの心は悲しみでいっぱいです。

被災地では、全ての方々が一丸となり、仲間とともに頑張っておられます。

人は仲間に支えられることで、大きな困難を乗り越えることができると信じています。

私たちに、今、できること。それはこの大会を精一杯元気を出して戦うことです。

「がんばろう！日本」

生かされている命に感謝し、全身全霊で、正々堂々とプレーすることを誓います。

平成23年3月23日

創志学園（岡山） 野山慎介主将

この宣誓に胸を熱くした人も多かったようである。

スポーツ選手・芸能人・一般の人を問わず、被災地の支援に立ち上がった。その際に「被災地の人を勇気づけられたら、元気づけられたら、うれしいです」というような物の言い方が物議をかもしかけた。上から目線だ、というのである。言葉の問題として非常に面白い。というのは助動詞「る、らる」は大きな変化のただ中にあるように思えるからである。「見れる」という表現は、「ら抜き言葉」として忌み嫌われた時期があった。しかし、今では定着しつつある。その結果、何がおきたか。

「る、らる」は受身・尊敬・自発・可能を表す助動詞であるとされるが、見るにおいては、見れる＝可能、見られる＝受身に分化したと考えられるのである。食べるも同様である。食べれる＝可能、食べられる＝受身である。今の子どもは、「**ちゃん、これ食べられるよ〜」などという自分が食べられてしまう、と思って怖がるというマンガがあった。私なども、映画だったか演劇だったかの席に関して「一番前で見られます」と書いてあるのをみて、むしろ自分が人から見られてしまうところを連想してしまったりした。

「自分の芸なり料理なり（その他なんでもいいのだが）で被災地の人を勇気づけられたら」という表現は、可能を表しているのではなく自発を表している表現なのではないだろうか。自分の芸なり料理はたいしたことはないかもしれない、しかし、芸をみたり料理を食べたりすることで、もし仮に相手の方が元気になればうれしい、というような表現として、助動詞「られ」が用いられているのではないだろうか。上から目線で、と非難する人は、言うまでもなく自分が上から目線で被災地や被災者の人を見ているのであり、それが他者の喋る「る・らる」によって喚起されてしまうのであろう。勇気づけられたらうれしい、という時の「られ」は自発の意味を表している。

2) 単線性物語としてのナントカ神話

この大震災は福島第一原発に多大の被害をもたらした。これだけの震災なのだから、東京電力の責任ではない、という意見が強く出るかと思ったらそうはならなかった。その理由の一つに、安全だということを強調していたから、ということがあげられるだろう。安全だから大丈夫、何があっても安全だから、その先のことを考える必要はない、という安全神話を振りまいていたのである。さらに言えば、安全なのに安心できない人は非科学的な人であると非難さえしていたのである。このような上から目線で接しておいて、安全が損なわれました、と言っても誰も同情してくれないのは当然であらう。

福島第一原発の件で、面白いというか許せないのは、測定にまつわる話である。安全神話を振りまいた側は、科学は信頼できる、という論調であった。そうであれば、どんなときにでも科学的態度を取るべきであるのに、必ずしもそうはなっていない。科学の基本が測定や測定に基づく予測にあることは誰も否定しないはずであり、だからこそ、多額の予算が放射能の測定や拡散予測のためにもつぎ込まれてきた。このような時こそ、東電側は測定をしなければいけない。科学に基づいて安全であることを主張しなければならないはずである。

しかし。

- 1 測定器の数が揃わずに測定をしないで結果的に人を危険な目にさらした場合があった。
- 2 SPEEDI という皮肉な名前のシステムで得た予測を公表しなかった。
- 3 被害が極めて広範囲に及ぶため、危険を感じた人々が自ら測定を始めたところ、測定にはいろいろな条件が関係するし誤差があるので、混乱を引き起こす可能性があるといっていた学者がいた。
- 4 極めつけとして、一時期、安全な数値を超えているのに安心せよと言ってみたり、安全基準そのものを動かして安全だといい、(安全に基づかない) 安心を強要した。

これはエッセイなので、細かい論拠はあげないが、いくら好意的な人であっても以上のような例が次々と出てくるのであれば、安全を認知して安心することは難しいだろう。また、当局側のこうした態度には、明らかに自分たち以外の人々は愚かだという前提が透けてみえる。

上記4つの例は以下のような態度に由来する。

測定するかどうかの判断も専門家が行う。測定できなければ科学的事実はない。

測定する際、素人は手をださず専門家に任せておけばよい。

測定値に基づいた安全かどうかの基準設定は専門家に任せておけばよい。

公表が必要かどうかという情報公開の選択は専門家が行う。

つまり、完全な専門家主義でありパターナリズム（父権主義）である。科学技術が私たちの手を離れて久しいが、地球上の人々がすべて抹消されかねない力が既に地球上に存在しているという意味で、核問題はその中核の一つである。人間が作り出したものに間違いは無いと言い切るのが安全神話である。神話と一般に言った場合には古くからの話で信じるしかないもの、というニュアンスを持つ。私たちはそれに加えて単線的な物語であるという特徴を指摘したい。そうした単線物語を受け入れるのではなく、複線性の物語が今こそ必要とされている。

ナントカ神話と呼ばれるものは原子力安全神話の他にもいくらでもある。私たちは、原子力事故に関するパターナリズムに対抗せねばならないと共に他のあらゆる領域における単線的な神話をうちくずしていかなければならない。何かを考える際には常に複線性を念頭において、単純な因果で終わるような物語は、その内容ではなく形式において批判的に吟味されねばならないのである。

私が開発した複線径路・等至性モデル

(<http://www.k2.dion.ne.jp/~kokoro/TEM/paper.html>) というシステムは、政策議論にも使えるのではないかと思う。私はこれまで、母性神話、IQ 神話、血液型神話、目撃証言神話、健康神話（病気は不幸神話）など様々な神話を相手に研究を行ってきたが、そうした具体的なレベルの研究と、複線径路・等至性モデルという理論的な研究は、東日本大震災後の今、合致していたたと実感できる。そういう意味で東電の安全神話をめぐる様々な動向は私個人にとっても感慨深いものとなった。

対人援助学&心理学の縦横無尽(3)

アーサー・フランク先生、 三度目の来日(滞在記)



サトウタツヤ@立命館大学

カルガリー大学教授・アーサー・フランク (Arthur W. Frank) 先生がこのほど三度目の来日を果たされました。彼は『傷ついた物語の語り手: 身体・病い・倫理』などで知られるナラティブ研究の第一人者です。

子どもの頃に一度来たという話を聞いた気もしますが、それを除けば、学者として最初に来日したのが、第二回・日本質的心理学会(東京大学)での招待講演の時です(2005)。京都にもきませんか、ついでに京都に是非どうぞ、とお誘いしたのが、立命館大学との縁でした。立命館大学 GCOE「生存学」創成拠点(立岩真也教授代表)の招きで再来日を果たしたのが 2008 年のことで、そして今回も同じく GCOE「生存学」創成拠点の招きで三度目の来日となったのでした。

最初の来日の時はゼミ生と一緒に奈良にいたりもして、名前さながらのフランクさんに私はすっかり魅了されてしまいました。学生がカナダでインターンシップをしたいと言ったところ、あとで書類の添削までしてくれました。彼は自分自身のことをアート、と呼んでくれということで、以下ではアートと書くこともあります。

アートは今回、外部評価の一環として来たのですが、そんな内輪の仕事だけではモッタイナイ(今や国際語)ので、公開講演会も開きました(2011 年 8 月 28 日)。

“Holding One’s Own as an Art of Living: Reflections on Companion Stories and Narrative Analysis”

というタイトルです。講演の内容そのものについては論文として本拠点の“*Ars Vivendi Journal*”に掲載されるはずなので、それを楽しみに待っていてほしいのですが、簡単に説明すると、「Holding One’s Own」を文字通り訳せば「自分を下から支え持つ」ということになります。英語的には意味が転じて「自分らしくあることを守る」「**には屈しない」という意味の口語的表現になるそうです。「Art of Living」は生の技法。じつは GCOE で用いている「生

存学」という単語の原語が「Ars Vivendi」なので、それと合わせてくれているわけです。こういう気遣いがうれしい。「companion stories」は、同伴者としての物語、とか、その人と共にある物語、などと訳されます。ただし、複数形になっていることに注意したいところです。以上をまとめると、タイトルは

生の技法としての「自分を持ちこたえること」

同伴者としての物語とナラティブ分析についての省察

となるわけです。今回の講演でさすがと思ったのは、同伴者としての物語が必要な場合も多いが、この物語によって、他者との関係が切断されてしまう可能性についても批判的に捉えていたことです。自分を守ることが他者を傷つけることにならないようにしなければいけないことを私たちは深くとらえる必要があります。

難しい話はこれまでにして、今回もアートと一緒に少しだけですが京都巡りをしました。といっても、既に2回来ているわけですから、場所には迷いました。結果的に、マンガミュージアムと細見美術館に行くことになりました。



マンガミュージアム、日本語が読めないから退屈するのではないかと思ったのですが、まず、多くの展示に英語が表示されていました。これは驚きました。また、京都精華大学の協力を得ているので、研究書があったり、各国に翻訳されている日本のマンガがあったりして、英語で読めるものもそれなりにありました。しかし、アートはそういうものよりも日本のマンガそのものを堪能していました。アートは日本語が読めないなりに、各年代ごとのマンガをちゃんと味わっていたのです。そして、1970年代以降の日本のマンガは基本的に変わっていないのではないか、という感想と、攻殻機動隊などは少し違っているのではないか、という感想を私に対して述べたのです。私はマンガの知識などないのですが、現代のマンガが手塚治虫によって作られその影響をうけ、脱しようとしつつも脱しきれない、というような宣言的知識はあるし、アキラとか攻殻機動隊の位置も少しは知っていたので、ちょっと驚いたのです。

もう一つ



というようなコーナーがあり、ここで興味深い話を聞かせてくれました。ここには

Manga is a kind of story-telling, which unfolds the narrative by means of sequential frames, or panels.

というようなことが書かれており、Story と Narrative という語が両方でできます。ストーリーとナラティブってどう違うの？ということは私ならずとも気になるのですが、アートの定義はこうです。

ナラティブは、時間の経緯とともに出来事がおきる、ということで、一般的な構造のようなもの。それに対してストーリーは、登場人物がいて、オチがあって、わくわくするようなもので、具体的なもの。

彼の定義において、ナラティブの典型の一つが天気予報。時々刻々と事態が移り変わっていくものもナラティブに入るというわけです。先のパネルに戻ると、一枚の絵や写真はナラティブたりえない。しかし、そこからストーリーを読み解くことは不可能ではない、というようなことを言っていたのです。彼自身もこの定義だけが絶対ではないと言っていましたが、こういう考え方も一理あるでしょう。彼がナラティブの類型と言って、ストーリーの類型と言わないのもこうした定義に依拠しているからということのようです。

難しい話はオシマイといいながら、また戻ってしまったので、話題を転換。有馬啓太郎という漫画家とその作品『月詠 (つくよみ)』というマンガをご存じの方はいますか？



この方は、今回のアートの来日にあたって、通訳などを務めてくれた有馬斉・東大特任助教のイトコさんだということです。せっかくだから、見てみようと思って司書の方に聞

いたら、なんと開架で読み放題さわり放題という扱いではなく、閉架に保存されていたのです。研究用ルームがあり、そこで閲覧希望を出さないと見ることができないのです。せっかくだから、出してもらいました。先客の方は『ガロ』を請求して山積みにして研究ノートをとってましたが、こちらに来たのは何の変哲もないマンガ。何がすごいのだらうと思ったら、なんとこのマンガは女の子の「ネコミミ」をマンガ界にもたらし、ひいては日本文化にもたらしたマンガの一つだということです。またアニメ化にあたっていろいろな実験的なことがなされた、ということで、歴史的な作品なのだそうです。たかがネコミミ、されどネコミミ、でしょうか。何事にも始まりはあるのですが、ちょっとびっくりしました。

なんてことを書いているとキリがない。細見美術館は記念写真だけ。小さいけれど、若沖の特別展があったりして楽しめました。



対人援助学 & 心理学の縦横無尽 (4)

第8回 日本質的心理学会 参加雑感



サトウタツヤ@立命館大学

1 はじめに

2011 年 11 月 26,27 の両日、広島大学教授・岡本祐子大会委員長のもとで第 8 回・日本質的心理学会開催された。会場は安田女子大学教授・澤田英三事務局長の尽力で安田女子大学を提供していただいた。他学会のことを書くのはオカシナ感じもあるが、2013 年第 10 回大会を立命館大学で開催する予定なので、学会の雰囲気を知ってもらえればありがたいと思い書いてみたい。自分たちで褒めるのもおかしいが、大変充実した二日間であった（感想には個人差があります）。このエッセイを通じて、学会という祝祭空間が持つ学問的興奮が伝われば、とも思う。

私が参加させてもらったのは、26 日の委員会企画シンポジウム「実践としての身体」と 27 日の大会準備委員会企画シンポジウム「子ども理解のメソドロロジーとしての質的研究—実践者の研究方法としての可能性を探る」であり、いずれも指定討論としての参加であった。指定討論の指名が二つあるところに私の本学会での立ち位置が透けて見えてくるのだが、学会事務局長の立場からすると、総会の準備だけで手一杯なので、事前に丁寧な準備が必要な話題提供者よりはありがたいのであった。

2 身体というアポリア：あるいは実験装置による身体拘束

「実践としての身体」シンポジウムでは、心理と身体という古くて新しいアポリア（難問）について扱われた。様々な話題が提供されたが、私が討論として指摘したのは、なぜ心理学は身体を拘束しないと実験できないのか、ということであった。拘束された身体を対象とする心理学は、心身一元もしくは心身相関を前提にしているはずである。そうでなければ、どのような姿勢でどのようなことをしていようとも「心理」を取り

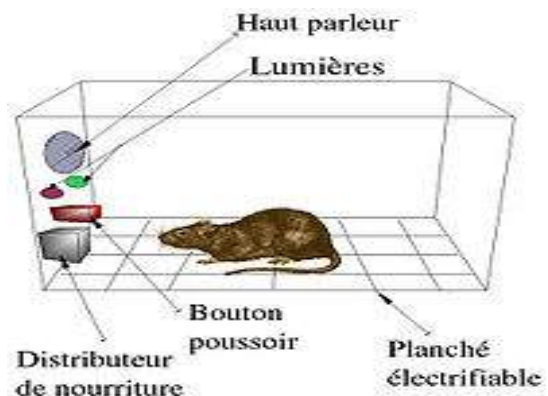
出せるはずだからである。

右図は竹井機器工業株式会社のカタログから引用掲載したものがある。カタログでは、顔面固定器となっているが、一般にはあご台と呼ばれている。知覚実験において、アゴとミミを固定することで顔が動かないようにするのである。これなど、心理学の実験をする人でなければ何であるか分からないだろうが、ここまでして固定しなければいけない身体、そうしなければ取り出せない「心理」とは何なのか、が問われなければならない。



お次はスキナー箱である。弁別刺激を提示したのちに、中に入っている有機体（この場合はネズミ）が何か行動をすると、報酬が与えられることがある。その場合、ネズミは同じような行動をするようになるという仕掛けになっている。理論的な意義はともかくとして、ネズミとその行動を環境ごと外から完全に見てしまおうという意図が丸わかりであり、ネズミの行動範囲は自ずと限られたものになる。

相手がネズミでなくても同じようなことは起きる。一昔前の発達心理学実験には必ずマジックミラーがつけられていて、外から実験者が中の様子をみることができるようになっていた。カウンセリングルームの写真は今ここで提示することを控えるが、警察の取調室と見まがうばかりのものもある。いずれにせよ、人間の行動範囲を限定したうえで対応するのが心理学という実践の本質なのだろう。



もちろん、身体拘束を前提とする心理学に反

対する動向はあり、有名なのは知覚心理学者・ギブソンによるアフォーダンスの概念である。動く身体による知覚の研究は、それまでの不動の身体を前提とする知覚心理学者たちとの折り合いが悪く、様々な軋轢が生まれていた。既に述べたことだが、身体を静止状態に制止できなければ取り出せない心理とは何なのか、一步踏み込んだ検討が必要となるだろう。蛇足ながら、質的心理学関連について考えるなら、近年のナラティブ心理学の動向も、場合によっては身体拘束の一種として捉えるべきか、物語のもつ広がりを見極めを最大限に生かそうとする別の意図があるのか、見極めが必要となるだろう。

3 畏怖という記号：そして記述による祝福は可能か

2日目の午後、公開講演があったのを忘れていた。神戸女学院大学名誉教授の内田樹先生

による講演であった。事務局長を務めた私は総会の仕切りを終えて出席した。小さな学会の場合、学会という場で参加者が同じ講演を聴くことには意味があると思うので ynabe39 の隣に座りながら聴いていた。さすがに色々と考えさせてくれるものであった。冒頭で、質的心理学会という名前にふれつつ、今の大学は数字で測定でき予測できるものによって評価がなされているのが問題だという指摘があった。研究は度量衡で測れないものを目指さねばならないにもかかわらず、数年先の結果まで分かるような研究計画を出さないと研究資金が獲得できないのでは、研究のスケールは小さくなっていくはずである。

内田氏の講演でほかに面白かったのが、福島第一の原発事故に絡んでの話題で、インドの原発の形状についての指摘である。私は知らなかったのだが、インドの原子力発電所の形はシヴァ神に由来するものだという。インド人は原発を神のごとく敬うとか非科学的な態度で接していると考えたと見誤る。むしろ、自分たちの手ではコントロールできないかもしれない畏怖の対象として見ている



のではないかと、とのことである。外から見てどのようなモノに見えるのか、ということはデザインと言うことができるが、デザインはサインの配置である。シヴァ神の如き外観をデザインするということは、人々にとって原子力発電所＝シヴァ神＝畏怖をもって見るもの、という記号を発生させることになり、その外見のあり方は、人々の原発に対する意識や行動をガイドするのである。何かあったら自分たちの手には負えないものとして、敬虔な気持ちで接することを可能にするのである。一方、我が福島の原子力発電所の外見は普通のビルであった。そこには何の畏怖もなくむしろ傲慢さの裏返しではないかとさえ思える。その結果、何が起きたのかは周知のことである。

さらに内田氏は、記述と祝福に話を進めた。何かを固有の名前で記述するということは何なのか。「固有名を固有名として記述せざるを得ないことがもつ固有性の祝福」であると私のメモにはあるが、何のことかわからない。氏があげた例はサザン・オールスターズのデビュー曲は「勝手にシンドバッド」という歌であった。その歌詞に「江ノ島が見えてきた。俺の家も近い。」というフレーズがある。ここに出てくる固有名は江ノ島である。東京方面から車で帰ってきたときに、江ノ島が見えた瞬間、その瞬間を描いている歌詞である。ここで、江ノ島としか表現できないのは、もちろん、江ノ島が固有名であるからだが、固有名を安易につかうのではなく、思考の格闘の末にギリギリの記述として用いることは、実は、その固有名を祝福していることにつながっているという。その固有名と自分の関係でしか伝えられない時空を切り取るとことのすごさである。松尾芭蕉の作であるとされる（今は疑われている）江戸時代の俳句、「松島や ああ松島や 松島や」を思い出すと、なるほどと思わされる。蛇足ながら、松田聖子の「青い珊瑚礁」の歌詞と比較する

とサザン・オールスターズの「江ノ島」への言及が祝福であることの意味はさらに明確になるように思われる。「あ～私の恋は 南の風に乗って走るわ～。あ～青い風 切って走れ、あの島へ」。この歌はギリギリの記述からも固有名の祝福からも遠いことが分かる。逆に言うとアイドルが創り出す空気の軽さ、あるいはユートピア（どこにもない場所）を創り出そうとする努力は尊敬に値するとも言える。

4 実践と研究は対立するか：あるいは質的研究の可能性

2日目(11/27)、講演の後、ynabe39（ああそういえば本名＝固有名は渡邊芳之だった、あえて敬称略）と感想を述べながら、途中でそれぞれの行き先に別れ、当方はシンポジウム「子ども理解のメソドロロジーとしての質的研究」に出席した。「実践者の研究方法としての可能性を探る」という副題がついており、ここでも「実践」がキーワードであった。先のシンポジウムの実践とここでの実践は微妙に意味が違うのであるが、それでも、同じ言葉で表現できる何かであるのだから共通性があるのだろう。

このシンポジウムは、大会の運営委員でもあった広島大学・中坪史典先生の企画によるものである。「実践者の子ども理解のメソドロロジーとしての質的研究の可能性を探ること」が目的であった。こう書くと堅苦しいが、「質的研究法を用いて、「無理なく」「楽しく」「継続的に」、実践研究を行い、子ども理解を深めようではありませんか!!」ということである。具体的には、柴山真琴先生がエスノグラフィについて説明し、得丸さと子先生がTAE（Thinking At the Edge）という方法について説明するというもので贅沢なものである。そして広島大学附属幼稚園の松本信吾先生が実践者の立場からコメントをつけ、私が理論家の立場からコメントするというものであった。柴山先生はエスノグラフィについて「ある集団の人々に共有された行動パターンを構造化する信念・価値観・態度、ないしは共有された信念と社会的相互作用のパターンとの連関（Merriam, 2004）」という紹介をしてくれた。得丸先生のTAEは（ロジャーズの同僚でもありフォーカシングの創始者として知られる）ジェンドリンが開発した理論構築法を質的研究法として開発したもので、自分の中に蓄えられている感情や体験を言語化するためのステップガイドのようなものである（と私は理解した）。私のコメントは以下のようなものになった。

実践とは、固有名と固有の身体をもった、人（たち）が個別具体的な時間と場所において行われるものである。そして「偶発的＝Contingent」な活動を「治める＝govern」のが実践である。実践は固有の活動であるから、その場での判断が重要であるが、その判断が、個人の気まぐれに基づいていてはならず、何らかの学問知に基づいていることが期待されているだろう。実践家は「いえいえ、そんなことはありませんよ」と謙遜するかもしれないが、専門家にわが子を預ける側からすれば、何の基礎もないのでは困惑してしまう。したがって、実践を研究としてまとめることの理由の一端は明らかである。実際に現場で起きていることを次代の専門家の知恵・知識・技術として伝達する、ということである。もちろん、研究は難しい。したがっ

て、全ての人が研究をすべきだ、ということにはならない。やろうとする人がいる時にガイドになるのが、方法論である。ただし、質的研究の方法論はそのようなものであり金科玉条のように扱うものでもないし、一つの方法に殉じて他のものは使わない、というような態度をとるべきではない。

討論の時にフロアから、実践活動を研究にするときに、個人情報を含むとそれが研究倫理に抵触する可能性がある、どうすべきか、という問いがあった。この問いに対する答えは単純で、「研究倫理」ではなく「実践倫理」を構築していくべきだ、というものである。言うは易く行うは難し、の代表的なものではあるが、「研究倫理」至上主義はよろしくない。だいたい、実践者が実践においてうまくいったことや失敗したことを他者に伝えないということがあり得るのか？それがなぜ研究になると個人情報保護などという問題にぶち当たるのか、その構造こそが問題なのである。情報は保存・公開・共有が前提となるべきであり、その前提が個人を不必要に傷つけたりしないようにするための「実践倫理」こそが、今、求められているのではないだろうか。質的研究の方法論についても言えることだが、細かい手順を理解した上で手順通りしようとする志向があることは大変気になる。そういう細かいことではなく、原理を理解した上で、その場に即した行動を取ればよいと思う。特に、研究倫理の手順に盲従するのは好ましくないことであり、これさえやっておけば倫理問題はクリア！というようなことは絶対にあり得ないと思うべきなのである。

5 本当の雑感

二つのシンポジウムに指定討論者と参加したことで、アタマをフル回転させて学会に参加することができました。私を指定した人の意図は理論的側面からの討論だろうから、なるべく極端なことを言うように心がけました。今やれるようなことをやれるように言うのは理論家の喋ることではないのです。方法論講習会ではないのだから、やれることをやれるように喋っても意味がない。5年後に可能になりそうなことを喋らなくてはいけないわけです。

学会全体としても方法論に関する講習会や企画が盛況なのはうれしいですが、私の視点からすると「方法論は自転車の補助輪」みたいなもので、無くても走れるようになるというのが良いなあと考えています。「方法論は自転車」という考え方もありますが、いずれにせよ、方法論に固執してその手順を遵守することが目的になってはいけないと思います。

さて、個人的には九州大学教授の南博文先生が九州から来て会場係を担当していたのが感慨深かったです。南さんがいると個人的には大変落ち着きます。南さんと今回事務局長をしてくれた澤田さんは広島大学の先輩後輩の関係で、私が東京都立大学助手をやめて福島大学行政社会学部に就職する時に、私の後輩の尾見康博（これまたあえて敬称略）と一緒に訪問したことがありました。もう17,8年くらい前のことになるでしょうか。その当時の心理学の閉鎖性に窒息しそうになりながら、しかし同好の士とつな

がっていた時代です。昨今は質的研究がブームだと言われることがあるけれど（実際、日本質的心理学会の会員は 1000 名ほどになっている）、こっちは 20 年以上前から地道にやってるんだから、と言いたくなる時もあります（言っても意味無いし、今日のようにするためにやってきたわけですが）。20 年以上前からといえば、二次会で指摘されたのだけれど、（裏コンの）席替えなんてのも、今の大学生が生まれる時からやっていたとのこと、「歴史は夜作られる」とは良く言ったものです。

Last but not least（最後だからといって重要じゃないというわけではないというクラーク大学の Valsiner 教授ことヤーンがよく使う慣用句）、にしき堂の生もみじまんじゅう、オミヤゲに買って帰りました。なぜなら、にしき堂のもみじまんじゅうが大会に際して 300 個！も寄付されていたからです。もとより、宣伝効果としてはカウントされない程度の数しか買ってないのが遺憾ではありますが。それにしても、前日の理事会から 3 日間、充実した会でした。来年は東京都市大学（横浜）、再来年（2013）は立命館大学で開催です。みなさん、よろしく！

引用サイト

竹井機器工業株式会社のカタログ

<http://www.takei-si.co.jp/productinfo/detail/95.html>

ウィキメディア（スキナー箱）

http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/2/2d/Boite_skinner.jpg/200px-Boite_skinner.jpg

India 's atomic plants remain on terror radar: Government

<http://liveindia.tv/india/indias-atomic-plants-remain-on-terror-radar-government/>

関連サイト

日本質的心理学会第 8 回大会

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/yasuda/index.html>

日本質的心理学会（2011 年 12 月からリニューアル）

<http://www.jaqp.jp/>

対人援助学&心理学の縦横無尽(5)

複線径路・等至性モデル、世界を駆ける



サウトツヤ@立命館大学文学部心理学専攻

この頃、ありがたいことに、外国の研究者から「ぜひ来て講演してほしい」という依頼がくるようになった。ここで私がジンバルドーなら「健康上の理由からファーストクラスでしか移動しない！チケットを用意せよ！」などと言えるのだが（実話）、つまり招聘者がファーストクラスチケットを用意せざるを得なくなったりするのだが、私の身の上といえば実際には「予定していた予算の1/3しか獲得できなかったので、自腹で来てほしい」などというトホホな話になっている。それでも、きっかけ、チャンスもらえるのは本当にありがたいことで、2012年にはイタリア、ブラジルで講演のようなことをしてきた。いずれも文化心理学およびその方法論としての複線径路・等至性モデルに関する話や法と心理に関する話を学生・院生にしてほしいという依頼である。ぶっちゃけ、ブラジル（の一部）では、日本より複線径路・等至性モデルに関する研究が盛んだったりしている。

複線径路・等至性モデルとは、システム論に基づく質的研究法的一种であり、等至点に対する径路の多様性を認めようとするものである。研究者が調べたい、考えたい、と思う現象を等至点として設定し、そのことを経験した人（たち）に対してナラティブ調査などを行う。そしてその人（たち）が経験した径路を描くのである。ただし、その時にその人（たち）が経験しえなかった径路についても描くことを特徴とする。



2012 年 1 月 イタリア

2012 年 1 月末はイタリア。レッチェ大学のセルジオ (Salvatore 教授) とサレント大学のピナ (うーん、名字は何だったのか・・・) が呼んでくれた。いずれも南イタリアで、レッチェは長靴のカカトのあたり、サレルノは足のスネのあたりである。日本の中部地方が南北に連なる電車が無いように、イタリアは東西をつなぐ電車がなく、バスで移動ということになる。

さて、レッチェ大学ではマスターコースの文化心理学に関する大講義の一コマで講演を行った。私のつたない英語では何も伝



わらない恐れがあり、セルジオがイタリア語に訳して説明してくれている。授業が終わると記念写真を撮ろうといってくる学生さんもいて、和やかに記念写真。ピースをしているのはイタリアの習慣では

なく、「日本人は口をあげずにピースサインをするのが笑顔なのだ」という話をしたため、それを喜んで実践してくれているのである。

この話はエモティコンの比較の文脈で出てくる。日本の顔文字は(^_^)ということだが西洋というか(東洋以外というか)では:-)のようなものが使用されている。単に縦横の違いなのではなく、笑顔を目で表すか、口で表すかの違いがある。そして、日本では、写真を撮るときには歯を見せずにピースサインをする、という話をすると興味を持ってくれるのである。



レッチェ大学ではこの他、大学院生たちとも小さなセミナーをもった。さらについてながらセルジオは奥さんが単身赴任中だとのことで、息子さんのお迎えをしている。その様子がこの写真である。



そして、サレルノに移動である。朝 5 時発のバスで 5 時間揺られて到着する。サレルノ大学は古くから医学が盛んであり、健康のための指南書であるサレルノ養生訓というもので知られている。ピナ (左) とルカ (中央) が院生セミナーでの講演を依頼してくれたのである。昼食



は白魚。実は、サレルノで5年間くらい使ったラップトップコンピュータの液晶が壊れるという悲劇に見舞われたのだが、ルカは親切にも研究室で余っているモニターを貸してくれた。それによってホテルでも仕事のできたのである。今思えば(今、これはサンパウロで書いているのだが)、この時に壊れてくれてよかった。ホスピタリティに感謝である。そして右の写真はピナのダンナである。日本につれてきたら映画俳優くらいできるのではないかというイイオトコでした。



サレルノでも、文化心理学と複線径路・等至性モデルについての小さなセミナーをもった。また、ピナが法廷外紛争解決の実践活動をしていることもあり、法と心理に関するプロジェクトについての相談もしてきた。

2012年2月末～3月 ブラジル

イタリアから戻ってきて卒論の口頭試問や大学院入試やその他もろもろを片付け、2月末にブラジルへ。

バイア州のサルバトーレで行われる「第二回、国際文化心理学セミナー」への招待をうけ、大げさにいえばゲスト・コメンテーターとして参加を招聘されたのである。アナ・セシリア（アナ・セシリアまで名前。ファミリーネームは何だったのか??）が率いるブラジルにおける母性を巡る文化心理学的研究の発表会を兼ねたセミナーである。研究が全部で10くらいあったのであるが、驚くべきことにその全てに複線径路・等至性モデルが使われていたのである。複線径路・等至性モデルは自分で言うのも何だが、面白いと思う。しかし、何もそんなに皆で使わなくてもいいのではないかとさえ思えたのであった。

さて、この文化心理学に関するセミナーは、クラーク大学のヤーン・ヴァルシナー（写真中央）を中心にした国際的ネットワークがブラジルに移動した観があった。それは大げさであるにしても、タニア（スイス）、ナンディッタ（インド）、日本（私）、アメリカ（ヤーン&ケニー）から関連する心理学者を招



聘してセミナーを開催するアナ・セシリアの構想力には見習うべき点が多くある。

セミナーはサルバトーレに近い景勝地で行われた。風光明媚なところであり、何もこういうところでやらなくても、とも思うが、そういうやり方

も文化のあり方であるから、その雰囲気を楽しむことにした。部屋のまどから椰子の木が見え、その向こうに海が見える（大西洋）。



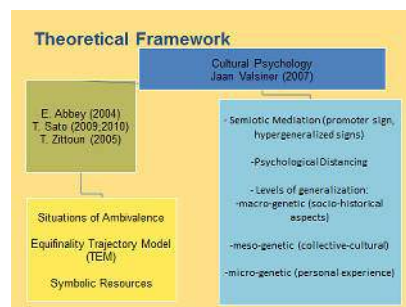
さて今回のシンポジウムを開催したアナ・セシリアは向かって右、左側は同じくブラジルのリビアである。心理学に限ったことなのかもしれないが、とにかく女性教員が多いという印象をもった。院生も多くは女性であった。

今回プレゼンされた研究は、現代ブラジルにおける「母性を巡る移行(transition)と不定さ (uncertainty)」を巡って行われたと総括できる。詳細に述べることは不可能なので、テーマを紹介しておきたい。

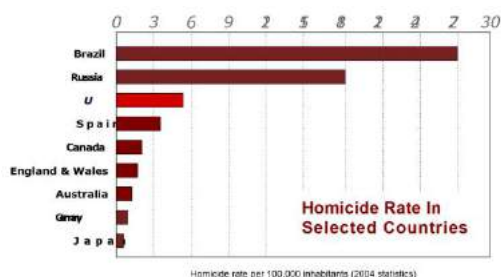
青年期における人生展望の消失、近代化の過程において従来の出産を選ぶという経験、繰り返される流産、HIV に感染しつつ子どもを持つこと、国を越えて（移民）子どもを持つこと、移民として子どもを教育すること、子どもを殺害されること、子どもを持たないこと、女であることを問うこと。

いわゆる「フツアの結婚 and/or フツアな出産」を巡る様々な思いや適応、という研究は今回の発表ではむしろ少数派であり、その周辺の様々な困難に焦点を当てられた研究が多かった。

こうした事情は、アナ・セシリアが公衆衛生に関心を持っていることとも関係しているが、それにしても、母性を巡る様々な困難が取り上げられている。右の図はある発表者のものだが、方法論としてのTEMが理論的枠組みの中に位置づけられて、用いられている。これらの研究はケースに対するインタビューであり、複線径路・等至性モデルを用いて、その径路（トラジェクトリー）の描写を試みていたのである。



研究内容自体にいろいろ驚かされたこともあった。子どもを殺された母親の研究では、子ども 7 人のうち 3 人が殺害された母親がいたとのことである。



びっくりして調べてみたところ以下のようなデータがあった。2004 年における各国の殺人率の比較である。ブラジルでは 10 万人あたり約 27 名が殺人の被害にあっている。日本は約 1 名。両国の人口は 1 億人強というくくり方をすればほぼ同じであるから、この差には驚くばかりである。

http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Homicide_rate_by_country.svg
 今回のシンポジウムは午前 3 時間、3 時間休憩、午後 3 時間、というスケ

ジュールで3日間行われた。楽しい中に苦しさあり、というか、英語が必ずしも堪能ではない私にとって、個々の発表を聞いてコメントをするというのが大きな負担だったのも事実である。真剣に取り組んでいるからこそ、休み時間が待ち遠しい。この雰囲気、何かに似ているなあと思ったら、高校の時のフェンシング部の時の合宿であった。時計の掛かっている体育館で差し込む光の位置を頼りに、時間経過を計っていたことを思い出す。その時の監督が、「どんなに寝れなくても、夜は横になって休んでいろ」という指示を出していた。これは聞くべき金言である。「疲れているのに寝れない」のではなく、「疲れているから寝れない」のである。横になって休んでいることで疲れがとれ、寝れるようになるのである。二日酔いの時の方が早く目が覚めたり、海外にいる時の方が寝れなかったりするのも同様の理由である。疲れているときこそ、肉体を休める必要がある。それはともかく、三日間の濃密な時間はゆるやかに過ぎていき、最終日は海外からのゲストたちがまとめをする時間であった。英語を母語として操っている人はいいが、こちらはそうはいかない。夜のエクスカーションを断り、最終日の発表構想を練っていた。英語だけで勝負しても他のゲスト



より劣るに決まっているので、一計を案じた。会場にあったピアノを使うことにしたのである。心理学の重要概念に「ゲシュタルト」というものがある。これは日本語に訳すと(形態+全体)÷2のような概念であり定訳はないのだが、19世紀の哲学者・エーレンフェルスは、楽曲には個別の音が単純に足し合わされたものではないし、一方で、転調してもその質が変わらない

ということを強調し、その楽曲のもつ「その曲らしさ」の本質を「ゲシュタルト質」と表現したのである。つまり、音符の一つ一つを拾い上げて楽曲の質を味わうことはできないし、あるいは全ての音符を同時に弾いても楽曲の質を味わうことはできない、ということである。音を音符として表し、そこに表現された構成を時間にそって弾くことによって、楽曲のゲシュタルト質を表現することができるのである。「さいた、さいた、チューリップの花が・・・」という歌は、ドレミ・ドレミ・ソミレドレミレ・と表すことができるのであるが、これらの音の中から任意に拾い上げて音を出していても、この歌にはならない。また、一度に全ての音を出しても分からない。人生の質



(Quality of Life) を考えるときに、音符を勝手に拾い上げたり、時間を無視して一度に全ての音を鳴らしているということは、無いだろうか？ そういうこ

とを実演つきで話したのである。思ったよりもウケて良かった。写真は、アンジェラにバイアの有名な歌、Asa Branca（白い翼）という歌の弾き方を習っているところである。相当久しぶりにピアノを弾いたので小指の筋肉が衰えていることがはっきり分かった。

最後に記念写真をとってお開き。しかし、この写真を撮るまでも大変だった。写真を撮ろうとしないし、列になろうとしないし。とはいえ、この写真が未来から見たときに歴史の1ページに成れば良いと思う。

合宿研究会の翌日は、UFBA（バイア連邦大学）で法と心理学のディスカッションと講演。アナ・セシリアがセッティングしてくれた。



お互いに合宿が終わって疲れているところであるが、良い機会を与えてもらった。午前のディスカッションでは、法と心理学史の必要性や、心理学的なジャスティス概念について議論した。午後の講演では日本における法と心理学の展開を話した。法と心理学を担当している教員（正確には「法と犯罪の心理学」）が参加してくれて、議論も盛り上がった。

ブラジルでも日本食は人気があるということで、この日の昼食は日本食レストランにつれてい



ってもらった。そこで寿司を頼もうとしたのだが、メニューに「New Sushi」と「Traditional Sushi」が



別々にあった。こういうときはもちろん現地化した寿司を食べるのが王道である。そこで、New Sushiを頼んだところ、このようなものが出てきた。フレ

ンチ化した寿司といったところだろうか。まあ悪くない、と思っていくつか食べてみたのだが、どうも変だと思うことがある。気になって、寿司を割ってみたところ、案の定、シャリが無かった。思えば、アナ・セシリアが頼んだ「サーモン・テマキ」なるものも、どう見てもシャリがなさそうであった。「大トロ握り一貫、シャリ抜きで！」「それって刺身じゃん」というような話を地で行くようなものである。



いよいよサンパウロに移動である。バイアからサンパウロは空路で2時

間強。人口2000万人の大都会である。サンパウロ連邦大学では、リビ



アがいろいろと骨を折ってくれた。彼女の指導する大学院生が、私が書いた論文を読んだ上で議論に参加してくれたのには感激した。複線径路・等至性モデルの基本となる文化心理学の考え方、とりわけ記号の機能に関する説明と複線径路・等至性モデルの手順について解説を行った。論文だけでは説明しきれないことも多く、こうした機会に

身近なやりとりができるのは楽しいことである。毎回強調することであるが、研究をするときに、**TEM**を使ってもいいが**TEM**に使われてはいけない、ということがある。ある種の方法論（**M-GTA**など）は、方法に従うことが良いことである、という気持ちで勉強している人がいるような気がしてならない。大事なのは、研究テーマであり、対象者の生き方に敬意を払うことである。研究（者）が方法論に従うのではなく、方法論が研究（者）に従うべきなのである。

さて、サンパウロ大学での講演の直後、その午後にはいわゆる「先住民」も



と呼ばれる **Guarani** 族の保留地（リザーベーション）を訪れる機会を得た。デニーロがその民族風習の研究をしていることもあり、同行することができたのである。サンパウロから南に50kmくらいのところに、**Guarani** 族の保留地がある。昔ながら、というか、民族継承的な、というか、表

現は難しいが、暮らしを過度に近代化することなく、暮らしのあり方（**Way of Life**）を維持しようとする人々である。

現地に行ってみると、祝福の儀式、なるものが行われていた。宗教的リーダー（キリスト教なら **Priest**）が、交易を行う相手（いわゆる普通のブラジル人だったりこの部族を保護することを担っている人）を祝福する瞬間に立ち会うことができた。写真を撮ることはできなかったのだが、日々食料を運んでくる人は、頭をなでられ神の祝福を得ていたのである。ここでの神は、土着的な神とキリスト教の神とが融合した感じのものである（シンクレティズム）。生活必需品などの物資を運んできた人は、対価を受け取るのではなく、神から祝福を受ける。ここには、物々交換でもないし、金銭による売買でもない、一種独特の交換（**エクスチェンジ**）の仕組みがある。我々の一行は総勢7名で出かけたのだが、祝福の儀式に出席させてもらおうという形をとった。そして、生活必需品も捧げさせてもらった（この写真の向かって右端がサンパウロ大学で心理



学と人類学を教えているデニーロである)。面白いことに、一度二度来ただけの人は神から祝福されない。宗教的リーダーに拝謁して言葉をかけてもらえるだけである。私もつたないポルトガル語で「Eu vin du Japon (日本から来ました)」のようなことを喋ったところ、「おお、よしよし良く来た」とばかりに目の前で拍手を打たれた。

普通では経験できない文化的ツアーであった。以上の内容は、帰りのタクシーの中でリビアが英語で説明してくれたものであり、正確ではないことも多々あると思われるが、諒とされたい。

ついでながら、ブラジルの心理学がどのようなものなのか、を折に触れて聞いてみたところ、サンパウロ大学の心理学インスティテュートは、実験、臨床、発達・教育、社会・産業、神経科学という5つの部門に分かれており、それぞれに30名ほどの教員が所属しているとのことである。そして、その150名の教員に対して、学部生(5学年)は合計600名ほど、大学院生も同じく5学年で合計600名ほどの定員だそうである。単純に計算すればS/T比が8:1である。連邦政府が運営しているとはいえ、すごいことである。心理学部に150人の心理学者がいるのである。さらにブラジルの心理学で驚いたのは、ミシェル・フーコーの考えが広く受け入れられていることである。日本の心理学者でフーコーを知っている、とか、何らかの影響を受けたという人がいったいどれくらい存在するだろうか。ほとんどいないだろう。ところが、ここブラジルでは、「職業としての心理学」50周年を記念してフーコー著作集の翻訳が、心理学者によってなされるとのことなのである。フーコーに限らず哲学的思想や認識論が重んじられている一方で、先住民の土着的(インディジーニャス)な考えにも関心が払われている。臨床心理も神経科学もしっかりと組み込まれている。ブラジルの心理学は結構オモシロい、というのが私の結論である。北米型の心理学をモデルにするだけではなく、社会包摂的なブラジルの心理学をモデルにすることも、日本の心理学の選択肢としてあり得るのではないか、と思える。北米の心理学をモデルにするのもいい加減止めて目を世界に広げるべきであろう。ブラジルという国自体が発展中ということもあり、今後も目が離せないという印象をもった。是非また訪れてみたい。

ブラジルで気に入ったものは何か
といえば、ブラジルだけではないが、
ココナツ。その場で実を割って飲むの
は私たちからすれば非日常的でおい
しい。その他、各地の宿泊地での食事
の様子をいくつか紹介するので、その
雰囲気を感じ取ってもらえれば幸い



である。



最後に、食事に関しては、徹底した個人主義が根本にあるようで、食事は単品注文よりもバイキングを好むことが多く、個人支払いである。配膳後他者待ち行動などはモチロンなく、バイキングでとってきた順に食事を開始する、という感じであった。皆でわいわいとするような時でも（日本でいうところのコンパをするときでも）、注文は個別だし、支払いも個別であった。ウェイターが無線クレジット支払機を持って一人ずつ支払ってもらっているのである。日本では、混雑時の個別支払いはお断り、という表示があったりするが、これもまさに日本的な文化的マナーなのだなあと痛感した次第である。

対人援助学 & 心理学の縦横無尽 (6)

人物で見る「法と心理学」とその課題



サトウタツヤ@立命館大学文学部心理学専攻

【法と心理学の概要】

法や紛争処理に関わる人間活動に焦点をあてるのが広義の法と心理学の領域である。法学が規範の学であるのに対して、心理学は事実を扱う学である。規範は人間ではないが、規範を作るのは人間である。法に関わる現実の人間の活動から法システムを展望するところに法と心理学の特徴がある。

【法と心理学の歴史】

1893 年にアメリカの心理学者キャテル(Cattell J.M.)は日常経験に関する記憶の確実性の実験を行い、これが裁判における証言の不確実性の問題を惹起したことから、法と心理学領域の研究を刺激した。フランスではビネ(Binet, A)が被暗示性の研究を行った。ドイツではシュテルン(Stern, L. W.)が新派刑法学者・リスト(Liszt, F. E.)と協力して目撃証言の曖昧さを研究し(1901)、『Beiträge zur Psychologie der Aussage (証言心理学への貢献)』という雑誌を創刊した。これは後に『Zeitschrift für angewandte Psychologie (応用心理学雑誌)』と代わり世界初の応用心理学雑誌となった。また、ドイツでは 19 世紀の末から心理学者が刑事裁判において専門家証人として登用されはじめた。



Cattell J.M.



Stern, L. W.



Liszt, F. E.



Binet, A.

1909 年、慶応義塾大学の最初の法学教授を務めたこともあるノースウェスタン大学法学部長 J・H・ウィグモア (Wigmore, J. H.) が『イリノイ・ロー・レビュー』において「ミュンスターバーグ教授と証言の心理学」と題した論文を発表した。



Wigmore, J. H

この論文は裁判記録の形式を採用したものであり、被告は H・ミュンスターバーグであった。その訴えの内容は、1908 年刊行の『証言台で』と題された書籍においてミュンスターバーグ (Münsterberg, H.) が、法学者・裁判従事者の名誉を毀損したというものである。



Münsterberg, H.

心理学サイドからの裁判への批判は、それを受け止める法サイドからすると「能力について不正確で間違った真実ではない主張」であると受け止められ（あるいはフレーミングされ）、法関係者の名誉を毀損するものだという主張となったのである。

この論争の結果、法と心理の協働は少なく見ても 50 年は滞った。個別の研究は行われていたとしても、である。学融（トランス・ディシプリナリ）な領域としての法と心理を進めていくには、この歴史から学ぶことは多い。相手の学範（ディシプリン）を攻撃することが目的ではなく、融合領域を作ることにより、社会のあり方を良いものに変えていこうという姿勢こそが求められているのである。

さて、ウィグモアとミュンスターバーグの論争が停滞を引き起こしていたころ、心理学が捜査技術に応用される契機が高まりつつあった。虚偽検出である。イタリアの精神科医ロンブローゾ（Lombroso, C.）は被疑者がつく嘘を検出する方法を追究する中で複数の生理的指標（血圧・脈拍等）の利用を提案し（1895）、これが現在のポリグラフ検査の初源となった。スイスの精神分析学者ユング（Jung, C. G.）は、ある言葉に対する連想語を答えるときの反応時間が遅いことに着目した。これが犯罪捜査に取り入れられると、無言でいる時間が長い（反応時間の長い）ものは証言したくない内容を含んでいるのではないかと考えられることになり、虚偽検出の質問技法の基礎となった。これらをもとにキーラー（Keeler, L.）によって現在使用されているポリグラフが完成された（1932）。



Lombroso, C.



Jung, C. G



Keeler, L

法と心理学の停滞がおきたアメリカでも 1970 年代以降、認知心理学の台頭と共に新しい興味が生まれた。ロフタス(Loftus, E.)が目撃証言（の歪み）研究に着手し、また実際の法廷に専門家証人として立ち、司法からの心理学のニーズを再び開拓した。

日本では、明治末期から大正初期にかけて法学者・牧野英一と心理学者・寺田精一による共同研究が行われていた。牧野はドイツ外遊中に新派刑法論者のリストに師事し実証的研究の必要性を理解した。寺田は大学卒業後、巣鴨監獄に勤めたこともある心理学者である。「供述の価値」論文（1913）は、目撃証言研究の先駆である。第二次世界大戦後の日本では、法心理学はふるわず心理学では虚偽検出、矯正といった分野が中心であり、法学では川島武宜により経験（主義）法学が導入されてその中で法心理学的動向が紹介された。甲山（かぶとやま）事件（1974）を契機として、心理学者・浜田寿美男が自白供述分析に取り組んだが、これは自白を強く求める日本の制度のもとだからこそである。2000 年には法と心理学会が設立された。2009 年に始まった裁判員裁判においては、裁判員の判断プロセスや法廷プレゼンテーションなど多様な領域で法と心理学の検討が必要となっている。



牧野英一

【法心理学の課題】

犯罪や刑事法など、これまで関係の深かった領域については、現代的問題に対応することが課題であり、民事法や法意識などに関係する領域については研究領域の拡大と深化が課題である。

法制度が個別の国や文化に基づいていることを前提とした上で、共通の原理を追究することは法と心理学に課せられた使命の一つである。そのためには、法心理思想史のような領域が必要となるだろう。本稿においても、法と心理学の歴史を近代心理学成立

以降の出来事として捉えたが、そもそも、法思想の重要人物であるトマス・アクィナス、ホッブズ、ロック、カントなどの人々は、それぞれ近世心理学史に関しても重要人物である。法が必要であること、法に従うこと、法により仲裁・調整すること、はいずれも人間の本性について考えることを含んでいたからであろう。



Kant, I.

日本においては、裁判員裁判が開始され、一般市民が一部の刑事裁判に参加することになった。これまで職業裁判官のみが事実認定や量刑判断を行っていた時代には、法と心理学が裁判プロセスに積極的に関与することは一特に日本では一無だったのであるが、今後必要な領域となる。自白尊重という文化のもとに行われる刑事取調べの可視化も課題である。

対人援助学 & 心理学の縦横無尽 7



サトウタツヤ@立命館大学文学部心理学専攻

福島・ふくしま・Fukushima (1)

今回からは、福島のことなどを書いてみたい。なるべく長く色々と。

私は立命館大学に来る前は福島大学行政社会学部助教授として七年間福島に住んでいた。

今や有名になってしまった Fukushima。そして、一時期ホットスポットとして有名になった渡利というところに住んでいたのがあった。

2011 年 3 月 11 日、地震がおき、これまた有名になった Daiichi（福島第一原発）で放射能漏れが起きて以来、福島から離れた人間として何をすべきか、考えていたりもした。

これまた個人的な事情ではるが、父母は福島県喜多方市出身であり、隣の会津若松市も含めて親戚が何人か住んでいる。福島は心理的に近い場所、なのである。そうであるのに何もできない、という思いもあるし、何かしても的外れになってしまうのではないか、という思いもあるし。

などとグダグダ考えていたところ、立命館大学生存学研究センターの院生プロジェクト

「生存学における原子力研究会」の若手研究者たちが、福島大学の原発災害支援フォーラム（FGF）の人たちを呼んで話を聞きたい、ということになり、仲の良い元同僚が多かったので、呼んで話を聞くことにした。旧交を温めるというよりはシビアな話の連続ではあったが、福島に来て欲しい、それが観光であっても、実地調査であっても、という話があったので、いよいよ出かけることにした。この会がきっかけで院生が福島県立医大助手になるという全く予想外の出来事もあったりして、福島に出かける動機は高まっていた。

とはいえ、私も研究者のはしくれであり、観光に行くというわけにもいかない。そこで風評被害メカニズムの研究をすることにした。思えば、私がうわさ研究に足を踏み入れたのは、1995 年の阪神・淡路大震災の時だった。その時、福島大学行政社会学部の同僚たちや学生たちと『震災と行政と社会』という冊子を刊行し、その売り上げを被

災地に贈ったのだった。その時、テーマとして選んだのが「地震とうわさー関東大震災の虐殺」であり、それ以来、私はうわさ研究を手がけるようになったのであった。

今、そのキャリア（轍）を活かさないでどうするのだ？

立命館大学の「東日本大震災に関する研究推進プログラム」に風評被害研究を行うという申請を出して採択された。2012年6月にはエストニア・タリン大学のカトリン・クラセップ准教授が来日することになっていたので、「被災地に行ってみるか？」と尋ねてみた。イヤがる人はイヤがるのだが、カトリンは行ってみたいという返事をくれた。それで本当に行ってみようということになった。生存学研究センター研究員の木戸彩恵氏を協働研究者に迎え、院生も関心をもってくれたので、一緒にいくことにした。しかし、さて、被災地に行く、と言ってもどこにどうやっていくのがいいだろうか？

日本質的心理学会・震災WGで活動をしている茨城大学・伊藤哲司教授に連絡を取ったところ、太平洋の海岸沿いをいろいろと案内してくれるという。ご長男とご一緒に、しかも、9人のりのバンを出して運転までしてくれるというのである。伊藤哲ちゃんとの付き合いも最早20年近くになるわけだが、いつでも頼れる男である。

というわけで、出発するまでにこれだけ書いてしまった。福島の話はどうなったのか？つまり、私はいろんな人に助けられて福島に行くことができたのだが、それを書く福島に着くまでのことを書ききれない！

詳細のレポートは次号に譲るとして写真を二葉ほどお見せしよう。いずれも、2012年6月の状態である。

まずは飯館村役場。0.71 マイクロシーベルト／時間である。この数値に24をかけ365をかけると年間の線量になる。6219.6 マイクロシーベルト／年、つまり6.5ミリシーベルトである。（写真1）。

ところが、ここから車で五分も走ると、除染中。除染という言葉が良いのかは疑問である。要は表面の土を黒い袋に入れているのである（写真2）。この土の行き先はどうなるのか、気になるところだが、それはともかく、簡易版・ポータブルの線量計で測ってみると、3.71 マイクロシーベルト／時間である（写真3）。村役場の数値の約五倍。ここでも同じようにこの数値に24をかけ365をかけると年間の線量になる。32.5 ミリシーベルト／年、であり、現状で人が住めるような数値ではない。

2012年6月でこの数値である。私たちはこの数値をどう受け止めればいいのか。





参考サイトなど

福島大学原発災害支援フォーラム

<http://fukugenken.e-contents.biz/>

6月4日（月）「風評被害の構造」

<http://fsl-fukushima-u.jimdo.com/2012/06/06/災害復興研究所-定例研究会を行いました/>

東日本大震災に対する本学会の取り組み

http://www.jaqp.jp/news/110830_oshirase/

対人援助学 & 心理学の縦横無尽 8



サトウタツヤ@立命館大学文学部心理学専攻

福島・ふくしま・Fukushima (2)

福島訪問 2012.11.3 - 11.05

★はじめに

歴史の機能とは何か。歴史には物語の機能があり、制約はあるものの、様々な出来事を「つなぐ」機能を果たすものとも言える。もし、出来事をつながないのであれば、それは単なる出来事の羅列であり、それは歴史とは言えない。そして歴史研究のもう一つの機能として、再（評価）がある。これは異なる文脈からの再評価という意味で捉えることもできる。物事の意味は文脈によって多様に変化する。過去の出来事もまた、後続のどのような文脈に位置づけるか、あるいは、後にどのようなことが起きるかによってその意味が変わってくる。

卑近な例で恐縮であるが、筆者は立命館大学に奉職する前は福島大学の教員（1994-2001）であった。このことは、筆者にとって前歴の一つにすぎなかったが、2011年の東日本大震災（とその後の放射能汚染）によって、大きく意味が変わった。東日本大震災という事実が、それ以前の出来事である筆者の福島大学在籍という事実を変更することは不可能であるが、個人にとっての意味づけは大きく異なることになったし、周りの見方も変わった。そしてまた、福島大学に在職していたということの意味が現在の筆者の生き方を多少なりとも変えている。学生と共に復興のために少しでも役立ちたいと考えている。

2012年6月の訪問は第10号で紹介した。9月にも訪問したが、そのことはまたいつか書くことにして、11月初旬の訪問について書いてみたい。

今回、研究員・学生・院生と10人規模で福島に出かけた。勝手に言っているのだし、場合によっては飛び込みに近い形で訪れた場所もあった。しかし「来る」ことについて、私

たちが「行ったら迷惑ではないか」などと躊躇していたのは全くの杞憂だった。

今回は、学部生の黒田絢子さんを中心とするサトゼミ生が、福島県の情報発信事業「いいね！ふくしま」に採択されたため、その取材をかねて、福島県に出かけた。前回、前々回は浜通り（海岸地域）に足を伸ばしたが、今回は福島県の魅力をワイドに知ってもらうため、中通りの福島市訪問を中心にしつつ、会津地方を訪れた。福島県は、会津、県庁所在地の福島市がある中通り、そして浜通りの3つの地域に分かれており、それぞれ、風土と魅力が異なっている。

★2012年11月3日

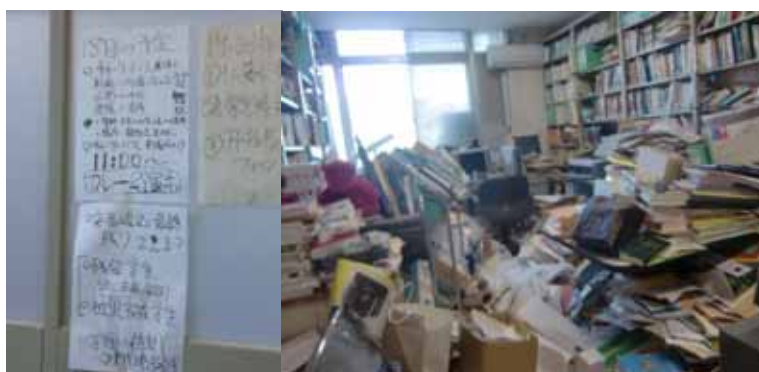
この日は福島大学の学園祭の日だった。誰にアポをとったわけではないが、学生委員とか学部長（福島大学では学類長と呼ぶ）はいるだろう、と勝手に考えて突撃。案の定、多くの元同僚に会えた。また、学生達の突然かつぶしつけな質問にも答えてくれた。



行政政策学類長・辻みどり先生は当日のことを語ってくれた。



地震直後、まず重要になったのは水の確保。また、学生の安全確認。幸いなことに福島大学学生に震災による犠牲者はいなかった。次に、放射能の問題が明らかになったときに、学生を自宅に戻すかどうか、ということが問題になった。国が「放射能は大丈夫だ」と言っているのに大学が学生を福島から出すなんておかしいではないか、それは放射能が危ないって言っているのと同じだからやめるべき、という反対論があったという。これについては、結局、帰りがっている学生を大学が支援するのは人道にもかなっているということで一件落着となった。この件に限らず、安全・安心をめぐる見解の違いは、大学のみならず多くの人たちにとって非常に重要であるにもかかわらず、というか、重要な問題であるからこそ、複雑な影を落としているとのことである。さて、いくつか、当時の様子を示すものが、動態保存の形で残っているので写真に収めさせてもらった。写真左は、2011年3月の張り紙である。教員たちが、様々な手配をしていたことを示すものである。写真右は、とある方の、研究室。2011年3月11日大震災後の様子。行政政策学類棟の7階の部屋だそうです。



佐々木先生の部屋を訪ねたら、学生委員で待機とのことでお話を伺えた。



福島には、人がいない、子どもが遊べないと思われるが、メディアの情報に影響を受けているのではないか。たとえば、2012年の9/11にNHKが特番を放送した際、子どもが遊べない公園を映していた。子どもにもインタビューしていたのだけれど、その子も「外で遊べない」というような答えをしていた。そういう答えをした子どもがいたのは事実だろうが、放映されている実際にその公園に行ってみると、子どもが野球をしていたりする。

次に、やけに親しげな鮮魚商さんが来た、と思ったら元同僚の塩谷先生でした。



次は千葉先生と修士課程一年生の佐藤くん。佐藤くんは2012年4月から福島に来たとのこと。Rのマーク入りのチョコレートをおみやげに差し上げました。



家族がバラバラになっていることの複雑さを様々な角度から語ってくれました。

11月3日は土湯温泉に宿泊。向瀧旅館。11月1日に再オープン。つまり、震災の被害を復旧するのにそれだけの時間がかかったということ。

★11月4日



旅館の前で記念写真を取り、五色沼を經由して喜多方へ。今回の目的は福島の良いさを伝えるということも重要なので、裏磐梯という観光ルートを移動して、景色の美しさを実感し、それを伝えることにした。



この景色。これが福島である。

さて、喜多方、と言えばラーメンなので、もちろん食べた。



その後、お土産屋さんも営む漆器店、木之本漆器店へ。何を隠そう、ここは私の母の実家、つまり「おばあちゃんち」なのである。現在の当主は私にとってイトコにあたる遠藤久美さん。孫がいるとは思えない！



久美ちゃん（と幼い頃は呼んでいた）は、「一番大きく変わったことと言えば、住んでいるひとが2つに分かれたこと」だと感じているという。助けが必要な人／助けたい人という二分法、あるいは、ここから逃げなきゃいけないという人／この場に残ってがんばっていかなくちゃという人、の二分法が立ち現れたというのである。

喜多方市は、震源からも原子力発電所からも遠かったのだが、もちろん、様々な影響を受けている。6000 人の方が避難してきているとのことである。地震直後、とにかく店を開けていたそうである。店を開けていることによって、多くの人が、止まり木のよ

うに木之本漆器店を訪れてきてくれたとのことである。実際に、商売になったのかといえなくなってはいるのだが、店を開けていたために、この店で一息ついていった方々がいたし、後日再び訪れてくれた人もいた。それで良かったと思う。

放射能について、恐れているわけではないが、やはり情報が少ないと思う。チェルノブイリの事故など誰もが知っているのだから、そこから得られたこと得られなかったことなどを丁寧に説明してほしいし、それがなくて、疑心暗鬼になりがちのところはある。喜多方市は修学旅行生が多かったのだが、去年はゼロになった。裏磐梯地方は実際に放射能の数値が低いとは言えない以上、仕方無いのか、と思う面もある。そういう意味で、福島経済的打撃は、もしあるとしても、どこまでが風評被害で、どこから実害なのか分からない、という気持ちもある。

ただ、外の人が思うほど、悲壮感があるわけではない。現在来ていただいている方々がもう一度来たいと思ってもらえるように、努力すべきだとは思う。

安全論者もいれば非・安全論者もいるわけで、結局どっちを信じるかは自分次第である
これは全てのことにいえるし、風評被害の問題もそうであると考えて

喜多方から福島市に戻って来て向かったのは—これまでも何度か訪れている—高橋果樹園の高橋さん。ふくしま土壌クラブとして活動するなど、地元の農家としてできることをやる、という姿勢に貫かれている。奥様は知る人ぞ知る、元「ミス・ピーチ」。お二人の真摯な姿勢には常に頭が下がる思いである。

高橋さんは、実は色々なことをやってきた。しかし、除染などは、一生懸命やれば、そんなに汚染されているのか、と思われてしまう側面もあり、複雑だとおっしゃっていた。本当に真摯に色々なことをやってきた。その努力が結果に表れてきているという自信もうかがえた。「福島の果物のおいしさをアピールする」ということが大事だというのが今の心境だそうである。

高橋果樹園の努力については、いつか、きっちりと、文章にまとめて皆様にお伝えしたいが、慎重に書く必要があるので、時間が必要である。



夕方は福島大学の元同僚たちと軽く宴会。福島大学時代の大学院の教え子の鈴木実氏、立命館大学元ゼミ生の日高君（福島県立医大助手）も参加してくれました。元々は縁もゆかりもなかった二人が福島で知り合いになってくれる、というのはうれしい。教師をやっていて、幸せな気分になれることの一つである。

★11月5日

11月5日は、福島民報社を訪れ、社内にある財団法人 福島民報厚生文化事業団事業団を通じて寄付を行った。今回の寄付は、「立命館大学・応用社会心理学受講者学生有志＋研究部職員有志」の名前で行いました。5名がその代表として写真に収まり、翌々日の福島民報の新聞紙面を飾りました。

ちなみに、福島には地方新聞が二紙あるのですが、それは福島民報と福島民友。福島新聞というような名前ではありません。明治時代における自由民権運動発祥にふさわしく、新聞に「民」の字が使われているのでしょう。



その後、松川にある避難所へ。ほぼ飛び込みに近かったが、大歓迎してくれた。



★おわりに

今回も、また、いろんな言葉に出会った。

「おおサトウタツヤか。よく来た。でも、来るのが遅いじゃないか！」 と言ったのは福島大学の小島先生。何も言わずに、顔を見るなり、いきなり、である。しかし、震災後、一年半後、ということが前提になっている。

「ちょこっとでもいいから、みなさんに福島に来て欲しい。何もお買い求めいただかなくても、みなさんが来てくれている、ということが自信になる」とは 土湯温泉 向瀧 支配人氏。

「こうやって皆さんに関心をもってもらって、来てもらえるのが、うれしいです」と言ったのは福島民報記者氏。

「一度来てくれるのもうれしいけれど、それっきりの人たちよりも、何度も来てくれる人たちとの関係は、また別のもの」と言ってくれたのは高橋果樹園の経営者 氏

「また、いつでも来てくださいね」と送り出してくれたのは、川内村松川避難所の管理人 氏

福島を、可能な限り繰り返し、訪れること。そして、その時、その時の福島の様子を伝えること。おいしい福島の名産品を味わってもらうこと。今できることはそうしたことだけなのかもしれない。

というわけで、私たちは、立命館大学の学園祭での「いいね！ふくしま」展示を行った。福島の人たちの写真と、高橋果樹園のリンゴジュースである。



対人援助学&心理学の縦横無尽 9



サトウタツヤ@立命館大学文学部心理学専攻

QOL 測定における数値化表現の本質を問う

あるいは QOL から SEIQOL への架橋のための素描^{*1}

第0章 はじめに

明治二十年代の日本で、小学校の卒業時に人物評価が証書として与えられることになった。この制度は施行前はかなり歓迎されていたのだが、実施されるとわずか数年で姿を消した。成績が必ずしも優秀でなかった者達は、人物の評価で高い評価を得られると期待していたのだが、実際にはそうはならず、両面を低く評価されるものが多かったのである^{*2}。

^{*1} 本稿は、筆者が雑誌『生存学』第2号に寄稿した「QOL, 再考（死より悪い QOL 値を補助線として）」（生存学, 2, 171-191, 2010）を大幅に加筆して構成し『対人援助学マガジン』に学術エッセイとして掲載するものである。量的にはもとの原稿に対して倍であり、質的には知能検査などの数量化の問題も扱うことで「数値化とは何か」をより深く問う構成になっている。

^{*2} 仮に評価が優劣のみの二分法であり、二つの評価軸が完全に独立だったとき、全体の四分の一が成績人物の両方を劣とされることになる。しかし、実際には教師から見た人物の優秀さは成績と相関していたに違いないから（二つの軸が独立ではない）、かなり多くの人が成績・人物ともに劣っていると評価されたはずだと私は勘ぐっている。具体的に言えば、教師にとって「良い人物」とは成績の良い人であることが多いということであり、成績がよい子は「良い人物」に見えてしまうということである。

評価軸が一つである場合、他の軸が理論的にも実際的にも必要とされる場合があり、それが評価実施者はもちろんのこと、評価される当事者に歓迎される場合もある。しかし、軸が二つになるということは、二つの劣った評価を得る人がでることを意味する。

心理学的測定理論（以下、心理測定学とする場合もある）に基づく知能検査は、フーコーの言うところのパノプティコン（一望監視装置）だと私はかつて述べたことがある（サトウ、2006）。また、知能検査は創案者のビネの意図に反して、優生劣廃学のための選別の道具として使われたこともある。

評価の軸を一つ増やすということは全く不要だということにはならないが、評価は誰のために、何のためにするのか、開発の目的を離れて使うことの是非はどうか、ということなどを常に考えていかねばならない。

本稿で主題とする QOL の測定について、知能検査の教訓は生かしていけるのだろうか。

なお、測定は一定の手続きで数値化することであり、評価は（数値であるないに関わらず）良い悪いについての意味づけをすることである。

「**くんの彼女ってスラッとしてるよね・・」

「身長 140cm あるんだって！」

「高〜い！すてき。お似合いのカップルだね」

というようなことである。身長は測定値であり、スラッとしてる、とか、ステキ、というのが評価である。この会話は大人であれば意味をなさないが、小中学生だったら充分あり得ることである。測定を基にした上で、特定の価値体系（評価空間）の中でなされるのが評価である。

第1章 起 QOLの何が問題か

クオリティ（Quality=多くの場合、質と訳される）を測定するというのは、字義からすると矛盾以外の何ものでもない。しかし、そのようなことは実際に行われており、QOL の数値は、それ自体として重宝されるだけでなく、医療経済学などでも用いられることがあり、医療資源配分の議論の参考にされることもある。さて、QOL の数値化のなかで驚かされるのは、マイナスになる QOL というものである。QOL においては、死を 0、完全もしくは理想的な健康状態を 1 とした上で様々な状態の QOL を数値化するのであるから、定義から言ってもマイナスはあり得ないはずである。死んだ方がマシ、死にたいくらい苦しい、という表現は存在するが、それはあくまで生者の言葉であり、それを文字通りにとってマイナスの QOL もあり得るとする態度はおそらく不誠実だろう。

死より低い生の数値化を許容する QOL 測定の仕組みについては後に詳しく検討するが、このことを含めて本稿では、QOL なるものについて、数値化の手続きという観点からいくつかのことを考えていく。QOL の Q はクオリティであるから、質であり、数値化になじみにくいと思われるのだが、心理測定学が蓄積していた数値化の技術を援用することで、現

実に数値化が行われている。ここで重要なことは、数値化は量化ではないということである。数字にしていることで、量として扱おうとしているだけであり、量ではないのである。質を数値化するということは不可能であると叫んだところで、様々な数量化の方法がある中ではごまめの歯ぎしりのようなものである。ここでは、数値化の問題の最たるものは、結果の単純な一次元化であると主張しておきたい。数字の一次元性こそが、功利主義との結びつきを根底で支えており、指標としての QOL が医療経済学に回収され、時にはマイナスの QOL が重宝される根源である。

また、QOL に限ったことではないが、数値化を行うことでその指標が信頼にたる妥当な測定として認められるべきだという主張があるけれども、そこにはどのような根拠があるのだろうか。QOL に関する多くの書籍・論文では、数値化された QOL の使用方法については書かれているし、それが使用された研究は多く紹介されているが、その前提はあまり書かれていないように見受けられる。そこで以下本稿では、数値化を支えるメカニズム・システムを検討していくことにする。第2章では、起承転結の承として QOL という概念、心理測定法という方法論について、その歴史もふまえて考えてみる。第3章は、転として、QOL という考え方を批判する。その際に医療経済学に組み込まれた時におきる問題を主題化する。QALY という装置が取り扱われる。第4章は、結であり、じゃあ、どうするの？という点について、項目事前準備型ではない QOL の把握方法である SEIQOL という代替案を中心に考えていく。

第2章 承 訳が無いことに慣れてはいけなし、質を測定するという矛盾に慣れてもいけない

第1節 Quality of WHAT? あるいは LIFE という魅力的で粗雑な概念

QOL とは何か。このような場合、たいてい日本語に置き換えることで意味を捉えようとすべきなのであるが、まず日本語に訳すことが難しい。Quality は質である。これは単純に置き換えられる。したがって Life の質となる。そして、この Life を訳するのが難しいのである。

簡単に言うことが許されるなら、日本語で「生命」「生活」「人生」で表すことが、Life という英単語で表されていることが分かる。ここで、(昔懐かしいという人もいる) サピエ＝ウォーフ仮説を援用して考えてみると、言語は必要に応じて分化するものであるし、また言語の分化が私たちの認識に影響するということが考えられるから、Life であれ何であれ一言で言えるということはその表現すべき事象について差異の認識と表現に価値をおかないということになる。Life 以外に私たちが実感しやすい例としては、英語のブラザー・シスターと日本語の兄弟姉妹の対応がある。英語において、兄・弟を言い分ける必要はなくブラザーで十分である。一方、私たちは自分のきょうだいを英語圏の人に紹介するときに、

「マイ・オールダー・ブラザー」のように「年上の」という表現を付加せずにはいられない。常に年齢の相対的位置に敏感でなければならない状況では、姉・妹が違うコトバで表現されるのだし、兄弟や姉妹という違うコトバがあるから現実認識の仕方が年齢センシティブになっていく。

あわてて付け加える必要があるのだが、これらの例は、日本語が繊細でセンシティブなコトバだということを意味するわけではない。北極圏で暮らすイヌイットたちは、私たちが一言で「雪」と表現するものを、「降る雪」「住居を造る雪」「大地の雪」というコトバを用いて表現を分化させている。

QOL なるものが、最近の日本では日本語に訳されず、また、カタカナ表記もされずアルファベット表記で流通していることは、そのこと自体が反省的に捉えられなければならない。日本語にすると、LIFE の持つ魅力的で豊かな意味が損なわれてしまうから、という美しい解釈もよいが、学者たちの知的怠慢の可能性がある。また、LIFE という概念がそもそも私たちから見たら粗雑なので訳しきれないという冷たい解釈も行っておく必要がある。LIFE という概念は大ざっぱである、ということだ。

こういう例を考えてみればいい。

あなたが電車に乗っていると考えてみよう。実りの秋。車窓から、収穫直前の稲穂が見える。「実るほど頭（こうべ）を垂れる稲穂かな」なんて叔父からことあるごとに言われたなあなどと思い起こしながら、黄金の波を見る。そのとき、「ご飯が生えている」と言う子どもがいたらどうだろうか？「収穫して、精米して、おうちで炊いたらご飯になるんだよ」とあなたは言うだろう。あるいは、近所のスーパーから新米5kgを買ってきたあなたに、「稲買ってきたんだね。早く稲を食べたい」という子どもがいたらどうだろうか。間違っていない。しかし、それは違うと言うだろう。そして、以上の話を英語で行えば、稲穂もご飯も米も全て Rice で表せるのだから、違和感のない話になる。

北極圏に住む人たちが、住む家を造るために雪のレンガを用いている。家を造るのに適切な雪質というものはあるだろう。その人たちが実際には、「家を造る雪」として良い雪と言ったことを、私たちの言語は、良い雪、と訳してしまう。降る雪や大地につもる雪のことには言及していないのに、良い雪、と言ってしまうことで雪の用途や状態ではなく、「雪なるもの」の質に言及することになってしまう。

一言で「雪なるもの」の質に言及し値踏みするということは、その概念の内包について、とてつもなく大ざっぱな理解が含まれている、ということが、QOL の場合にもあてはまるかもしれない。とにかく、異なる文脈で現れた LIFE について「訳し分け」て「分かった」気になることは危険である（QOL という表現で表して分かった気になるのも同様に危険だが）。生命と生活と人生をずらしながら表現する世界とそれらを一言で LIFE と表現する世界。相互の尊重が必要であることは言うまでもない。もう少し強く表現しておけば、異なる世界観で生成された概念を単に翻訳すればすむというものではないことは明確である。一方で訳せないから QOL と文字表記することにも懐疑の目を向けるべきだろう。国際化の

時代において、異なる国や文化における測定尺度の共通理解はどのようになされるべきなのか。後に見ていくことになる EQ-5D という尺度について、その中味の項目の訳し方について、バックトランスレーションを丁寧に行うというような「表面的」な問題では解決できないことがあることはハッキリしている。

このように曖昧な QOL の L (Life) であるが、このライフが「生命」の意味で解され（そう訳されている）領域が少なくとも二つある。一つは新生児医療の領域であり、もう一つが医療経済学における費用効用分析である（質調整生存年）。前者については櫻井(2010：本誌)が二つの例を出しているので煩を厭わずここでも見ておこう。

アメリカの小児科医のシャウ(1977)が QOL 診療基準を提案したが、それは下記の式で表されるという。

QOL = 「天から与えられた身体的・知的資質」 × (「家族：家庭」 + 「社会によって与えられるその児への援助」)

従属変数たる QOL が何を意味するのか、生活なのか、生命なのか、分かりづらくはあるが、新生児は生活を殆どしていないという逆説的な理由もあり、生命と訳され理解されることが多い。エンゲルハート(1986=1989)が提案した、QOL に新生児の現在の状態と将来の時間を取り込んだ以下のような公式では、QOL が生命の質を表していることは比較的明確となる。

恩恵 (benefit) の義務の強さ = (成功の確率 × QOL (生命の質) × 生命の長さ) ÷ 費用

この式において QOL は、被説明変数たる恩恵 (benefit) の義務の強さに影響する説明変数となっており、QOL が「生命」の質と訳されているのである。ただし、新生児医療に関するこの問題は他に委ね、私たちは新生児医療の問題からは距離をとり、むしろ、概念を測定するとは何か、ということに歩を進めていきたいと思う。

第2節 概念とその測定の乖離 理性・知能を対象化する道

人間の性質に関する何ごとかを概念化することと、その測定は異なるものである。また、人間の性質を概念化することも、その測定方法の整備も、それぞれ異なる歴史的な文脈の上で社会的に構成されてきたものであることにも留意しなければならない。

驚くべきことでもないが、魂 (spirit) に変わって心 (Mind) に焦点があてられ始めたのは、中世から近代へと移行する時期のことである。中世が暗黒であり、近代が光当 (enlightenment) であるというのは、後知恵的な欺瞞の匂いを感じないわけにはいかないが^{*3}、

*3少なくとも、中世に生きる人々は、その時点において「Dark age」なるものに生きてい

何が善で何が悪かという基準を—それまでの宗教的権威と独立に—人間がその理性に基づき、あるいは経験に基づき形成していける時代の到来は、それがヨーロッパという地域限定的なものであったとしても、人類史上に意味をなすものであっただろう。

暗黒な中世という時代を揶揄するエピソードにウマの歯の問題がある。19世紀から20世紀にかけて活躍した動物学者 Richard Hertwig が中世の動物学を評することには、中世の学者は「ウマの歯が何本あるか」ということをたびたび激論的としたが、その1人でも実際にウマの口をのぞいてみるものがなかった、のだという（小川、1964による）。シジェク（1999）によれば、近代以前においては「汝の眼ではなく、我が言葉を信ぜよ」という規範が強く働いていたからである。

このような時代を克服すべく、一六、一七世紀のヨーロッパでは、理性が光となり、経験が祝福される風潮が現れた。つまり、理性を／で考えることは近代ヨーロッパ哲学の注目すべき特徴的な出来事であったが、やがて心理学という領域が哲学から独立を始めようとする、理性を人間の性質の一部として扱い対象として扱おうとする動きが出てきた。

一八世紀になって、心理学を一つの学問体系として位置づける動きが出てくる。特にヴォルフが一八世紀前半に相次いで世に問うた『合理的心理学』と『経験的心理学』の影響が大きかった。ヴォルフにおいて経験心理学は「人が人について経験を通して認識するもの」と関わるもので、合理的心理学は「人が人について経験を通して認識するものについて、その根拠を心の本質および本性のうちに示す」ものであるとされた。心理学を合理的とそうでないものに分けることは新しい考えでありそれが『経験心理学』という名称になったことも新しかった。ヴォルフにおいて—実存としての魂ではなく—思惟や表象の主体としての心を扱う姿勢、心理を観察によって理解する姿勢が初めて示されたのであり、学範（ディシプリン）としての心理学の成立を先取りしていたとも考えられている。また欲求と忌避を計算によって明らかにするプログラムとしての心理測定法（psychometria）についても取り扱われているという（小田部、2007）。

一九世紀。ダーウィンが進化論を唱えると、人間と動物に様々な連続性を見る見方が登場した。特にダーウィンの友人の比較解剖学者ロマーニズは進化論的な視点から人間と動物の行動を検討する比較心理学(comparative psychology)を創始し研究を行った。彼は逸話収集と分析を行い、人間と動物の知能の連続性を強調したのだが、その時に「低次の動物に現われたことを記す際に理性(reason)という語を使うのはいくぶん異様に聞こえるであろうから、私はこうした場合にはしばしば知能という語を代わりに用いることにしたい」

と思ったわけではない。enlightment の訳をここでは光当とした。日本語の訳は時に原語の本質を鋭くとらえた「超訳」になるが、啓蒙もその例であると感じる。enlightment は光をあてる、というような意味だが、蒙を啓くという機能をつかみ取って訳語にしたのだろう。心理学の例だと subject を被験者と訳すとか母子間の attachment を愛着と訳すなどが超訳の例にあたるだろう。

(Romanes, 1882, p.14)と述べていた。理性は人間だけのものだという当時の雰囲気伝わってくるし、知能は動物と人間に共通の知的能力だという意味になっていったことが分かる。

つまり、人間のなかに知能・知性や性格という概念をあてはめて人間を理解するようになるのは理性主義よりもさらに最近のことなのである。しかも理性とは異なり知能や性格の場合は個人差という概念とも不可分であった。ここでは心理概念の生成史を扱うわけではないので詳述はしないが、個人差が脚光を浴びたのは産業が人を必要とする時代のことであり、その個人差を測定しようとしたのは心理学が近代化した一九世紀中葉以降の出来事である（この意味で近代産業社会と心理学は完全な共犯関係である）。こうしたなか一九世紀末から心理学という新しい学範（ディシプリン）に身を投じたアルフレッド・ビネがテオドール・シモンと共に開発した知能検査が20世紀初頭に完成し、画期をなしたのである(1905)。

第3節 知能検査は何を測定したのか 知能検査と知能指数（IQ）の間の溝

知能検査のアイディアはキャテルのメンタル・テスト(1890)に遡るが、そこでは感覚・知覚の個人差が重視されていた。メンタル・テストは不首尾に終わった。なぜビネの知能検査は成功したのか、それは一般的な知能を探究するというよりは、具体的な場における能力の発現を前提にして、知能検査を開発したからである(Binet, 1905)。ビネは知能に関して、単なる感覚や知覚のテストではなく、思考のような高次の心理プロセスを把握すべきだと考えていた。さらに彼はフランスの初等教育において集団授業に馴染まない生徒を選別するための有効な検査の作成を試みていた。ビネの知能検査は、「年齢による知的水準の違い」に着目したことにより成功した。年齢という時間の尺度（あるいは成長の尺度）をうまく外的な参照点として置くことにしたのである。ある子どもがある項目（たとえば「君の名字はなに？」に正答したとしても、それだけでは単なる反応にすぎない。そうではなく、名字を答えられるのは何歳くらいなのか、逆にある年齢の子どもたちがどのような問題に対してどのように正答できるのか、ということを予め調べておき、それとの比較で子どもの水準を理解しようとしたのである。

単なる回答の集計ではなく、事前の調査結果との参照による評価、これが心理学的な評価の基本である。本稿で後に検討する、ストレス、QOL そのいずれも何らかの形の事前調査が不可欠であり、その事前調査の結果との参照によって「測定」が行われている。

なお、ビネは知能検査の開発者ではあるが、知能指数の発明者ではない。知能指数はドイツの心理学者、シュテルンが提案したものである。

ビネらは1908年に改訂版を作成するが、そこで年齢尺度という考え方が作られた。この知能検査では、どの問題に答えられたら何歳レベル、ということが予めの調査によって決定されているのである（年齢尺度）。目の前にいる子どもが何歳レベルの問題に答えられ

た、何歳レベルの問題には答えられなかった、ということを知ることによって、個々人の結果が知能の年齢水準として表されることになったのである。これを精神年齢 (Mental age) と呼ぶ。そして、その精神年齢を実際の年齢 (生活年齢あるいは実年齢) と比較するのである。知能の年齢水準 (精神年齢) が生活年齢と一致すればその子は標準的、生活年齢が精神年齢より低ければ遅れがある、と判断された。ビネは、2歳以上のズレを、介入の必要な遅滞レベルであると考えた。

ところが、2歳のズレ (遅れ) といっても、その子が何歳であるかによって意味は異なる。そこでドイツの心理学者シュテルンが「生活年齢÷精神年齢」によって結果を表現しようと提案した。これこそが知能指数である。この結果表記を実用的な検査に取り入れたのがアメリカのターマンである。ターマンはビネ＝シモン検査のアメリカにおける改訂版を作り (スタンフォード＝ビネ式)、その際の結果表記に知能指数を取り入れたのである。なお、ターマンは知能の定義として「一定の方針を決め保持する傾向、意図する結果を達成するために目的を調整する能力、自己批判力」というビネの定義を採用していた。

知能指数の計算式は「生活年齢÷精神年齢」に 100 をかけて表現することになっており、平均は 100 である。この算出式は、比率による表現になったのだが、それと共に、単位が消えてしまったことにも注意が必要である。一次元的で、かつ、大きい方が良いように思える数値が誕生したのである。知能指数は IQ として日本でも良く知られている。

ビネらの知能検査は、ビネの理論とビネの実用的関心の接点に成立したものだが、その成功は、知能を科学的に捉える道具が誕生したものとして歓迎された。心理測定学という心理学と統計学のアマルガム (合金) のような学問が成立するきっかけとなった。ただし、心理測定学という数値化や数字操作の規範は確立したのだが、その対象である知能の定義は人により様々であった。ビネは自分なりの知能の定義に基づいて研究を行い検査を作ったが、他の人が彼の定義を受け入れているかどうかは定かではない。むしろ他の定義に基づき、その測定を行っていた人もいただろう。知能に限らず、こうした概念については、定義は定義で行われており、その一方でそれを測ることを目的とした数値化は数値化として整合性を重視して行われている。その結果として定義と測定には大きな乖離があると言っても決して言い過ぎではない。

さらに、知能検査を基盤にした心理測定学が成立することによって、様々な心理的概念を対象にした測定が可能であるように見えた。たとえば、性格検査は知能検査に少し遅れて成立した。その原型の一つは第一次世界大戦において、戦場神経症に陥りそうな兵士を除外するための目的で作られたウッドワースらの「個人データシート」に求められる^{*4}。そ

^{*4}このことを性格研究から見ると、若干違った風景となる。すなわち数値化は遅れてきた性格研究法であったのである。1920年代にクレッチマーやユングなどにより性格の類型学が勃興しており、そこでは、面接による性格の把握こそが目指されており、それは決して数値化を目指す方向ではなかった。

して、知能、性格に引き続いて大きな概念として用いられたのは（心理的）ストレスであり、多くの測定器具（心理学の場合、器具というのもおかしいが）が作られることになったのである。

第4節 IQにおける数字の一人歩き

数字の一人歩きというのは常に心しておかねばならないことであるが、知能指数に関しては、積極的に一人歩きをさせるような研究が行われていた。コックスによる偉人 IQ の研究である。

表1は1位から3位までの人物とそのIQを抜き書きしたものであり、表2は同じIQ値であると推定された人たちを示したものである。

表1 Coxによる有名人のIQの推定

順位	名前	推定IQ
1	J. S. ミル	190
2	ゲーテ	185
3	ライプニッツ	185

表2 Coxによって同じIQだと推定された人たち

IQ=135

ワグナー、カント、ダーウィン

IQ=150

モーツァルト、ヘーゲル

もちろん、ここまで読んできた読者諸賢におかれては、このようなものがそもそもビネ＝シュテルンによって開発された知能指数とは無縁であることはわかるであろう。ゲーテでもモーツァルトでも、その子どもの時期には知能検査など無かったのであるから。実は、これらの数値は、コックスが自伝などを読み、まず全ての人にIQ=100を与えた上で、幼少期に賢さを彷彿させるエピソードがあれば加点するというを行って推定したものである。ところが、ラベルというのは恐ろしいもので、同じ「知能指数（IQ）」というラッピングがなされると、それまでの手続きのことはあまり気にすることもなく、何となく同じものだと思ってしまうのである。

これくらい手続きが違っていれば、調べれば違うと分かるが、手続きが違うかどうかを知らうとする人があまりいない。したがって同じ言葉（ここではIQ）で表されたものは似たようなものだと思わされてしまうのである。本稿の主題であるQOLについても、ここま

で極端なものはないかもしれないが、同じ言葉で表現しているものが同じ手続きで行われているわけではない、という意味ではIQと大差はない。

次に、手続きに問題がない場合でも知能検査の数値をどう解釈するのかについて様々なポリティクスが作動することがある。数値は客観的なものかもしれないが、解釈は政治的になりえるのである。

表3は日本における教育測定学の先駆者の1人である田中寛一が戦前に行ったものである。田中は言語式(A式)ではなく数字や図形などを用いる非言語式(B式)検査を用いて「朝鮮、満州、台湾、支那」の現地の児童及び各地の在外日本人児童に対して知能検査を施行した^{*5}。その結果いずれの地域でも現地児童と日本児童の比較では日本人児童が優れていたとされた(佐藤、2002を参照)。次に田中は北米(ホノルル、サンフランシスコ、ロサンゼルス)において日本人を含む様々な民族の児童に対して知能検査を施行し、日本人の知能が高いとした(田中、1941)。表3は田中(1941)の結果総覧とも言える第161表(北アメリカ3都市における公立小、中学校児童生徒の学校種別知能偏差値の平均、標準偏差)から抜粋したものである。ここでは知能指数に変わって採用された知能偏差値の数値が用いられているが、北米都市に住む諸民族の中では日本人の知能が高いという(当時の日本人にとって都合のいい)結果になっている。

表3 田中(1941)による北米3都市における諸民族の知能検査結果

集団別	知能偏差値	人数
日本人	49.8	644
イギリス人	45.1	524
ドイツ人	43.7	118
イタリア人	37.1	217
アメリカ人	44.2	668

注・田中(1941)の第161表から欧米の小学生で被験者数が100人以上の集団を抜粋した

表3を見ると確かに日本人児童(小学生)の値が最も高い。しかし、その数値は49.8であり、他はそれ以下となっている。これは何を意味しているのだろうか。知能偏差値とは

^{*5}星野(1997)はこの結果について2つの保留が必要だとしている。まず、被験者選定がどのような学校で行われたかが明記されていないし、少なくとも日本人児童の通う学校は優秀な生徒が通う学校であったとされる。次に、B式検査は非言語式であるとされるが、問題施行をする際には必ず教示が必要であり、教示の言語がどのようなものであったかによって結果に大きな差がでるというのである。星野真由美 1997 心理学の教育・社会への影響 佐藤・溝口(編著)『通史 日本心理学』 北大路書房 第3部2章 Pp.258-274。

そもそも 50 が平均になるように整備されたものであるから、平均がそれ以下であるということは、その集団に適した知能検査ではないのである。数値という結果のみを重視して、数値のみを比較可能だという立場は大変危険なものである。

第5節 ストレスの測定：万人向けのストレス尺度は可能か

心理的概念の数値化、知能の次はストレスについて見てみよう。

ストレスという概念は、生理学者のキャノンやセリエによって注目されたものである。セリエはラットを用いた実験を行い、個体を脅かすような有害な状況を作りだすと（寒さにさらす、外傷を与える、過度の運動、様々な薬物による中毒状態）、それぞれの有害要因に対して特異的な症状群（局所適応症候群）と、どの有害要因に対しても引き起こされる症状群が見られることを見いだした（1936）。後者（どの有害要因に対しても見られる症状群）は1. 副腎皮質の肥大 2. 胸腺・全身のリンパ節の萎縮 3. 胃・十二指腸の出血や潰瘍、からなり、これをセリエは汎適応症候群（General Adaptation Syndrome）と名づけた。ストレスはその当時において機械工学の専門用語であり、「外力が物体に加わった場合の歪み・不均衡」という意味を持っていたが、セリエのこの論文以降、有害要因に対する生物の反応を示す用語として新しい意味を吹き込まれた。また、ストレスを引き起こす要因は、当初ストレッサーと呼ばれていたが、やがて、ストレスという語がストレッサーを意味するようになり、人間生活におけるストレス研究が盛んになっていった。

たとえばホームズとレイ（Holmes & Rache、1967）はストレスを「日常生活上の様々な変化に再適応するために必要な努力」として捉えた。彼らは、身の回りの出来事は、それがどのようなものであっても、何らかの再適応の努力を必要とするものと仮定し、様々な出来事の再適応の度合いについて標準的な尺度を構成した。それが社会的再適応評価尺度である（Holmes & Rache、1967）。これは「配偶者の死」を数値 100 とし、結婚を 50 とし、どの程度、生活の再構築（彼らの言葉では再適応）に影響があるか、を検討したものである。

表4 社会的再適応評価尺度の項目例

配偶者の死亡	100
自分のケガや病気	60
結婚	50
失業	47
夫婦の和解	45
家族の病気	44
特別な業績	28

休暇	13
クリスマス	13

この尺度は、多くの人に、この出来事がおきたらどうか？ということ問うことにより、標準的な重大度（マグニチュード）の値を提案するものである。多くが日本人であるだろう読者諸賢におかれては、失業と夫婦の和解がほぼ同じ数値であるとか、クリスマスが項目として採用されていることについて、様々な違和感をもったことだと思う。これはどのように決められたのか。これは結婚を 50 とした時に他の出来事はどれくらいの大きさなのか、ということの人々に尋ねて得た数値の平均値である。

そして、ストレスの評価をされる人は、多くの項目について、特定の時間内に経験したかどうかを答えるのである。答えるのは自分の経験（家族が病気をしたとかクリスマスがあったとか）であるが、そのストレス度は事前調査によって割り当てられているものである。

ホームズらは、こうした出来事の標準的な数値を設定することによって、生活におけるストレス重症度を理解しようとし、精神疾患の説明変数としても用いようと考えていた。ストレスの値は、ここでも質の違いを数値化したものとして扱われている。日々遭遇する出来事について、単に数を数えるだけではない。重症度という質を加味した上で、どのような経験をしたのか、を理解しなければ、その人の生活や精神疾患との関連をうまく予測出来ないというのが心理的ストレス論の基本的な考え方である。そして、重症度については本人の評価ではなく事前の調査で重みを予め決めておくのである。

第6節 そして、QOL（quality of life）

やっとな、である。

QOL には明確な定義はないことは既に述べてきたことだが、「良い生のあり方」を考えるというように意味を広く取るならば、プラトンの『国家』やアリストテレスの議論に遡ることができる。アリストテレスはその『ニコマコス倫理学』において、健康が幸福にとって重要だと指摘していたことから、健康関連 QOL の源流として考えられている。

QOL が社会学や心理学において実証的研究として扱われるようになったのは 20 世紀になってからである。社会全体として、そこに生きる人々の QOL を考えるような志向を仮にマクロ QOL 研究、どのような社会であれ、個人の状態を基点にしてその個人の QOL を考えるような志向を仮にミクロ QOL 研究と呼ぶことにすれば、前者は社会インフラの指標を用いた QOL 研究を行うことになり、過去の任意の時代・任意の地域を対象とした QOL 研究も成立することになった。一方、後者（ミクロ QOL 研究）は、個人の状態をいかに的確に把握するかが重要になってくるから、心理測定学の技術をその根本に据える必要がでてきたのである。

QOL は生活全般にわたって考えるべきであるが、既に見てきたように、Life をどのように考えるのが明確ではない。したがって、領域を区切って考えることも十分ありうる。たとえば就労関連 QOL というように、職業生活をめぐる QOL という問題の立て方は不適切なものではない。就労状況の質は学校生活における質とはまた別物であろう。

さて、医療の世界に目を移せば、QOL が重要な概念として取り上げられるようになってきていることに気づく。医療において QOL という概念が脚光を浴びてきた理由はどこにあるのか。それは患者立脚型のアウトカム評価の重要性、ということである。そしてまた、この患者立脚型アウトカムが医療経済学に接続することで、医療費配分の問題に一つの方策を提案できるということがある。福原（2002）は、健康関連 QOL (Health-related quality of life=HRQOL と略す場合もある) を「疾患や治療が、患者の主観的健康感（メンタルヘルス、活力、痛み、など）や、毎日行っている仕事、家事、社会活動にどのようなインパクトを与えているか、これを定量化したものである」と定義している。

健康関連 QOL は、医療における結果・効果を完治・治癒以外に設定するという文脈で医療に登場した。その初期のものとしては医師・カルノフスキーによるがん患者を対象にした Performance Status scale (KPS) がある。パフォーマンスの状態という語が暗示するように、これは日常生活動作（Activities of Daily Living; ADL）に焦点をあてた尺度であるが、医療のアウトカムとして用いるという発想による尺度であり、当時において斬新であり、またその内容はその後も色あせず今日においても用いられている。

なお、健康関連 QOL は、大きくわけて日常生活動作を基盤とするものと主観的ウェルビーイング（SWB; subjective well-being）を基盤とするものがある^{*6}。また、特定の疾患患者を対象とするものと、個別の疾患を超えた包括的なものがある。

さて、カルノフスキーの実践的試みと同時期に、QOL にも大きな影響を与えた世界保健機構（WHO）による健康の定義が発表された。WHO は 1948 年の設立時に「世界保健機関憲章」を発表したがその前文に健康の定義がなされているのである。

Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.

1951（昭和 26）年に官報に掲載された訳は「完全な肉体的、精神的及び社会的福祉の状態であり、単に疾病又は病弱の存在しないことではない」となっている。well-being は良くあることであり、現在の訳では良い状態（安寧な状態）となるだろうから、私なりに訳し

^{*6}単純な理屈であれば、健康関連 QOL は主観的ウェルビーイングの一部であえると考えるべきであるが、健康関連 QOL と主観的ウェルビーイング（well-being）について、どちらをより上位のカテゴリーとして考えるかは諸説あり、その目的によって、どちらを上位にするかは分かれるようである。

てみれば「単に疾病や虚弱がないというだけではなく、身体的、精神的そして社会的に完全に良い状態である」ことが健康だということになる。QOL を考えるにあたってはこの憲章の前段「単に疾病や虚弱がない」を強調するか、後段「身体的、精神的そして社会的に完全に良い状態」を強調するかで、ニュアンスが変わってくるのであるが、いずれにせよ、身体的疾病の欠如＝健康ではないという認識を広めるのに役立ったという意味で、QOL 概念に対する側面支援の意味があった。

アメリカでは、1964 年にジョンソン大統領が“Great Society”計画を発表。その中で、国民の Quality of Life 向上を目指すと宣言したことから、QOL という言葉が人口に膾炙したとされる。

QOL という概念は、このように徐々に社会に浸透し、それがまた医療を中心に新しい治療目標として組み込まれていくことになった。医療において重要になっているのが患者立脚型 (patient-based) アウトカムという考え方である。医師の側から、治療がうまくいったかない、ということを見るだけではなく、患者側の主観的な安寧を重視しようということだからである。

Walters (2009) によれば、MEDLINE に採用されたのが 1975 年、Index Medicus に採用されたのが 1977 年である。また、社会学の分野において、『Sociological Abstracts』に QOL がカテゴリーとして登場したのは 1979 年であった。Walters (2009) によれば下図のように QOL に関する論文は右肩上がりが増えており、2008 年には 3000 件を超えている (図 1)。

図 1 Walters (2009) によるメドライン (MEDLINE) における 1975 年から 2008 年までの QOL 関連論文 (Walters, 2009) ただし、集計途中である 2009 年のデータは除いた。

このように研究論文が増えたということは、学範 (ディシプリン) としては喜ぶべきことではあるが、知能やストレスの例を出すまでもなく、根本的な問題の理解が深まったということは意味していない。測定できるようになったという認識や、その測定なるものの手続きそのものに内在する諸問題もまた、知能やストレスと同様だと考えるべきである。概念と測定は本質的に乖離せざるを得ないのであるから。

概念と測定の乖離の問題とは別に、QOL については以下のような論点もある。

表 5 QOL 尺度が何をとらえるか

本人の状態か環境 (インフラ) か

本人の状態だとして、日常生活動作 (ADL) 的か主観的安寧 (SWB) 的か

本人の状態だとして、包括的か個別領域 (疾病) 単位か

本人の状態だとして、誰がどの立場から行うか、

表 5 における最後の問題は、本人が行えるならいいが、様々な事情でそれが不可能なと

きに誰がやると良いのか、ということである。役割名からいえば、本人、家族、医療関係者、の誰かが行うのだし、家族が行う場合には代理者と呼ぶことも可能となる。そして、代理者が行うことが可能なら、家族でも医療関係者でもない第三者が代理者となることも理屈の上からは不可能ではない。

しかし、こうした回答者の属性は単なる役割で理解するのではなく、「人称」という観点（渡邊・佐藤、1994）から整理するならば、家族以外の代理人は三人称的回答者であろう。すなわち、一人称的回答者（患者本人）、二人称的回答者（家族など患者の親しい関係者）、三人称的回答者（医療関係者、専門的代理人）と整理しておくことができるのである。

一人称的 QOL は、私の QOL、ということである。私が幸せなら幸せ、ということも可能である。二人称というのは、あなたの、ということだが、特定の関係にある人同士のうちの一人が評定するということである。あなたのことをよく知っている私があなたの幸せを評価してあげる、という感じである。三人称的というのは、外在的視点から行い、しかもその人の状態を見ているといいながら、測定される人そのものが対象になっているといいながら、他者との比較によって成り立つものである。本人は幸せそうだけど、他の人たちと比較すると不幸だから不幸せと評価しておこう、というようなことがおきるのだ。

第7節 知能、ストレス、QOL；その測定が意味すること

心、知能、性格、ストレス、QOL。私たちはこれらのコトバがある世界に住んでいるので、こうした概念で表す内容が、普遍的に存在してきたかのように思ってしまう。しかし、現実とは逆で、こうしたコトバで対象化する必要のある事柄は、様々な事情でそれが必要とされる時空で誕生してきたと理解するべきなのである。

逆のことを考えて見よう。なぜ知能は 19 世紀末以前に主題として取り上げられなかったのか。あるいは、第二次世界大戦後に注目されても良かったはずなのになぜ 19 世紀末だったのか、と問うこともできる。そして、なぜストレスは 19 世紀末ではない、特定の時期に主題化されたのか、なぜ QOL は 19 世紀末ではない、特定の時期に主題化されたのか、ということを考えてみる必要がある。

そして、このことは測定ということに関しても同様である。知能検査の成立を機に成熟した心理学で行われる測定を心理学的測定と限定的に呼ぶことがあるが、こうした測定を可能にした思想やそれを支える技術（テクニク）自体の進展が 20 世紀以降の知能・性格検査の開発とほぼ同時に起こっていることには注意が必要である。心 (Mind) が魂 (Soul) とは異なるものであると認識されたとき、そこに心理学的測定はなかった。知能・性格が概念として生成されたとき、それは測定されるものとして立ち現れ、測定することによって

知能や性格を「実在化」さえしたと主張した^{*7}。それを支えたのが心理測定というテクニックである。そして、ひとたび心理測定というジャンルが成立した後は、ストレスや QOL などの概念が必要とされたときに、基本的な技術として測定してみせたのである。QOL も、それが何であるのかの定義をスキップして、測定のスキームに持って行くことができたのである。この測定スキームこそが心理学的測定のパラダイムである。英語では **Psychometrics** であり心理測定学とか精神測定学と訳される^{*8}。

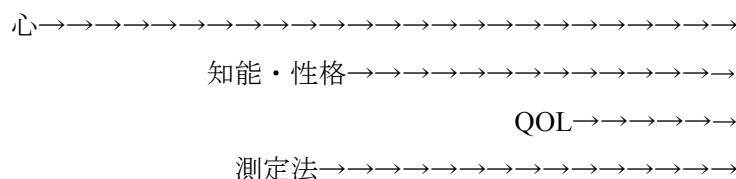


図2 心、知能、QOL、測定の時間的経緯

QOL はそれが社会的に有用な概念として立ち上がった時には、それが何であれ、測定に有用な心理的測定法が既に存在していたのであり、QOL 研究者は心理測定学の知見を利用した。逆に言えば、QOL とはこの方法論が新に適用されうる有望なフィールドとして期待されるという側面もあった。心理測定学はその延命のために新しい測定対象を常に必要としているのである。QOL の測定、もしくは、数値化の背景とプロセスについては松田(2004)が端的に表現しているので少し長めであるが（そして、引用中に引用も含まれているが）、紹介しておきたい。

西洋社会における医者・患者の関係の変化や、疾病構造の変化、治療法の発達による死亡率の低下などを背景に発展してきた保健医療分野での Quality of Life (QOL) 研究は、60年代、70年代に注目されて以来、「QOL をどう定義するか」に始まり「果たして QOL という概念は評価できるのか」、そして「QOL はどのように評価したらいいのか」という点が今日まで議論されてきた。当初は、QOL のように質的な次

*7因子分析という統計手法により因子を抽出し、そのことが概念の実在を示していると考えた

*8「psycho」を心理と訳すか精神と訳すかは若干ポリティカルな問題でもあり一言で言うのは難しい。psychotherapy(精神療法か心理療法か)、psychotechnique(精神工学か心理工学か)、psychophysics(精神物理学か心理物理学か)を巡っても同種の問題が起きていることを指摘するにとどめる。

元に属する項目は記述的に捉えられ、ケーススタディ等の観察研究やインタビューの解析が一般的な調査手法であった

1)．質問紙を用いた調査においても自由回答式質問があてがわれ、分析には社会学や民俗学で多用される定性的方法が用いられていた。しかしながら、とりわけ保健医療分野では QOL に関して概念の最低限のコンセンサスができ 2)．QOL を一つの指標として臨床や保健医療行政の場面で利用するために評価を定量的に行うことが必要となり、また、QOL の概念の最も重要な要素が評価対象である本人の主観であるということから、本人の自己評価を測定バイアスを抑制して捉えるアプローチとして一日の長のある精神測定学の手法が積極的に取り入れられることとなった 3)．

引用文中の精神測定学は本稿では心理測定学と訳しているものである。

そして、1980 年代以降の努力の結果、心理測定学の手法を用いることで QOL の定量化は可能であるという到達点に達したとされる（松田、2004）。

心理測定学は、人間の心理的要素の一部を「変数」という形で切り取り、数値として得たデータに様々な統計手法を施すものである。知能であれ QOL であれ、変数に落とし込まれて、人間としてではなく変数として理解するのが心理測定学である。したがってそこで得られた数値というのは、人間全体を表すものではないことはもちろんのこと、本来なら価値づけできないことを、数字という道具を使うことによって一次的に表したものにすぎない、ということになる。

こうした、心理的（というか実体のないというか）測定と、仮にも物質的に存在するものの長さや重さの測定は、自ずと違った手続きになるはずだ。しかし、測定という語で言い表してラップをかけてしまうと、その差異よりも、共通性の方に目を奪われてしまう。さらに操作的定義という概念の誕生は、物理学にとっては謙虚な出来事だったかもしれないが、心理学などにとってはむしろ傲慢な出来事であった^{*9}。

QOL の測定やそれに基づいた研究は心理測定学（psychometrics）に全幅の信頼を寄せると宣言することで成り立っている（松田、2004）とのことだが、「一日の長のある」など

*9物理学における操作的定義は、測定する実体の測定値ではなく測定の手続きが測定であるというだけなのだ、という謙虚さを生み出したが、もともと測定対象が明確でなかった心理学においては、測定手続きこそが測定であり、手続きが明確であればそれが実体を担保するのだ、というようなニュアンスさえ生み出した。

と持ち上げられたところで、その歴史は世紀転換点の知能検査に遡る程度のことであり、その「一日の長」の実際を詳しく検討する必要があるのは言うまでもない。だが、このことについては拙著『IQを問う』（サトウ、2006）などを参照してもらうことにして、QOLの測定の実態こそを見ていこう。

第3章 転 健康に関連する QOL とその内容

第1節 健康に関連する QOL 尺度の多様性

一口に QOL といっても様々な領域の QOL が考えられているのだが、医療や看護に関連する QOL は健康関連 QOL (Health-related quality of life=HRQOL と略す場合もある) と呼ばれることが多い。以下ではこの HRQOL を中心に考えていく。福原(2002)によれば、HRQOL を構成する基本的な構成要素は「主観的なウェルビーイング」(subjective well being) と「日常生活機能」(functioning) の二つである。つまり、健康関連 QOL は「疾患や治療が、患者の主観的健康感(メンタルヘルス、活力、痛み、など)や、毎日行っている仕事、家事、社会活動にどのようなインパクトを与えているか、これを定量化したものである」と定義できるとのことである。

HRQOL の指標には、大きく分けると包括的尺度と特異的尺度(特殊疾患尺度)がある。前者は疾患や健康状態にかかわらず、その人の全体的な QOL を捉えようとするものであり、後者は個別の疾患における患者の QOL を捉えようとするものである。前者、つまり、包括的尺度は、病人(それがどのようなものであっても)と健康人の QOL を連続したものとして捉えようとするものであり、1) 健康プロフィール型尺度と 2) 選好に基づく尺度とがある。

健康プロフィール型の尺度は疾病重大度プロフィール(Sickness Impact Profile; SIP と略す)や Short-Form-36 Health Survey (SF-36 と略す)に代表されるもので、いくつかの次元について QOL を把握することができる(Ware and Sherbourne, 1992 ; 福原・鈴嶋, 2004)。SIP は疾病(Sickness)の影響を行動に基づいて計測する尺度であり、社会的交互作用、栄養摂取、余暇活動、など 14 のカテゴリーについて、機能不全が起きているかどうかを行動レベルで把握するものである。SF-36 の場合は 8 次元(ただし 6 次元のものもあるし、一次元の効用値も開発されている)のプロフィールを描くことができる(表 6 に 8 次元版の次元名を掲げる)。

表 6 SF-36 の下位尺度

身体機能 (Physical functioning) PF	日常役割機能 (身体) (Role physical) RP
身体の痛み (Bodily pain) BP	社会生活機能 (Social functioning) SF

全体的健康感 (General health perceptions) GH	活力 (Vitality) VT
日常役割機能 (精神) (Role emotional) RE	心の健康 (Mental health) MH

このほか、疾病 (Sickness) の影響を社会的交互作用、栄養摂取、余暇活動など 14 のカテゴリーについて、機能不全が起きているかどうかを行動レベルで把握する Sickness Impact Profile (疾病重度プロファイル ; SIP と略す) や世界保健機構による WHOQOL などがある (100 項目版と短縮版がある)。

選好に基づく尺度は価値付け型尺度、効用型尺度などとも呼ばれ、HRQOL を一次元の効用値という概念 (最悪値が 0, 最良値が 1 など) として測定する方法である。死がゼロ、最高の状態が 1 であるとして、その一次元の中に様々な健康状態を位置づけるのだ。つまり、QOL の状態を 0 ~ 1 の間の数値に置き換えることが可能となる。こうしたことにより複数の健康状態をその具体的な状態ではなく、効用値を見ることによって比較することが可能になるのである。

効用値の算出方法には様々な方法がある。評点尺度法、スタンダード・ギャンプリング法、タイムトレードオフ法 (Time trade off ; TTO = 時間得失法) の 3 つが標準的である。TTO 法についてはその具体例を後で検討する。

選好に基づく尺度としてはユーロ QOL や健康効用インデックス (Health Utilities Index; HUI) などがある。

第 2 節 健康関連 QOL と医療経済学

なお健康関連 QOL (HRQOL) の特徴は、単にその内容が「健康に関連」していることだけにあるわけではない。選好に基づく尺度によって算出された効用値が質調整生存年 (QALY) に組み込まれ、その数値がさらに医療経済学における費用効用分析に使用され、財の分配に関する意思決定に接続しているところにこそ HRQOL の特殊性がある。このことは、本来、QOL の多様な側面をみる健康プロファイル型尺度の包括的尺度として開発された SF-36 が、単一次元の効用値を算出できるように改変された、ということからも理解できる。SF-36 はそもそも 8 つの次元で QOL を把握するものであったが、SF-6D に至っては 6 次元 (身体機能・日常役割機能・社会生活機能・身体の痛み・心の健康・活力) に圧縮され (Brazer 他、2002)、スタンダード・ギャンプリング法によって効用値が推定されたのである。多様な理解より効用値による一次元の把握を目指すのは、医療経済学との接続を重視するからに他ならない。

さて、医療経済学に組み込まれ使われる数値は、功利主義に基づいて使われることが多い。たとえ使っている人が正当だと主張しているからといって手放しで信用するわけにはいかない。少なくとも疑ってかかる点がある。では何が問題になりうるのか。この数値の基礎は心理測定学というテクニックに依拠しているのであるから、そこを丁寧に見ておく

必要があるだろう。

また、心理測定学に基づく数値が政策に影響を与えて個人の Life を蹂躪したということについては、優生劣廃政策（優生劣廃は eugenics の訳）に接続した知能検査の例をただちに思い起こすことができる。知能検査の結果の数値によって、ある一定以下の数値のものは劣った知能だとされ（量から質への転換）、移民排除や断種強制が行われた歴史である。知能検査は人間の性質のうちの知能という側面のみに特化した数値化を行った。そして測定（数値化）を客観性・科学性の担保として見なし、測定に基づく評価を神聖視し、優生劣廃的な政策を実行した（ここで優生劣廃とは Eugenics に対して筆者が与えた超訳である）。HRQOL は Life そのものの質を数値化するというのであるから、もし、それが人を蹂躪する方向に使われたら破壊力は知能検査の比ではないことは、容易に想像できる。

第3節 お得なバリューセット？とユーロ QOL；

バリューセットという言葉を開けば、もしかしたら「某ハンバーガー屋さんのあれでしょ」と思う人がいるかもしれない。お値打ち感のある、ハンバーガーのセットである。ところが、VALUE SET というのは QOL 業界においてはレッキとした数学の用語であり、それは選択値群と訳されるのであった。

さて、一部の医療業界ではウワサされていることであるが、難病患者の QOL がマイナスになるらしい。気温だってマイナスの温度もあるのだし、まあ、たいしたことないだろうという考えもありうるが、この QOL の場合には「死亡を 0、完全な健康を 1 とした間隔尺度上で表された QOL スコア（効用値）に換算することができる」ことが謳われており、マイナスの数値は死よりもひどい状態ということになる。

ユーロ QOL と呼ばれている測定法にはマイナスの QOL が存在する。どのように存在するのだろうか。

ユーロ QOL は 1990 年に開発された手法で、健康状態を 5 つの項目に分けて評価する 5 項目法（EQ-5D；EuroQOL-5 dimension。以下 EQ-5D と略す）と視覚尺度（visual analogue scale、以下 VAS と略す）による評価の 2 つから構成されている。その目指すところは、単純な項目で QOL を把握することであり、単純な項目で少ない項目数だからこそ、様々な状態の人たちの QOL 測定が可能になるというのがユーロ QOL の基本的なポリシーである。

5 項目とは、移動、身の回りの管理、普段の活動、痛み／不快感、不安／ふさぎ込みであり、回答者は表 7 のような形式の質問に答えることが求められる。こうした 5 項目で判断することは乱暴であり拙速だという批判もありえるが、医療全体が対象にする様々な状態について考慮するなら、むしろ個別の状態（骨折、目が見えない、運動神経が完全に麻痺して筋肉が動かない）などを尋ねるよりも、包括的な項目に答える方が汎用性を確保できるという思想（志向か？嗜好か？）があり、こうした方向性に一定の価値があることは否定できない。ちょうど、生理学者・セリエが個別の疾患状態の根底にあるものを見ようと

してストレスという概念を発見・創案したのと同じように、個別の疾患状態にはとらわれずに健康状態を包括的に捉えようとするのがユーロ QOL の根本的思想なのだろう。

表 7 EuroQoL (EQ-5D) 日本語版における 5 つの次元と 3 水準の表現

移動の程度

- 1 私は歩き回るのに問題はない
- 2 私は歩き回るのにいくらか問題がある
- 3 私はベッド（床）に寝たきりである

身の回りの管理

- 1 私は身の回りの管理に問題はない
- 2 私は洗面や着替えを自分でするのにいくらか問題がある
- 3 私は洗面や着替えを自分でできない

ふだんの活動（例：仕事、勉強、家事、家族・余暇活動）

- 1 私はふだんの活動を行うのに問題はない
- 2 私はふだんの活動を行うのにいくらか問題がある
- 3 私はふだんの活動を行うことができない

痛み／不快感

- 1 私は痛みや不快感はない
- 2 私は中程度の痛みや不快感がある
- 3 私はひどい痛みや不快感がある

不安／ふさぎ込み

- 1 私は不安でもふさぎ込んでもいない
- 2 私は中程度に不安あるいはふさぎ込んでいる
- 3 私はひどく不安あるいはふさぎ込んでいる

この項目から察するに、自身で移動したり歩き回るのに問題がなく、身だしなみを整えたり身の回りのことをするのに問題がなく、仕事、勉強、家事、家族・余暇活動を行うのに問題がなく、痛みや不快感がなく、不安でもないしふさぎ込んでもいない、という状態が QOL の高い状態であるというのが EQ-5D の根本的な思想であるようだ。

さて、EQ-5D において回答者は各項目別に 3 段階尺度で回答を求められる。3 段階には、1, 2, 3 という数値が割り当てられているから一多くの尺度がそうしているように一これらの数値を単純に加算するかぎり、マイナスの数値になるわけがない。

5 つの項目の回答値を、単純に合計して他者と比較をするというのが、普通の心理測定法である。たとえば、移動、身の回りの管理、普段の活動、痛み／不快感、不安／ふさぎ込みの全てについて、全く問題が無い場合には、全ての項目に 1 と回答することになる。

一方で、全ての項目に問題を抱えているとするなら、全ての項目に3と回答することになる。前者は $1 + 1 + 1 + 1 + 1 = 5$ 、後者は $3 + 3 + 3 + 3 + 3 = 15$ というように計算するのが、単純化した計算方法である。

しかしEQ-5Dにおいては、そうした単純な加算は行わず、回答パターンをQOL 効用値に換算するという作業がなされることになる（ここで効用とは Utility の訳である）。これは、EQ-5D で表現されるいくつかの状態について、それがどれくらいの好ましさなのかをTTO 法によって判断してもらい、効用値を決定するというものであり、これについては後述する。

なお、1990年に開発されたユーロ QOL はいくつかの国で開発が行われている。日本では1998年に日本語版が開発され、ユーロ QOL の承認を得ている。子ども版を新たに作る動きも始まっている。表8に、池田・池上（2001）による日本版の数値表（効用値表）の一部を示す。

表8 日本版版 QOL 効用値の抜粋 （池田、2001;P47 による）

11111	1.000	22231	0.482
11112	0.786	22232	0.419
11113	0.736	22233	0.370
11121	0.768	22311	0.587
11122	0.705	22312	0.524
11123	0.656	22313	0.474

煩を厭わずに「1, 1, 1, 2, 3」について記述するなら、以下のような状態となる。

移動の程度

- 1 私は歩き回るのに問題はない

身の回りの管理

- 1 私は身の回りの管理に問題はない

ふだんの活動（例：仕事、勉強、家事、家族・余暇活動）

- 1 私はふだんの活動を行うのに問題はない

痛み／不快感

- 2 私は中程度の痛みや不快感がある

不安／ふさぎ込み

- 3 私はひどく不安あるいはふさぎ込んでいる

この状態の効用値は0.656となっている（有効数字はどこまでなのか、と突っ込みたいが

*10)。つまり、この状態で生きることは全てに問題の無い状態で 6 年半ほど生きるのと等価であると判断されており、この状態は完全な健康状態の約 65%の効用だということになる。

「2, 2, 2, 3, 3」というのは

移動の程度

2 私は歩き回るのにいくらか問題がある

身の回りの管理

2 私は洗面や着替えを自分でするのにいくらか問題がある

ふだんの活動（例：仕事、勉強、家事、家族・余暇活動）

3 私はふだんの活動を行うことができない

痛み／不快感

3 私はひどい痛みや不快感がある

不安／ふさぎ込み

3 私はひどく不安あるいはふさぎ込んでいる

という状態のことである。この状態の効用値は 0.370 となっているので、この状態で生きることは全てに問題の無い状態の 40%弱でしかないと等値であると判断されているわけであり、約 37%の効用だということになる。

こうした効用値はどのように決められるのか。そして、マイナス値はどのようにあてがわれるのか？もう少し詳しく見てみよう。

第4節 EQ-5D で表現される様々な状態の効用値

日本語版のバリューセットから「2 2 2 2 2」と「3 3 1 1 2」という二つの状態を比べてみる。総和は等しい（共に 10 である）。しかし、効用値は前者が 0.533、後者は 0.266 である。後者は前者の半分の効用値しかないと考えられている。

「2 2 2 2 2」は以下のような状態である。

*10科学だと標榜する心理学や心理測定学を実践する人々は有効数字という概念を殆ど無視している。そうでなければ、小数点3桁などという数値が心理測定で用いられるはずがない。ある時、ある場所で、指導の学生にこのことを指摘したところ、心理学の論文には小数点第三位まで書いてあるではないかと主張され、「たとえ先生の言うことでも小数点三位まで書く。これだけは先生に従えない」と言われたことがあった。本当に驚くべきことであるし、冷たく言えば心理学の似非科学性を裏書きするものだと考える。

移動の程度

- 2 私は歩き回るのにいくらか問題がある

身の回りの管理

- 2 私は洗面や着替えを自分でするのにいくらか問題がある

ふだんの活動（例：仕事、勉強、家事、家族・余暇活動）

- 2 私はふだんの活動を行うのにいくらか問題がある

痛み／不快感

- 2 私は中程度の痛みや不快感がある

不安／ふさぎ込み

- 2 私は中程度に不安あるいはふさぎ込んでいる

「3 3 1 1 2」は以下のような状態である。

移動の程度

- 3 私はベッド（床）に寝たきりである

身の回りの管理

- 3 私は洗面や着替えを自分でできない

ふだんの活動（例：仕事、勉強、家事、家族・余暇活動）

- 1 私はふだんの活動を行うのに問題はない

痛み／不快感

- 1 私は痛みや不快感はない

不安／ふさぎ込み

- 2 私は中程度に不安あるいはふさぎ込んでいる

これら二つの効用値の比較を行うと、後者は前者の二分の一の効用値でしかない。

また、効用値がマイナスになっている数値について着目し、その状態を抜き出してみると、「3 1 3 3 3」＝－0.010；「3 2 3 3 2」＝－0.014；「3 2 3 3 3」＝－0.063；「3 3 2 3 3」＝－0.022；「3 3 3 3 2」＝－0.062；「3 3 3 3 3」＝－0.111となる。

「3 1 3 3 3」は以下のような状態である。

移動の程度

- 3 私はベッド（床）に寝たきりである

身の回りの管理

1 私は身の回りの管理に問題はない

ふだんの活動（例：仕事、勉強、家事、家族・余暇活動）

3 私はふだんの活動を行うことができない

痛み／不快感

3 私はひどい痛みや不快感がある

不安／ふさぎ込み

3 私はひどく不安あるいはふさぎ込んでいる

ちなみに、5項目のうちの4項目に3が与えられ、一つに1が与えられるセットは他に4つあるが、「1 3 3 3 3」など他の4パターンはいずれもプラスの効用値である。

このように、5つの項目の数値配列によって、全く異なる効用値が割り当てられていること、5つの項目の単純な総和は効用値と直接的な関係にあるわけでないことが、このEQ-5Dの特徴ということになる。

第5節 TTO（タイム・トレード・オフ）法によってバリューセットを作ること

このような効用値がどのように算出されているのか、誰でも疑問を抱くであろう。

前述のように効用値を求める方法はいくつか存在するがEQ-5Dにおいてはタイム・トレード・オフ法（Time Trade-Off；TTO）で効用値をたたき出している。TTO法はTorranceら（1972）によって開発されたものであり、ミクロ経済学の期待効用理論に依拠し、確実性条件下における健康状態の選好（preference）価値を測定するのである^{*11}。

まず、TTO法の例を『保健医療プログラムの経済的評価法』（武藤、1998）から引いてこよう。狭心症の例である。たとえば、内科的治療では狭心症で家から出られない状態でa年生きられるとした時、冠動脈バイパス手術を受けるならほぼ通常の生活ができるとする。その場合に、通常の生活で生きる年数があと何年しか生きられなくてもよいか（b年）を質問するのである。

分かりやすくするためにa=10年とする。つまり、家から出られない状態で10年暮らすのと、手術を受けて余命が短くなったとしても普通の生活を送れるとしたら、何年でも良いか、ということを問うのである。

武藤孝司 1998『保健医療プログラムの経済的評価法』篠原出版新社

*11選好とは文字通りで言えば、どちらが好ましいか、ということである。実際の手続きでは二つの異なる状態を比べて、どちらも見分けがつかない、という判断を手がかりにして、様々な状態の価値を決定し、それを選好価値と呼ぶ。

この狭心症問題に対して、回答者が 8 年と答えたとする。そうであるなら、外出不能な 10 年間と「健康」で「普通」な生活の 8 年が同じ価値づけをされた、ということになる。今、狭心症の生活の状態について U と置くなら

$$10 \text{ 年} \times U = 8 \text{ 年} \times 1.0$$

であると数式化することができる。この数式における 1.0 は「健康」状態を表すものである。以上の式を U について解くなら U は 0.8 となる。従って、前提となった狭心症の状態の効用値は 0.8 と測定されるのである。

TTO 法はそれが考案された後も理論的数理的検討がなされており、補正案・代替案などが提案されている。たとえばドラモンドら(1997)の第 6 章(費用－効用分析)を参照されたい。

M.F. ドラモンド、オブライアン、ストダード、G.W. トランス 1997 保健医療の経済的評価—その方法と適用(久繁 哲徳・岡 敏弘(監訳)日本語版 2003) じほう

Michael F. Drummond, Bernie J. O'Brien, Greg L. Stoddart, George W. Torrance 1997 Methods for the Economic Evaluation of Health Care Programmes. Second Edition. Oxford University Press.

ユーロ QOL の EQ-5D に話を戻す。この手法はどのように TTO 法を用いて効用値を求めるのか。それは、5つの項目からなる数値セットの状態について、その状態で 10 年間いることが「もし完全な健康な状態でいる何年間と等価値か」を問うことによってである。

EQ-5D においては、3 項目の 5 乗のバリエーションに意識不明と死を加えた 245 通りの状態が設定されている。これら 245 の状態に対して予めの調査で参照する値を決定しておくのが心理測定法のオーソドックスな方法であった。だが、245 通り全てについて判断してもらうことは時間的にもその他の理由によっても難しいので、17 セットもしくは 43 セットのパターンのみ^{*12}を取り出して判断を求め、そこで得られた数値によって他のパターンの効用値を推定するというを行う場合がある。

EQ-5D のバリューセット算定の際の TTO 法と先ほどの狭心症患者さんの TTO 法とは

^{*12}なぜか分からないが 17 セットか 43 セットの状態に対する効用値設定調査が行われている。日本版の場合、17 のセットそれぞれの状態について十年間生きることが、完全な健康状態の何年分と釣り合いが取れるかを判断してもらい、その値を用いて、それぞれの 5 項目(次元)のそれぞれの水準(レベル)が、健康という効用に対して持つ値が統計的に決定されることになった。

同じなのだろうか？違うのだろうか？

簡単に言えば大きく二つの点で異なっている。

まず、特定の疾患の病像が問題になることはなく、何らかの疾患なり不具合を抱えた生活の全体像を想像するし、それに対する TTO（タイム・トレード・オフ）法が求められている。たとえば「身の回りの管理」、「普段の活動」はほぼ問題はないが、「不安／ふさぎ」があり、「移動」、「痛み／不快感」については大きな問題を抱えている、というような状態を想定してみよう。このような状態で10年間生きることを想像した上で、これら五項目の問題が全くない状態で生きるとしたら何年間で釣り合いがとれると思うか、を答えるのである^{*13}。

そしてもう一つは特定の一つの状態についてではなく複数の状態について、必ずしも当事者ではない三人称的な他者が評定しているということがあげられる。バリューセットを作成する回答者と、自分自身の病状をもとに回答する人は、全く接点がない。バリューセット作成のために参加した人は、17セットなり43セットなりの状態を提示され、その状態で10年間生きることを想像した上で、さらに、その状態が完全な健康状態で何年生きることに等価でありえるのか、を想像して回答することを求められるのである。

さて、ここまでの説明では、マイナスになる QOL 効用値について、その存在理由も存在様態も分からなかっただろう。マイナスの数値の導出を行うには TTO 法を行うに際して異なる手順が存在する。

TTO 法において、「そんな状態で10年生きることは想像できない」「これで10年生きるなら死んだ方がまし」と答える場合を想定してみよう。ここでは具体的には書かないが、そう思うような状態があると言う人がいるだろうことは想像できる。

その場合、調査者は仕切り直しをする。

以下は、マニュアルではなく、戯画化したトークの仮想例である。

例は日本版においてマイナスの数値を示した「3 1 3 3 3」とする。

ベッド（床）に寝たきりで、ふだんの活動を行うことができず、ひどい痛みや不快感があり、ひどく不安あるいはふさぎ込んでいる。ただし、身の回りの管理に問題はない

という状態について、TTO 法を行うのが回答者の役目である。以下のようなやりとりがなされるわけではないが、わかりやすさを優先すれば以下のような感じになるだろう。

*13もう一つ、状況をずらしてわかりやすい例を創作すれば、コトバのわからず、電気も通らないようなところで家族と離れて10年暮らさねばいけない状態だったら、現在のある程度幸せで不自由がない生活の何年分と釣り合うか、というようなことである。「こんな状態で10年暮らすなら、短く太く3年程度暮らす方がいい（それで死んでもかまわない）」というような値踏みをしてもらおうということである。

回答者 「この状態は死よりひどい、死の方が良いように思います」

質問者 「今示した状態が、死んだ方がマシだという状態だということはわかりました。違う聞き方をします。「この状態で1年生きてその後9年健康な状態で生きること」と、この状態ならすぐに死ぬことのどちらがいいですか？」

回答者「この状態で1年間のあと、健康な9年があるのですね。それなら大丈夫そうです。」

質問者「それでは「この状態で2年生きてその後8年健康な状態で生きること」と比べてみてください。」

回答者「つらそうですね、でも、それでもやはり生きる方がいいです」

以下このように、数値を変えていく。

質問者「それでは「この状態で8年生きてその後2年健康な状態で生きること」

回答者「それは選べないなあ。同じくらいでしょうか」

という感じになれば終了となる（以上はあくまで戯画化した仮想場面である）。

この場合の効用値はどのように計算されるのだろうか。

効用値 U は $x / 10 - 1$ で算出される。

先の例では、8年だったので、 $8 / 10 - 1 = -0.2$ となる。

かくして、マイナスの QOL が設定されることになった。

EQ-5D では、このようにして協力してくれる個々人から、17もしくは43の状態について TTO 法を用いて効用値を推定してもらう。まず回答を求められた人たちの数値は平均化される。そして、五項目から成る重回帰式の説明率が最大になるような各項目の係数と定数を推定するのである。Szende, Oppe, Devlin (2006) には、各国の結果が包括的に紹介されており、そこから日本の数値を示すと以下ようになる。

表9 日本版の EQ-5 値のための係数・定数表 (Szende ら 2006 から日本のデータのみを取り出して作表した)

定数項	-0.152
移動の程度	
2	-0.075
3	-0.418

身の回りの管理	
2	-0.054
3	-0.102
ふだんの活動	
2	-0.140
3	-0.374
痛み／不快感	
2	-0.080
3	-0.194
不安／抑うつ	
2	-0.063
3	-0.112

全ての項目について1が選択された場合には、係数がマイナスになることはないし、定数項（-0.152）も無視される。2, 1, 1, 1, 1の状態であれば、移動の程度が2であるからそれにあてがわれた係数（-0.075）が考慮される。さらに、一つでも1以外の数値があれば、マイナスの定数項（-0.152）を加算しなければならない。

かくして、2, 1, 1, 1, 1の状態は $1 - 0.152 - 0.075$ となる（0.773）。このような手順で243全ての組み合わせの効用値が算出できるが、計算をしなくていいような数値表も利用可能である（池田・池上、2001；p47）。

このような方式を考えたのには何か根拠があり、また、心理測定学上の妥当性もあるのだろうが、死よりマイナスを考える、ということが尺度構成として妥当と言えるかどうかとは無関係である。こうした方法を考えること自体に問題があると言える余地はあるべきだろう。確かに「こんな状況なら死にたい」という人がいることは想像できる。さらに「こんなに苦しいならいっそ殺してくれ」と周りの人に訴える人だっているだろう。

しかし、そういう表現自体は「死ぬ」ことを意味するわけではなく、ましてや、その状態が死と比べて劣っていると考えているわけでもない。「死んだ方がマシだと思って生きていること」でしかないのである。多くの状況で「死んだ方がマシ」というのはレトリックとして表現されているだろう。「死んだ方がマシなら死んだら？」と言われたら「いやいや、そういう意味じゃなくて・・・」というように返されるのが普通であり、それはつまりプラス状態なのである。一方で、その願いが本当だったとして、「はい、では今死んでもらいます」というようなことにはなり得ない。

また、死んだ方がマシと思うような状況があるとして、その状況を耐えれば状況が変わるということはよくある。一度数値にしてしまうと、状況のこととは無関係に数字は一人歩きをし始める。医療経済学の数式に組み込まれたなら、そのマイナスの数値が全く見知らぬ地平まで、まさに一人歩きをさせられてしまうのである。

レトリックであるかあり得ない状態の表現であるはずなのに、言葉尻を捉えて死ぬより低い QOL があると見なしてそのプロセスを手順化しているのがユーロ QOL の効用値算出プロセスなのではあるまいか。このような方法が効用値設定の段階で実現可能なのは、回答者はあくまで仮想的に想像するだけだということ（自身がある状態になっているわけではない）、具体的な病像を想像するのではなく一般的な状態を想像するだけだからだということ、の二つが関与しているように思える。

では、マイナスの QOL というのはどのような理屈で許容されているのだろうか。ドラモンドら（1997）の第六章「費用－効用分析」から抜き書きしつつ考えたい。

一見すると、健康関連 QOL の尺度は、死亡をゼロとしているようにみえるかもしれない。しかし、結局、死亡はいかなる健康関連 QOL をも表さない。ここで問題となるのは、死亡よりも悪い状態が存在する可能性があるということである（Torrance ら,1982 ; Torrance,1984 ;Patrik ら 1994）。これらの状態も、それ自身の健康関連 QOL の点数を必要とする。したがって死亡は尺度の最低値ではない。事実、この尺度には、十分に定義された最低値は存在しない。慣例的には、上で述べたように、死亡にゼロ点を割り当て、死亡よりも悪い状態は負の点数をとる。

Torrance ら（1982）の文章の二文目、死亡はいかなる健康関連 QOL をも表さない、というのはその正しさに啞然とさせられる。死亡は LIFE ではないのだから当然の帰結である。しかも、この文は（死をゼロとする）効用値算出の手順すらも否定してしまっている。もっと驚くのは以下の文章との接続である。死をゼロとすることを否定しているにもかかわらず死亡より悪い状態が存在すると言い、その可能性の根拠が示されていないのだ。もしそうした状態に彼らの言うところの QOL の点数が必要であるとしても、ゼロより下にしなければいけない理由は存在しない。もしあるとしたら日常感覚であろうか。この文章における「したがって」という接続詞の理由が読み取れないし、その前後も関係はメロメロである。最後に、「慣例上」と断って「死亡にゼロ点を割り当て、死亡よりも悪い状態は負の点数をとる」と解説されても、何が何だか分からない、と読むべきであろう。念のために付け加えれば、訳の問題ではない。

また、ここで引用した文章のみが特異なわけではない。詳細は控えるが（もっとひどいのがいくつかあるけれど引用紹介を控えたのである）、マイナスより低い QOL を与える根拠は日常生活の実感か先行文献の羅列に基づくものが大半であり、根拠それ自体について詳細に検討している文献は殆どないのが実状である。

第6節 選好に基づく QOL 尺度（たとえば EQ-5D）は患者立脚型アウトカムと呼べないだろう

さて TTO 法に基づく効用値は、患者自身が自分の状態について自己報告するのではなく、

一般の人が多くの状態を想像するものに立脚しているのであった。つまり一般人の健康観を反映しているのである（図3）。

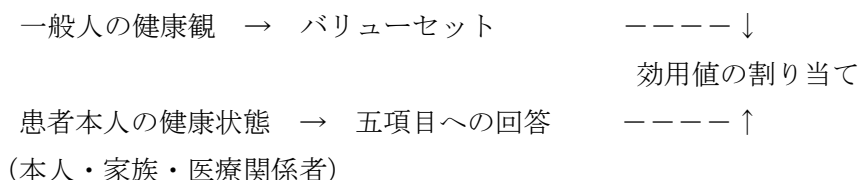


図3 EQ-5D の効用値は何に立脚しているのか

確かにこの結果は、患者にも立脚しているが、より正確に言えば、一般人の健康観と患者本人の健康状態の評価に立脚したアウトカム、ということになるだろうか。

健康関連 QOL やそれを重視する姿勢が患者立脚型アウトカムという文脈で開発されたとしても、選好に基づく尺度（たとえば EQ-5D）の数値は、患者に立脚ということにはほど遠い。選好に基づく QOL 尺度（たとえば EQ-5D）の回答者は確かに患者自身である。その意味で、患者立脚型と呼べないこともない。しかし、効用値は明らかに当事者たる患者とは無関係に設定されている。

患者として EQ-5D に回答させられる人は、単に自分の状態を告白させられているだけでなく、他者の評価という網目の中に組み込まれてしまっているのである。

ある文献には EQ-5D の効用値の設定の方法は、民主的であるとして高い評価を与えていた。納税者たる市民の判断に基づいた効用値だから一定の価値がある、という言い方をしている文献もあった。このような見解に真っ向から反論するわけでもないが、少なくとも、健康観に関して多数派と少数派が存在すること、実際の患者は少数派であることを指摘しておく。また、こうして開発されたバリュースセットの数値が QALY（Quality-adjusted life-year の略。「質調節生存年数」「生活の質を調整した生存年」詳しくは本章第7節参照）に使われ、それが何を意味するのか、を説明しないでおこなわれた QOL 効用値を医療経済学に使用するの、倫理的に問題があると言わざるを得ない。そもそも、こうした効用値を医療経済学に使用することを畏と言わず何と表現すればいいのか。

知能検査の仕組みと比べてみよう。知能検査では、一般人口の知能の様子を知るために、サンプリングを行って、標準を設定する。その上で、検査された個人がどこに位置付くのかによって、知能指数が与えられる。これが知能検査の仕組みである。

ユーロ QOL では、一般人口の健康状態そのものが調べられているわけではない。人がある状態に陥ったらどうか？という曖昧な問いが一般の（多くは病気でない）人たちに質問され、その回答によって、検査された個人の健康状態が推量されているのである。回答を求められた患者は自分の状態だけを答えているのであるが、その回答は一般人の空想による評価軸で評価されてしまい、それを調査者が客観的と評している（民主的と言う場合さえ

ある) というねじれがある。

こうした QOL は単純なパノプティコンを超えた仕組みである。一望監視装置という概念装置で考えるのではなく、告白とそのポリティクスをめぐる問題系であると考えた方がいい。そして、ここでのポリティクスは単なる力のせめぎ合いではなく、現実の政治に反映されるかもしれない。知能検査の結果が優生劣廃学によって用いられて移民制限や断種という具体的政策に取り入れられていったのと同じように、何らかの政策に取り入れられるのである。

健康ならば幸せだという時、健康でなければ不幸だということは意味しない (サトウ、2008a)。しかし、ユーロ QOL の効用値の算定の時に協力を依頼された人たちの多くにはこの種の健康神話が投影されてしまっている可能性が大きい。

もし、あなたが以下のような告知を受けたらどうするだろうか。

「あなたの冒された疾患は、神経性の難病の『筋萎縮性側索硬化症』、通称 ALS です。この病気は、発病後、平均 3 年から 4 年で呼吸が出来なくなり、その時点で患者さんは人工呼吸器で延命するか、そのまま人生をまっとうするかのどちらかを選択します。また、症状の一つとして筋肉の麻痺があります。これはやがて全身から、人によりますが眼球にまで及び、逃れる手立てはありません。つまり、人工呼吸器で延命したとしても、全身麻痺で寝たきりになります。加えて、一度装着した人工呼吸器は、どんな理由があっても、あなたが亡くなるまで外せません」

これは ALS 患者船後靖彦氏が自身の体験を語った中での病名告知の回想シーンである (船後、2009)。そして、彼自身も「告知により知り得た我が人生の見えない落下点が、略、深い悲しみと絶望を生み、私はその場で延命拒否を決めたのであった」と判断したという。上記の状態にうちひしがれてしまうのが一般的な健康観であり、当事者としてその生活をしたときの実態とは異なる。告知を受けた時の船後氏はいわば一般人の健康観を持っていたのだが、実際に患者として暮らすことでその健康観も変わっていく。事実、船後氏は、その後はピアサポートに生き甲斐を見だし、筋肉が衰えても元気に暮らしているし、多くの ALS 患者さんは人工呼吸器を着けた生活に価値を見だしその生を楽しんでいる。

健康神話というものは、健康な一般人が持っているものであるが、それがどのようなものかは普段は気づかない。だが ALS に罹患した方が告知を受けたときの経験は、まさにそうした健康神話の一端を見せてもらうことができる例である。

難病になる人生など誰も予期していないから、その時まではごく普通の健康観を持っていることが多い。そして、自身の予後を知られたときに、その健康観をもとに自分の延命措置についても考えてしまい拒否するのである。だが、様々な人との出会い、知識の蓄

積によって、健康神話が崩され、新しい健康観とでも呼べるものが構築されていくのである。多くの人は（かつての私もそうだったが）、ALS など難病の方々と出会う機会もないし、その生き方に接することもない。自分や家族の健康を祈るしかない、か弱い存在である。したがって、EQ-5D 用のバリューセットのために様々な状態を想像すると、その時点における自分の常識（健康神話）の影響を大きく受けてしまう。

もちろん、健康神話を持っているからといってバリュー作成に協力した一般の人たちが糾弾されるのは筋違いであり、彼らもまた被害者である。よもや自分の行為が、QOL の数値化に使われるとは思っていないだろうし、ましてや医療経済学に用いられて難病患者的な生活がマイナスになる片棒を担がされているとは全く思っていないだろうからである。

EQ-5D によるマイナスの値は、実際には生きるということ、生きているということを含意している。それならむしろマイナスという表現だって許容されてもいいのではないかと考える人もいるだろうが、それが医療経済学における費用－効用分析などに使用されるなら、たとえば QALY（質調整生存年数）の算出のための一部に組み込まれるならとんでもない悪影響をもたらすことになるのである。

第7節 医療経済学と費用効用分析

医療経済学は、医療を一つのサービスとして見たときに、費用と結果の関係を考慮にいれながら複数存在する医療サービスを選択する時に助けとなることを目的として発展してきた学範（ディシプリン）である。経済学の一分野として、費用を金銭的に評価したうえで（経済的評価）、医療の結果を何らかの形で評価した上で比較し、費用との関係を分析していく。そして分析するだけではなく限られた費用をどのような分野、どのような開発、どのような治療に割り振ればいいのか、ということについての判断材料とするのである。

現在、主に使われているのは、費用－最小化分析、費用－効果分析、費用－便益分析、費用－効用分析の四つであるが、ドラモンドら(1997)の標準的なテキストが指摘するとおり、これらの境界はそれほど明確なものではなく、実際の分析では曖昧になっていくこともある。

そして、現在において最も使用されているのは費用－効用分析であるという。費用－効用分析は功利主義の哲学に基づいているから、その目指すところは「資源が最大の善をなすところに、それを配分すべきである」というものである。医療にかかる費用は金額で算出できる。では効用をどのように定義すべきか。一般的には医療サービスの提供を受けた結果として得ることのできる健康に対して、個人や社会のもつ好ましさのことである。この好ましさのことを選好（preference）と言うのである。

適切な例かどうかかわからないが、事故で両手の機能を失った時、治療をすればどちらかの手を回復できるとする。多くの人は利き手の回復を願うだろう。これが選好である。費用が同じであれば、迷わず利き手の回復を実行することになる。しかし、なぜか右手と左手とで価格が異なり、右手は百万円、左手は一万円（あり得ない例です）かかるとする。

そのとき、右手が利き手の人はどのように考えるだろうか。右手は五十一万円、左手は四十九万円だったらその判断は変わるのだろうか。費用は治療にかかるお金、効用はどちらかの手が回復したときの好ましさである。この場合、利き手回復の方が効用が大きいと考えるだろう。ただし、効用の比較が「大きいー小さい」や「便利ー不便」という表現だと、コストパフォーマンス（費用対効果）を数式化できないので、効用の部分を数値化するのが費用ー効用分析の前提となる。仮に利き手の回復の効用が百なら、非利き手の効用は五〇などのように数値化するのである。最初の例だと利き手（右手）の場合の効用＝百、費用＝百万円なので、効用を一単位あげるのに百万円かかることになる。一方、逆の手は、効用＝五〇、費用一万円なので、効用を一単位あげるのに二百円ということになる。

第8節 費用ー効用分析と QALY

さて、費用ー効用分析では、効用値をそのまま用いず、効用値にその状態が続くであろう年数を乗じた指標が用いられる。医療における効用は時間という次元抜きには考えられないからである。そうした実際の計算において、効用の指標として QALY が用いられるのである。QALY とは、Quality-adjusted life-year の略であり「質調節生存年数」「生活の質を調整した生存年」と訳される。この概念の立役者であるウィリアムズ（1985）によれば

QALY なるものの本質は、健康な生活を期待できる 1 年を 1 と価値づけ、不健康な生活の期待される 1 年についてはその価値を 1 以下と見なすことにある。不健康な人物の QOL が低くなるほど、その正確な QALY の数値は低くなる（‘quality adjusted’ という部分が意味するのはそういうことである）。

QOL 効用値 0.4 で 10 年生きるとは、4 QALY（単位は年）というような計算を行う。

QALY 値を勘案した医療資源配分は功利主義——特に選好功利主義——的な手法であり、医療資源に限定がある場合の配分問題について明快な回答を与える。この値を用いればある医療行為の結果もたらされる状態の比較が可能になるから、かかった費用とのコストパフォーマンスを計算して比較することができるのである。1 QALY あたりのコストを計算し、比較することで、予算配分を決定しようという流れもある。もちろん、問題も多々あるが、類書を見てもらうことにして、QALY が費用効用分析に接続するそのことこそが大問題だと提起しておく。

ハリス(1987)は QALY を批判する。そのもっともらしさ（妥当性）が、「選択を与えられたなら、人間というものは、深刻で不満足な状態で長く生き延びるよりも、より短くより健康な状態を好むだろう」ということを「真実」と見なした上で組み立てられているからだと言っている。

さて、QALY の単位は時間（年数）であるため、このままでは費用効用分析に用いることはできたとて、費用便益分析（便益が金銭価値化された分析）に用いることはできな

い。これは医療経済学では少し残念なことらしい。そこで、QALY（年数）に VSLY（金額／年）を乗じれば、金銭価値化された値となるため、費用便益分析に用いることが可能となる。

VSLY（Value of Statistical Life Years；統計的延命年価値；単位は、通貨単位／年）という指標についてもまた残念ながら詳細な検討をする余裕がない。だがこの VSLY というのは延命一年あたりの価値を推定するものであり（生まれたての子どもから老人まで同じということではなく、年齢に依拠した推定を行う）、日本では円／年である。

単位が通貨単位（日本なら円）になると、費用便益分析に持って行けることになる。

単位の存在しない生活の質（QOL）を効用値という形で数値化し、そこに生存年（Year）を乗じることで QALY というものが算出される（単位は年）。それに VSLY（円／年）をかけると、円（金銭単位）になる。このようにして、EQ-5D その他による QOL 効用値は、式のなかに組み込まれていき、VSLY を組み込むことで最終的に金銭価値（日本だと円）の算出に寄与することになってしまうのである。

なお、QALY に必要なのが効用値化された QOL であるというなら、他の QOL 値を使うことも考えて良いはずである。功利主義的な観点からすれば、効用値は一次元でなければならないという制約はあるが、EQ-5D だけが唯一の効用値というわけではない。プロフィール型の QOL 尺度である SF-36 は、複数次元による理解だけではなく一次元の効用値化を行った。しかし、一次元化するのではなく、多様性を確保しながら QOL を一次元で表現する方法もあるはずである。

第4章 結 一人称的 QOL の可能性

第1節 QOL の歴史性

QOL 値がマイナスになる人が存在するということを許容したり、あるいは、そういう測定器具を作っても大丈夫だという事態に至るにはそれなりの経緯（歴史性）がある。これは、知能検査の結果で断種を迫っても良いと思った人たちがいたことの歴史から学ぶことが多いように思える。また、医療経済学との連携についても同様に知能検査と優生劣廃学（Eugenics の訳）との関係から学ぶことが多いように思える。何かを測定する＝数値で表すことと、それを評価空間の中で評価すること、そして政策に反映させること、これらの関係について私たちは学ぶべき歴史を持っているのだから、QOL についてもそうした知識を反映させていく必要がある。

予算の配分は不可欠で医療経済学は花形だから、それに乗っていくことは悪くない。

という言説と

人口の抑制は不可欠で優生学(Eugenics の一般的な訳)は花形だから、それに乗っていくことは悪くない。

という言説のパターンの類似性には驚くばかりである。

QOL に限ったことではないが、心理測定学の技術が入ると、人間を全体として見るというよりは、人間を変数の束として見ることになりがちである。

QOL が医療現場において、患者立脚型アウトカム(結果・効果)だとして、その片足を現場においていたとしても、もう片足をおいている心理測定学なるものにも歴史がある。その歴史を簡単に振り返るなら、心理測定学は患者全体を見るよりは QOL という変数のみに注意を払う仕組みに他ならない。その結果、人間の全体性よりも測定値(それがどのように算出されたものであれ)が重視され一人歩きする。測定値の評価は人間全体の評価であることを忘れさせてくれるから、残忍な決定を政策に反映させやすくなる(IQ が低い人は断種させようと言いやすくなるということ)。QOL においてはさらに悪いことに IQ やストレスの場合と異なり測定された QOL は効用値という形に変換される。効用値の評価空間は一般の人が空想に基づいてなすものであるから、個別の患者の生に立脚すべき QOL の状態とはかけ離れている。しかし一度効用値として見なされたなら、他の効用計算の一部に組み込まれていくことになる。それを避けるには、効用という考えとは別の考えに基づく経済学、たとえばセン(1985)のケイパビリティ概念に依拠した経済学に接続した医療経済学(本当の意味での厚生経済学=つまり、分厚い生の経済学)などを考えていく必要があるだろう。

医療経済学の計算の一部に、心理測定学に立脚した QOL を組み込むことが良いのか、その場合の QOL が EQ-5D のような効用値(の計算方法)でいいのか、は何度も問い直していく必要があるだろう。

第2節 QOL の文化性

どのような QOL でも、日常生活動作のようなものの客観的判断だけをするのでなければ、何らかの価値を反映せざるを得ない。ユーロ QOL の EQ-5D のように一般人の健康観に片足をおいているものは、その一般の人たちの価値観が様々な歴史的文化的影響を受けていることは容易に考えられる。たとえば、「寝たきり」状態の評価などには大きな違いがあるかもしれない。そのため、ある国で作られたバリューセットを他の国で用いる時に五つの項目を単に翻訳して使い回すということにはなりにくい。国や文化などの単位ごとに様々なバリューセットが作られる必要がある。

2006 年に発行されたその名もズバリ『EQ-5D バリューセット』という本にはデンマーク、ドイツ、日本、オランダ、スペイン、イギリス、アメリカ、ジンバブエの 8 カ国のバリューセットが掲載されている(Szende, Oppe, Devlin, 2006)。また 2007 年には韓国でもバリューセットに関する論文が発表された(Jo and Lee, 2007)。さらに公式 HP

(<http://www.euroqol.org/home.html>) によれば、2009 年 12 月現在で 102 の言語に翻訳されているという。

ここでは日米英韓の四つの国の効用値の違いを見てみよう。全体として良好な状態（たとえば、5 項目のうちの 4 つが 1 で、一項目のみ 2 というような状態）における国別の数値の分散は小さいが、重篤な状態になると、国による評価の違い（ばらつき）が現れてくるということが分かる。図 4 は Jo and Lee (2007) によるものであるが、左から五つくらいのデータについては日米英韓の四つの国のデータのばらつきが小さい。

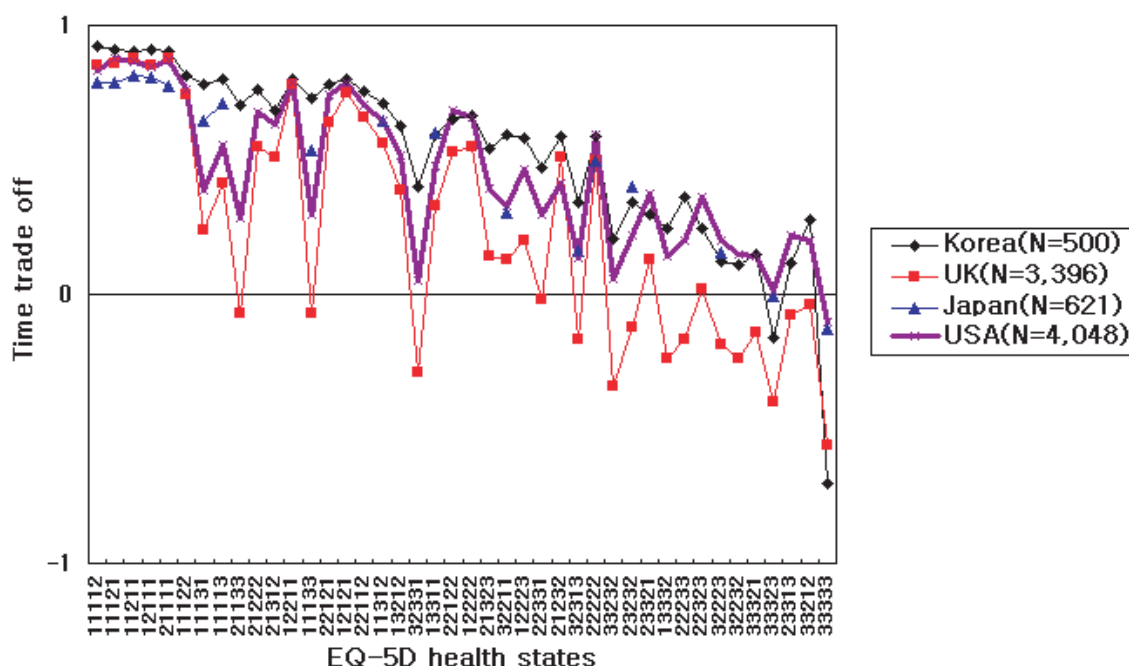


図 4 TTO 法に基づく EQ-5D バリューセットからの効用値について抜粋して日米英韓を比較したもの (Jo and Lee, 2007)。

たとえば ‘21232’ というような状態においては、英国において 0.088 であるのに対し日本では 0.472 である。ちなみにこの状態は、「身の回りの管理」に問題がなく 1 が与えられ、「移動」「普段の活動」「不安／ふさぎ」が 2, 「痛み／不快感」が 3 という状態である。英国ではこれがほぼ死に近い効用値（ゼロ）となっている（筆者も日本で育ったという背景をもっているため、イギリスの効用値がゼロに近い数値になっているというのは実感しづらいというのが率直なところである）。ただし、こうした違いが東洋と西洋の違いなのかというところでもなく、全てが最悪の状態である「3, 3, 3, 3, 3」の状態が最も低いのは韓国 (-0.694) だったりする。なお、Szende, Oppe, Devlin (2006) によれば、日本やジンバブエが -0.2 程度であるのに対し、オランダでは -0.4 程度、そして、イギリス、スペイン、デンマークでは -0.6 程度であると報告されている。

以上の例で様々な国における効用値の違いを見てみて、それなりの「文化差」を感じることができたと思わされるてしまう。ただし、実際にはこれらの数値の違いは文化差のみによって生じているのではない。実は、各国における効用値算出方式そのものが微妙に違っているということもある。原産地のことは問わずに、加工した場所を生産地と言っているような（詐欺ではないにしても）欺瞞が EQ-5D の効用値にも潜んでいる。

名称同一性による手続き同一性の保証

数値の強力な一次元性による比較可能性

これらはいずれも神話にすぎない。QOL だから全て同じ手続きだというわけではないのである。もっとも、こうしたことは QOL でのみ行われているわけではなく、知能検査とその結果表記である知能指数においても行われてきている。コックス(1926)の「有名人の知能指数」という研究が良い例である。この研究では伝記を読んで知能指数 (IQ) を推定しただけにもかかわらず、IQ という名称で数値化されているので、多くの人は現在の知能検査による知能指数 (IQ) と違うとは思えないのである。

第3節 測定における人称性の混乱

QOL について誰がどのような視点で検討しているのか？自分が自分のことを考えて答えるのは良いとしよう。自分が親しい他者について考えている場合はどうか。親しい他者といっても、二人の関係性や年齢によって大きな違いが現れることは言うまでもない。

自分としてのいわゆる「植物状態」とその人と関係している他者にとっての「植物状態」とが異なることは言うまでもない。しかも、自分は一人しかいないが、関係のある他者というのは複数存在する。関係性の質や量が異なっているのである。昨今の医療裁判においても、複数存在する二人称的他者の対立が争点を作り出していることが多い。

ある人から見て、意味のない「無駄」な延命（かつ高額費用がかかる）という指摘があることは容易に想像できるとしても、オープンシステムとしての人間という考えを取り入れれば、ある一人の人の価値をその人の状態だけで価値づけるわけにはいかないということになる。

一方で、日常生活動作(ADL)のような活動レベルの判断によって本人の思いとは別に医療関係者に QOL を測定されてしまうのはちょっとおかしい話になることもある。

では EQ-5D の5項目を提示されて、自分の状態にあわせて回答する人はどのような位置にいるのだろうか。

自分の状態を EQ-5D 項目に合わせて答えた人は、その回答した数値によって何かを判断されることはない。既に用意されたバリューセットのあてはまる数値を QOL（の効用値）としてあてがわれるだけなのである。自身の状態を項目に沿った形で「告白」させられ、その結果を既にできあがっている数値表（バリューセット）の中に位置づけられる。そして、その状態を評価され烙印を押されるのだ。

こうした作業が、様々な揺らぎの中で行われていること、独自の評価空間を形成していることは、異なる文化における EQ-5D のバリューセットを見ることで実感できる。もし、こうした QOL が本当の意味で普遍的であれば、各国でバリューセットを作る必要はないだろう。しかし、それはいくらなんでも乱暴だという意見が生じるから、少なくとも、国単位で基準を作ろうという話になるし、実際にそうになっている。図 4 において「3, 3, 3, 3, 3」の効用値が、韓国において著しく低く、日本はそれほど低くなかったという結果から見ても、それぞれの国や文化ごとのデータが必要であることは首肯される。だが、ある一国でとったデータを平均するというのも、実は、国の違いを無くしてしまうことと同じくらい乱暴である可能性もある。

ここで EQ-5D について、人称的観点（渡邊・佐藤、1994）から整理しておく、これは明らかに三人称的な視点を含んだ QOL 判定ということになる。効用値推定／算定に参加した人々は、具体的な状態を—自分のことのように考える人もいるかもしれないが一遠い他人の出来事として想像して TTO 法を用いて効用値化しているし、研究者がその数値をさらに集積・平均化した値というものが、バリューセットの正体である。そうであるなら、一人称的な QOL というものがあれば、三人称的な QOL 効用値とは別のオルタナティブ・オプションになりうるだろう。

第 4 節 主観的な判断を超えるものとしての SEIQOL

ここまで紹介してきた、従来の心理測定学に依拠する QOL 測定法以外の方法に、SEIQoL-DW（The Schedule for the Evaluation of Individual Quality of Life-Direct Weighting: 個人の生活の質を直接重み付けする評価法）というものがある。これは、アイルランドの心理学者、O' Boyle らによって提唱された少し変わったタイプの QOL 評価法である（O' Boyle, 1994 ; Browne, O' Boyle, McGee, McDonald, and Joyce, 1997）。

手順は以下の通りである。まず調査協力者の生活の質を決定する重要な領域を 5 つ挙げてもらう。SEIQOL ではこの領域のことを、キュー（Cue）と呼ぶ。キューが 5 つあげられたら、それぞれのキューの充足度（level）を VAS（visual analog scale）によって評価する。全く不十分であればゼロ、完全に満足していれば 1（または 100%）となる。その後さらに、5 つのキューの相対的な重要度（weight）を評価する。これは円盤を用いることが多い。最後に充足度と重み付けを数値化したものを掛け合わせ、各人の QOL の指標として算出する

のが SEIQOL の方法となる（大生・中島，2007）。

この方法では、自らの QOL を構成する生活要素を自らで決定することができる。つまり SEIQOL は項目事前準備型ではなく項目自己生成型の QOL 評価法であると言える。その考え方の基本には社会心理学者ジョージ・ケリーの影響が見て取れるだろう。ケリーはパーソナル・コンストラクト（自分にとっての概念化のような意味）を重視し、人は自らの経験や環境を自ら意味づける存在であると考え、個人ごとの構成概念を知ることによって、その意味世界やその人自身を知ることができると考えた。項目事前準備型の知能検査や性格検査によって予め用意したモノサシのうえに個人を乗せて考えるのではなく、個々人が世界をどのように捉えているのかという観点から見ようとしたのがケリーのパーソナル・コンストラクトである。SEIQOL にはこうしたケリーの考えが反映されている。

SEIQOL を用いた研究例を見てみよう。Neudert, Wasner and Borasio (2001) は、ミュンヘンにおいて 42 名の ALS 患者を対象に、3 つの健康関連 QOL 評価法 (SIP と SF-36 か SEIQOL) を用いて、最低 3 回（間隔は 2 ヶ月以上）の回答を求める調査を行い、それぞれの手法によって捉えた QOL 及び手法の特徴について報告している。

ALS は進行性の難治性疾患であるから、その病態は悪化するのみである。それに従い SIP や SF-36 の QOL は直線的に下降傾向を示した。だが、SEIQOL の QOL 値は病像の進行と関連しなかった。病像悪化と関連しないことをもって SEIQOL の妥当性が無いと言うべきなのか。Neudert らは必ずしもそうした立場をとらず、むしろ SEIQOL の結果は臨床的な経験と合致すると述べている。

4 回にわたって SEIQOL を行ったある患者では 8 個のキュー（項目）が提出された（各回 5 個×4 回であるから、最大で 20 のキューを提出することが可能だが、実際には毎回違ったキューが出てくるということはない。「家族」「文化的生活」についてはキューとして毎回言及されたのだが、他のキューについては入れ替わっていた。すなわち、初回のキュー（項目）は、文化的生活、庭いじり、職業、スポーツ（活動）、家族だったものが、4 回目には、文化的生活、文学、休暇、スポーツ（観戦）、家族になっていたのである。自らの病態の進行により、出来ないことは増えているのだが、QOL を支えるキュー（項目）が新たに発生していることがわかる（たとえば、スポーツ活動はスポーツ観戦に変わった）。SEIQOL による QOL 値はほぼ変化していなかった。そしてこの研究によれば、患者自身は SEIQOL を、SIP や SF-36 よりも妥当な指標だと感じていたとのことである。

功利主義アプローチに代わり潜在能力アプローチを提唱するセンの経済学についてコーエン（1993）は、（功利主義的厚生に対するロールズの批判と対象する形で）センは二つの転換をなしたと評した。一つは 実際の状態から機会への転換、もう一つは財（さらには厚生）から彼が「機能」（functioning）と呼ぶものへの転換である。

機能とはセンの潜在能力アプローチの基本的な視角であるが、潜在能力についてセン（1980）は文化との関係で面白いことを述べている。

「基本的潜在能力の観念はきわめて一般的なものだが、それを適用するにあたっては、どうしても（特に異なる潜在能力を比較考慮するような場合に）文化に従属する（culture-dependent）形で現れざるをえない」（Sen 1980）。

ここで文化をどのように定義しているのかは不明だが、記号の発生を文化と見なす文化心理学の立場（Valsiner, 2007；サトウ、2008）からすれば、難病患者とその生活は一つの文化をなしていると言えるから、ALS などの進行性の難治性疾病を単に健康状態が劣っているというように、健康－不健康の一次元で捉えるのではないとらえ方が必要になると言えるだろう。

潜在能力アプローチにおける潜在能力の概念的意味には、達成可能な福祉の選択肢集合を表すという考え方があり、それは即ち選択の幅を示すものである。この時、健康な人が病を得た人をみて、選択の幅が狭まったと思うのは一面の真実を付いている。食事も自由にできず職業にもつけない・・・しかし、それは、健康者の文化からみた選択の幅の狭さに過ぎない。健康者の文化というものと対置する形で、疾病者の文化というものを設定するなら（健康－非健康という一次元で理解するのではなく）、その文化を暮らす者自身の選択の新しい生成を見ていく必要がある。SEIQOL において、患者自身が設定する QOL の項目は、自身と環境との接点における機能（functioning）の新たな生成を捉えられると考えられるのではないだろうか。

第5章 おわりに 数式で数値を算出して質を表現すること

本稿では、QOL という指標の測定ということを中心に据え、数値の出し方の手続きのあり方をも視野に入れながら検討を行ってきた。

最後に冒頭でも紹介したショウ医師(1977)による QOL を再度見てみよう。

このわずか1頁の論考で彼は新生児の QOL（彼の論文では QL となっているが、本稿での整合をとるため QOL とする）を以下のように定義する。

$$QOL = NE \times (H + S)。$$

QOL＝生きる場合に子供が持つだろう生命の質。NE＝子供の知的・身体的な天賦の資質。
H＝両親の結婚の情緒的安定度・両親の教育レベル・両親の財産に基づいて、子供が家庭、家族から得られるだろう支援。S＝子供が地域社会から得られる社会サービスの質。

この式の驚くべきところは、式の中に積算（かけざん）を含んでいるところにある。積

算は、その前後の項のどちらかがゼロであると自動的にゼロになるからである。

案の定、ショウは都市部のスラム街に住む薬物中毒の10代の女性から生まれた児の例を挙げ、この子のHがゼロだと言い切る。もしSの項（社会からのサービス）がゼロになるならば、と前提をつけながらではあるが。いずれにせよ、こうした子のQOLはゼロになるとショウ医師は述べているのである。

つまりショウが提唱した数式においては、自身の資質がどのようなものであっても、家族から得られる支援や社会から得られる社会サービスがゼロになるなら、結果としてQOLがゼロになるというのである。そうした子は現実に生まれ、そしてショウの式とは無関係に、おそらく生き続けているだろう。だが、ショウはそうした子どもを見ることはなく、計算式を示して特定の条件の下に生まれた子どものQOLはゼロと言い放つ。そうした発現を可能にし、そのことに全く問題を感知させないシステムが何らかの形で存在していることがわかる。

まず、家族を支援しろよ、それが社会サービスだろ、というツッコミを入れたくなるのは私だけではないだろう。

QOL（やその効用値）がマイナスになったり、ゼロになったりするという例、こうした例の具体的な一つ一つに驚いてはいけいないのである。むしろ、それは川の流れが岩にぶつかった時の波しぶきのようなものでしかない。川の流れの部分にあたる、大きな思想の流れを捉えて批判する必要があるし、その表現を促進している道具としての心理測定学に由来する技術のあり方そのものを批判的に検討する必要がある。

QOLの研究と実践においては、定義が一致しないことを当然のこととして測定手続きの開発が行われてきた。しかし、今こそ、QOLの定義から検討していくことが望まれるのである。マイナスを許容するかどうかにも真剣な議論が必要である^{*14}。日常生活において、「死よりひどい状態」というような表現が存在したりそういう実感を持つことはありえるだろうが、それを測定という考え方には取り入れるべきではないのである。

*14なお本稿では、マイナスのQOLという考え方が、さも当然のこととして語られる現状も否定的に紹介していたが、逆に、マイナスのQOLという考え方が無いと言うと、そのことに対して説明が求められる場合がある。そのような場合には『現代思想』2004年11月号において小泉義之と立岩真也によって行われた対談「生存の争い」の中の立岩の語りを紹介することが適切であろう。そこで立岩は「生きていればいろんなことが感じられる。それだけでいいんです。……見えなくても聞こえなくても世界は感受できる。そしてそのことは、その人において肯定的であるとしか言いようのないことです。」と述べている。ここで言う「肯定的」と「数値上のプラス」というのは同じではないが、どのような状態であっても、「その人において肯定的」であることを数値で表現するのであればプラスということにしかなり得ないであろう。QOLという質を数量化するという手続きにおいてはそれが最低限のマナーではあるまいか。

QOL を医療経済学に使用することは止められないかもしれない。そして医療経済学における QOL は生命の質とか生活の質と訳されている。だが、QOL を人生そのものに寄り添うものとして理解する手だても必要である。LIFE は日本語では、生命・生活・人生に相当することを思い起こすなら、人生の質に寄り添う QOL という構想は決しておかしいものではない。そういう QOL の理解に何がふさわしいのかは分からないが、知能検査や性格を否定したケリーの思想とも接続している SEIQOL がその一つの可能性であることは改めて強調しておきたい（福田・サトウ、2009）。

測定値に限ったことではないが、それを評価する場合（評価行為）には（１）何が評価対象になるのか、と（２）それぞれの対象にどれだけの価値があるのかという二つの問題を区別して考えなければならない、とセン(1993)が述べる時、価値対象を財の多寡（効用，所得，機会等々）にするのではなく、機能(functioning)にすべきであるとセンは考えている。様々な行為や状態それ自体の重要性というとき、重要性を外在的に評価するのではなく、その個人と環境との調和によって理解されるべきである。

本稿で見てきた様々な QOL の評価については、本稿の問題意識からは大きく三つの方法があると言える。

- 1 回答者は自分の状態を答えているとしか思っていないのに、他者の回答傾向と比較されるもの。
- 2 回答者は自分の状態を答えているとしか思っていないのに、一般人の価値観の中で価値を値踏みされてしまっているもの。
- 3 回答者が自分なりに重要なものを提出することで、生活全体を理解する手がかりとなるもの。

1 は単純な心理測定学に基づく QOL 評価方法であり、2 は一般人口の選好に基づくもので、EQ-5D などが典型的なものである。それに対して 3 は SEIQOL が用いている方法である。SEIQOL は、自分の言葉で QOL を価値づけることができるという意味で画期的であり、自分自身の責任で QOL を評価するという意味で、2 の方法などとは決定的に異なっている。既に見たように SEIQOL において、難病患者の QOL が常に高止まりになるけでもない。

他者が決めた項目でもなく、他者が想定した効用値でもなく、自分が決めた項目で自分が判断した充実度を数値にする。これが SEIQOL であり、こうした患者自らの声を聞く方法は、真の意味での QOL 理解には欠かせないものになるのではないだろうか。

文献

Binet, A. and Th. Simon 1905 Methodes nouvelles pour le diagnostic du niveau intellectuel des anormaux. L'Annee Psychologique, 11, 191-244. (ビネ&シモン著：中野善達・大沢正子訳 『知能の発達と評価』 福村出版(1982) 所収)

- J Brazier, J Roberts, M Deverill 2002 The estimation of a preference-based measure of health from the SF-36. *Journal of Health Economics*, 21, 271-292.
- Browne, J.P., O'Boyle C A., McGee, H.M., McDonald, N. J. and Joyce, C. R. B. (1997) Development of a Direct Weighting Procedure for Quality of Life Domains. *Quality of Life Research*. 6, 301-309.
- Catherine Morris Cox 1926 Early Mental Traits of Three Hundred Geniuses. Stanford University Press.
- Cohen, G. A. 1993 "Equality of What? On Welfare, Goods, and Capabilities", In Nussbaum, M.C. & Sen, A. eds. "The Quality of Life" Clarendon Press. Pp.9-29. 水谷めぐみ(訳)/竹友安彦(監修) 2006 クオリティー・オブ・ライフ—豊かさの本質とは 里文出版
- Donald L. Patrick, Helene E. Starks, Kevin C. Cain, Richard F. Uhlmann, and Robert A. Pearlman 1994 Measuring Preferences for Health States Worse than Death, *Medical Decision Making*, 14, 9 - 18.
- M.F. ドラモンド、オブライアン、ストダード、G.W. トランス 1997 保健医療の経済的評価—その方法と適用 (久繁 哲徳・岡 敏弘 (監訳) 日本語版 2003) じほう
- Engelhardt, Hugo Tristram, 1982, "Medicine and the Concept to Person," Beauchamp, Tom L and LeRoy W. Alters, *Contemporary Issues in Bioethics*, Belmont: Wadsworth Pub. Co. (=1988, 久保田顕二訳「医学における人格の概念」加藤尚武・飯田宜之編『バイオエシックスの基礎 欧米の「生命倫理」論』東海大学出版会, 19-32.)
- ユーロ QOL <http://www.euroqol.org/eq-5d/what-is-eq-5d.html>
- Fitzsimmons D, et al. Differences in perception of quality of life issues between health professionals and patients with pancreatic cancer. *Psychooncology* 1999; 8 (2): 135-43.
- 福田茉莉・サトウタツヤ 2009 SEIQoL-DW の有用性と課題—G. A. Kelly のパーソナル・コンストラクト・セオリーを参照して— 立命館人間科学研究, 19, 133-140.
- 福原俊一. いまなぜ QOL か—患者立脚型アウトカムとしての位置づけ. 池上直己, ほか編. 臨床のための QOL 評価ハンドブック. 東京: 医学書院; 2001. p.2-6.
- 福原 俊一. 臨床のための QOL 評価と疫学. 日本腰痛学会雑誌. 2002; 8: 31-37. http://www.jstage.jst.go.jp/article/yotsu/8/1/31/_pdf-char/ja/
- 福原俊一、鈴鴨よしみ 2004 『SF-36v2™日本語版マニュアル』 健康医療評価研究機構, 船後靖彦 2009 2009 年度立正大学石橋湛山研究助成公開講演会「生きる——出会いの場からの生の創造」 於: 立正大学 <http://www.arsvi.com/w/fy04.htm>
- HARRIS, J., (1987) QALYfying the Value of Life, *Journal of Medical Ethics*, 13, 117-123
- Holmes, T. H., & Rahe, R. H. 1967 The social readjustment rating scale. *Journal of Psychosomatic Research*, 11, 213-218.
- 池田俊也, 池上直己 2001 選好に基づく尺度 (EQ-5D を中心に). 池上直己, 福原俊一, 下妻晃二郎・池田俊也 (編): 臨床のための. QOL 評価ハンドブック. 医学書院, pp45-49.

- Jo M, and Lee S. 2007 General population time trade-off values for 42 EQ-5D health states in South Korea. *Journal of Preventive Medicine*. 40,169–76.
- Karnofsky DA, Burchenal JH. 1949 The clinical evaluation of chemotherapeutic agents in cancer. In: MacLeod CM (ed.): *Evaluation of chemotherapeutic agents*. New York: Columbia University Press ; 191–205.
- 松田智大 (2004) QOL 測定の方法論と尺度の開発 *保健医療科学*、53、181-185.
- Michael F. Drummond ,Bernie J. O’ Brien, Greg L. Stoddart , George W. Torrance 1997 *Methods for the Economic Evaluation of Health Care Programmes*. Second Edition.Oxford University Press.
- Neudert C, Wasner M, Borasio GD (2001):Patients' assessment of quality of life instruments: a randomised study of SIP, SF-36 and SEIQoL-DW in patients with amyotrophic lateral sclerosis. *J. Neurol. Sci.*191:103-109
- O’ Boyle C A., McGee, H .M., Hickey A, Joyce C R B, Browne J, O’ Malley K, Hiltbrunner B. (1993) *The Schedule for the Evaluation of Individual Quality of Life (SEIQoL):Administration Manual*.Dublin:Royal College of Surgeons in Ireland.
- 小川鼎三 1964 *医学の歴史*. 東京：中央公論.
- 大生定義・中島孝監訳(監訳) (2007) 個人の生活の質評価法(SEIQoL)生活の質ドメインを直接的に重み付けする方法(SEIQoL-DW) 実施マニュアル. 日本語版(暫定版).
- 小田部胤久 2007 ヴォルフとドイツ啓蒙主義の暁 加藤尚武責任編集『哲学の歴史—第7巻理性の劇場』41–74 頁. 東京：中央公論新社.
- Romanes, G. J. 1882 *Animal intelligence* London : Kegan Paul, Trench.
- 櫻井浩子 2010 新生児医療における QOL と「子どもの最善の利益」 *生存学雑誌*、2、133-144。
- 佐藤達哉 2002 『日本における心理学の受容と展開』 北大路書房
- サトウタツヤ 2006 *IQを問う* ブレーン出版
- サトウタツヤ 2008a 常識ずらしの心理学9——難病は「不幸」なのか 2008/09/07 朝日新聞『be』7面。
- サトウタツヤ 2008 「「社会と場所の経験」に向き合うためのサンプリング論再考」サトウ・南(編)『質的心理学講座3 社会と場所の経験』, 東京大学出版会, 233-260
- SEIQoL-DW 日本語版(暫定版)について(2009年11月13日):<http://www.niigata-nh.go.jp/nanbyou/annai/seiqol/SEIQoLJAP00703WEB.pdf>
- Selye, H. 1936 A syndrome produced by diverse nocuous agents. *Nature*, 138, 32.
- Sen, Amartya. 1980. "Equality of What?", in S. M. McMurrin (ed.), *Tanner Lectures on Human Values I* (Cambridge: the University Press). 大庭健・川本隆史訳『合理的な愚か者』(勁草書房, 1989年) .
- Sen, A.K. (1985), *Commodities and Capabilities*, North-Holland, 鈴木興太郎訳 1988, 『福祉の

- 経済学——財と潜在能力』, 岩波書店
- Shaw, A. 1977 Defining the quality of life. Hastings Center Report, 7, 11.
- スラヴォイ・ジジェク 1999 (鈴木俊弘 増田久美子訳 2005) 『厄介なる主体 2』
(青土社) の 171 頁。
- Solomon ES, et al. Quality of life: Problems of assessment and measurement. Socio-economic studies 1983; Vol.5. Paris:UNESCO.
- Stephen J. Walters 2009 Quality of Life Outcomes in Clinical Trials and Health-Care Evaluation
John Wiley & Sons, Ltd
- Szende, A., Oppe, M. and , Devlin, N. 2006 Comparative review of Time Trade-Off value sets. In
Agota Szende, Mark Oppe, Nancy Devlin (Eds.) EQ-5D Value Sets: Inventory, Comparative
Review and User Guide. Springer. Chapter 2, 21-28.
- 田中寛一 1941 北アメリカ 3 都市における諸民族の知能に関する研究 東京文理科大学
文科紀要 第 19 卷
- Torrance, G. W., Thomas, W. H., & Sackett, D. L. 1972 A utility maximization model for valuation
of health care programs. Health Services Research, 2, 118-133.
- Torrance GW, Boyle MH, Horwood SP. 1982 Application of multi-attribute utility theory to
measure social preferences for health states. Operations Research. 30, 1043–1069.
- Torrance, G.W. (1984). Health states worse than death. In W. von Eimeren & R. Engelbrecht
(Eds.), Third international conference on system science in health care (pp.1085-1089).
- Valsiner, J. (2007). Culture in minds and societies. New Delhi: Sage
- Ware JE, Sherbourne CD. 1992 The MOS 36-Item Short-Form Health Status Survey (SF-36): 1.
Conceptual framework and item selection. Med Care ; 30: 473-83.
- 渡邊芳之, 佐藤達哉 1994 パーソナリティの一貫性をめぐる. 視点と時間の問題. 心理学
評論; 36:226-243.
- Williams, A. (1985). The value of QALYS. Health and Social Services Journal 95. 15. Carr-Hill

対人援助学&心理学の縦横無尽 10



サトウタツヤ@立命館大学文学部心理学専攻

複線径路・等至性モデル、世界を駆ける (2)

2013 年 3 月 9～17 日

TEM と言われて何のことだか分からない人は本誌の読者たる諸賢諸姉にはもういないと思うが、TEM(複線径路・等至性モデル (Trajectory equifinality model))のことである。ちなみに、Wikipedia を使うと透過型電子顕微鏡 (Transmission Electron Microscope; TEM) しか出てこない。TEM について知りたい人は下記 WEB サイトを参照してもらいたい。

<http://www.k2.dion.ne.jp/~kokoro/TEM/whatistem.html>

成書も既に二冊出ている。

複線径路・等至性モデルとは、システム論に基づく質的研究法の一つであり、研究者が研究したい現象を等至点として定め、その等至点に対する径路の多様性を描こうとするものである。おかげさまで国内外から関心をもってもらうことができおり本誌第 8 号において、2012 年のイタリア、ブラジルでの講演について、「複線径路・等至性モデル、世界を駆ける」と題した活動記録を掲載させてもらった。

<http://www.humanservices.jp/magazine/vol8/16.pdf>

である。

そして、さらに幸いなことに 2013 年も、イタリア、デンマーク (以上 3 月)、イギリス (5 月) で TEM について話す機会を得ることができた。なお、どうしても良いことだが、2012 年 4 月から研究部長という役職についており、海外に出かける日程もかなり慎重に決める必要があったと自分では思っている (本人比：感想には個人差があります)。

2013 年 3 月 9～13 日

まずはイタリア・サレント大学で 3 年目となる講義。セルジオ・サルバトーレ教授のお招き。ご自宅にも呼んでもらったので、娘さんに折り紙（ナプキン）で兜を折ってあげたら奥様も大喜びで写真を撮っていた。



講義の内容については割愛。黒板を使ったのだが、変な物体が！サッカーのストッキング止めみたいなもの（懐かしい）。そして、いわゆる黒板消しが存在しない。



この物体でチョークを消すのでした。

講義の後は、セルジオがピザ屋につれていってくれたのだが、ピザがでかい！大きすぎるでしょ！という感じのピザでした。この一枚を二人で食べようというのだから、セルジオの注文感覚もよく分からない。



3 / 14からは、いよいよデンマーク。今回、初めてのデンマーク訪問。なぜデンマークなのか、と言えば、現在クラーク大学教授のヤーン・ヴァルシナー教授が、2013年9月からデンマーク・オールボー大学に異動するからなのであった。ヤーンといえば、2004年に立命館大学に特別訪問教授として講義をしてもらって以来、私のみならず多くの日本人心理学者がお世話になっている人である。何より **TEM** の共同開発者でもある。オールボー大学はデンマークの北部、オールボーに本拠を置くが、このほか、首都コペンハーゲンなど合計3つのキャンパスをもっている。



ヤーンは、ニールス・ボーア記念・文化心理学センターの教授に就任すること。ニールス・ボーアは量子論に関する物理学者。相対性理論のアインシュタインの論敵であったことでも知られている。オールボー大学では、デンマークが生んだ偉大な物理学者の名を、文化心理学の講座名として冠することにしたのである。粋な話である。科学社会学では、人の名前をつけて顕彰することを冠名現象と呼ぶが、その例である。

ボーアは物理学において相補性の理論を提唱した。そして、このアイディアにはデンマークの心理学の影響が認められるのである。デンマークの心理学者？そんなのいたっけ？誰？と思う人が多いだろうが、ルビンの壺、と言われて知らない心理学徒はいないはずである。



ルビンの壺、のルビンは人名なのであった。これもまた、冠名現象である。彼は当初、

エビングハウスの無意味綴りのように、無意味図形を用いて研究していたが、得る物はなかった。試行錯誤の結果、いわゆる反転図形にたどり着いたのである。1915年に提出した博士論文[Visually experienced figures: Studies in psychological analysis. Part one]は、反転図形に基づいて書かれたものである。

先の反転図形は、横顔と花瓶が同時に見えることはない。黒い部分が地・背景となった場合には白い部分が図となる。そして、白い部分が地・背景となると黒い部分が図となる。我々の認識は決して、図だけを見ているのだけではなく、背景との相補的關係が必要なのである。ここでもまた相補性という語が出てきたが、そもそも、ボーアはこのアイディアを心理学から取り入れたようである。

そして、ニールス・ボーアとエドガー＝ルビンと一緒に写っている写真がある。どうやらこの2人はイトコ同士だったようなのである。心理学関係でイトコ同士というと、ダーウィンとゴルトンの2人がすぐに思い浮かぶが、ボーアとルビンイトコ同士で知的な切磋琢磨をしていたのかもしれない。



<http://www.kb.dk/images/billed/2010/okt/billede/object73704/da/#>

さて、3月14日、私はTEM（複線径路等至性モデル）について講演を行った。日本のように、とりあえず聞いておいてあとで質問という形ではなく、話をしている途中にいろんな人がいろんなツッコミを入れてくるのでナカナカ進まなかった。写真上は私の講演の様子、下は討論者として参加したピナである。





次の写真は、この会を準備したオールボー大学のブラディ・ワゴナー（向かって右端）とその仲間達との写真である。その隣はイギリス・ワーウィック大学（University of Warwick）のエリック・ジェンセン。数理的な社会学者なのだが、妙に TEM のことを気に入ってくれて、院生の研究に使わせているとのことである。



3 月 15 日はいよいよヤーン・ヴァルシナーの講演



文化心理学とその未来、と題して講演が行われた。

学術のことはさておき、デンマークの大学でびっくりしたことがいくつかある。

その一つは、学内のトイレが全て男女共用だったことである。あまりにびっくりしたせいか、写真をとるのを忘れてしまったが、王立美術館のトイレの写真がネット上にあったので拾ってみた。このように、トイレの横にはマーク、男女並んだマークが付けられており、どのトイレを誰が使ってもよいことになっている。いわゆる「男性小用」のトイレはどこにも存在しないのであった。



<http://blog.goo.ne.jp/mr-sakugen/e/24bca3235d0aafb7c356ca62097684ac>

飛行機のトイレや居酒屋のトイレなどは男女共用の場合があるのだから、私たち日本人にも全くなじみがないわけではないが、大学で男女共用というのはやはりぎょっとするのであった。

もう一つ、驚いたのは、大学教室内にビア・バーがあったことである。タンクトップのお嬢さんは大学生で、学生がビールを売ってくれているのである。



せっかくなので買って飲んでみた。



12デンマーククローネ。1クローネは30円ほど。なので少し高い(売上税が25%)。ただ、ホテルの自販機では30デンマーククローネだったので、確かに安い！のであった。

デンマーク写真の最後は夜空。左側真ん中にちょっと傷のように写っているのは実は三日月。分け合って7時過ぎに校舎の周りを歩いているときに見上げたら三日月が綺麗だったので撮ってみた、のである。



2013年5月21～25日 イギリス・ロンドン。

個性記述科学、という志向性がある。イタリア・サレント大学のセルジオ・サルバトーレ教授を中心に活動しているグループであり、既にネット上の年報の形で『Yearbook of Idiographic Science』雑誌も出している。

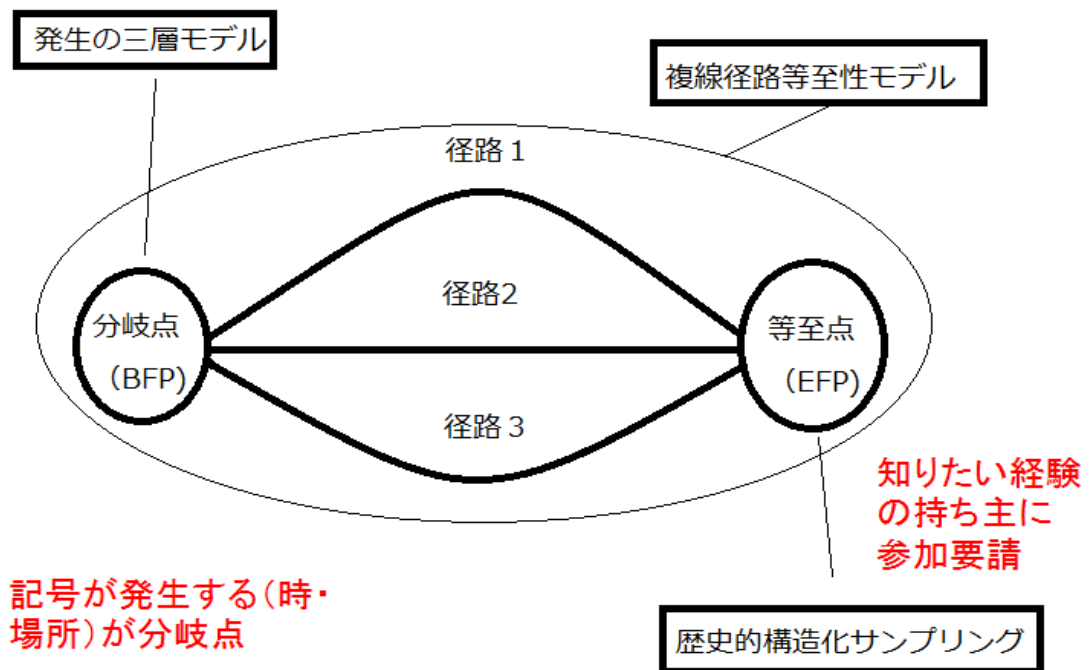
<http://www.infoagepub.com/index.php?id=11&s=s5021908d38a2b>

個性記述科学の仲間達は既に何度か、毎年一度の会合をもってきた。決して学会のような大規模な会ではなく、どちらかというと人づてで参加者を集める秘密結社的な会合で、参加者は全部30名弱程度である。

その会合が2013年はロンドンのLSEで行われた。LSE(ロンドン・スクールオブエコノミクス)は知る人ぞ知る社会科学系大学の雄である。心理学的介入の方法というサブタイトルであった。

私自身は「**Trajectory Equifinality Approach: Toward a Generalization and methodology in economic psychology**」というタイトルで発表を行った。TEM(複線径路等至性モデル)ではなくTEA(複線径路等至性アプローチ)に代えたところが少し新しい。

もともとTEM(複線径路等至性モデル)は人生経験を非可逆的時間と共に捉えようという記述モデルである。そのTEMと関連するサンプリング手法や自己理論が統合されてTEAとなっているのである。サンプリング手法としてのHSS(歴史的構造化サンプリング)は、研究の対象となる興味深い経験を実際にした人を研究対象者としてお招きするサンプリング手法である。また、TLMG(発生の三層モデル)は変容する自己を記述する理論である。



この TEA という枠組によって、ひとそれぞれ、様々な経験をモデル化し、一般的知識として蓄積できるというのが、今回の発表の核心であった。

夜、皆で街に繰り出した時に撮ったのが次の一枚。



さて、宿泊した Strand Hotel の近くにはトラファルガー広場がありナショナル・ギャラリー (National Gallery) <http://www.nationalgallery.org.uk/>があった。



1824年に設立された美術館で、13世紀半ばから1900年までの作品2,300点以上を所蔵している美術館である。そのコレクションは広く公開されており、特別な企画展示をのぞいて入館は無料となっている。

ただし、維持管理費用の一部を寄付でまかなうため、**Donation box** が入り口ほか数カ所に設けられている。

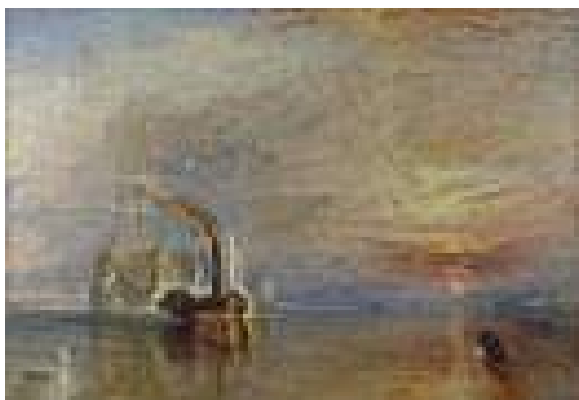


ガラスの板に印刷されているので分かりにくいのだが、「入場料無料。あなたの寄付が世界レベルのコレクションの維持に役立ちます」と書かれている。

海外の博物館は無料なのに日本の入場料は高すぎる！と憤っている人がいたりするのだが（前に新聞の投書で読んだことがある）、大英帝国系の博物館はたいてい無料＋寄付依頼が行われている。英語など読めない！と言わずに **Donation** という文字をみたら寄付しまし

ようね、みなさん。

さて、ナショナル・ギャラリーで見たかったものの一つが、ターナー（Joseph Mallord William Turner）の描いた「The Fighting Temeraire」という絵である。解体されるために最後の停泊地に曳かれてゆく戦艦テメレール号。



デジタル画像では雰囲気しか伝わらないが、ターナーは、現在でこそ印象派を先取りする作家として有名であるが、当時は、(印象派が印象的なほど酷いという意味だったのと同様)、よく分からない酷い絵であるという評価を受けていた。その絵は、闇と光を描くものであり、ゲーテの色彩論の影響を受けていると言われている。ゲーテの色彩論については以下の論考でも触れておいた。

サトウタツヤ 2007 心理学と科学の関係を考えるための若干の考察ーゲーテ『色彩論』を補助線に。てんむすフォーラム 第 2 号(2007)

http://www.k2.dion.ne.jp/~kokoro/tenmus/2_31_40.pdf

というわけで、TEM を通じて、イタリア、デンマーク、イギリスと渡り歩くことができたのであった。2014 年は、再度ブラジルに行く予定である。

対人援助学&心理学の縦横無尽 1 1



サトウタツヤ@立命館大学文学部心理学専攻

福島県浪江町 訪問記

二〇一一年三月に発生した東日本大震災。その直後の大津波は福島県双葉郡大熊町・双葉町に立地する福島第一原子力発電所を襲い、大量の放射性物質が環境中に放出されました。周辺住民を含む多くの人々が強制避難に追い込まれたり、自主避難を選択せざるをえなかったことは周知の通りです。

放射能は主として爆発のあった3月12日～15日にかけて大気中に放出されたのち、風に乗って北西の方角へと流れ、やがて雨によって地上に降下しました。放射能が風によって広まるということは、風が吹かない方角には広まらないということを意味しますから、予測は可能なはずでした。

さて私は、二〇一三年六月、関係各位のご厚意をえて福島県浪江町を訪問することができました。現在、浪江町は、放射線量の高さによって、「帰還困難区域」「居住制限区域」「避難指示解除準備区域」の3つの区域に区分けされています。

「帰還困難区域」については少なくとも5年以上は帰還して居住することが困難だと

考えられています。この区域にある浪江高校津島校は、原発事故後数日間だけ避難所になっていましたが、すぐに閉鎖され、そのままです（写真上）。





JR 浪江駅は「居住制限区域」にありますが、その近くの民家は崩れおちたままでした（写真左）。あるいは、この2年間の間に崩れたのかもしれませんが。いずれにせよ、片付けもされていません。

「避難指示解除準備区域」は引き続き避難指示が継続されるものの、住民が帰還できるよう環境整備を目指すとされた区域です。つ

ぎの写真は津波で水田に運ばれた漁船です。2年たってもこのままです。よもやこの2枚の写真がもともと水田だったとは誰も思わないでしょう。



対人援助学&心理学の縦横無尽 1 2



サトウタツヤ@立命館大学文学部心理学専攻

構想：新書版「心理学入門」

★プロローグ

本稿は、特に出版するアテもなく、心理学とは何か、ということの新書で出せたら良いなあとと思いながら、手すさびに書き綴ったものである。『LIFE（生命・生活・人生）の心理学；あるいは心理学の未来』というタイトルを仮につけている。

出版社から依頼があったり、自分で計画して出版社に持ち込んだ計画の原稿が多数残っているのに、何やってんの？というご批判は受け付けられません（笑）。

LIFE（生命・生活・人生）の心理学；あるいは心理学の未来

はじめに あなたと心理学の関係；ヒト・ひと・人としてのあなたと心理学

この本を手にとって読んでくれている皆さん、ありがとうございます。この本は心理学についての本ですが、もう一人の主役はこの本を読んでいる読者の皆さんです。

あなたが、今、あなたがいるその場所で、この本を読んでいる。このことについて考えて見ましょう。なぜ、このようなことが起きているのでしょうか？とはいえ、なぜ（WHY）を考えるのは難しいので、どのように（HOW）の形にして考えてみましょう。

あなたの読書行動＝生物としてのあなたの力×社会的な条件整備×個人的な事情・展望

$f(\text{Action}) = \text{Biological faculty} \times \text{Social condition} \times \text{Idiographical affair}$

$f(\text{行為}) = \text{生物学的な力} \times \text{社会的条件} \times \text{個別的事情}$

あなたがこの本を読んでいるのは、目が見えて、日本語を読むことができ、宿題の課題図書に指定されているから、というような分析ができると思います。

人によっては、目が見えないけれど、誰かが読んでくれているので、心理学を学びたい

という気持ちから、この本を聞いている、という人もいるかもしれません。

目に見えるけれど、韓国に生まれて母語はハングルだけど、日本語はよくわからないけど、日本の大学に行きたいのでこの本を読んでいる、という方もいるかもしれません。

実はこうした考え方は、人間が、生物としてのヒト、社会的存在としての人、個人的人生を展望する存在としてのひと、というように、3つの異なる層から成っていることを前提にした考え方です。また、等式の左側の f は関数を意味しています。右側がかけ算になっているのは、一つでもゼロであれば、あなたの読書は行われまいだろう、ということを暗示しています。

行為の内容に、自分で空を飛んで旅行に行く、ということを入れたらどうでしょうか？ 飛ぶ力は人間の場合ゼロです。他の社会的条件や個別的事情がどうあろうと、飛んで行くことはできない、ということはこの関数式は示しているのです。その一方で、乗り物にのって空を飛んでいく、ということを行為として置くならば、それは可能です。飛行機その他の手段があるからです。

さて、この関数式で読書について考える時には、等式の左辺は読書ではなく「読書行為」になります。

読書を読書「行為」というように「行為」という接尾辞をつけて呼んだり考えたりするのは、心理学の特徴です。私たちが日常で気持ちとか感情とか悩みと言っていることを、心理学は行為として考えることが多いのです。行為に置き換えることによって、自分や他人が見る（観察する）ことができるし、もしかしたらそれをコントロールできる、ということを用意しているのです。授業中にどうしてもスマホをいじっちゃうんだよね～とか、どうしても朝起きられないんだよね～とか、どうしても好きな異性（同性でもいいですが）のことがアタマに思い浮かんじゃうんだよね～、とかいう悩み事も、心理学では行為として捉えます。授業中にスマホをいじっちゃう行為、起きる時間がきても寝続ける行為、常に好きな子のことをあれこれ考える行為、というように、行為をつけて考えるのです。そして、行為であると考えればコントロールして克服する可能性が出てくるのです。

普通の感覚では行為ではないようなことも、行為として考えるのが心理学のやり方です。たとえば、緊張状態をどのように克服するか、ということについても、「緊張＝緊張する行為」と置き換えることによって、緊張行為のコントロールを可能にしようと試みるのです。

誰かを好きな気持ちも、会社に行きたくない気持ちも、もちろん、会社をさぼることも、人をいじめることも、全て「行為」と置き換えることによって、行為がなされたり、なされなかったり、維持されたりする法則を見いだそうとするのが心理学の特徴です。

あなたの読書は、あなただけでなく、あなた以外の人間にも適用できる法則で記述できるかもしれない、というのが、普遍志向の心理学の考え方です。このように言われると「私がこの本を読んでいるのは、他ならぬ私のことなのだから、他の人と全て同じということはない」と反発する人も出てくることでしょう。

他の誰でもない私が、他の時ではない今、他のものではないこの本を読んでいる、とい

うこの事実を重視する考え方もありうるでしょう。これは、実存志向の心理学の考え方です。実存というのは難しい言葉ですが *existence* の訳です。受験英語だと「存在」です（実際の存在、を実存と訳したのは九鬼周造という哲学者です。日本の哲学者は言葉を難しくするのが仕事ですから仕方のないことだと哲学者の悪口を言うことはおいてくことにします）。他のことに回収されない実存（実際の存在）を記述する志向は心理学の中に確かに存在します。

私たちの一人一人のあり方をひととして重視すれば実存志向となり、私たちがヒトという種の一員だというあり方を重視すれば、本質志向になります。本質は *Essence* の訳です。何かを読むということの本質は何か、ということを考えることは可能です。ただし、心理学的に考えるということは、この両者について考える、ということに他なりません。また、その中間に社会的存在としての私たちという言い方も可能です。本を読む行為ということにしても、本を書いた人、出版した人、売っている人、多くの人のネットワークの結果として成り立っているのです。

さらに、今、地球上に60億を超える人たちが住んでいますが、そこで生きる人たちの行動・習慣・将来への見通しは、全て同じではないと思います。自分が生まれ落ちた社会に何らかの制約を受けているのだと思います。そして、その制約を打ち破る人が現れた時、新しい可能性が生まれるのです。

かつて、私が福島大学教員として教育心理学の授業で「青年期の悩み」という内容を扱っていた時のことです。経済学部のある学生が感想を書いてくれました。青年期において進路を決めることは大変だ、というような内容の話をしていました。その学生さんは「私と同じような悩みを持っている人がいるとは驚いた。さらに、そこに法則を見いだそうとしている学問があることにもっと驚いた」と書いてくれました。この学生さんがその時に実際に抱えていた悩みは、固有名をもったある個人が卒業後に何をしようか、というようなことであり、その意味でその彼／女の実存的な悩みごと（実際に存在する悩み）だったのだと思います。しかし、こうした悩みを青年期に持つ、というレベルで捉えたなら、それには本質的な側面もあったのです。しかし、こうした悩みは社会によっても規定されており、近代を生きる青年が共通に持つ悩みにすぎないという言い方も可能です。

気持ちや悩みは、実存的な経験であり、それを**行動と置き換えることで普遍的な法則に近づくことができる。そして、その中間には個人を導く社会の存在も重要です。実存的であるとはいえ、社会抜きでは何もできず、とはいえ生物としての法則に従うのが人間です。生物としての「ヒト」、社会的存在としての「人」、私の人生を生きる「ひと」、私たち人間は多様な衣を着ているのかもしれない。

そして、心理学は人間の *LIFE* (生命・生活・人生) を総合的に扱う学問です。本書では、人間の様々な側面を様々なアプローチから研究・実践する心理学の世界をこれから紹介していきます。

第1章 心理学の概要

第1節 心理学への期待と失望

心理学が人気です。私が務める立命館大学は関西圏にあるのですが、少子化で大学に行きたい人は減っているのに、関西全体で見ると、心理学を希望して大学を受験する人の総数は毎年増えていっています。高校までの科目には無い科目なので、未知の科目に対するあこがれや期待のようなものがあるのかもしれません。

ところが、心理学は最も失望的な学問だ、というような状態は、私がアエラムック『心理学がわかる』を裏方として編集していた20年前とあまり変わっていないようです。そこには心理学とは「学ぶ前には期待を与え、学んだ後には失望を与える学問」だと書かれていました。心理学への期待は、臨床心理学のような実践的な心理学が中心のようです。これは今の高校生でも同じで、「将来はカウンセラーになりたい!」というような希望をもって大学に入学してくる人が増えているという現状があります。大学院までいって臨床心理士になりたい!と思うその気持ちは大事です。ところが、大学の心理学はカウンセラーのことばかりをやっているわけではありません。そこにズレが生まれるわけです。

高校までには心理学という科目が存在しないので、心理学の全体像が見えにくいのは仕方のないことかもしれません。しかし、期待と現実にズレがあるのは問題ではないでしょうか。

カウンセリングはもちろん、心理学の一部です。そのカウンセリングがどのような意味で心理学なのか、そもそも心理学とは何なのか、ということを考えていきたいと思うのです。そこで、本書では、心理学という学問について、なるべく平易に面白く、しかし基本的な軸はぶれないような形で説明していきたいと思います。

第2節 心理学の体系

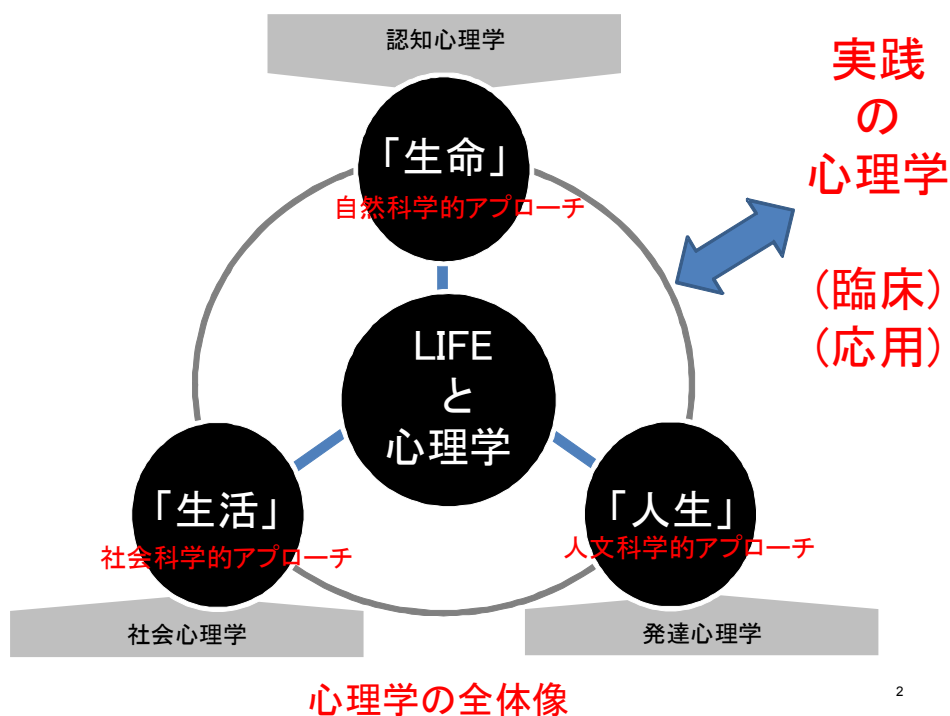


図 1
LIFE; 心理学
の全体像

心理学がどのような学問であるかの体系の見せ方はいくつもありますが、ここでは、本書「はじめに」でも書いたように、英語の LIFE という語から考えて見ることにします。英語の LIFE という単語の訳語を、みなさんはどのように覚えてますか？ 生命？ 生活？ 人生？ そのいずれもが正解です。ライフ・サイエンスという時のライフは「生命」と訳されます。生物としてのヒトの生命現象を理解しようとする領域です。どこかの宣伝ではありませんが、「ビューティフル・ヒューマン・ライフ」といったときのライフは、これもまた宣伝文句の「おいしい生活」に対応するようなもので、ライフは日常生活という意味での「生活」を意味していると思われます。そして、ライフコースなどという時のライフは、人間の一生の径路・行程を視野にいたったものであり「人生」を意味すると考えるべきでしょう。

LIFE を生命として考えるなら、それは生命体としてのヒトを扱う心理学になります。ここでは簡単にするため認知心理学と一言で呼んでおきますが、この領域の特徴は自然科学的なアプローチを用いることになります。実験を用いることが多いのが自然科学的なアプローチの特徴です。実験というと理科（物理や化学）を思い出す人が多いでしょう。その手法を心理学にも適用するのが認知心理学の特徴です。ヒト以外の動物との比較を通じてヒトの特徴を考えたり、ネズミやハトやサルとヒトとの共通点を探ることでヒトの特徴を考えることもあります。

実は心理学においては、この認知心理学が中心になっています。何故かという、歴史的な経緯が関係しています。およそあらゆる学問は哲学から生まれたと言えますが、モノをどう見るか、感じるか、というのは哲学から心理学に受け渡された重要なテーマの一つなのです。そして、心理学が哲学から独立した学問になった時には、実験という手法でデータをとることが、哲学との差異を強調するのに役立ったからなのです。このことは歴史を扱う第4章で詳しく見ていくことになるので、ここではこれ以上触れないことにします。

LIFE を生活として考えるなら、それは生活を営む人を扱う心理学になります。ここでは簡単にするため社会心理学と一言で呼んでおきますが、この領域の特徴は社会科学的なアプローチを用いることになります。アンケート調査などを行うこともあります。人は一人で生きていくことはできず、社会生活の中で生きています。そうした社会の中の心理学を追究するのが社会心理学の特徴です。対人関係や集団における心理、あるいは、様々な文化における心理の差異と共通性を理解しようとするのが社会心理学です。

LIFE を人生として考えるなら、それは生まれてから死ぬまでの人生を生き抜くひとを扱う心理学になります。ここでは簡単にするため発達心理学と一言で呼んでおきますが、この領域の特徴は人文科学的なアプローチを用いることにあります。聞き取り調査などを行うことがあります。ひとは時間の中を生きる存在であり、一時とも同じ状態で生きていることはありません。もちろん、比較的安定している時はあるかもしれませんが、赤ちゃん→子ども→青年→大人→老人という時間と共に変化していく存在です。また、時に悩み矛盾を抱えながら生きている存在です。口に出せないようなことを想像することさえあるのがひとというものです。赤ちゃんの時の自分と青年の時の自分とでは、差異も共通性もあるでしょう。そうしたことを通じて、心理の発達を考えていくのが発達心理学です。

表1 心理学の領域とその特徴

名称	着眼点	アプローチ	手法	差異と共通性の検討の素材
認知心理学	生命主体としてのヒト	自然科学	実験	他の動物
社会心理学	生活主体としての人	社会科学	アンケート	他の文化・集団
発達心理学	人生主体としてのひと	人文科学	聞き取り	人生の各時期

第3節 臨床心理学を含む実践心理学の多様性

ここまでの心理学の説明には臨床心理学やカウンセリングという言葉が出てきませんでした。奇異に感じた人がいたかもしれません。しかし、あわててはいけません。世の中は、よく目に付くことばかりで成り立っているわけではありません。影の主演というのものは必ずです。たとえば、飛行機や列車という移動サービスを考えてみましょう。新幹線というのはよく目にするので、有名であり、誰もが知っているものだと思います。誰でも新幹線の車体を思い浮かべることができますし、小さい子どものあこがれは運転士さんです。しかし、新幹線を支えているのは運転士とボディ（車体）だけではありません。車輪、椅子のバネ、その他、色々なものが集まって新幹線を作っているのです。安く早く安全に、そして可能なら快適に、というのが移動サービスの根幹ですが、こうしたサービスを提供するためには非常にたくさんの目に見えない領域が隠れていることに皆さんも気づいてくれるでしょう。駅員の存在も、安く早く安全で快適な移動には重要であることは論を俟ちません。

臨床心理学やカウンセリングというのは、移動サービスにおける新幹線の運転士のような存在です。よく人目につくので、誰もが知っていて憧れます。男の子の多くは運転士になりたい！と思います。しかし、運転士だけでは新幹線は動かせません。多くの人が支えています。それと同様に、臨床心理学やカウンセリングにも影の主演というのがいるわけです。そして、それが、前項で説明した心理学の体系なのです。心理学の様々な領域があるからこそ、臨床心理学やカウンセリングの輝きが増すのだと考えてください。

新幹線が乗り物の一種であるのと同じように、臨床心理学やカウンセリングは「実践心理学」の一種です。そして、実践心理学には（乗り物がたくさんあるのと同じように）たくさんの領域があります。一番身近な実践心理学の一つは教育心理学です。皆さんがこれまで習ってきた内容は、実は、発達心理学と密接な関係を持っているのです。簡単な漢字から複雑な漢字の順番で習うのは、子どもたちの発達の程度にあわせて教育の方が効率的だということが分かっているからです。実践心理学には法心理学という領域もあります。日本では裁判員裁判が始まりました。職業裁判官だけではなく、私たち市民が裁判を行う制度です。イヤだなあと思う人もいたかもしれませんが、最高裁判所が行った平成24年度「裁判員等経験者に対するアンケート調査」の結果報告書によれば（N=8,331）、「非常によい経験と感じた」人が54.9%、「よい経験と感じた」人が40.3%でした。裁判員裁判においては、被告人が本当に犯人なのか（つまり何が本当のことなのか）を判断する必要があり、また、もしも被告人が犯人だとしたらどれくらいの量刑が必要なのか、を判断する必要があります。そして、この「何かを判断する」過程は心理のプロセスそのものです。

したがって心理学の実践領域でもあるのです。教育心理学、法心理学のほかにも交通心理学、環境心理学など様々な実践領域もありますが、この話は後に回すとして、実践心理学の花形である臨床心理学に話を戻しましょう。

実践心理学のスターが臨床心理学であることは疑いありません。カウンセリングはそのスターの中のスターということになります。現在の日本の臨床心理学ではどのような問題が関心をもたれているのでしょうか。

まず第一が、スクールカウンセラーの活動です。つまり、学校において子どもたちの相談にのったりする活動です。いじめ問題の予防や解決など、学校の先生たちだけでは解決が難しい問題に臨床心理士が関わっているのです。

第二に、東日本大震災への対応です。PTSD という語を聞いたことがありますか？ Post Traumatic Stress Disorder の頭文字をとって PTSD と呼ばれます。トラウマになるような大きなストレスを経験した後で精神に変調をきたすことです。大人も子どもも震災後の精神状態は不安定です。特に子どもたちに対して臨床心理士がかかわっています。

第三が、認知行動療法です。抑うつ状態や不安や心配を心理的に改善する心理療法です。

ここでスクールカウンセラー、東日本大震災と PTSD、認知行動療法、この3つについて、先の心理学の全体図（図1や表1）と関連づけて考えてみましょう。

表2 実践心理学のスターとしての臨床心理学は Life とどのように向き合うか。

臨床心理学の中の役割	対象	手法	モデル
スクールカウンセラー	人生主体としてのひと	人文科学的	物語りモデル
災害後の PTSD 支援	生活主体としての人	社会科学的	生活移行モデル
鬱病の認知行動療法	生命主体としてのヒト	自然科学的	医学的治療モデル

もちろん、これほど簡単には割り切れませんが、臨床心理学が、心理学のあり方を基礎にしていること、様々な側面から様々な手法を用いることができること、が分かってもらえんと思います。

なお、心理学の周辺には、社会学、教育学、医学などがありますから、そうした学範（ディシプリン）と重なる部分があることは言うまでもありません。

第4節 研究としての心理学の可能性

臨床心理学に興味をもち、カウンセラーになりたい、という思いを胸に心理学に興味をもった皆さん。ぜひ、心理学の全体像に関心をもってください。心理学の対象はもちろん「人間の心理」なのですが、LIFE が対象だということもできます。そして LIFE を生命・生活・人生という3つの側面から考えることで、心理学の多様性が理解できたと思います。どのような方法で研究するのか、ということはここまであまり述べませんでした。研究によって新しい知識を作っていくことは極めて重要なことです。学問の目的は新しい知識を作って社会に有用な知見を生み出すことにあるからです。

心理学の研究対象は、データです。本を読んで考えるだけではなく、何らかのデータを用いて研究するところに心理学の特徴があります。心理学の研究方法は、何らかのデータをとるための方法、ということも可能です。そのアプローチには多様なものがあり、実験などの自然科学的アプローチ、アンケートなどの社会科学的アプローチ、聞き取りなどの人文科学的アプローチがあります。ここで実験とは、観察という方法の一種です。自然場面での観察ではなく、条件を整えて観察することが実験ということになります。心理学においてはそれぞれの目的や対象によって自由に選択することができます。心理学は、柔軟な研究方法によって新しい知識を生産してきたと言えるのです。そして、その知識を用いることで、様々な領域においてより良い実践が可能になるのです。

ここでは一つだけ、認知心理学に関連する領域の動物を被験体にした研究方法を紹介しましょう。少し残酷ではありますが、おつきあいください。記憶は脳のどこが支配しているのでしょうか？もしそれが分かれば、記憶障害で苦しんでいる人の治療が可能になるかもしれません。では、記憶障害の人の脳を調べれば良いのでしょうか？どうやって調べれば良いのでしょうか？逆に、脳の一部を破壊してその部位の働きを調べる方法があります。人間のことは人間でやらなければ分からない、という主張が正しければ、人間の脳の一部を破壊して、その機能を調べるしかありません。しかし、ネズミを用いることで、代替できるということが心理学の常識になっています。ネズミからすれば「そんな身勝手な！」ということになりますが、そういう手法があります。その時に問題になるのは、記憶と忘却の定義なのです。ネズミに「何か覚えてますか？」と聞いても「ちゅー」としか答えてくれません。記憶を行動的に定義する必要がでてくるのです。

どのようにするのでしょうか？

すごく簡略に述べれば以下のようなことです。水槽の水の中に台をおき、エサをおきます。透明な水であれば、それがすぐわかるので、ネズミはその場所をめがけて泳いでいき、エサを食べることができます。また、何度かやるうちに覚えてしまいます。本当でしょうか？それを確かめるにはどうすればいいのでしょうか。

たとえば、墨汁で水を黒くしてしまっ、エサ台を見えなくするという方法があります。ネズミはどうするのでしょうか？もし、記憶があれば、台が見えても見えなくても、その場所に泳いで行けるでしょう。実際、ネズミはエサの場所に泳いでいくことができるのです。このような手法によって、記憶を定義することができるなんてすごいと思いませんか？この、「記憶の定義」を考えたのは心理学者たちなのです。

記憶が定義された後にのみ、脳のどの部位が記憶を司っているかの研究が可能になります。この後の詳しい話は割愛しますが、脳の様々な部位の機能を破壊／停止してみて、記憶機能に影響が有るかどうかを調べるのがノックアウト・マウスという方法なのです。少し残酷ではありますが、私たちはこうした研究方法によって記憶と脳の関係について研究してきたのです。興味がある人はノックアウト・マウスという話題を調べてみてください。

第5節 第1章のまとめとつなぎの文章

最初の章では、心理学の概要のみをお話したので、中途半端な感じがするかもしれませ

んが、これからが本題です。心理学の幅広い領域とよく工夫された研究方法、そして、自分がどんな研究や実践をすることができるのか、という観点から本書を読んでいってほしいと思います。第2章では、まず、実践心理学をとりあげます。その中でもみなさんが最も興味をもっているだろう臨床心理学から始めていきます。第3章では、心理学の基本的な領域について解説してきます。先ほどの図とは逆に、発達心理学、社会心理学、認知心理学、の順番に説明していきます。第4章では、今後の心理学のあり方について、歴史と展望を見ていきます。

★エピローグ

今回の原稿は、特にアテもなく心理学の入門書を新書版で出したいと思って書いているものである。

目次は以下のようになっている。

第1章 心理学の概要

- 第1節 心理学への期待と失望
- 第2節 心理学の体系
- 第3節 臨床心理学を含む実践心理学の多様性
- 第4節 研究としての心理学の可能性
- 第5節 第1章のまとめとつなぎの文章

第2章 基幹心理学の諸相

第1節 認知心理学

- 第1項 イントロダクション
- 第2項 低次認知：感覚・知覚ネタ
- 第3項 高次認知：思考・記憶ネタ
- 第4項 生理心理・脳神経科学

第2節 社会心理学

- 第1項 自己
- 第2項 対人関係
- 第3項 集団・組織
- 第4項 文化

第3節 発達心理学

- 第1項 乳幼児期
- 第2項 思春期
- 第3項 青年期
- 第4項 成人期・老人期

第4節 新しい知識を作る基礎としての方法論

- 第1項 実験
- 第2項 調査・アンケート
- 第3項 面接・インタビュー

第4項 観察

第5節 第2章のまとめとつなぎの文章

第3章 実践心理学の諸相

第1節 臨床心理学とカウンセリング

第1項 学校とスクールカウンセリング

第2項 震災と PTSD

第3項 認知行動療法

第4項 家族療法・芸術療法・動物療法などその他の臨床心理学

第2節 医療・薬理・看護・病気と心理学 （ストレスと健康）

第1項 ストレスと健康

第2項 薬理心理学

第3項 看護の心理学

第4項 人生 with 病い

第3節 法心理学と犯罪心理学

第1項 法意識・道徳の心理学

第2項 犯罪と被害の心理学

第3項 裁判プロセスの心理学

第4項 立ち直りと赦しの心理学

第4節 その他：経済・政治・軍事・平和・環境・交通・エンタメ と 心理学

第1項 政治・経済 行動経済学

第2項 環境・交通

第3項 軍事・平和

第4項 エンタメと食

第5節 第3章のまとめとつなぎの文章

第4章 心理学の未来

第1節 心理学の歴史とその意義

第1項 進化論・精神物理学・民族心理学 1860年頃

第2項 必須通過点としての心理学実験室 1880年頃

第3項 心理学の確立と新しい領域への展開 1910年頃

第4項 心理学ルネッサンス；意味への関心 1960年頃

第5項 予言・大変革は2030年頃

第2節 キャリア形成と／の心理学

第3節 システム論的思考

第4節 複線径路等至性モデル；未来への展望があなたを作る

第5章 付録

第1節 心理学を学びたいあなたへ 心理学を学ぶ大学／大学院

第2節 力をつけて社会に出る！ 心理学関連資格と新しい資格（心理調査士）と職場

以上

対人援助学&心理学の縦横無尽 1 3



サトウタツヤ @立命館大学文学部心理学専攻

臨床心理学の起点を考えてその歴史を再考する試み

—『臨床心理学史(仮)』暫定的目次の提案—

『臨床心理学史(仮)』という本を書いているのですが、何せテーマがテーマであり、構想1年執筆10年ということになりそうです。そこで、この場をお借りして、「はじめに」と目次と「おわりに」を披露させていただき、ご批判を受けたいと思います。目次は簡略版と詳細版があります。年号を入れているので、年表として活用できるようになってます。目次は思想の表現の一つですので、吟味していただいてご批判いただきたく思います。できれば、良い本にしたいので、足りない項目や改善すべき表現に気づいた方はご連絡ください。

§ 1 ★★★『臨床心理学史(仮)』のはじめに(暫定版) ★★★

はじめに

★本書の目指すところ

本書は、臨床心理学の歴史を検討するものである。そして、心理学の一分野としての臨床心理学という視点から叙述することを目指した。他の観点が取り得ることは承知しているが他の観点からの歴史については他の著者に任せたい。著者がこのように開き直りとも取れる立場から臨床心理学史を書くことは、日本語で読める臨床心理学史の圧倒的な不在によって正当化されると考える(他の言語で読めるものも決して多いとは言えない)。また数少ない日本語で読める心理学史も、臨床心理学の始まりを精神分析におき前史の始まりを催眠に置くものが多いなど支配的な学説(ドミナント・ディスコース/マスター・ナラティブ)化している。

さて日本において臨床心理学の歴史について扱った論文・著書はそれほど多くない。一

方で臨床心理学を扱う成書や事典の一部に歴史を扱うセクションがあることは少なくない。こうした論考の多くが、精神分析やその前史としての催眠から臨床心理学史を始めている。具体的にはシャルコーとフロイドが現在の臨床心理学の起点になっているのである。こうした歴史も一つのあり方であろうが、特に日本の臨床心理学のあり方を考えるとき、これで良いのか、ということも考えざるを得ない。心理学との接続について考えていく必要があると思うのである。

一方で、心理学史についてもまた、支配的学説があり、それはフェヒナーの精神物理学などを経てヴントが実験心理学を打ち立てることによって近代心理学が成立した、というストーリーとなっている。これは心理学史家・ボーリングが打ち立てたという意味で、「ボーリング史観」（サトウ・高砂、2003 参照）と呼ぶべきものである。ボーリング史観の骨格は彼が『Isis』という雑誌に書いた論文（Boring, 1961）を読むとよく分かる。

ボーリングは測定(Measurement)と量化(Quantification)を「正しくも」ほぼ同義に使っており、測定が心理学に導入されたことが心理学を他の学問と異なる一つの学範(ディシプリン)として成り立たせたのだと主張する。そして、フェヒナーの精神物理学パラダイム(1860)、ドンデルスの反応時間パラダイム(1862)、エビングハウスの記憶・学習の研究(1885)、ゴルトンの個人差研究(1883)を心理学の学範成立の重要事項として重視する。近代心理学の父と呼ばれるヴントは、こうした流れの中で「生理学的心理学」を打ち立て(1873)、ライプツィヒ大学に心理学実験室を設立し(1879)多くの学生に心理学を学ばせその成果を世界に普及することを可能にしたアントレプレナー(起業家)として位置づけられ、高く評価されている。

なお、本書で言うところの心理学は、実験心理学という狭い意味での心理学を意味するものではない。心理学=実験心理学という考えはそれ自体が、ボーリングの『実験心理学史』という本の影響を受けた一つの史観にすぎない。そのうえで(催眠や精神分析から始まる)臨床心理学史と(実験や測定を基本におく)心理学史という枠を一度取っ払って臨床心理学史を描いたらどうなるのか、それを考えた末に、本書では19世紀の終わり頃を臨床心理学史の起点として設定した。本書で採用する仮説として、ウィトマーがペンシルベニア大学に「心理学クリニック」を創設した1896年頃を臨床心理学の起点にした。これは、多くの臨床心理学の歴史が前提にしているフロイトやシャルコーを起点にするという考え方とは明確に異なっている(ただし、時期はあまり変わらない)。

言うまでもないことだが、学範(ディシプリン)は一人の偉人によって打ち立てられるものではない。この時期、臨床心理学に関することだけでも実にいろいろな試みがなされていた。たとえば、ドイツではヴントのもとで心理学を学んだ精神科医・精神医学者クレペリンが自ら創刊した『Psychologische Arbeiten(心理学の仕事)』に「精神医学における心理学的試み」という論文を発表した(1895)。オーストリアではフロイトが『ヒステリーの研究』を公刊した(1895)。フランスでビネが『心理学年報』を創刊したのが1895年であった。このような動向の中、アメリカでは前述のようにウィトマーが1896年に心理的クリニックを設立したのである。臨床心理学の成立というような大きな出来事は個人の努力や業績にだけ帰せられるものではなくより広い文脈で考えるべきものであることがわかる。

また、歴史の起点を描く時には、起点の前の歴史（前史）を考える必要がでてくる。いきなりウィトマーの 1896 年から始めるわけにはいかないのである。先に述べた 1895 年頃の動向は、それを準備した文脈というものが存在するのである。本書では前史の本格的な始まりを 17 世紀、時あたかも西洋で近代社会が成立しつつある時期を選んだ（当然、他の選び方もあることに留意されたい）。精神医学および医学も、臨床心理学および心理学も、どちらも近代の影響を大きく受けているからである（また逆に臨床心理学や心理学が時代を作ったという面もある）。

★遡及的影響仮定の禁止－実生活への応用を視野にいれた手続的知識としての歴史

学問の歴史のことを科学史・学問史と呼ぶが、歴史的思考の基本は、複数の出来事があるように影響を与え合って歴史を織りなしてきたのか、ということにある。また、歴史は一回性をもつ出来事であるが、ある具体的な歴史を知ることができれば、それは、確固たる必然的なものではなく、むしろ偶然と必然が織りなして実現したことだと実感することができる。そして－より重要なことなのだが－、実現してきた歴史でさえ、もしかしたら、他の可能性もあったのだ、と実感することができるようになる。歴史を学ぶことの意義は、事実を固定して考えることではなく、他の可能性の中でなぜ、このことが実現してきたのか、を考え、そうした考え方を実生活にも活かすことにある。

さて歴史的思考の最も大きな特徴の一つは、出来事の時間的順序にしたがって理解することである。その基本は、後に起きた出来事は、前に起きた出来事に影響しない、ということにある。これを遡及的影響仮定の禁止と呼んでおく。ファンタジーの世界であれば、未来の出来事が私を導く、というようなことはあり得るかもしれないが、歴史的思考では、後の出来事が遡って前の出来事に影響すると考えることをしない。だからこそ、歴史は、年号だの何だのやたら時間の記述にうるさいのである。

たとえば、ちょっとした知り合い X 君が恋人 A さんと別れて新しい恋人 B さんにつきあうようになったとして、いつ新しい恋人と知り合ったのか、ということは、出来事の（歴史的）理解に決定的な意味をもつ。1）新恋人と称する人と既に知り合っていたから、前の恋人と別れたのか、2）前の恋人と別れた後に新しい出会いがあったのか、の二つの可能性があり、そのいずれであるかを決めるのは、いつ、誰と会ったのか、という時間情報であることは、日常生活では自明であろうし、1）なのか 2）なのかによって、X 君に対する態度が変わってくることも理解できるだろう。また、新恋人 B さんが、彼女（A）に振られて落ち込んでいる X 君を励まし続けて新しい彼女になったのか、恋人のいる X 君にモーションをかけて恋人の座を奪ったのか、で B さんに対する評価も違って来るだろう。実は、こうした思考は歴史的思考を用いたと言えるのである。そして、学問史はこうした歴史的思考を学問の領域に対して行うものであり、その手法を身につけたと実感できれば他の社会的生活にも役にたつと思えるのである。

★臨床心理学の 5 つの問題系

本書では、臨床心理学の中に少なくとも 5 つの問題系を考えてみる必要があると考えている。

1, 一つは、「狂気」をめぐる問題系である。医学的心理学というカテゴリーを経て、あるいは技法としての催眠などを経て、精神分析へと至る流れである。精神病理学と呼ばれることもある。1953 年に向精神薬が誕生することによって、そううつ病と統合失調症が臨床心理学の対象からは除外される傾向になったことは、医学的心理学から精神分析的な臨床心理学へという傾向に拍車をかけたとも言える。精神分析とその流れをくんだ心理療法が多くの批判を受けているのは事実であるが、ドイツの心理療法士などでは精神分析的な流れをくむ深層心理を用いた心理療法を行っている人は少なくない。

2, 次が、子どもの適応、特に、障害をもつ子どもや非行児と呼ばれる子どもの適応に関する問題系である。これはアメリカの臨床心理学がウィトマーによる学習障害児向けのクリニックを臨床心理学の起点とすることによく現れている。移民の国アメリカでは国籍が出生地主義であることから分かるとおり、（ヨーロッパ大陸とは異なり）生まれた子ども達の未来に対して重大な関心が寄せられていた。児童ガイダンスやコンサルティングもこうした流れの中にあるものである。

3, 3つ目が、心理学的知識に基づく介入法である。身体的な侵襲を行わないものであり一言で言えば心理療法ということになる。身体的に非侵襲的な心理療法には様々なものがあるが、その代表は行動療法である。心理学における行動主義の源流はイギリスの経験主義やヨーロッパの反射研究にさかのぼるが、機能主義と結びつくことによって、症状除去という非常にわかりやすいスタイルを確立することに成功した。行動療法は、現在では認知行動療法という形になってきている。そして効果測定の透明性や時間的なコストパフォーマンスという観点を取り入れながら地歩を確立している。このほか、ロジャーズによるカウンセリング的心理療法、子どもに対する遊戯療法など、心理学的知識に基づく、非侵襲的心理療法は臨床心理学の中心的な位置をしめている。なお、精神分析的な心理療法は医学と心理学の接点であり心理療法であるとも言えるが、医学的精神療法でもある。

4, そして、以上3つの動向を支えているものとしての、心理学的な検査・測定である。ビネ&シモンによる知能検査、その他の知能検査、各種性格検査、ロールシャッハテストなどの投影法検査、など。DSM（アメリカ精神医学会の診断と統計の手引き）における人格障害の診断基準もここに加えられるかもしれない。こうした検査を用いて人間の理解を必要としたのは実のところ心理学者だけでなく、現場における教育者や医師であったかもしれないが、検査を整備して使用を促進したのは心理学者に他ならず、病院という現場における心理学者の雇用を促進したのは、心理検査という領域だったと言ってよいだろう。

5, 最後が、人の生活を支える心理学的支援である。精神病の寛解者、いわゆる精神遅滞をかかえる成人、大きな出来事に遭遇した人々、の生活を支える役割は心理学者だけに与えられるものではないが、心理士（師）の仕事の一つであることは日本でも認識されつつある。負の状態をプラスにするのではなく、生活をより悪化させないための心理学的支援、の重要性は社会に認識されつつある。このことは、医療における心理学の適用範囲を広げる可能性をもっている。慢性病や難病患者の生活支援という新しい領域である。

集団精神療法は臨床心理学ではないのか、家族療法やシステム志向だってあるではないか、矯正心理学はどうなのだ、最近ではナラティブや質的研究の影響もあるではないか、と

いう声や問いにはもちろん答えていくつもりであるが一場合によっては第6、第7・・・の流れとしてもいいが一、大きな幹としては、精神分析療法に至る流れとその展開、カウンセリング・ガイダンス・コンサルティングに至る流れとその展開、認知行動療法に至る流れとその展開、それを支える心理検査に至る流れとその展開、心理学的介入が必要な人への総合的支援、を総合的に理解していくことが本書の目的である。

★ 宣言的知識と手続き的知識

フロイトの弟子として精神分析の考えに共鳴しつつ、後にフロイトの元から去った人物とその独自の考えについて、適切な組み合わせを選びなさい。

- 1 ユング — タナトス論
- 2 ユング — 個人心理学
- 3 アドラー — 個人心理学
- 4 アドラー — タイプ論

という問題に対して、アドラーといえば個人心理学、ユングは元型論だから、答えは4だ、というように暗記で対応すれば、それは宣言的知識であるが、それぞれの人がどのように考えたのか、どのような問題にぶつかってどのように乗り越えて、どのような順番で物事を考えていったのか、ということが分かればそれは手続き的知識である。歴史に関する手続き的知識は宣言的知識を包含するから、手続き的知識として理解すれば、暗記中心のテスト対策などは不要になる。それだけではなく、実際の場面で経験する問題に対して、ヒントを提供してくれることになる。たとえば、人生上の難問に出会ったとき、自分の親だったらどうするか、自分の先生だったらどうするか、と考えることがある。親や先生が体験した問題と私が体験している問題は異なっている。しかし、親なり先生の考え方の原理を自分なりに理解することで、この場面ではこうすればよいのだ、ということが分かってくる。

フロイトとアドラーとユングの関係に関していえば、フロイトが年長であり、次いでアドラー、ユングとなる。まず最初に、フロイトと対立的関係になったのは、アドラーである。フロイトの汎性欲説と呼ばれる考え方は性のエネルギーが神経症の原因であると考えたのに対し、アドラーは、劣等感とその補償ということから説明しようとした。

ユングはこの対立に対して、どちらも正しいと考え、中立を保った。フロイトが、性エネルギーをもとにしつつ、父子関係などの複雑な（コンプレックス）人間関係に関心を持ったことも正しいし、アドラーが、個人の隠された動機に関心をもったことも正しいと考えたのである。そして、人間の見方に二つのタイプがあるとする、人間の類型論にまで昇華させたのである。

フロイトとアドラーの対立が表面化したのが、1911年である。そのころ既にユングはフロイトとの訣別期にはいていた。正式な訣別は1912年であるとされる。

フロイトだけではなく、優れた業績をあげた人々がどのように思考を発展させたのか、

ということは、どのように挫折を切り抜けたのか、ということに等しい。歴史を学ぶことは、自分の人生でこれから起きる問題を解くための「ヒント集」のようなものである。個々人の歴史から、何らかの原理的なものを読み取ることができるなら、それを自分の手続きの知識として活用することができる。本書はそのための足場づくり（スキヤフオールディング）を目指している。

細かい年号を覚える必要はない。だが、先に述べた「遡及的影響仮定の禁止」、つまり、後に起きた出来事は、決して前の出来事には影響しない、というルールだけは理解してほしい。

★ケースフォーミュレーションのための歴史

本書はもともと、臨床心理学をまなぶというシリーズ（シリーズ編者：下山晴彦：東京大学出版会）の一卷として構想された。このシリーズにおいて臨床心理学に求められることは「ケースフォーミュレーション」という語でまとめられる。

目の前に現れた人を見立て（アセスメント）、適切な技法を選び介入する。個人の内面を追求するというよりは、文脈と行為、個人と家族、コミュニティとエコシステムという多重な関係のあり方に注目して、目の前の人にもふさわしい介入技法を選ぶ。その際には、介入すべき現象に関するモデルが必要となる。見通しをもつということである。

さて、介入技法を選んだ後はどうするか。その選んだ技法には習熟している必要はあるが、いわゆるマニュアル人間のようにしてはならない。個々のケースのプロセスにおいては、自らの過ちの可能性を考慮しながらスーパーバイズを受ける。効果の有無について透明性のある判断が必要である。透明性のある判断には、臨床家が自信をもって行えさむ問題と、他の人たちにも判断を共有してもらい、他の人たちにも同じことができるようにするということが含まれ、後者は研究による説得が必要となる。研究には質的研究と量的研究がある。いずれも、透明性の確保（ひとりよがりにならないこと）が重要である。

これだけのことであれば、歴史以外の巻の内容だけで十分ではないか、という声も出てきそうである。なぜ歴史が必要になるのだろうか。

ほかならぬ自分自身が、臨床心理学を実践するのと同じように、過去にも多くの人がそうしていたし、あるいは技法を創始した人がある。そのことに思いを馳せ敬意を払う必要がある。あるいは、よかれと思ったことが、悪い結果になっていたこともあるだろう。率直な反省と再発防止こそが必要である。こうしたプロセスについては臨床心理学史の出番なのである。特に失敗と再発防止は個人では行いにくいことなので、心理学史のような学問の存在価値はそこにもある（決して受験勉強の丸暗記のためにあるのではない！）。

ケースフォーミュレーションの力をつける為に歴史を含む思考を活用してほしい。

★物語としての歴史

本書は臨床心理学の起点としてウィトマーをおいた。また、前史としてギリシア時代の心に対する学問的姿勢をとりあげた。そして、1985 年にアリゾナ州フェニックスで行われた。心理療法の発展会議（The evolution of psychotherapy）を物語のメにおいた。

このような考え方には異論もありえるだろうが、日本で最初の本格的臨床心理学史の仮説として尊重してほしい。そしていずれはこの仮説を乗り越えてほしい。この仮説を乗り越えるのは、新しい世代の臨床心理学を学んでいる読者の中で心理学史の方法論を身につけようとする人々である。臨床心理学の過去に興味があるだけでは、歴史を書く・描くことはできない。私たちは、心理学史研究会を細々と続け『心理学史・心理学論』という雑誌を刊行してきた。このサークルに加わって、方法論を体得し、ぜひ新しい臨床心理学史にチャレンジしてほしい。

近年、臨床心理学の分野では、歴史的な資料や体験談・回顧録などが非常に充実している。本書はそうしたものに助けられながら一つの物語を提示することを目的としている。

歴史は一つの物語である。もちろん、事実に基づく物語である。本書を読んで、そんな単純なものではない、と思う方も多いと思うが、それこそ健全な感想である。筆者自身は臨床心理学の訓練を受けていないし実践もしていない。本書を読んだ若き臨床心理学者・心理士（師）たちが、本書を味わい尽くして、自らの専門性に基づいてさらに新しい歴史を書き上げるときに、本書はその役割を果たしたと言えるだろう。

★本書執筆のために設定した制約

本書を執筆するにあたっては、前史を含めた全体の歴史を5つの時期に区切り、その中の節は10個に統一することにした。これは本としての体裁を整えるためであるが、結果として全体的にバランスのとれた記述にする助けとなった（と信じたい）。

また、その際に大前提として節レベルの時間を逆行させないことを心がけた。したがって、目次の節レベルだけを見れば、年表としても使えるようになっている。その一方で各節の中では、その節でとりあげる出来事の文脈を説明するために時間を遡ることを許容した。節で扱う出来事には固有の文脈があるため、項目ごとに時間を遡ることは許容せざるをえないのである。

§ 2 ★★★『臨床心理学史（仮）』の目次 簡略番 章と節のみ★★★

第1章 臨床心理学の前史（～1896）

- 第1節 諸学の近代化プロセスと心理学前史の始まり
- 第2節 パリにおける精神病者の解放 1793
- 第3節 精神医学の提唱 1808
- 第4節 統計的思考の展開と心理学への影響 1835
- 第5節 生理学と生物学の状況 進化論のインパクト 1859
- 第6節 近代心理学成立前夜 1860
- 第7節 神経心理学の曙光（ブローカ野の発見） 1861

- 第8節 近代心理学の成立 1879
- 第9節 児童研究運動 1880
- 第10節 神経症とその治療法としての催眠 1882

第2章 臨床心理学の成立（1896～）

- 第1節 近代心理学成立以降の心理学の多様化
- 第2節 ウィトマーのサイコロジカル・クリニック 1896
- 第3節 フロイトの精神分析とその展開 1900 夢の解釈（夢判断）
- 第4節 知能検査の成立 心理検査の源流 1905
- 第5節 精神衛生とガイダンス アメリカ 1908
- 第6節 統計と心理学：因子分析及び小標本の分布に関する統計的思考 t分布 1908
- 第7節 フロイト派の大騒ぎ：離反・展開・巻き込み 1911
- 第8節 ドイツにおける精神医学の状況と精神病理学の成立 1913
- 第9節 反射研究、機能主義から行動主義宣言へ 1913
- 第10節 戦争と心理学 臨床・神経・知能・性格 1915

第3章 臨床心理学の多彩な展開（1921～）

- 第1節 学範内外における心理学の広がり 基礎と応用と／楽観と危惧と
- 第2節 性格理論の勃興と心理学的測定の必要性 1921
- 第3節 心理検査 投影法から多変量解析まで 1921
- 第4節 優生劣廃学の興隆・衰退と社会的影響 1922
- 第5節 行動療法 レスポンデント条件づけと行動療法 1924
- 第6節 児童研究から発達研究へ 1924
- 第7節 児童相談と児童精神医学 1926
- 第8節 臨床心理学という制度：職業としての心理学確立期の内憂外患 1931
- 第9節 精神医療に関する様々なできごと 1935 ロボトミー
- 第10節 生理・神経・脳と心理学 1936 神経心理学

第4章 臨床心理学の成熟（1945～）

- 第1節 第二次世界大戦の終結と心理学の状況
- 第2節 子どもの精神衛生と母性（愛）神話 1945
- 第3節 科学者－実践家モデル 1949
- 第4節 妥当性と信頼性：心理学的統計の進展 1951
- 第5節 効果の考察、訓練法の整備 1952
- 第6節 向精神薬の発見と精神医学の展開 1952
- 第7節 精神医学・精神力動・精神分析 1953
- 第8節 カウンセリングの展開と人間性心理学 1954
- 第9節 ストレス学説から心理学的ストレス学説へ セリエ 1955
- 第10節 行動療法の展開 1957

第5章 臨床心理学の新展開 (around 1960～)

- 第1節 心理学における意味への志向の高まり
- 第2節 心理療法の多様化 1954
- 第3節 論理療法・認知療法から認知行動療法へ 1955
- 第4節 家族療法：システム論の台頭 1958
- 第5節 コミュニティと職場の精神衛生 G,カプラン 予防精神医学 1964
- 第6節 精神医学への疑義の表明から操作的診断へ 『反精神医学』1967
- 第7節 発達と社会 発達課題 1968
- 第8節 乳幼児精神医学・自閉症・ADHD・LD への新しい見方 1985
- 第9節 効果をめぐる様々な立場の成熟 1991
- 第10節 統合アプローチ：専門職としての新たな基盤整備 近年の動向

§3 ★★★『臨床心理学史(仮)』 目次詳細版 章と節に「項」を加えたもの。★★★

はじめに

第1章 臨床心理学の前史 (～1896)

とびら絵 ヴントの実験室とクレペリンの実験室のコラージュ

第1節 諸学の近代化プロセスと心理学前史の始まり

- 第1項 心理学の起源と「心理学 (psychology)」という語の起源 1520
- 第2項 近代科学の曙光 1543
- 第3項 近代哲学の芽生え 1637
- 第4項 哲学における経験論の台頭と感覚の重視 1690
- 第5項 臨床医学：中世医学から近代医学へ
- 第6項 カントと心理学 心理学は科学になれないあるいはカントの不可能宣

言＝『自然科学の形而上学的原理(1786)』と『実用的人間学(1798)』

第2節 パリにおける精神病者の解放 1793

- 第1項 魔女狩りの時代 1487 魔女に与える鉄槌
- 第2項 病者としての精神病者・精神遅滞者
- 第3項 フランス・パリの雰囲気－メスメルと動物磁気 1779
- 第4項 ピネルの経験 1793
- 第5項 ピネルによる精神病の分類と治療法 (道徳療法)
- 第6項 総括・ピネル、メスメルの時代

第3節 精神医学の提唱 1808

- 第1項 医学全般の状況と精神医療
- 第2項 ドイツのライルによる“Psychiatrie”の提唱 1808
- 第3項 イギリスの状況 1815 議会特別委員会の実態調査
- 第4項 アメリカの状況 1829 ディックス
- 第5項 ドイツの大学における精神医学 1845 グリージンガー

- 第6項 フランスの状況 1852 心理医学会
- 第4節 統計的思考の展開と心理学への影響 1835
 - 第1項 平均人の提唱 ケトレ 1835
 - 第2項 条件比較：産褥熱予防における統計的思考 ゼンメルヴァイス
 - 第3項 看護・医療における統計的思考 ナイチンゲール
 - 第4項 2変数の関係を扱う統計手法 1888
- 第5節 生理学と生物学の状況 進化論のインパクト 1859
 - 第1項 生理学の状況
 - 第2項 感覚生理学の状況
 - 第3項 ダーウィンの進化論
 - 第4項 ダーウィンによる乳児の心理学的観察 1872
- 第6節 近代心理学成立前夜 1860
 - 第1項 ドイツ哲学における心理学の黎明
 - 第2項 イギリスの連合心理学 アメリカの精神哲学
 - 第3項 アメリカの精神哲学から生理学的心理学へ
 - 第4項 フランスの心理学と医学的心理学の萌芽
 - 第5項 精神物理学 1860
 - 第6項 民族心理学 1860
- 第7節 神経心理学の曙光（ブローカ野の発見） 1861
 - 第1項 ブローカ野 1861 と ウェルニッケ野 1874
 - 第2項 失行症 1871
 - 第3項 神経学の黎明：ジャクソンとジャクソニズム 1881
 - 第4項 アルツハイマー病と進行性麻痺 1906
- 第8節 近代心理学の成立 1879
 - 第1項 ヴントによる心理学の体系化と学範の独立 1879
 - 第2項 心理学実験室の整備と弟子たちの多様性
 - 第3項 心理学関係の雑誌
 - 第4項 欧米における心理学の成熟と制度化 1892
- 第9節 児童研究運動 1880
 - 第1項 ダーウィン以後の児童研究
 - 第2項 児童研究運動とホール 1880
 - 第3項 児童研究運動の広がりと発達臨床との接点
 - 第4項 ホール以後のジョンズ・ホプキンス大学 ボールドウィンとワトソン
 - 第5項 教育心理学 ソーンダイク
- 第10節 神経症とその治療法としての催眠 1882
 - 第1項 神経症概念の成立 1769
 - 第2項 動物磁気から催眠へ 1843
 - 第3項 シャルコーによるヒステリーの治療 1880年代
 - 第4項 大催眠と小催眠：サルペトリエール学派对ナンシー学派

- 第5項 神経症とジャネの心理自動症 1889
- 第6項 オランダにおける psychotherapy と欧米における休息療法 1886
- 第2章 臨床心理学の成立（1896～）
 - とびら絵 ペンシルベニア大学の臨床心理学クリニック
 - 第1節 近代心理学成立以降の心理学の多様化
 - 第1項 米独仏における臨床心理学の状況 クリニックと雑誌 1896
 - 第2項 国際心理学会という発想
 - 第3項 ティチナーによる心理学のカノン化：構成主義と実験実習
 - 第4項 社会心理学 1908
 - 第5項 ゲシュタルト心理学の成立 1912
 - 第2節 ウィトマーのサイコロジカル・クリニック 1896
 - 第1項 心理学におけるクリニカルの意味
 - 第2項 クリニックの設立までのウィトマー 1896 まで
 - 第3項 アメリカにおける教育心理学の成立 1903
 - 第4項 『Psychological Clinic』誌の発刊以降の活動とその評価 1907
 - 第3節 フロイトの精神分析とその展開 1900 夢の解釈（夢判断）
 - 第1項 神経症とフロイトの治療技法
 - 第2項 無意識と防衛機制
 - 第3項 フロイトの思考の変遷
 - 第4項 フロイトの発達理論とパーソナリティ理論 1905
 - 第5項 精神分析の制度的発展と新大陸への広がり 1909
 - 第6項 フロイトの精神分析が臨床心理学に与えた意義
 - 第7項 晩年の業績（病跡学、文明論、文化論）とイギリスでの亡命死
 - 第4節 知能検査の成立 心理検査の源流 1905
 - 第1項 頭蓋計測学とメンタルテスト
 - 第2項 知的障害児・者というカテゴリの成立
 - 第3項 アルフレッド＝ビネと個人式知能検査 1905
 - 第4項 精神遅滞・犯罪の原因としての精神遅滞 1906
 - 第5項 指標としての IQ の成立 1912
 - 第5節 精神衛生とガイダンス アメリカ 1908
 - 第1項 マイヤーとアメリカの精神医学
 - 第2項 休息療法 1907
 - 第3項 アメリカの精神衛生運動 『わが魂にあうまで』 1908
 - 第4項 ガイダンス ボストンに職業指導室が開設 1908
 - 第5項 少年非行とヒーラー 少年精神病質研究所 1909
 - 第6節 統計と心理学：因子分析及び小標本の分布に関する統計的思考 t 分布 1908
 - 第1項 カイ二乗分布 1900
 - 第2項 知能の因子分析；2因子説と多因子説 1904
 - 第3項 ギネスビールの酵母数と t 分布 1908

- 第4項 古典的テスト理論の確立 1920
- 第5項 態度測定法の進展 1925
- 第7節 フロイト派の大騒ぎ：離反・展開・巻き込み 1911
 - 第1項 フロイトをめぐる集合離散：ユングとアドラー
 - 第2項 新フロイト派 フロム 1941 自由からの逃走
 - 第3項 メラニー・クラインとアンナ・フロイト：学説と確執
 - 第4項 フロイト以後：必須通過点としての精神分析
- 第8節 ドイツにおける精神医学の状況と精神病理学の成立 1913
 - 第1項 クレペリンの実験心理学（1895）と三大精神病の概念（1899）
 - 第2項 統合失調症：「分裂」概念の強調 1911
 - 第3項 精神病理学：ヤスパース（1913）とシュナイダー（1946）
 - 第4項 クレッチマーの精神病理学と精神療法 1921
 - 第5項 精神病質 1923
 - 第6項 作業療法 精神病院における積極的療法としての作業療法 1925
- 第9節 反射研究、機能主義から行動主義宣言へ 1913
 - 第1項 反射という問題系
 - 第2項 パブロフの条件反射学と実験神経症
 - 第3項 ワトソンの行動主義 1913
 - 第4項 環境主義としての行動主義 1913
- 第10節 戦争と心理学 臨床・神経・知能・性格 1915
 - 第1項 兵士の精神衛生
 - 第2項 砲弾ショック 1915
 - 第3項 アメリカ陸軍のアーミーテスト 1917
 - 第4項 兵士の選抜のための質問紙（個人データシート）1918
 - 第5項 ルリアの脳損傷兵士のリハビリテーションと神経心理学 1942
- 第3章 臨床心理学の多彩な展開（1921～）
 - とびら絵 臨床心理学者になる！ のポスター
 - 第1節 学範内外における心理学の広がり 基礎と応用と／楽観と危惧と
 - 第1項 応用心理学の始まりと広がり
 - 第2項 児童相談におけるサイコロジスト 1916
 - 第3項 アメリカにおける制度的進展 1917
 - 第4項 目分量統計から推測統計学へ フィッシャーと実験計画法(1935)
 - 第5項 ナチスドイツと心理学・精神医学 1935
 - 第2節 性格理論の勃興と心理学的測定の必要性 1921
 - 第1項 個人差への興味
 - 第2項 生来性犯罪人説
 - 第3項 性格の類型論 クレッチマーの『体格と性格』1921 ユングの心理学的類型論 1921
 - 第4項 性格の特性論と多次元的理解 オルポート 1937

第3節 心理検査 投影法から多変量解析まで 1921

第1項 ロールシャッハテスト 1921 『精神診断学』

第2項 投影法の発展 TAT 1935

第3項 神経心理学的検査という発想 1938

第4項 知能検査の第二世代 1939

第5項 性格の多因子的な理解 MMPI 1943

第4節 優生劣廃学の興隆・衰退と社会的影響 1922

第1項 フランシス・ゴルトンの発想 1904

第2項 優生劣廃学 (eugenics) 国際会議 (1912)

第3項 知能検査による選別とゴダードの改心 1922

第4項 ドイツにおける展開 精神療学会 1933

第5節 行動療法 レスポンデント条件づけと行動療法 1924

第1項 アルバート坊やと”ワトソン&レイナー” 1920

第2項 ピーター坊やとメアリー・カバース・ジョーンズ 1924

第3項 マウラー夫妻の古典的条件づけによる夜尿症への介入 1938

第6節 児童研究から発達研究へ 1924

第1項 ヴィゴツキーとロシア (ソ連) の欠陥学 1924

第2項 発達の最近接領域と内言・外言 1934

第3項 ピアジェの「知能の心理学」 1936

第4項 発達研究の心理学化 ゲゼルとビューラー 1941

第5項 発達の有機体説 レヴィンとウェルナー 1939

第7節 児童相談と児童精神医学 1926

第1項 児童精神医学前史の二コマ 思春期や世症をめぐって

第2項 欧米における児童相談 英タビストック・クリニック 1926

第3項 学校恐怖症と学校心理学 1931

第4項 英国精神分析協会におけるアンナ＝クライネ論争 1930年代後半～

1940年代

第5項 自閉症の提唱 レオ・カナリー 1943 とハンス・アスペルガー 1944

第8節 臨床心理学という制度：職業としての心理学確立期の内憂外患 1931

第1項 臨床心理学者のための訓練基準 1931

第2項 臨床心理学者による臨床心理学の定義 1939

第3項 ウィリアムソンのカウンセリング概念 1940

第4項 ロジャーズ『心理療法の新しい諸概念』1940

第9節 精神医療に関する様々なできごと 1935 ロボトミー

第1項 てんかんの精神病からの離脱と抗てんかん薬

第2項 イギリスの精神病院における心理士 1930

第3項 集団精神療法 モレノ 1932

第4項 自律訓練法 1932

第5項 自助グループとしてのアルコール・アノニマス AA 1935

- 第6項 身体療法の流行 ロボトミー 1935
- 第7項 ショック療法 インシュリン(1937)と電撃(1938)
- 第10節 生理・神経・脳と心理学 1936 神経心理学
 - 第1項 局在論の前史としての骨相学
 - 第2項 脳地図 1909
 - 第3項 脳波 1929
 - 第4項 カール・ラシュレイの神経心理学 1936
 - 第5項 ヘップの生理心理学 1949
- 第4章 臨床心理学の成熟(1945～)
 - とびら絵 ボウルダー会議の様子の写真
 - 第1節 第二次世界大戦の終結と心理学の状況
 - 第1項 心理学におけるアメリカの影響力の増大
 - 第2項 新行動主義／操作主義 ハル『行動の原理』1943
 - 第3項 レヴィンの米国亡命と社会心理学の進展 レヴィン死去 1947
 - 第4項 リハビリテーションにおける医学と心理学の邂逅 ラスク 年代決める！
 - 第5項 ユングによる分析心理学の進展 ユング研究所 1948
 - 第6項 シュナイダーによる統合
 - 第7項 失調症の第一級症状 1950
 - 第8項 性格研究の進展 1952
 - 第2節 子どもの精神衛生と母性(愛)神話 1945
 - 第1項 スピッツの劣悪環境研究 1945
 - 第2項 ボウルビーとホスピタリズム 1951
 - 第3項 遊戯療法 1952 アンナ・フロイドと児童分析
 - 第4項 虐待・被殴打子ども症候群 1961
 - 第3節 科学者－実践家モデル 1949
 - 第1項 シャコウ委員会と報告書
 - 第2項 1947年におけるトレーニングコース
 - 第3項 ボウルダー会議 科学者－実践家モデル 1949
 - 第4項 教育分析からスーパービジョンへ
 - 第5項 ヴェイル会議(1973)－ボウルダー会議以後の動向
 - 第6項 臨床科学モデル(Clinical Science) 1990
 - 第7項 PSyDの挫折と再興
 - 第4節 妥当性と信頼性：心理学的統計の進展 1951
 - 第1項 スティーブンスの尺度水準 1946
 - 第2項 信頼性係数 1951 と カッパー係数 1960
 - 第3項 妥当性の問題 1955
 - 第4項 統計濫用への警告：地球は丸い(有意差5%)論文 1968
 - 第5項 項目反応理論 1968

第5節 効果の考察、訓練法の整備 1952

第1項 アイゼンクの効果研究とそれへの反論 1952

第2項 シャピロによるケースフォーミュレーションの萌芽 1957

第3項 ロジャーズによるカウンセリングの中核条件 1957

第4項 訓練用映像の出現 『心理療法への3つのアプローチ』1965

第6節 向精神薬の発見と精神医学の展開 1952

第1項 向精神薬；効果的な薬の発見 1952

第2項 精神医学における診断規準：アメリカ精神医学会によるDSM 1952

第3項 薬効の研究と臨床的評価尺度 1960 ハミルトンの抑うつ尺度

第4項 精神薬理学の成立；向精神薬の光と影

第7節 精神医学・精神力動・精神分析 1953

第1項 統合失調症への精神力動的アプローチ（対人関係論） 1953

第2項 対象関係論。クライン派の理論

第3項 新行動主義と精神分析 実証的研究との連携と挫折 1950

第4項 家族療法への架橋 精神「分裂」病を「作る」母親 1948

第8節 カウンセリングの展開と人間性心理学 1954

第1項 実存主義と現存在分析 『夜と霧』1947

第2項 マズローの自己実現理論 1954

第3項 ロジャーズ 1959

第4項 フォーカシング ジェンドリン 1962 体験過程と意味の創造

第5項 交流分析 バーン 1964

第9節 ストレス学説から心理学的ストレス学説へ セリエ 1955

第1項 ホメオスタシス 1932

第2項 セリエの“汎適応症候群(GAS: General Adaptation Syndrome) 1936

第3項 ストレス概念の社会学化と社会的再適応評価尺度 1967

第4項 ストレス概念の心理学化：ソーシャルサポート・コーピングの取入れ

第5項 鉄道脊椎、砲弾ショック、心的外傷後ストレス障害(PTSD)

第6項 DSM体系におけるPTSD

第10節 行動療法の展開 1957

第1項 スキナーとアイゼンクの貢献 1957

第2項 ウォルピの系統的脱感作法 1958

第3項 アサーション・トレーニング 1966

第4項 トークン・エコノミー1968 行動修正・応用行動分析

第5章 臨床心理学の新展開 (around 1960～)

とびら絵 アメリカ精神医学会による臨床心理学者投薬への反対キャンペーン

第1節 心理学における意味への志向の高まり

第1項 認知革命 ハーバード大学に認知研究センター設立 1960

第2項 生態学的心理学と生態学的妥当性 (1956)

第3項 社会心理学の対人知覚・認知と帰属理論 認知的不協和理論(1957)

- 第4項 チョムスキーによる生成文法説 『文法の構造』 1957
 - 第5項 SD法 意味を捉える測定法の開発 1957
 - 第6項 脳損傷事例による大脳機能の研究；スペリーとガザニガの分離脳研究
- 1967
- 第7項 性格の「人か状況か論争」と新しい因子分析 1968
 - 第8項 記憶研究の豊穡化 1972
 - 第9項 探究モードとしてのナラティブ ブルーナー 1986
 - 第10項 脳研究の発達 画像診断法の進展
- 第2節 心理療法の多様化 1954
- 第1項 ミルトン・エリクソン。催眠療法の新展開から短期療法へ 1954
 - 第2項 精神分析におけるラカン派(1964)とフランスの医学的心理学
 - 第3項 ゲシュタルト・セラピー パールズ 1969
 - 第4項 動物(介在)療法 1969
 - 第5項 芸術療法 因果モデルからの脱却を目指して
- 第3節 論理療法・認知療法から認知行動療法へ 1955
- 第1項 ケリーのパーソナル・コンストラクト理論 1955
 - 第2項 論理療法：エリス 1955
 - 第3項 認知療法と抑うつモデル：ベック 1962
 - 第4項 セリグマンの学習性無力感 1967
 - 第5項 マインドフルネス 認知行動療法の第三世代 1979
- 第4節 家族療法：システム論の台頭 1958
- 第1項 家族システムへの注目 1937 アッカーマンの家族力動
 - 第2項 システム理論的アプローチとダブルバインド(二重拘束)仮説 1956
 - 第3項 家族療法 1958 アッカーマン『家族生活の精神力動』
 - 第4項 家族療法の第一世代と第二世代
 - 第5項 家族療法の第二世代 1981 リン・ホフマン
- 第5節 コミュニティと職場の精神衛生 G,カプラン 予防精神医学 1964
- 第1項 ケネディ教書と地域精神衛生センター 1963
 - 第2項 ボストン会議 1965 と オースチン会議 1975
 - 第3項 バーンアウト(対人専門職の燃え尽き症候群) 1977
 - 第4項 心身症、健康悪化予防と健康心理学 1978
- 第6節 精神医学への疑義の表明から操作的診断へ 『反精神医学』 1967
- 第1項 精神医学における診断の問題 DSM-I 1952
 - 第2項 反精神医学 1967
 - 第3項 精神科診断への疑義 操作的診断基準の黎明期のゆらぎ 1973
 - 第4項 DSM-III 操作的診断の名にかけたリニューアルと多軸診断 1980
 - 第5項 統合失調症、気分障害、パーソナリティ障害 1980
 - 第6項 国際障害分類(ICIDH) 1980 から国際生活機能分類(International Classification of Functioning, Disability and Health ; ICF)へ 2001

- 第7節 発達と社会 発達課題 1968
 - 第1項 ヘッドスタート計画(1965)と生態学的な発達心理学(1979)
 - 第2項 発達課題 エリクソンによる発達段階 1968
 - 第3項 生涯発達論と中年期・老年期の扱い 1970年代
 - 第4項 青年期の職業指導から生涯にわたるキャリア発達支援へ 1980
 - 第5項 ジェンダーという視点、フェミニズムという立場 1982
 - 第8節 乳幼児精神医学・自閉症・ADHD・LD への新しい見方 1985
 - 第1項 注意欠陥障害と学習障害の提唱 1963
 - 第2項 母子関係へのエスロジック的視点 1973 ティンバーゲン ノーベル賞講演
 - 第3項 乳幼児精神医学と発達臨床心理学 乳幼児の心理的誕生(1975)
 - 第4項 自閉症と心の理論 ウイングによるアスペルガーの「再発見」1981
 - 第5項 新しい検査 KABC 1983
 - 第9節 効果をめぐる様々な立場の成熟 1991
 - 第1項 短期心理療法という発想 ブリーフサイコセラピー 1954
 - 第2項 メタ分析からランダム化比較試験へ：再燃する効果研究とコクラン計画の始まり 1979
 - 第3項 経験的に支持された療法 (Empirically Supported Therapy ; EST) 科学的根拠に基づく医療 1991
 - 第4項 質的アプローチ・ナラティブ志向
 - 第10節 統合アプローチ：専門職としての新たな基盤整備 近年の動向
 - 第1項 統合アプローチの萌芽 1977 『精神分析と行動療法の統合』
 - 第2項 フェニックス会議 1985 : 心理療法の発展へ向けて
 - 第3項 専門職倫理 『心理学、倫理そして変化』 1987
 - 第4項 医療との新しい関係：精神腫瘍学 (サイコオンコロジー) ・投薬特権
- 2002
- 第5項 各国における専門職教育と資格の状況
 - 第6項 心理療法の統合、欧州における資格の地理的統合 2005～
 - 第7項 臨床心理学を駆動するもの

§4 ★★★『臨床心理学史 (仮)』のおわりに (暫定版) ★★★

本書は臨床心理学に関する歴史を素描することを目的としている。

臨床心理学と精神医学の違いは何か、という問いがある。その一つの答えとして精神医学(者)は投薬ができるが、心理学(者)はできない、というものがあつた。あつた、と過去形で書くのは、現在のアメリカの一部の州(具体的にはニューメキシコ州とアリゾナ州)では、臨床心理学者が適切な訓練を行ったのちに限定的ではあるが投薬を行える制度が発足したからである。

一方、臨床心理学などという学問が存在しない国も多い(そもそも国という概念が流動

的なので、国を単位にするのはどうかという批判は甘受する）。

日本ではどうか。臨床心理学という言葉を知らない人はいないという意味でこの学問には一定の地位が与えられていると言えるだろう。そして、日本の臨床心理学で最も活発な議論の一つは国家資格化である。周知のように、医師・看護師や社会福祉士には国家資格が存在するが、臨床心理学には存在しない。

なぜ、臨床心理学の存在しない国があり、臨床心理学の資格の問題で議論している国がある一方で、臨床心理学士が投薬までできる国があるのか。

こうした素朴な疑問をとっかかりにして臨床心理学史を考えていきたい。

臨床心理学とは何か。こうした問いに答えるには、まず語源を探ることが有効である。実はここではそれほど有効ではないことが明らかになるのだが、労を厭わずまずこの作業からしてみよう。

clinic の語源であるギリシア語の κλινη とは、もともと人がその上に横たわる寝台、ベッドを指している。医療においてクリニックを旗印にして改革を進めた時代があったのは、ベッドとは遠く離れていた医療があったことを意味する。そうではなく、実際の病者のあり方を見て医療を行っていかうというのがクリニカルな医療である。

このクリニカルを心理学の接頭辞としたのがアメリカのウィトマーであった。では彼は寝台に横たわる心理学を目指していたのだろうかといえそうでもない。寝台に横たわらせるのはフロイトであり、その意味でまさに臨床心理学なのだが、ウィトマーはそういう意図を持っていたわけではなかった。

臨床心理学の歴史を展望する本は意外に少ない。ましてや日本の臨床心理学史について言及している本は少ない。本書は「臨床心理学を学ぶ」シリーズに叙述されている様々な内容のルーツを可能なかぎり描くことによって、「つなぐものとしての歴史」を目指したい。

さて、読者の中には、心理療法と精神療法は同じなのか違うのか、違うとしたら何が違うのか、ということが気になる方がいたかもしれない。psychotherapy という同一の語が違って訳されたりしているのである。同じ語をどのように訳すのか、ということにも訳者の立場性が現れるため、西洋起源の学問についての歴史を日本での歴史を含めて検討することは少しやっかいである。

現在の日本では、精神療法は医学用語であると同時に現在の日本における医療制度上の用語でもある。たとえば、「診療報酬点数表」には

通院精神療法は、精神科を標榜する保険医療機関の精神科を担当する医師が行った場合に限り算定する。

という規定がある。入院精神療法やその他にも同様の規定があるが省略する。そして平成 20 年度の診療報酬改定にあたっては

通院精神療法は、診療に要した時間が5分を超えたときに限り算定することとし、30分を超えた場合については評価を引き上げる。

ということになった。

「5分間の精神療法！どのように何をするのだろうか？と驚きを禁じ得ない！などというのはカマトトか医療を知らない人である。また、この改定以前のことに想像を馳せるなら、この改訂以前には、5分を超えない診療にも通院精神療法が適用されていたと理解することが可能である。こうしたことは、一般的な臨床心理学の学習者が考える心理療法とは大きく異なるように思われる（通院精神療法とは5分間以下の面談のことであると考えた人はいないだろうという意味）。現在の日本では医療制度において精神療法という語が使われていることに鑑みて、本書では、psychotherapy の訳は心理療法で統一することにした。

では心理療法とカウンセリングはどのように違うのだろうか。ドライデン&ミットンによれば、最近のイギリスでは、この両者を区別しない傾向にあり、ほぼ同義と考えることもできるという。心理療法は1880年代に身体の病気とその治療に対応するような、心の病気と治療があるはずだとして成立した語であるのに対し（Erfan and Clarfield, 1992）、カウンセリングは、1930年代にカール・ロジャーズがアメリカにおいて独自の技法（パーソン・センタード・アプローチ）を開発する過程でその技法をカウンセリングと称したことに発端があるという。ロジャーズは精神医学に対して心理療法の独自性・優位性を示すことに熱意をもっていた人であり、当時のアメリカではサイコセラピー（psychotherapy）が法により医師のみが使用できる状態であったため、違う言葉を用いて非医師である自らが心理療法を用いることができるように、カウンセリングの語を用いたのだという。心理療法とカウンセリングの名称の違いは、少なくともその歴史を振り返るならば、内容としては交換可能なものであり、制度としては互換不可能なものだったと言えるだろう。日本の医療において精神療法が用いられているなら、心理療法とカウンセリングという用語を用いることは制度的に意味があることかもしれない。

本書は臨床心理学が心理学から派生して、心理学の一領域であるという立場を仮説的に設定した。こうした立場に反論もありえる。しかし、本書で明らかにしえた（と著者が望む）ように、臨床心理学を学び資格をとり実践するということは、とりもなおさず心理学（者）が維持・展開したテクニックを用いるということを意味する。サイコドラマのように医師が開発したものや、SSTのように社会福祉学が開発したものがあっても、それを維持・展開してプログラム化してきたのは多くの場合は心理学者と呼ばれる人たちなのであった。なぜならば、実践や資格が公的になればなるほど、広い意味でも狭い意味でも効果の測定が必要にならざるを得ず、そうしたことには心理学の技術が必要だからである。

なお、臨床心理学やその根底にある心理学のあり方自体が一種の社会制度を構成しており、それは近代社会のあり方と通底しひいては人間のあり方を疎外するものだという議論

があることは十分承知している。しかし、こうした問題については、その一部しか扱うことができなかった。他日の課題としたい。

本書の記述が西洋中心史観だという批判は甘受するしかない。日本の臨床心理学史に関しては扱うことができなかった。その理由については明白に存在するが、ここで明らかにすることも難しい。

本書執筆にあたっては多くの史資料・著作・ホームページの助けを借りた。ここに謝意を表したい。多くの歴史書と同じように、細かな引用はしていないが、多くの先人の業績に助けられていることを強調しておきたい。

なお、本書は科学研究費補助金『社会状況や海外学説との関連からみた本邦臨床心理学の歴史的展開（課題番号 16330138）』の成果という位置づけも持っている。多くの優れた臨床心理学者に参加していただいたプロジェクトのおかげで、より広い視点を持つことができた。参加者のみなさんに篤く御礼申し上げたい。このプロジェクトが終わってから本書が刊行されるまで遅すぎるという批判もあるだろうが、このように時間をかける成果のまとめ方もありうるのだということを理解していただければ幸いである。

個人的には、『日本における心理学の受容と展開』出版（2002）から約 10 年で、『知能指数』出版（1994）から約 20 年で、本書『臨床心理学史』を出版できたことは喜びであるし、心理学史研究者として一種の責任を果たしたのではないかと愚考している。

対人援助学&心理学の縦横無尽 1 4

PTSD から PTG へ: PTSD の歴史と理論



サトウタツヤ@立命館大学文学部心理学専攻

★PTSD とは

PTSDはPost-Traumatic Stress Disorderの頭文字をとったものであり、心的外傷後ストレス障害、と訳されている。

日本では1995年の阪神・淡路大震災以降、このPost-Traumatic Stress Disorder (PTSD) という概念が注目を浴び始め、英文字を用いた略語形であるPTSDがそのまま日本語として定着している。

英語の単語としての「Trauma」は身体的な傷、つまり外傷であって、もともとは心的なものではなかった。トラウマ＝大きな事故の後の大きな身体的な傷である。

ところが、ある時点から、大きな出来事後の傷には心的な傷も含まれているのではないかという考え方が広まってきた。こうした考えを始めたのは、フロイドやジェームズといった心理学の著名な学者たちであり、彼らは19世紀末頃からトラウマに「心的」という意味を付与していったという。日本ではトラウマというと心理的な現象のように聞こえるかもしれないが、現在においてもTraumaという語を英語として使えば、身体的な外傷という意味あいの方が強い。

さて、PTSDをひきおこすのはどのような出来事なのだろうか。その大きな出来事は戦争であったり、鉄道の事故だったり、震災であったり、犯罪（性犯罪含む）だったりした。被害、被災が心の問題をひきおこし、だからこそ、心のケアが必要だというのが、PTSDの基本的考え方である。

最近のDSM-5（アメリカ精神医学会の診断と統計の手引＝マニュアルの第5版）によれば、自分が経験した大きな出来事（重傷をおうようなこと、性暴力にあう／あいそうになること）、や、他人が経験した大きな出来事（他者が死ぬことを含む）によって、感情、認知、行動、が障害され、それまで可能であった生活スタイルを維持できなくなるような状態のことを言うものとされている。このほか、大きな出来事以外でも、好ましくない状況が継続的に続くことも、PTSDの原因になるとされている。

この診断名が精神医学において、画期的とされるのは、精神的苦悩や変調に原因がある

と認めたところにある。一般に精神障害においては原因がわからない（＝だから治療が難しい）とされているのである。

なお、PTSD の定義は DSM の版が変わるごとに変更されるが、ある原因となる出来事を経験した人が示す主要な症状は、再体験（想起）、回避、過覚醒の 3 つであるとされる。

表 1 PTSD の主要症状

1) 再体験

外傷的な原体験が、繰り返し思い出されたり、夢に出てくる。

2) 回避

原体験を思い起こさせる状況や場面を、意識的／無意識的に避けること、また、感情や感覚などの反応性が麻痺すること。

3) 過覚醒

交感神経系の亢進状態が続き不眠やイライラなどが経験される。

こうした症状によって主観的に人生上の苦悩を経験し、社会的にも生活が困難になっていき、生命維持さえ難しくなりかねない、というのが PTSD なのである。

★ 戦争と PTSD

さて PTSD という概念が作られるのに最も大きな要因となったのは戦争であった。戦争という大きな出来事を経験した兵士の問題である。戦争従事者がさまざまな危険にさらされ、また、身近な他者の死を経験したりすることは想像に難くない。

もちろん、PTSD と概念化される以前にも、戦争中に兵士達が精神症状を呈して機能不全となることは、多くの機会に気づかれていた。いつのどの戦争の時に、今で言う PTSD が初めて見られたのか、ということについては様々な説が存在する。逆に言えば、様々な戦争において、今日で言うところの PTSD が見られたことの証でもある。

ハイアム(1996)らはアメリカが参加した戦争における兵士の精神状態に対する評価を紹介している。それによると、戦争が兵士の精神状態に悪影響を及ぼすことは、アメリカの南北戦争の時には既に医師達に認識されていた。もっとも、それが治療に反映されることはなかったのである。そして、それぞれの戦争の後に、もっともらしい名称が割り当てられていたのである。

表 2 戦争に従事した合衆国陸軍兵士の戦争関連精神障害の概念化
(ハイアムら 1996 を参考にした)

戦争	精神障害
南北戦争	ノスタルジア
第一次世界大戦	砲弾ショック
第二次世界大戦	戦争神経症
朝鮮戦争	洗脳

ベトナム戦争 外傷後ストレス障害

エドガー・ジョーンズらは、戦争と精神医学の関係について広範に調査を行っている。特に、19世紀以降にイギリスが関与した戦争（ボーア戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦、マラヤ戦争、朝鮮戦争、湾岸戦争）に従事した軍人の「軍人恩給記録」を用いて病歴を調べ、戦闘経験者がどのような症状を発したのか、それが戦争と関係あると考えられていたのか、ということについて検討した。それによれば、19世紀には身体的な症状として考えられていたものが、次第に心理的な症状として捉えられるようになってきた、ということが明らかになったという。

なお、戦争経験者の苦しみを精神症状として見るという意味での画期の一つは日露戦争であったという。日露戦争においては、ロシア軍が兵士の精神状態の悪化は治療に値するものだと考えたのである。そして、治療を終えたものを前線に返すということを行なったが成功率は20%に届かなかったという。こうした試みが戦争と人間の関係にとって何をもたらしたのか、深く考える必要があるだろう。

★鉄道事故と第一次世界大戦の「砲弾ショック」

トラウマは本来の意味としては外傷、それも大きな傷のことである。19世紀以降には戦争以外にもこうした大きな出来事というのが増えていった。その一つが鉄道事故である。このことは、鉄道の開始という近代（工業）社会の成立と大きな関係があることを意味する。鉄道が普及すると、鉄道事故を経験した者が後に精神神経症状を多発することが指摘されるようになり、イギリスの外科医エリクセンは、鉄道事故の生存者の中に、認知的障害や精神身体症状を呈する者がいて、その社会生活が阻害される場合があることに注意を促した。19世紀中頃のことである。目立った外傷がないのに、日常生活を送れない人が存在することは人々を困惑させた。一部には詐病ではないかと疑う人もいた。そして、この現象は鉄道脊椎（railway spine）として知られるようになった。身体的な外傷がもたらす神経症という考え方も普及し、外傷性神経症については、オッペンハイムがはじめて『外傷神経症』という本を出版した（1889）。

第一次世界大戦は、その規模が地球規模化しただけではなく、毒ガス、戦車など新しい平気が投入された近代型戦争の先駆けとなった。こうした中、身体硬直などヒステリー様の症状を示し、戦場での服務が不可能になった兵士が多数現れた。こうした状態は砲弾ショックと呼ばれ神経症の一種と考えられた。イギリス軍では、戦闘中や戦闘後の兵士が身体化症状を呈したり、混乱した状態を示すことを、精神科医・マイヤーズが『ランセット』に発表した論文（1915）で砲弾ショックと名付けた。砲弾ショックはその原因を、砲弾の爆発による微細な生理的な損傷に求めたためにその名が付けられたのだが、次第に男性における神経症だと考えられるようになった。ヒステリーという名称が子宮を意味する言葉に由来することからわかるとおり、女性のみにかかるものとされていたが、兵士が呈する症状は女性のヒステリーと類似しており、懲罰的な処遇ではなく、談話療法が効果的だとされたことから、精神分析の評価にもつながっていった。

このことから、イギリスでは軍隊における神経症について、精神分析療法家たちが積極的に治療に関与した。しかし、実際には精神分析療法の効果があったとは言えず、行動療法的アプローチから批判を受けることになった。

第二次世界大戦は第一次世界大戦より規模も拡大し、兵士の心理的ストレスもより大きなものになっていき、粗大なストレス反応（Gross Stress Reaction）という概念を生み出した。アメリカが敗戦したベトナム戦争ではさらに多くの兵士が戦闘中及び帰還後に心理的苦痛を経験することになった。

戦争における兵士の機能不全の問題は、兵士を戦争遂行の部品として扱う見方からすると「不良」品の排除と修理という発想になる。こうした考え方は次第に変化していき。他ならぬ兵士自身やアメリカの退役軍人による異議申し立てを受けることになり、ついには PTSD（心的外傷後ストレス障害）概念へと変貌したのであった。

なお、第二次世界大戦後の復員兵士数はそれまでとは桁違いに多く、精神障害への関心も高まり、そのことが特にアメリカにおいて臨床心理士の訓練や資格整備を促すことになったことも重要なことである。

そして、PTSD が診断名として定着すると、戦争帰還兵以外にも、虐待、特に性的虐待の被害者に対して PTSD という診断名がつけられるようになった。その背景には、従来は等閑視されてきたレイプ、セクシャルハラスメント、子どもや配偶者への虐待、が問題視されるようになり、その被害もまた大きな注目を集めたことがあげられる。

★PTSD の治療

PTSD が発症した場合、どうすればいいのだろうか？厚生労働省のホームページ「みんなのメンタルヘルス」http://www.mhlw.go.jp/kokoro/know/disease_ptsd.html によれば、日本での研究も進み、心理療法と薬物療法で有望なものが見つかりつつあるとのことである。

さて PTSD を生じさせる原体験となるような出来事には、交通事故、その他の各種事故、犯罪被害、自然災害、戦争、などがある。このような出来事に遭遇したら、まずは、関係機関に相談することが重要であろう。犯罪の場合であれば犯罪被害者支援センター、ドメスティック・バイオレンスであれば自治体の女性相談センターなどが相談を受けてくれるかもしれない。ただし、同じことを何度も言わなければいけないような状況になると、いわゆるフラッシュバック（恐怖体験の場面がよみがえって恐怖心が表れること）が起きるかもしれないので、そういうことに気をつける必要もあるだろう。

専門機関には行きたくない、というのであれば、身近な人に相談するとか、自分なりに感情を解き放つことが重要である。自分の感情を押し殺すようなことが続くと、心身に負担がおきてしまうのである。自分で対処することができればベストだが、苦しいときに苦しい、と言える相談相手がいるのであれば、その人に頼ることは決して恥ずかしいことではない。

ただし、自身での解決や身近な人への相談では、問題が解決しない場合もある。自分や周りの人たちだけでは対処が難しいということであれば、医療機関や心理相談機関に相談することが選択肢として重要になってくる。こうした専門の機関における心理療法について見ていこう。

現在、有望な心理療法の 1 つに持続エクスポージャー法がある。薬物を用いた医療よりも効果があるとされている。エクスポージャーというのは「曝露」である。この心理療法では、PTSD のもととなった原体験について、あえて思い出すということを行う。嫌な経験を思い出すなどというのは、考えただけでもおぞましいと思うかもしれないが、おぞましいから体験に蓋をし続ける、ということでは、問題は解決しないのである。

たとえば、5 才頃に海辺に出かけた時、波打ち際で大きな波がきておぼれかけて、それが PTSD の発症原因となったということを考えてみよう。その人はその後、海水浴に行くことができないのみならず、カレンダーにサーフィンの写真があっただけでも息苦しくなるかもしれない。年頃になってデートをしようと思っても海辺のレストランにも行けないし、子どもができて潮干狩りに行けないということがおきるかもしれない。このように本人にとっては極めて重要な問題を生涯にわたって抱え続けることになる。

こうしたことに悩む人を救うための心理療法を考えだしたのが、フォア（1937-）博士である。彼女は不安障害および PTSD（性犯罪被害後の PTSD）の治療に関心をもち実践と研究を行っていた。しかるに、2000 年にサバティカルにて母国イスラエルに滞在した時に第二次インティファダが起きたことから、本格的に戦争関連の PTSD とその治療に関心をもちことになった（なおインティファダとは、「イスラエルによるパレスチナ軍事占領に対する民衆蜂起」を意味するものである）。フォアが開発した持続エクスポージャー（Prolonged Exposure）療法は、認知行動療法の 1 つに位置づけられ、PTSD の原因となった出来事に関連する事象に自身を曝露していくこと、それを一度きりではなく、何度も行うこと、そしてそれを可能にする安定した環境を構築すること、を行う心理療法である。

たとえば、海で溺れそうになった経験が PTSD の原因だというのであれば、それを思い出すことをやめるのではなく、むしろ、自分が安心できる状況で、その怖かった経験を思い出してみる、というのがこの療法の中心となっている。怖かった波の記憶をいつまでも持ち続けるのではなく、小出しにすることで、怖かった経験を自分の中で消化していくようにしていくのである。それによって、次第に怖さの質が変わっていくことが期待されるのである。

★発想の転換：PTG という考え方

さて、PTSD の T は Trauma であり、心の傷（心的外傷）であった。大きな出来事によって身体のみならず心の傷を負うことで不適応を起こす、という考え方が PTSD なのであり、その治療法の 1 つが持続エクスポージャー法であった。

一方で、PTSD を起こすような大きな出来事を経験した人であっても、それを乗り越えたり、さらなる成長を遂げる人がいるということは、誰もが知っている事実であろう。

こうした成長の側面に焦点をあてるのが PTG（Post Traumatic Growth＝心的外傷後成長）という考え方である。この用語が最初に学術誌に載ったのは 1996 年のことである（Tedeschi & Calhoun, 1996）。この論文は、心的外傷後の成長について焦点をあて、それを把握するための尺度を作った論文であるが、その冒頭でテデスキらは、外傷的体験の肯定的な側面に注目することがほとんど無かったことは問題だ、ということを述べている。外傷的な出来事の後、多くの人が、「何かが変わった感じ」を持っているということに着目して、「自

分が変わったという感じ」「他者との関係が変わったという感じ」「生き方の哲学が変わったという感じ」に着目した尺度を作ったのである。

日本の研究者たちによる日本語版尺度によれば、心的外傷後の成長は、大きく4つの因子（要因）から成るという。まず「他者との関係観の成長」である。たとえば「自分には他者が必要だということが分かった」というような変化を感じられるようになったことを意味する。他者に頼ることは自分の弱さなのだという考えを克服し、必要な時には他者を頼ってよいという感覚がもてるようになるということである。次に、「人間としての強さ」である。「自分は困難に対処していけるという感覚を感じられるようになった」というようなことである。困難を乗り越えたことについての自信のようなものである。3つ目の因子（要因）として「新たな可能性」への気づきがある。「人生は自分の力でよりよくすることができる」ことに気づくことができ、それを喜びとすることができる感覚である。最後、4つ目が「精神的（スピリチュアルな）変容および人生に対する感謝」である。「毎日感謝して過ごすようになった」などであり、自分のおかれた状況や他者に感謝するという感覚である。

ただし、心的外傷体験が人を成長させるからと言って、無理にそうした経験をするのは本末転倒である。実際、カルホーンとテデスキ(2001)は、1) 成長したと述べている人でも、必ずしもすべての面で成長したわけではないこと、2) 成長が存在するということは、苦痛や苦悩が存在しないという意味ではないこと、3) 成長を経験したという人でも、どんな人にとっても悲嘆や喪失が望ましいと結論づけることはできない、ことに注意を促している。

★ 回復可能性（レジリエンス）という考え方

心的外傷体験をまったく無しで生きていくことは可能だろうか？そう願っても、不慮の事態というのは避けられない。天変地異は避けられないし、親をふくめ自分より年長の関係者の死に立ち会うことは避けられない。

もしそうなら、心的外傷体験の影響を大きくしないための工夫も必要になってくる。外傷的体験が起きた時に、全てが破壊されてしまうのではなく、その経験を持ちこたえて次につなげていくことが重要だという考え方が表れてきた。そうしたあり方のことを「回復可能性」（レジリエンス）とか復元可能性と呼ぶ。

ガラスのボールと軟式テニスのボールのことを思いうかべてみよう。ガラスのボールはある程度硬いが、一度割れてしまったら、戻ることがない。一方で軟式テニスのボールは軟らかいが、少しくらい凹んでも、元に戻ることが可能である。これがレジリエンシーである。

このことは、人生においても重要なヒントをあたえてくれる。日常生活において、自分が困っていても他人に頼るべきではない！それがカッコイイ生き方だ、などと考えているような人は、何かが起きたときに、すぐに壊れてしまう可能性があるのかもしれないのである。

PTGの尺度において「自分には他者が必要だということが分かった」という項目があったことを思いおこしてほしい。ネガティブな出来事を通じて、他者に頼れるようにな

ることが、成長なのである。そして、そうした成長は次に起きるかもしれない外傷的体験に対してはレジリエンシー（回復可能性）を与えるものなのである。

参考文献

Calhoun, L.G. & Tedeschi, R.G. (2001) “Post-traumatic Growth: The Positive Lessons of Loss”, In R.A. Neimeyer (Ed.), *Meaning Reconstruction and the Experience of Loss* (pp. 157-172), Washington, DC: American Psychological Association.

近藤卓（編著） 2012 PTG 心的外傷後成長 金子書房

Tedeschi, R. G., & Calhoun, L. G. (1996). The Posttraumatic Growth Inventory: Measuring the positive legacy of trauma. *Journal of Traumatic Stress*, 9, 455-471.

日本語

<http://www.vs-yamaguchi.net/pdf/PTG.pdf>

http://www.kansai-u.ac.jp/Keiseiken/books/sousho155/155_03.pdf

対人援助学&心理学の縦横無尽15

TEM (複線径路等至性アプローチ) 世界を駆ける (3)

2014 年 3 月ブラジル、4 月デンマーク、8月オランダ・デンマーク



サトウタツヤ@立命館大学文学部心理学専攻

1 前口上

前回の「世界を駆ける (2)」は、2013 年の活動報告でイタリア・デンマーク・イギリスでの活動であった。その最後に「2014 年は、再度ブラジルに行く予定である」と書いてあったのを覚えている読者も多いと思う (いるわけないか？と自己ツッコミ)。

実際には、ブラジルの後、デンマーク、オランダ・デンマークと 3 回にわたって海外渡航をしたので、その様子について書いていきたい。いずれも主題は TEA (複線径路等至性アプローチ) である。

複線径路等至性アプローチとは、システム論に基づく質的研究法的一种である。おかげさまで国内外から関心をもってもらうことができおり、本誌でも既に二回「複線径路・等至性モデル、世界を駆ける」と題した活動記録を掲載させてもらっているのご参照いただきたい。

2012 年 1 月イタリア、3 月ブラジル

<http://www.humanservices.jp/magazine/vol8/16.pdf>

2013 年 3 月イタリア、デンマーク、5 月イギリス

<http://www.humanservices.jp/magazine/vol13/17.pdf>

TEA のサイトもリニューアルされている。

<https://sites.google.com/site/kokorotem/whatistem>

というわけで、今回は、2014 年に行った 3 回の活動について報告してみたい。

2 2014 年 3 月 ブラジル

3/10～13 パイア州にて第3回文化心理学セミナーに出席した。このセミナーには欧州(デンマーク・ノルウェー・イタリア)、南北アメリカ(アメリカ・チリ・コロンビア)、アジア(日本・中国)など世界

中の人々がブラジルに集まり、様々な側面から文化心理学の枠組みや概念などについて討論を行った。筆者は僭越ながら、心理学的な媒介作用に関する様々な発表に対してまとめの講評を行った。



写真の人物が主催者であるアナ・セシリア・バストス先生である。バストス先生はブラジル人家族の発達的な文脈と移行を 30 年にわたり調査している。そして「発達的な文脈と径路」が、人生の移行にアプローチする TEA (複線径路等至性アプローチ) の精神と合致するとして、私たち日本人グループを厚遇してくれているのである。



また、3/14 にはバイア州立大学で文化心理学のシンポジウムがあり、方法論としての TEA (複線径路等至性アプローチ) について講演した。

ブラジルで驚くのは、ビールを冷たいままで飲もうとする努力。いわゆるハカマを使って保冷を徹底しているのだ。



なお、この時も院生を含めてかなり大がかりに移動して参加した。院生視点からみたその様子は以下のウェブサイトの下の方にも掲載されている。

<https://sites.google.com/site/satozemigyoseki/home/2013nian-du-hai-wai-du-hang>

3 SECTION2 2014 年 4 月 デンマーク

2014 年 4 月は、以下のようなスケジュールで、PBL (Problem-Based Learning) 調査と第2回 Niels Bohr 記念文化心理学シンポジウムへの参加を行った。

4/21・Aalborg 大学・Valsiner 教授と『Trajectory Equifinality Approach』の出版打合せ
 4/22・Aalborg 大学・Mogens 准教授から PBL と心理学プログラムに関する説明をうけ、今後の提携について打合せ
 4/23・Aalborg 大学・ユネスコチェア (PBL) の Kolmos 教授から同大学の PBL に関する説明をうけ、立命館大学と同大学における法心理学に関する提携可能性について打合せ
 4/24・Niels Bohr 記念文化心理学シンポジウムにおいて、指定討論
 4/25・引き続き同シンポジウムに参加。さらに、このシンポジウムの記録の著書出版に関する打合せを行った。

このうち、記念写真だけを載せておく (2014 年 4 月 22 日、オールボー大学にて)。



右から 2 人目のモーエン准教授にいろいろと予定を調整してもらい、オールボー大学の PBL、特に心理学の PBL について、ある程度の知識を得ることができた。PBL 調査の詳細については、次号に掲載することにした (対人援助学マガジン 19 号)。

4 SECTION3 2014 年 8 月 オランダ+デンマーク

4-1 プレビュー 2014 年 8 月 17~31 日

オランダ・デンマークに出張。最初に言っておきたいことは、今回の八月後半、オランダ・デンマークは寒かった！とにかく異常気象だった！ということ。半袖で過ごすことは一日たりともできなかった。気温があがってもせいぜい 15-18 度なので、晩秋という感じだった。

ヨーロッパ文化心理学院生の会・第 8 回国際対話的自己学会・コペンハーゲン大学文化心理学サマースクールへの出席という長丁場の旅行となり、いずれも TEA (複線径路等至性アプローチ) についての講演・講習会が組み込まれていた。

費用について、今回はなんとご招待。コペンハーゲン大学のプロジェクトから航空運賃を出してくれるというのだから、ありがたいかぎり。手続きが煩雑なのかと思いきや「何もない！来てるんだからそれで OK!」とのことで拍子抜け。日本だったらパスポートのコピーから始まり書類の山が必要なところなのですが……。大らかなシステムで快適でした。

大まかなスケジュールは以下のとおり。

8/18 ヨーロッパ文化心理学院生の会 (University of Haag) にて「Trajectory Equifinality

Approach; Concepts and basic practice. Lecture and thematic group discussions」の講演。

8/19-22 第8回国際対話的自己学会（University of Haag）に参加。

8/23 ハーグからコペンハーゲンに移動

8/25-29 コペンハーゲン大学で行われた文化心理学サマースクールに講師として参加。

8/30 Valsiner 教授らと京都での法心理学サマースクール開催について打合せ。

8/31 デンマーク出国

9/1帰国

4-2 オランダ編

2014年8月18日

ヨーロッパ文化心理学院生の会（University of Haag）

10.00 – 12.30 : Trajectory Equifinality Approach; Concepts and basic practice.

Lecture and thematic group discussions



TEA（複線径路等至性アプローチ）について解説した後、昼食時間を利用して、お互いにインタビューをして TEM（複線径路等至性モデル）の練習を行ってもらった。

お昼ご飯は近くのレストラン。私はルッコラのサンドイッチを選んだ（おいしかった）。



TEM づくりのためにインタビューしている風景（イメージ写真）



今回のワークショップをやってみて分かったのだが、TEM は、インタビューによって分岐点をどう引き出すのか、というところが重要であり、逆に言えば、インタビューの仕方に分岐点の引き出し方をしっかり組み込んでおくということが重要なのだらうということになる。参加者の皆さんが描いた TEM（もどき）は以下。



この日の夕食は、オランダの旧植民地だったインドネシア（蘭印＝オランダ領東インド）料理を食べに行きました（コペンハーゲン大学のご招待。ありがたい。。）。エスニックフードといえば聞こえがいいですが、歴史的経緯を知る必要もあります。



真ん中にいるのが、ペニーラ・ヴィ先生（コペンハーゲン大学）。後ろに掛かっている絵にも注目。

2013 年 8 月 19～22 日 第 8 回国際対話的自己学会（University of Haag）

前回のこの学会はアメリカ開催だったので（行くのが面倒で）すっぽかしたので、4 年ぶり 3 回目の参加となった国際対話的自己学会。今回はシンポジウムの企画 1，シンポジウムでの発表 1，院生との連名発表 3、ということなので、しっかり参加できたのではないかと感じている。

まずは東大の能智先生と一緒に会場の前で記念写真（左）。学会長のヒューベルト＝ハーマンス先生がいたので、日本人で集まって記念写真（右）。今回、日本人の参加者は 29 名で、オランダに次いで 2 位（ブラジルからの参加者も同じく 29 名で同率）とのことであった。



私が行ったシンポジウム発表 1 つ目は、アグニエスツカ・コノプカ先生の「コンポジション・ワーク」に関するもの。

対話的自己の各ポジションについて石を使って表現するというワークを彼女が開発しているのだが、それを TEA（複線径路等至性アプローチ）の立場から検討したというものになった。

今回のシンポジウムは、午前、午後に分かれており、午前中は森岡正芳先生が「間」についてご発表。「Space-between」と訳されることが多いが、「Time-between」でもあり、「Chronotope-between」ということになるのだろう。

さて、コンポジション・ワークは箱庭と同じようなものと考えても良いが、箱庭が様々な人形や小道具を使えるのとは異なり、コンポジション・ワークの場合は使えるのは石だけ。そしてその表現する対象はあくまでも、「**としての私」という表現を追求するものである。以下が参考のコンポジション・ワーク。彼女が2012年に来日して島根の日本パーソナリティ心理学会で講演した時のパワーポイントである。感情を石で表しているとみるだけではなく、不安＝心配性の私、ソフト＝優しい私、というように「自己の配置」として見ていくのである。



西洋的な自己は、非常に強力な単体が想定されているが、コンポジションワークでは、その自己に「場所を与える」ことが目指されている。場所に余裕ができれば争いはなくなる、というのである。

細かい説明は省くので、興味のある方は、いろいろ調べてください。と思って自分でグーグルで検索したら、彼女が2012年に来日して島根の日本パーソナリティ心理学会で講演した時の動画がアップされていて驚いた。私が日本語で喋ってる。。

<https://www.youtube.com/watch?v=aUuz2lSqZyc>

ご本人のサイトは

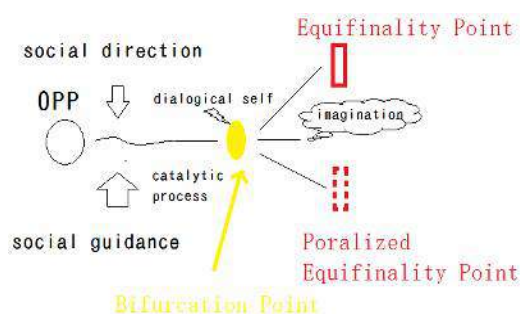
<http://www.konopka.nl/>

さて、私の発表は「自己にスペースを与えるだけでは十分ではなく、時間的広がりも与えましょう、ということになる。TEM がもつ時間重視の姿勢をコンポジション・ワークにも取り入れましょう！」ということであった。私のこの主張にはアグニエスツカも賛同してくれている。

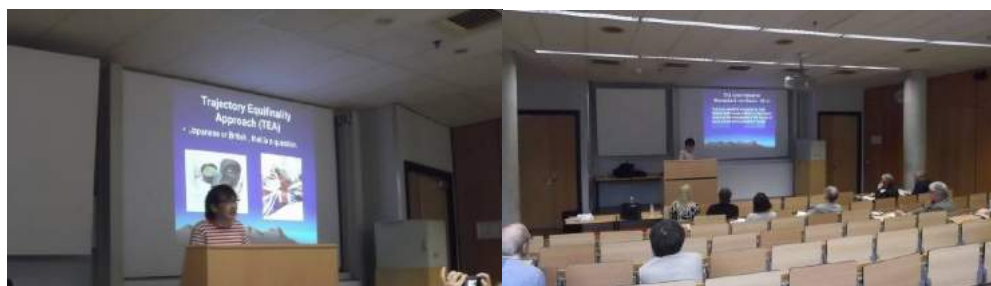
単体であり確固たるものとして考えられている「自己」を構造 (Structure) として開いたのがアグニエスツカの考えだとすれば、自己を時間的に開きましょう、というのが TEM

による提案である。その時に重要になるのが、分岐点（Bifurcation Point）である。構造として表現された「自己の構造」から、分岐点に着目することができるなら一分岐点は単に選択肢があるだけではなく、そのどちらかを選ぶ方向に動くということを伴っているの—そこに時間を読み取ることができるのである。

なお、このことは、TEM から見れば、分岐点においてこそ、対話的自己が現れ、想像が生じ、いずれの道に行くのかが決定される、ということになる。以下、参考まで。



このシンポジウム発表の様子は以下。



さて、もう一つのシンポジウムはスイスのタニア・ジットウン先生と共に企画したもので、抑制的記号ということを取扱おうとしたものである。

ヴィゴツキーに由来する文化心理学は、主体と客体の間に記号を媒介させる。あるいは、記号が媒介することによってしか、主体は客体と向き合えない、というように考える。その記号の役割には、促進的記号と抑制的記号がある、というのがヤーン・ヴァルシナーやタニア・ジットウンの到達点である。椅子は普通座るものだ。それは、作る人が、座るために作ったからである。文化心理学の立場からは、記号が発生するからこそ、椅子になるのであり、座るという行為を促進する促進記号が発生するから人は座るのである、と説明する。

私が抑制的記号の例として今回提示したのは岡本太郎の「座ることを拒否する椅子」というものである。以下の様な椅子があったとして座ろうと思えるだろうか。たとえば、右端の歯が描かれているものは、何となく座りたくない気がしてくる。

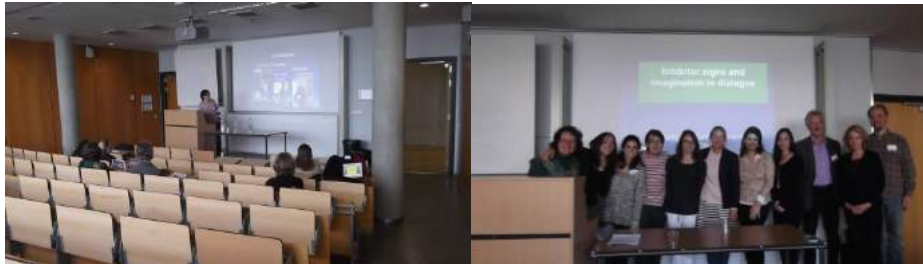


<http://file.kininarukizi.blog.shinobi.jp/Img/1261139358/>

椅子は「座るという行為」を促進する記号を発するべきところ、この椅子は、「座るとい

う行為」を抑制する記号を発するように作っている、というのである。実際にこれは芸術作品であるので、それほど単純でないだろうが。。。

発表の様子と全員での記念写真は以下。



今回のオランダ滞在では、いくつか特筆すべきことがあるのだが、その 1 つは、アグニエスカ・コノプカさんのご自宅にお呼ばれしたこと、である。手料理でもてなされ、神戸大の森岡先生も一緒に、楽しい一時を過ごすことができた。左の写真は、お土産にもってきた会津民芸「起き上がり小法師」で遊ぶアグニエスカ・コノプカさん。右は最後に出てきたお酒の数々。



もう一つの特筆事項は、学会の講演に招待されていた、ケネス=ガーゲン先生との再会。ガーゲン先生にはかつて立命館大学の招聘教授として授業をしていただいたことがあり、その時の院生たちが、それぞれアカデミックな職を得ていると紹介できたのはうれしいことだった。



最後にサトゼミ一同で反省会（をしてるフリ）。最初の学会発表が海外という院生もいる

のだから、私にとっては隔世の感がある。



オランダ編の最後に、恒例となった（個人的感想です）、海外で寿司を食う！のコーナー。今回はハーグのレストラン「Oni」。寿司盛り合わせ、は、まあ普通の感じだったが、ロール（巻物）には、ベルガロールとシルバーレインという見慣れない名前のものがあったので頼んでみた。シルバーレインはサバがメインでタルタルソースのようなものがかかっていた。いずれのロールも中に黒く見えるのが海苔。ウラマキと称しているが、海苔を中に巻き込んでいるのである。



4-3 デンマーク

8/23、デンマークに移動。デンマークは3回目だが、過去2回はオールボーにのみ滞在。コペンハーゲンが初めて。

コペンハーゲン大学が主催する「文化心理学サマースクール」に講師として出席を依頼／招待された。その内容は

International Summer School, 25 – 29 of August, 2014 København

Developmental processes within the cultural life course

Organizers: Pernille Hviid, Tania Zittoun, Jaan Valsiner,
Tatsuya Sato, and Brady Wagoner

This summer-school introduces Life Course perspectives as theoretical and methodological frames for approaching various psychological and social phenomena. Life Course studies are not restricted to a special kind of research design, but considered as a perspective which explores a given phenomenon in its course and context of living, emphasizing culture as the mediating link between the transformation of societies and individuals.

PhD and MA students are encouraged to explore these perspectives – their strengths and weaknesses - by applying them on their own work. Productions of papers serve as part of their passing the Summer-school exam. These papers can later appear in special issues of *Outlines – critical practice studies, Integrative Psychology and Behavioral Science* or in *Culture & Psychology*, thereby contributing the future development of the field.

The Summer-school entails a pre-, present- and post-phase.
(Important for us to be explicit about the expectations and the possibilities during the whole process)

というようなものであり、成果の論文化までも目指す本格的コースである。コペンハーゲン大の学生以外は 1000 ユーロの負担が必要になっている。ちなみにデンマークの大学は、どうやら 3 年間の学士コースに 2 年間の修士コースが連結しており、特別な事情のない人は修士まで取得する。そして、驚くことに、5 年間の学費は無料である。

サマースクールの 5 名の講師は、デンマークのみならずスイスと日本から招聘されており、5 名が毎日出席して指導にあたった。文化心理学のコースなので、美術館や墓地など文化的事跡とふれあうこと（要するに観光？いえいえエクスカーションと呼ぶのです）も授業の一部になっていたのも、朝から晩までねじり鉢巻きで勉強していたわけではない。

また、サマースクール全体のテーマとして「***Be bright-eyed and bushy-tailed !***」を提案したところ、熱狂的な支持を受けた。「目を爛々と輝かせろ！尻尾を力強く振れ！」という意味のオーストラリアの英語で、今は使われない表現らしいのだが、今の私たちにぴったりである。



2014 年 8 月 25 日

講師それぞれの自己紹介の後、参加者も短く自己紹介。ヤーン＝ヴァルシナーの貴重講演。

夜は、講師陣のみでディナー。なんとエチオピア料理。これは初めて！大皿が一枚出てきて、そこに全ての食材が乗っていて、それを手で食べる。



五人勢揃い (from left, Brady, Jaan, Tania, Pernille and Tatsuya)

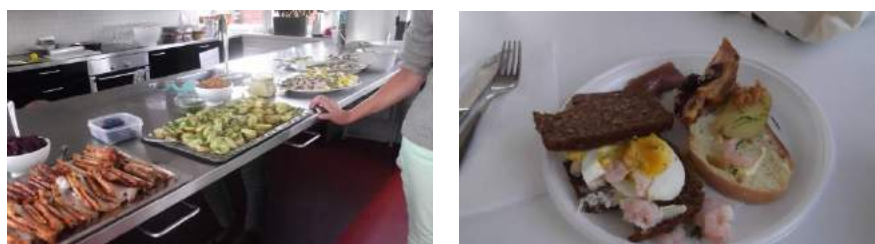


箸はもちろん無いが、ナイフもフォークも無いので、手で食べるのみ！

2014 年 8 月 26 日

午前＝タニア・ジットウン（スイス・ヌーシャテル大学）の講義

昼食＝ペニーラ先生お手製のデンマーク風オープンサンドウィッチ



折角いろいろな食材を用意してもらったのに、あまりおいしそうには作れなかった。。。

午後＝博物館フィールドワーク



夕食はタイ料理でした。



2014 年 8 月 27 日

午前＝ペニーラ・ヴィ先生（デンマーク・コペンハーゲン大学）の講義。ライフコースの理解。



午後＝学生達はグループワーク。

夕食＝全員でいわゆるコンパ。コペンハーゲンにあるクリスチャニアという場所のレストランで会食。この地域は自治を自称しており、アンダーグラウンドな雰囲気満載。一方で、コペンハーゲンにおける 4 番目に大きな観光地であり、年間に 50 万人が訪れる場所でもある。

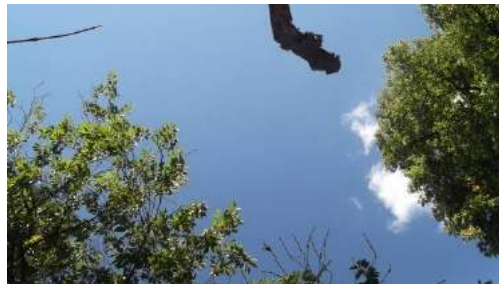


2014 年 8 月 28 日

午前＝ブラディ・ワゴナー&ヤーン・ヴァルシナー先生（デンマーク・オールボー大学）の講義。

午後＝墓地フィールドワーク

墓地に石を置くという不思議なワークもあった。ベンチでのんびり。その後、ベンチで横になり空を見る。本当に久しぶりに夏らしい空を見た。



下は、デンマークが生んだ偉大な哲学者、キルケゴールの墓。



夕食＝おなじみの、外国で寿司を食う！のコーナー。

小舟のようないなり寿司を発見。



2014 年 8 月 29 日

午前＝サトウタツヤ（日本・立命館大学）の講義；TEA（複線径路等至性アプローチ）。以下の写真はイメージです。



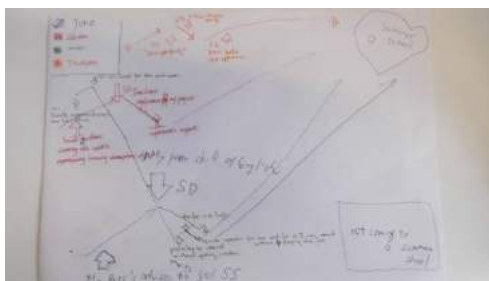
昼食＝今日もペニーラお手製のデンマーク風オープンサンド。サプライズで、参加者全員の感謝の気持ちを書いた寄せ書きをペニーラにプレゼント。



午後＝参加者による TEM 実習。それぞれのグループがテーマを決めて TEM を描く。
 なお、TEA と TEM の関係は、TEA（複線径路等至性アプローチ）が TEM（複線径路等至性モデル）をその一部に含む包括的な考え方に関する名称であるのに対し、TEM（複線径路等至性モデル）は人生径路を描く方法論であるということである。TEM は TEA の真部分集合であるが TEA には TEM のほか HSI や TLMG が含まれるのである（何のこっちゃ？という人は TEA のページ <https://sites.google.com/site/kokorotem/> をご覧ください）。



以下はあるグループが描いた **TEM** (複線径路等至性モデル)。そのテーマは、「(サマースクールに來ないという可能世界を含みつつ描いた)参加者はどのようにサマースクールに参加するに至ったか」であった。



図中の **SD** は社会的方向づけ、**SG** は社会的ガイド、という力を表したものである。この新しい方法論に興味をもつ海外の若い研究者が増えつつあるのは、本当にありがたいことである。

5 まとめにかえて

タニアに私の **PPT** を送ったら、以下のような返事がきた。楽屋オチで申し訳ないけど、あまりにもタニアの口調を彷彿させるメール文面なので、掲載しておきたい。

ちなみにタニア・ジットウン先生のウェブサイトは

<http://www2.unine.ch/tania.zittoun>

である。

Dear Tatsuya,

Thank you very much for this - it was a very nice and innovative presentation. Both a very good and funny way to demonstrate semiotic mediation and to do a different psychology of cultural difference; and on imagination in TEM. I hope you have a good end of stay in Denmark and I look forward to your visit in November/December.

With my best wishes,

Tania

というわけで、このメールにあるように 12 月にスイス・ヌーシャテル大学のタニアを訪問するのが楽しみである (スイスとルクセンブルグで **TEA** (複線径路等至性アプローチ) について会を持つ予定)。

TEA（複線径路等至性アプローチ）をきっかけに、多くの研究者・学生達と交流ができていることを改めて感謝して、稿を終えたい。関係各所（特に資金提供者）に感謝いたします。

次回は、デンマーク・オールボー大学の PBL 視察・訪問記の予定です。

対人援助学&心理学の縦横無尽16

オールボー大学の P B L (Problem-Based Learning) ; 心理学を中心に



サトウタツヤ@立命館大学文学部心理学専攻

前口上

今回は、2014 年 4 月に訪問したデンマーク・オールボー大学での聞き取り調査を中心に P B L (Problem-Based Learning) について紹介していきたい。

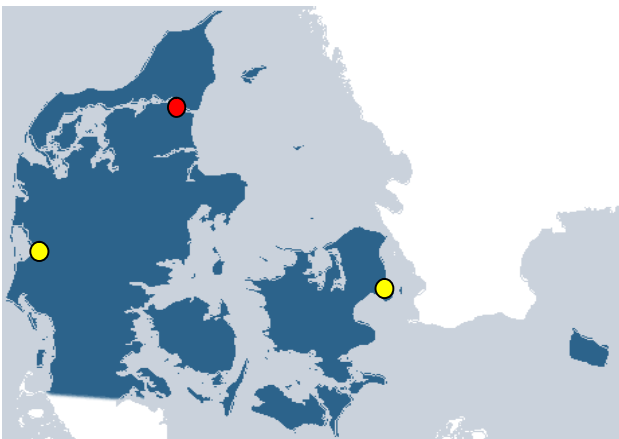
目次は以下の通りである。

- 1 オールボー大学の PBL とユネスコチェアプロフェッサー
- 2 PBL オールボーモデル ; Kolmos 教授の PPT より
- 3 オールボー大学心理コミュニケーション学部の PBL ; 2014 年 4 月の聞き取り
- 4 心理院生から見た PBL ; 2014 年 8 月院生 1 名への聞き取り

- 1 オールボー大学の PBL とユネスコチェアプロフェッサー

デンマークは今でこそ領土は小さいが、8 世紀から 11 世紀にかけての「ヴァイキング時代」と呼ばれた時代には、非常に大きな勢力を持っていた国である。

さてオールボー市はユトランド半島の北部に位置し、人口 17 万人、デンマーク王国で 3 番目に人口が多い都市である。



オールボー大学の学生数は約 185,00 名。工学，自然科学，医学，社会科学，人文学の 5 つの学部からなる総合大学である。キャンパスはメインキャンパスのオールボーのほか、首都コペンハーゲン、西南地方のエスビャーにある。

オールボー大学は 1974 年に設立された比較的新しい大学だが、その当初から、問題解決型（problem based）やプロジェクト型（project-organized）のティーチングのモデルを取り入れており、学術雑誌を発刊したり、UNESCO が主催する「国境を越えた知識の交換を促す」ための事業である UNESCO Chair に参加し、The UNESCO Chair in Problem Based Learning を展開し、専属の教授を一名配置している（いわゆるユネスコチェア教授であり現在は Anette Kolmos 教授）。

Kolmos ら（2004,p11）によれば同大学の PBL を支える基礎理論には、Piaget, Dewey, Lewin そして Vygotsky らの学説が参考にされている。そして、“経験を得ることが学びのモチベーションを高め、また、そのことがより進んだ学びの重要なアプローチ” (Kolmos et.al., 2004) であると考えて教育を展開している。また、PBL の歴史的背景を解説した Graaff and Kolmos(2007)によれば、PBL はつまるところ、学び手が主体的に学ぶことを支援する教育ストラテジーであるとされ、ソクラテスや孔子が引用されていた。

2012 年 10 月に Kolmos 教授に対してヒヤリングを行った磯田・下田・内山（2013）によれば、Aalborg 大学創設に際して、教師の役割の再検討がもう一つの重要な課題となり、教師は講義によって知識を伝えるというよりも、学生と協働してその学びを支援するサポーターとしての役割を採るべきだということに方向が転換されたというのである。その背景には大学紛争があったという。

2 PBL オールボーモデル；Kolmos 教授の PPT より

まず、2014 年 4 月 23 日にお会いしたユネスコチェア・Kolmos 教授からいただいた資料からいくつか紹介していきたい。これは彼女が 2013 年に日本で行った講演「デンマークの教育と PBL (Problem-Based Learning)」に用いた資料の日本語版である。

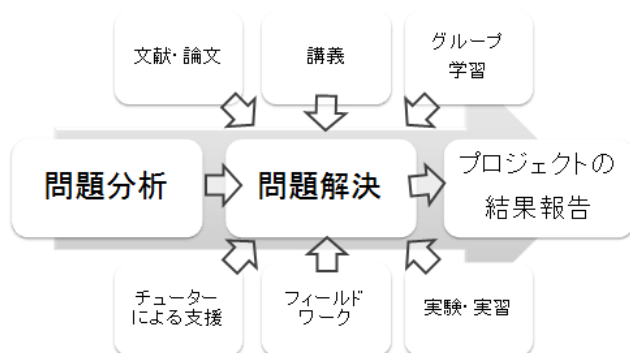
まず、PBL の歴史と特徴。カナダのマックマスターが 1968 年に始めた。この大学やマーストリヒト大学は医学における PBL で、問題解決ではなく事例学習型の PBL である。

PBLの歴史と特徴



オールボー型 PBL の流れは以下の様である。

PBLのながれ



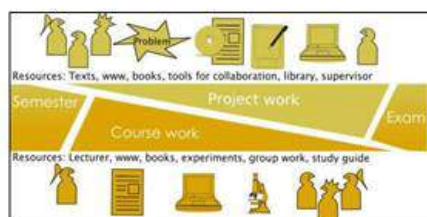
学生の時間の使い方は以下のようなものである、座学（講義）が50%、PBLに費やす時間が50%ということであり、そのために全学で1200もの活動スペースが用意されている。

－学生の取り組み－

コース(授業)とプロジェクト

50% プロジェクト：セメスター(学期)ごとに、ある科目に関連する決められた課題に取り組む。評価はグループ単位で行われる。

50% コース(授業)：様々な内容のコースが用意されており、プロジェクト遂行に役立つものが多い。評価は個人単位、筆記試験あるいは口頭質問などで行われる。



成績については以下の様であり、教員も複数名で評価を行うことになっているという。成績の付け方については、非常に丁寧にやっているという印象を受けた（ただし、学生に非公式インタビューしてみると、学生からは必ずしも全てが公正・公平だとは思えないようであり、言いたいことは多々あるようであった。どこの国でも事情は同じである。。。。）。

プロジェクトの成果を把握するための 試験の構成例

プロジェクトのプレゼン(学生)
プレゼンに対するコメント(試験官)

休憩

1. 一般的で質問形式で進めるディスカッション(方法論に関する質問など)
2. 個々の学生に対する詳細な質問

休憩

試験官が成績について合意

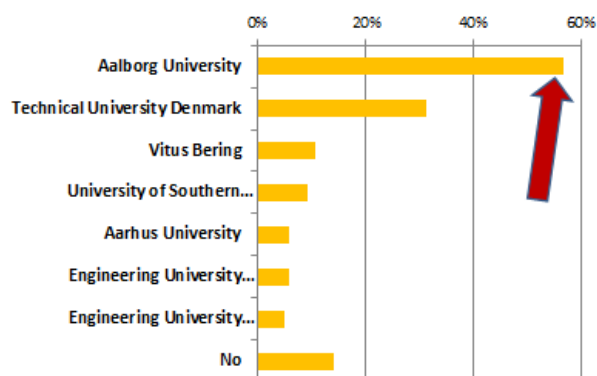
成績の発表とその根拠

新しい試験の形式における 評価

- 評価は個人単位。次の要素が考慮され、個々にかなり幅のある評価となる場合が多い
 - 学生が提出するレポートで、何が期待できるかがわかる。口頭発表ではプロジェクトの概要がわかる。
 - 個々の学生は、レポートのでき具合と、以下の項目で評価される。
 - 口頭プレゼンテーションでの貢献度
 - ディスカッション時の貢献度
 - 詳細な質問に対する返答の内容

最後に社会からの評価について、工学では以下の様なことになっており、成果は出ている、ということらしい。この他、ここでは紹介しないが、ドロップアウト（退学）率、留年率の低さ、などでもオールボー大学は他大学よりも優れているという数値が出ているとのことである。

社会や企業で必要とされている工学系教育が実施されている
と思う教育機関はどこですか？ (Ingeniøren, 2008)



3 オールボー大学心理コミュニケーション学部のパブリック・ラーニング ; 2014 年 4 月の聞き取り

3-1 2014/04/22 8:30

かねてからの知己である **Mogens Jensen** 准教授がすべてのスケジュールをたててくれ、現在のオールボー大学の PBL の状況を知ることができた。

コミュニケーション&心理学部では 1996 年くらいから PBL をいずれ採用すると決めていた。そしてその後、実際に PBL を取り入れている。

心理コミュニケーション学部の学生は 150 名。心理学の人気はデンマークでも高い。入試はないが、高校の成績で選抜するため、意欲も能力も高い。授業（新学期）は九月に始まる。秋学期（9-12）は普通の講義形式の授業が多く、春の学期（2-5）は PBL 的な学習の科目が多く入る、ということになっている。また学費は無償である。3 年間で学部教育であり、その後、大学院（修士課程）が 2 年間ある。卒業生の殆どが大学院に進学するため、事実上、5 年間の教育になっている。したがって 10 セメスター分のカリキュラムが作られている。

日本のシステムと比べてどちらが良いということはないが、オールボー大学の制度について良い言い方をすれば、5 年間で修士をとれる濃密なスケジュールであるが、悪い言い方をすれば、5 年間で卒論に毛の生えた程度の修論を書いて修了となるスケジュール、ということになるだろう（日本は 6 年間で卒論と修論という 2 つの論文を書くのに比べれば、という意味である）。

3-2 10:45 Lena Lippke 助教へのインタビュー。

第一セメスター（PBL）担当。第二セメスターも学生をガイドしている。

第一セメスターは心理学の入門過程でもあり、社会・性格心理学の講義が行われている。最も身近な科目から教えるという方針がとられているようだ。2 セメスターから本格化する PBL のやり方を教えるのも第 1 セメスターの仕事である。スケジュールリング（スケジュールの作成の仕方）とそれぞれの役割の取り方をしっかりおしえる。第 1 セメスターの PBL ではグループ分けは教師が行う。1 セメの PBL の授業は、自分たちでもやらせる授業。三週間。学生たちは、バスの中で人は何をしているか、スーパーで人は何をしているか、などのテーマを選び、インタビューか観察でデータをとり、分析し、発表する。

学生たちは、最初のうち、グループワークを嫌がるが、大学でのグループワークのやり方を教えるとやりたがるようになるという。



第 2 セメスターから PBL が本格化する。アドバンス社会・性格心理学という性格をもった PBL の授業があり、学生たちは第 1 セメスターで学んだことを基本に、自分でテーマを選んでグループを作って、やっていく。他のテーマでもいいが多くの場合は第 1 セメスターで学んだことを深めようとする人が多いとのことである。第 2 セメスターでは基本的に質的研究の方法（面接）を用いて学生達はグループ PBL 行うことになる。

3-3 10:45 Line Engel Clasen 登場、インタビュー。

彼女は博士課程の院生で、TAとして第4セメスターのPBLを担当している。この第4セメスターでは量的研究を行うことになっており、第3セメスター(2年目の前期)に勉強した論文や本の中からテーマを選び研究する。その第3セメスターでは、認知心理学、発達心理学、生物学的心理学の講義を学ぶ。学生達のPBLのグループは1グループ最大4人である。量的研究であるが、質問紙を設計してデータをとり分析することが多い。統計パッケージを使って計算を行う。

以上のことから、第1、2セメは質的研究のPBL、第3、4セメは量的研究のPBL、という順序になっていることが分かる。なぜそうなったのかを尋ねたところ、誰かが突然決めただけで、必然性はないようだとのことであった。しかし、質的研究から量的研究に進む方が、学生にとっては身近であろう。

最後に記念写真(左から、リナ、私、モーエン、リネ)



3-4 12:30 - Thomas Szulevicz 登場

昼食後。モーエン准教授による、学部最終学年の解説の後、昼から来てくれた Thomas Szulevicz 大学院の PBL について話をしてもらった。

まずモーエンの解説。学部最終学年は第5セメスターと第6セメスター。

第5セメスターでは、教育心理学、組織心理学などの講義を学ぶ。そして第6セメスターでは、「バチェラー(学士)プロジェクト」として、1~3名によるプロジェクトを行う。一つのテーマについて、複数の理論を学び視点や思考を深めるのが狙いであり、データをとる必要は必ずしも無く、それまでに学んだことの集大成としてプロジェクトを行う。

理論から入るのではなく、自分たちでプロジェクトを選んでから理論を学ぶほうが良いという考えに基づいているように思われた。

4年目からは大学院修士課程である。第7セメスターは Advanced Applied Psychology というくくりになっており、職業心理学といった趣である。心理検査やカウンセリングの講義がある。第8セメスターはいわゆるインターンシップ。臨床心理士志望の院生は実際に働いている心理士のところに行く。その他の進路志望(研究職含む)の院生はフィールドワークでもかまわない。50日間の長期修行である。

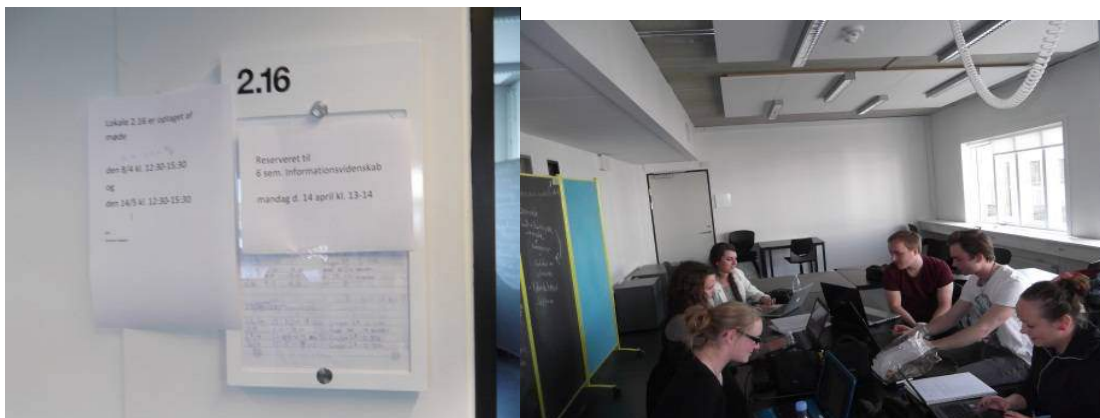
3-5 2014年4月22日午後

心理学のPBLのことは概ねわかったので、大学全体のPBLについて知るため、大学とは離れた市内のビルにあるPBL AcademyのThomas Ryberg教授をたずねた。



PBL Academy とは、PBL を広げるための組織であり、PBL の教え方の研究もしており、研修なども行っている。ユネスコ・チェア（教授）を擁し、専門ジャーナルを発刊し、E-learning Lab の展開を行うなど、発展的な志向をもつ。現在、タイ、マレーシアなど海外から博士号をとるために留学している学生も多いとのことである。

彼もまた、PBL ではグループワークが大事だと強調しており、PBL のグループワークのためのインフラ整備が重要であるとのことであった。PBL アカデミーが存在する建物のなかを見せてくれた。



ゼミナール室のようなものが多数あり、たとえば 2 1 6 の部屋では哲学の学生たちが PBL に励んでいた。

3-6 2014 年 4 月 23 日 午前

ユネスコ・チェア Anette Kolmos 教授に会う。カメラを忘れてしまったので写真をとれず。。。仕方無いのでできあいの写真をもってきた。心理学出身の教授であるが、PBL は工学にこそふさわしいと熱く語っていたのが印象的。既に本稿で紹介したように、PPT を提供していただき、また、ご著書もいただき、熱心に説明をしていただいた。



Problem based learning (PBL) とは：「問題の特定と分析、解決の体験を通して学習者が学ぶ、学習者中心型

学習法」である。PBLにはその開発経緯から、ケースメソッド型と問題解決型があり、オールボー大学では後者を行っている。

PBLにおけるオールボーモデルの特徴は、1) グループワーク、2) 教科横断型学習、3) 理論と実践の統合、にあるという。

★グループワーク

ただし、教師がグループワークのスキルを指導する

★教科横断型学習

ただし、プロジェクトを進めていく上で必要な内容の講義型授業によって、プロジェクトの進捗を支える

★理論と実践の統合

ただし、こうした学びを指させるための学びと方法論のスキルを学ぶ機会を提供する

である。

4 心理院生から見た PBL ; 2014 年 8 月院生 1 名への聞き取り

以上が、オールボー大学の PBL や心理学の PBL の聞き取りの成果エッセイである。この時にはわからなかったことを後日（2014 年 8 月）にコペンハーゲンにてオールボー大学の学生（2014 年 8 月現在、修士課程 1 年を終え、2014 年 9 月から修士課程 2 年になる学生）に会う機会を捉えて、尋ねてみた。インフォーマントは Elisa さん。毎日、髪に異なる花を飾っているキュートな院生である。



彼女の話を書き手に解釈すれば、心理学のカリキュラムについては以下の様な構成となっているようである。心理学教育において、PBLのPは「ProjectのP」である。

1 年目：前半＝社会心理学＋PBL 入門；後半＝PBL（質的研究法）

2 年目：前半＝科学的心理学；後半＝PBL（量的研究法）

3 年目：前半＝応用心理学；後半＝PBL（理論研究）

4 年目：前半＝職業心理学；後半＝インターンシップ

5 年目：前半＝心理学論（理論・実践・方法の統合）；後半＝修士論文

表形式にまとめると、以下のようになる。講義名などは正式なものとは異なっているかもしれないので留意されたい。

また、第1セメスター（B1）では講義の他に、グループワークのやり方を学ぶ授業も設定されていることを強調しておく。この授業こそ、PBLを成功させる鍵であるように思える。

	前期;9月～ 講義系	後期;2月～ PBL 系
B1	PBL 入門	質的研究法
	社会心理学	
	性格心理学	
B2	認知心理学	量的研究法
	発達心理学	
	生物学的心理学	
B3	教育心理学	プロジェクト決定(1～3人)
	組織心理学	複数の視点からの文献研究
	コーチング	(データ有りでも可能?)
M1	心理検査	インターンシップ
	心理学的介入	(国内外でフィールドワーク)
	職業心理学	
M2	セミナー	方法論のアサインメント
		修士論文研究

なお、1学年の定員は150名、退学や怠学で漸減していくとのことであった。

また、興味深かったのは、博士課程進学のことである。話を聞いた Elisa によれば、修士までの無償教育とはうってかわり、博士課程は学費が必要であり、奨学金を得なければ進学できず、その奨学金試験の競争が大変厳しいということであった。彼女自身も進学はしたいが、すぐには無理だろうという見通しを持っていた。

Elisa は 2014 年 9 月から最終学年に入る。良い成果を出して、博士課程進学がかなうことを祈りながら筆をおくことにしたい。

4 文献

磯田節子・下田貞幸・内山忠（2013）． 学生の主体的な学びを育むAalborg PBL model と建築教育—本校への導入の可能性と課題— 熊本高等専門学校研究紀要 第5号、99-107.

Kolmos A. Fink, F., Krogh, L. ed. The Aalborg PBL Model: Progress, Diversity and Challenges. Aalborg University Press, 2004, 402p.

Graaff, E. & de & Kolmos, A. (2007). Management of Change Implementation of Problem-Based and Project-Based Learning in Engineering. The Netherlands: Sense.

資料

2013年第31回開発教育全国研究集会におけるAnette Kolmos（オールボー大学）基調講演
「デンマークの教育とPBL（Problem-Based Learning）」に用いた資料の日本語版

対人援助学&心理学の縦横無尽17

「科学上のブレークスルーに関するグローバルシンポジウム」

参加メモ



サトウタツヤ@立命館大学文学部心理学専攻

平成 27 年 5 月 26 日（火曜日） 主催 日本学術振興会 ホテルオークラ東京別館

主な論者の論点のピックアップ（講演メモに基づくが他の資料も活用した場合があります）。

★下村文部科学大臣 特別講演

「科学上のブレークスルーを生み出す教育・科学技術政策」

★Paul Boyle 氏（イギリス・レスター大学長）

「インパクトある卓越した研究とは」



アメリカ・オバマ大統領

”科学はこれまでの時代よりも、私たちの繁栄、健康、環境（問題）そして QOL（生活の質）について、より本質的なものになってきている。”

これは多くの人の実感であろう。

※EU におけるホライゾン 2020（FP7（第7次フレームワークプログラム）の後継+α）について

H2020 の国際戦略

- ・ 基本方針
- ・ 欧州の研究・イノベーション、経済・産業競争力の向上に資する
- ・ 世界共通の社会的課題に取り組む
- ・ 欧州の対外政策を支える

事業としては

卓越した科学

産業界のリーダーシップ確保

社会的課題への取り組み

欧州イノベーション・技術機構（EIT）

共同研究センター（JRC）（原子力を除く）

その他

を行う。

全体の予算は、FP7（532 億€）に比べ大幅な増額（770 億€）だが、研究開発関連予算は、FP7 時と同等程度かやや減少するという声もある。科学への投資について、そもそもイギリスは GDP 比 0.5 以下。日本も 0.5 強。

※基礎と応用のバランスをどのようにとるか

ボトムアップとトップダウンのバランスをとるか？

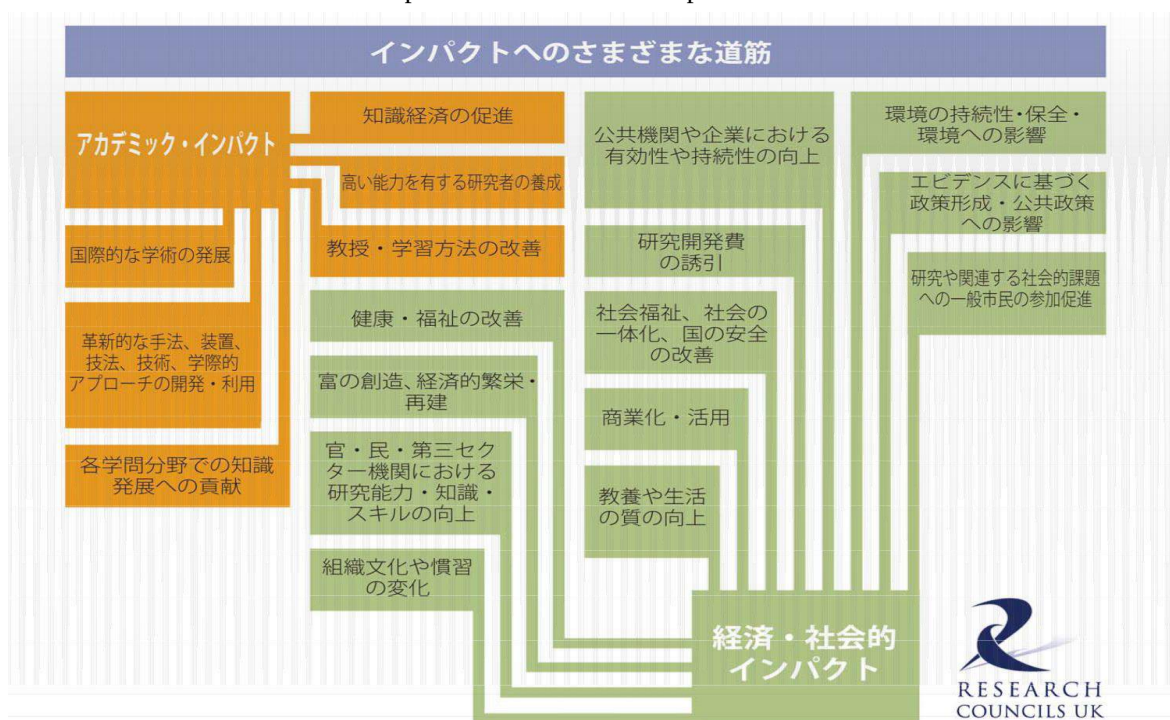
多くのファンディングエージェンシーはトップダウンプログラムをもっている。

※科学の価値、特に、インパクトについて、測る必要があるのかもしれない。

前提として、社会からの批判について敏感でなければいけないということがある。発見が次に結び付いていないという批判がある。『エコノミスト』による批判＝癌研究等では、論文による発見報告はその後ほとんど再現されてない。イギリス『ガーデアン誌』による批判＝ラット研究はラット研究でしかない！

その結果として、最近「Excellence with Impact（インパクトのある卓越性）」という考え方がイギリス・リサーチ・カウンシル（ERC）をはじめ欧州で取り入れられるようになってきた。

インパクトは「Academic Impact」と「Economic Impact」に分けられる。



上の図は「英国 RC による Impact の概念図」より

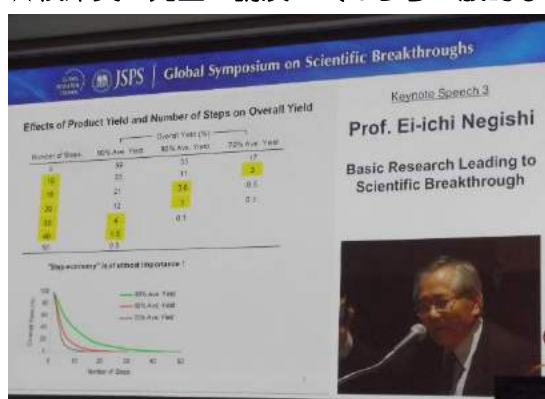
林隆之 「研究評価の国際潮流と日本の課題」 (大学評価・学位授与機構研究開発部准教授)

<http://www.uec.ac.jp/about/activity/sokushinhi/symposium/pdf/20141208-1.pdf>

現在、研究評価においては、アウトカム、インパクト、研究環境、の3点が評価される仕組みになっている。
たとえば、イギリスの REF (Research Excellence Framework) という評価の仕組みでは、「学術界を超えるような、経済、社会、文化、公共政策・サービス、衛生、環境、生活の質に対する効果、変化、便益」と定義されている。

インパクトは、予測できるようなインパクトではなく、インパクト・ファクターでもなく、社会の人々 (User) の関与を可能にする径路を提供するということ。

★根岸英一先生 講演 (のうち一般的なメッセージのみ抽出)



根岸先生の ABC ガイドライン

Ambition Boys be ambitious !

Broad and Basic 基礎的に広く !

Creative 常に学ぶ。

有機化合物の合成については、「メンデレーフの周期律表に戻れ！」 1960-63の院生時代からそう考えてきた。

★アーリング・ノルビー 元カリフォルニア大学医学部長 「Eureka Moments in Science」



※ノーベル賞について

科学は推論から始まり技術が開発されることで問題に対処してきた。

ノーベル賞は最初のアイディアに対するものとして与えられるのもそうした理由からである。

(ちなみに、ノーベル賞選考プロセスは50年後に公開される)。

※現状における “Three Large conundrums” 三大難問

宇宙の起源 67%がダーク因子

生命の起源

意識の起源

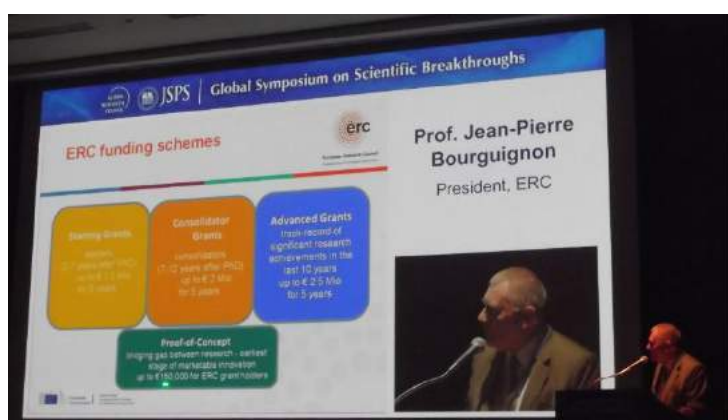
※ユーレカ！のための条件

シンプルに
大胆に
複数のドグマを
自然から学べ
優れたメンター（知識の伝授） 社会的側面が重要
オブセッション（強迫的傾向）
運 もしくは セレンデピティ 幸運は準備をしているものに現れる。

★ ERC (European Research Council) プレジデント Bourguignon氏

ERC:=EU が 2007 年に設置。ファンディング分野は、自然科学に限らず、社会科学・人文科学も含まれる。

ERC はヨーロッパの研究資金 8 % を管理している。 ハイリスク／ハイリターン型。



市場や社会での実証

ERC は 4 つのスキームで研究支援を行っている。

Starting Grants

スタート支援

Consolidator Grants

基盤固め

Advanced Grants

先端支援

Proof of Concepts

(女性が受給した場合で、その女性にライフイベントがおきた時は 18 ヶ月延長可にしている)。

★文科省・常磐研究新興局長



大学教育、高等教育の質的向上のためには「融合」が重要（特に情報）

分子・原子レベルでの探索が可能になったが、情報が膨大になった。

→情報科学が重要である。

ブレークスルーを考えるために重要なこと

基礎研究のジャンプ。

卓越性のある研究の発掘

様々な領域と情報科学との融合

科研費で得られた研究の卓越性をどうやって拾い出して次につなげるか？

★オマケ・懇親会

根岸「先輩」と記念写真。(ボクも湘南高校出身なんです！と言って無理矢理とってもらった)



参考 URL

文科省による簡単な報告（海外からの約 150 名を含め，約 500 名の参加者があったとのことである）

<http://blendboard.jp/government/detail/3507468/6471457>

シンポジウムの予告

<http://grc2015tokyo.jp/>

対人援助学&心理学の縦横無尽



福島、ふくしま、Fukushima（4）

福島県浪江町訪問記（2）

プロローグ

2013 年 6 月に引き続き、2015 年 11 月にも福島県浪江町を訪問することができました。今回の訪問は土曜講座での講演の仕込みのためです。以下で、東日本大震災後の福島との関わりについて簡単に振り返ってみました。

なお、対人援助学マガジンには既に 3 回にわたって連載してきました。今回の拙稿はそれに続くもので浪江町訪問記としては（2）、福島、ふくしま、Fukushima としては（4）となります。

<http://www.humanservices.jp/magazine/vol10/19s.pdf>

<http://www.humanservices.jp/magazine/vol11/16.pdf>

<http://www.humanservices.jp/magazine/vol14/17.pdf>

1 東日本大震災と福島第一原発事故

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災。その直後の大津波は太平洋側の各地を襲いました。福島県双葉郡大熊町・双葉町に立地する福島第一原子力発電所においては、全電源喪失の事態となり、水素爆発が起き、大量の放射性物質が環境中に放出されました。水素爆発のあった 3 月 12 日以降、大気中に放出された放射性物質は折からの南東の風に乗って北西の方角へと流れ、やがて雨によって地上に降下しました。その影響は浪江町から川俣町、飯舘村は言うに及ばず、福島市にまで及びました。

個人的なことです。私がかつて住んでいた福島市渡利は放射線量のホットスポットとして有名になりました。

風の通り道は、山と山の間、それは即ち川の上であり、川の周辺には人が集まり住んでいますから、風の通り道は人の住む所に他なりません。福島県浪江町の形は、東西に伸びた形です。そして一部が狭くくびれています。どうしてかという



と請戸川という川の流域に人々の生活圏が出来ていたからです。今と違って水運が交通の要だった時代には、同じ川の流域が 1 つの生活圏を形成していたのです。今では請戸川沿いには国道 114 号線が通り、車での往来も容易になりました。

川は低地にありその周辺が山であれば、放射線を含む風が、人の住む場所を通していくのは半ば必然だったと言えます。事故当時は、事故を起こした原発からの距離で一律に避難をしていましたが、それは全くおかしいことだったのです。原発からの距離ではなく、風がどのように吹くのか、ということこそ重要な情報だったのです。

日本原子力研究所が開発していた緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム (System for Prediction of Environmental Emergency Dose Information、通称:SPEEDI) といシステムは、わりと正確に放射線の拡散状況を比較的正確にシミュレーションしていたことが後に分かりましたが、当時は近隣住民には提供されませんでした (文部科学省は外務省を通じて 3 月 14 日に米軍に提供していました)。もしこの情報が人々に伝わっていたら無用の被爆をせずにすんだ人が多かったと思われます。SPEEDI 関係者は、情報を提供することでパニックになることを恐れたなどと言っていますが、これはむしろ官僚達がパニックになったが故に情報提供を控えた、と解釈すべきだと思います。こうした状態のことをエリートパニックと呼ぶことがあります。これは災害社会学者キャスリーン・ティアニーの言葉です。

2 福島との絆が復活

私は 1994 年から 2001 年まで、7 年間だけではあるものの、福島大学行政社会学部助教

授として福島に住んでいました。そのことが、今回の震災後に様々な活動をした原動力であることは間違いありません。震災直後、未曾有の大震災に際して、かつての同僚達がいろいろな形で奮闘している姿を見ながら側面支援はしていたのですが、福島に住んでいたから支援しますというのも白々しいかと思い、自分として何をすればいいのか分からず1年が過ぎていきました。

支援するとかではなく、自分が福島に乗り込むのでもなく、かつての同僚を京都に招いて研究会を行って福島の様子を発表してもらえば良い、そのように考えがまとまった時には既に1年が過ぎていました。2012年3月29日 原子力と生存学研究会・特別企画ワークショップ「震災・大学・放射能～福島大学教員をお招きして」という会合を行いました。福大在籍時の私の遊び仲間でもあった？永幡准教授など4名をお招きしました。



そこから福島の人たちと縁が復活し、2012年6月12日には福島大学に招かれて風評被害に関する講演（「風評被害の構造」）を行う機会をいただきました。

さらに同時進行的に、立命館大学災害復興支援室を立ち上げた今村正治総合企画室長（当時；現APU副学長）に誘われ、福島で日本再生大学を作る企画に誘われたり、研究高度化事業（震災復興）に応募したところ採択されたりして、福島を訪問する機会が増えました。震災後最初に福島の浜通



り地方を訪れたのは2012年6月のことでした。バルト三国の1つであるエストニア・タリン大学から来日したカトリン・クラセツ准教

授に「福島に行ってみたいか？」と尋ねたところ、行きたいという話だったので企画をしました。茨城大学の伊藤哲司教授の協力も得て、車で回ることができました。震災1年を経た時期、当然、立ち入りできないところも多く福島第一原発から北側の放射線量の低い地域を車で移動しましたが、その時の景色には唖然としたものです。朽ち果てた車がそのままになっているのは当たり前、でした。震災後1年以上経っていても、ほとんど後始末がされていなかったのです。



2013年8月23日には、福島県の内堀雅雄副知事（当時；現県知事）がBKCを訪問する機会があり、若い人たちと意見交換会をしたいというリクエストがありました。ゼミ生と共に私も同席することができました（これがきっかけで福島県と立命館は後に連携協定を結ぶことになります）。



この後、応用社会心理学ゼミ（サトゼミ）の学生の1人が、卒論に福島の状態を取り上げる決断をして通い始めたり、ゼミ生の企画が福島県の事業「若者による情報発信事業『いいね！ふくしま』」に採択されたりして、ゼミ生達が福島に行く機会を提供することができました。研究面でも福島との結びつきが増えました。福島と言えば松川事件（1949年に起きた列車転覆事件をめぐり最終的に多くの無罪判決が出た事件）、ということで法心理学のプロジェクトの一環として福島を訪問することもありました。さらに、『TEA 理論編・実践編』（新曜社）の執筆合宿を行ったこともありました。私が福島大学行政社会学部の教員だったことは、大震災の前までは、私にとって単なる履歴の1つでした。しかし、東日本大震災によって新しい意味が付与され、カッコ良い言葉でいえば、絆が復活したのです。私は1年ほど福島に行くことを逡巡していたのですが、かつて同僚だったある先生は、福島大学で私の顔を見つけるなり「来るのが遅い！」と笑顔で迎えてくれました。私と同世代だった先生方は学部長などを務めているし、中井勝巳先生にいたっては今では福島大学学長です。

また、元同僚達にいろいろな人々を紹介してもらいました。たとえば、ふくしま土壤くらぶの皆さんです。震災直後から行政に頼らず自分たちで除染を行い、文献を読み、安全・安心な果物作りに邁進してきた人たちです。徹底的に勉強し、徹底的に土壤作りを行い、徹底的に安全な果物を生産し、何よりも、検査も徹底的にやって徹底的に安全確認をしているので安心です。会長の高橋賢一さんは朝日新聞連載『プロメテウスの罠』にも登場しています。一度お会いして話をうかがえば誰でもその情熱と成果に圧倒されると思います（ちなみに奥様は元ミス・ピーチ）。私たちは福島に行くとはほぼ毎回、たかはし果樹園を訪れて四季折々の果物を買って求めています。



こうして広がったネットワークのうち、最も大きなものの1つが、鈴木典夫福島大学教授から紹介してもらった笹谷仮設住宅（正式には福島市笹谷東部応急仮設住宅）との出会いです。ここには、浪江町の皆さんが住んでいらっしゃいます。浪江町は2015年11月末現在でも、全域が避難指示区域となっていて居住はできません（町役場は二本松市にあります）。

浪江町民の避難先は、福島県内が約7割、県外（現在、和歌山県を除く全都道府県）が約3割で約3,300人が福島県内の仮設住宅で暮らしています（東日本大震災当時の人口は約21,000人。2015年10月現在の住民登録数は約19,000人）。

なみえ焼きそば、という名前を思い出す人がいるかもしれません。2013年11月に愛知県豊川市で開かれた第8回B・1グランプリで1位を獲得した、あのB級グルメも浪江がふるさとなのです。私たちが笹谷仮設住宅を訪れた際には、おいしい焼きそばを作っていたこともあります。



3 浪江町の2年前と今（2015年11月）

笹谷仮設住宅自治会長の熊田伸一さんに「浪江町の現状を見てみないか」と誘われたのは2013年6月。その時のことは『対人援助学マガジン』第14号において報告しました。震災後2年数ヶ月「も」たったのだから、それなりに復興なり何なりが進んでいるのだろうと思ったところ・・・。





浪江駅は、何事も無かったように建っていましたが、駅の近くの民家は屋根が崩れたまま。海に打ち上げられた船はそのまま、自動車もそのまま、という具合でした。繰り返しますが、震災後2年以上たった2013年6月のことでした。

ここまできて、やっと本題です。今はどうなのでしょう？

2015年11月下旬、サトゼミ有志は再び福島県に向かいました。2015年11月現在、浪江町はその全ての地域において居住が認められていません。その意味で、状況はあまり変わっていません。今回もまた熊田伸一さんのご厚誼を得て、浪江町に入らせていただきました。検問があり、通行証確認が必要です。町民のみなさんは、許可を得れば、立ち入り禁止区域に入ることができます。逆に言えば、自分がかつて住んでいた家に、行政から許可を得なければ戻れない、のが浪江町民の現実なのです。福島第一原発事故がもたらしたこの事実から、私たちは何を学ぶべきなのでしょう？



まず、県立浪江高校津島（分）校の様子。ここは福島第一原発事故の直後、避難所になっていたところです。なぜなら、原発から20km以上離れているから。放射性物質は風に乗って拡散するのですから、距離よりも風向きが重要なはずですが、Speediのデータは国

民に公表されず、人々は 20km 以上離れた場所として津島（分）校を選び、かえって被爆してしまったのです。このことの責任は誰がとるのか、はっきりしてほしいと思うのは私だけではないでしょう。



津島（分）校にはモニタリング・ポストがあります。数値を見ると毎時 5.089 マイクロシーベルト。この数値がどういうものだか、多くの人には分からないと思います。簡単に考えるために毎時 5.1 マイクロシーベルトだとして、24（時間）と 365（日）を積算（かけ算）すると年間の放射線量が計算できます。44.7 ミリシーベルトになります。国は 5 年を経過しても 20 ミリシーベルトを下回らないおそれのある地域を帰還困難区域と定めていますが、まさにそれにあてはまる地域であることが分かります。さらに、余計なお世話ではありますが、モニタリングポスト近くの地表近くを測定すると 12.2 マイクロシーベルトでした。これは年間で 106.9 ミリシーベルトです。ここで、モニタリングポストが不正確だと言ってはいけません。除染を最大限頑張ってもこれ以上は下がらない値がモニタリングポストの数値なのであり、地表の数値は、その理想値よりはもっと高いことを私たちが理解すべきなのです



次に浪江駅の様子を見てみましょう。ここは海岸から遠く、放射線量もそれほど高くなく、駅もそのまま。しかし、駅周辺に足を運ぶと、傾いたままの店舗など、直ぐに目にすることができます。



さらに、海沿い。熊田さんのご自宅があった、海岸沿いへ。かつての三世代住宅は基礎部分を残すのみです。



最後に、請戸小学校に足を伸ばします。この小学校は、一階部分が津波でさらわれ、二階部分のみが残っています。そして体育館には「卒業証書授与式」の看板が掛けられたまま。もちろん、2011年3月11日から残ったままなのです。



繰り返しますが、この写真は 2015 年 11 月 22 日に撮影したものです。震災から 4 年(8)ヶ月、何も手が付けられていない地域が、現実存在することの意味を私たちは噛みしめなければいけません。

4 福島のかぜを感じる

2013 年 12 月 20 日（金）、学校法人立命館は、福島県と相互に協力し、地域社会の発展と人材育成に寄与することを目的に連携協力に関する協定を締結しました。これを記念して、協定締結記念フォーラムとして、「ふくしまとのこれまで」をテーマに、立命館大学、福島大学、明治大学の学生、立命館宇治高等学校の生徒らによる福島での活動報告が行われました。サトゼミからもパネリストとしてゼミ生が参加しました。締結のために立命館大学を訪れた内堀副知事は、2014 年の県知事選挙に出馬、当選を果たされ、2015 年現在、県知事を務めておられます。



2014 年度、サトゼミ有志は 2014 年度福島県主催委託事業「ふくしまからはじめよう。若い力による風評対策提案事業」に応募して採択され、新しい活動を始めました。

この事業は完全な公募で全国の 57 の団体から応募があり、15 の団体がプレゼンに進み、結果的に 9 の団体が採択されました。サトゼミからの 3 人は大学の食堂で福島県産の食材を使った「ふくしま定食」をポイント付きで提供し、ポイントがたまった人には、福島の食材を親などに逆に「仕送り」できるというアイデア（逆仕送 RU）を発表しました。



http://www.ritsumeikan.ac.jp/rs/category/r_na_hito/entry/?param=613

ヘイトスピーチ的な非難も受けましたが、この事業は概ね好評に終わりました。逆仕送 RU はもちろん、Ritsumeikan University の RU のダジャレですが、それはさておき、多くの人にご活用いただきました。

福島の食材を使う、というだけで懸念や不安を示される方がいたのも事実です。そして、ネット上で非難（批判でなく）してきたということもありました。しかし、立命館大学の災害復興支援室のみなさんを始めとして、教職員の皆さんがサトゼミの企画を支えてくれると言ってくれました。それによって多くの活動が可能になったのです。

福島は日本で3番目に広い県です。しかし、「福島第一原発事故」ということが、福島全体のイメージを悪くしたのです。その責任は原発の運営主体にあることは明確です。これまで安全だと言ってきたのに事故を起こしたわけですから。2014年11月の大学祭では、直売企画を行いました。大盛況でした。12月には立命館大学生協さんのご協力を得て「福島メニュー」を行いました。これも学生の皆さんから指示を受けましたし、逆仕送 RU を受けとった父母の皆さんからも評価をいただきました。「とてもいい事ですね。親子で考えさせられるテーマで子どもと話できました。風評被害がなくなるといいです。続けてください」「思いがけず娘からのプレゼントで、他県の食品を知る機会をいただいてうれしかった」などの声が多数寄せられました。





既に述べたことですが、2015年11月下旬、サトゼミ有志は再び福島県に向かいました。11月22日は浪江町訪問（前述）、そして23日は藤原紀香さんのトークショー。その直前、私は内堀知事とお会いして、拙著『心理学の名著30』を贈呈して記念に写真を一緒に撮りました。気さくでありしかも一本芯の通った内堀知事に感謝です。なお知事は、トークショー挨拶の中で、福島状況を「風評は根強く、風化は進む」と表現していました。興味深い表現ですが、福島のおかれた苦境を言い表しているようです。



そして、11月24日は福島県庁に風評・風化対策監という役職の方にお会いしました。福島県には風評・風化対策監という役職があることにまず驚きます。現在、この役職に就いているのは野地誠氏。短い時間ですが、この役職ができた背景やこの役職の担うべき仕事について聞いてみました。

****野地風評・風化対策監の話の概要****

福島県では、風評・風化対策強化戦略を設定している。その目標は、福島県産品や観光客の数値を少なくとも震災前の水準まで回復することである。教育旅行（修学旅行など）は直後に20%にまで落ち込み、回復したとはいえ昨年度は50%にしかっていない。桃の値段も震災前の70%にしかっていない。農業・観光、まだまだ復興の途上なのである。

福島から遠いほど、今は情報が伝わらない。しかし、地震直後の状況が強く印象づけられているために、情報が更新されない。復興の状況や子どもは元気、という報道はなかなか無く原発のトラブル・汚染水問題は起きるたびに報道されている。

こういう状況では、福島の農産物を敬遠する空気は変わりようがない。福島の米は食べ

たくないという人が17%に及ぶという調査結果もある。食品のセシウム基準はEUなどの

10倍厳しいし（食品衛生法に定める一般食品の基準値(100 ベクレル/Kg)以下のものしか

出荷できない)、福島の玄米は全量全袋検査を行っており、最も安全な米なのに、である。ちなみに、本年度の福島米において基準値以上はまだ検出されていないとのことである。

こうした状況において、福島県は2015年9月、福島県風評・風化対策強化戦略を決定した。正確な情報を「より伝わる」、「より共感が得られる」よう発信することを目標としている。詳細は（<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/01010d/senryaku-sakutei.html>）参照。



エピローグ

以上、これまでの経緯も含め、浪江町の今（2015年11月現在）のレポートでした。

これに加え2016年2月7～9日も福島県を訪れました。初めて喜多方市に泊まりました。木之本漆器店店主・遠藤久美氏他と面談したり、震災以降の話を聞いたりしました。実は木之本漆器店は私の母の実家です。40年ほど前までは「おばあちゃんち」に良く来てましたが、オトナになってからはすっかり途絶えてました。こうして縁が復活したのもうれしいことです。ちなみに子どもの頃しか来ていなかったのも、喜多方で酒を飲むという経験自体が私にとって不思議な感覚でした。



最後に、これまでサトゼミでは、福島の問題を対象にした卒業論文が毎年書かれていま

す。2014 年と 2015 年には笹谷仮設住宅の住み込みフィールドワークを女子学生が行っています。浪江町の住民の皆さんに可愛がられているからこそ可能なことであり、関係各位に感謝したいと思います。

さらに蛇足。福島に足を運ぶたび、些少ではあるが寄付をさせていただいている。公的な記録が残るという意味でも、学生が良いことをして新聞に載るという意味でも貴重な場である。



対人援助学 & 心理学の縦横無尽 (19)

コミュニケーションの心理学 ―特にリスクを巡って

サトウタツヤ (総合心理学部)

本稿は2016年2月19日に大阪府危険物安全協会で講演した内容の記録をもとに口語的に執筆したものです。

0 前口上・概要

本日は心理学の解説や日常生活に役立つ話をした後コミュニケーションについてお話をします。その後リスクコミュニケーションとエリートパニックという話題についてお話します。みなさんは危険物のエリートだと思いますが、エリートだから陥るパニックがあるということを聞いていただきたいと思います。そして、最後は「北極星の展望を持て！」ということをお話しします。今日、事故の予防のために人的要因（ヒューマンファクター）が重要視されています。その時にマニュアルを作成して、手順指示で行ってもあまり良いことはない。かえって問題が大きくなってしまふことがあります。このことから、遠い展望をもって物事を行いましょ！というようなお話をさせていただきたいと思います。

1 自己紹介

私自身は何をやっているのかといいますと、研究テーマは「ホントっぽいウソ」です。「〇〇神話」と呼ばれるものの研究です。「〇〇神話」とは何ですかと考えると、根拠が無いのに信じてしまうようなことです。「証拠もないのに正しい」と思われていて、人に広まっていくもの。それが「〇〇神話」です。また、うわさ話もそれに近いので、うわさも研究テーマです。

皆さんは血液型と性格の関係があると思っている方がおられると思いますが、それは錯覚だ、血液型神話だと言うのが私の立場ですし、実の母親が3歳まで育てないと子どもがちゃんと育たないというのも根拠のないもので母性神話という言い方になります。もし、そんなルールがあれば人類は滅びてしまったと思います。誰の子であっても誰かが育てるといふ柔軟性が必要だったのです。誰か重要な人が居ることと、実の母親でなければダメだということは、論理的にはつながりません。もちろん実の母親が3歳まで育てることに害があるということではありませんけども、そうでないとぜったいにダメだというのは母性神話なのです。根拠もなく信じているお話なのです。

2 心理学とは何か

心理学は、人の心理についての学問です。その人というのは不思議な概念で、3つの切り口があります。

ヒトを対象にした心理学、ひとを対象にした心理学、人を対象にした心理学、です。読むと全て同じですが・・・

ヒトを対象にした心理学。それは、動物と同じ、生物としてのヒトに着目するものですカタカナの「ヒト」で表します。

例えばチンパンジーの研究をしている有名な松沢哲郎先生がおられます。チンパンジーも計算ができるとかコミュニケ

ーションができる。そのチンパンジーと比較することにより、人間の特質を理解しましょうというカタカナの「ヒト」の心理。

ひとを対象にした心理学は成長していく存在としての人を扱います。ひらがなの「ひと」の心理があります。私たちは5歳、10歳、15歳、20歳とそれぞれの年代で現在までは自分だと思っているわけです。しかし、一方で歳を重ねながら変わってきている部分もある。例えば、博多の女と書いて博多の「ひと」と読んだりします。博多というところで生まれ育っていくと、博多の「ひと」となっていくわけですね。性別についても、生まれつきというよりは、成長の過程で取り入れていく女性らしい役割、男性らしい役割というものがあります。それを積極的に取り入れていくと、男性となり、また女性ともなります。それをしない人もたくさんいますよというのが、現在、理解されているところですが、いずれにしても時間のなかで育っていくというのが「ひと」なんだということになります。

人を対象にした心理学は、社会に生きていく人間の心理です。社会というのは人と人が支えあって作っていく。そして、人間が社会を作り、作った社会に人間が育てられ、あるいは作った社会に人間が疎外されるというようなことがあります。そういった社会で生きていく漢字の人の心理ということで、動物での「ヒト」、発達・成長する存在の「ひと」、社会を生きていく「人」があるわけです。

さらに心には不調な状態があり、「うまくいっている」ときでだけではなく、「うまくいかない」ときもある。その時、カウンセリングなどの工夫をして不調を改善する。そうした分野を一般に臨床心理学と読みますが、それも心理学の分野の1つです。

心理学というのは心理というものについて、色々な角度から行うのが心理学になります。また、ライフという言葉があります。ライフは生命、生活、人生と訳されますが、このライフ（生命・生活・人生）について、生命と捉える場合は自然科学的アプローチ、生活として捉える場合は社会科学的アプローチ、人生としてとらえる場合は人文科学的アプローチ、として捉えるのが心理学の全体像です。最後のことについて補足しますと、過去は変えられない、過去に起きた出来事は変えられないが、過去のことを語り直すことができます。語り直しをすることによって意味づけを変えることができるようになる。こうしたことは自然科学的アプローチではできませんから、人文科学的な物語論みたいなアプローチで接近することになるわけです。

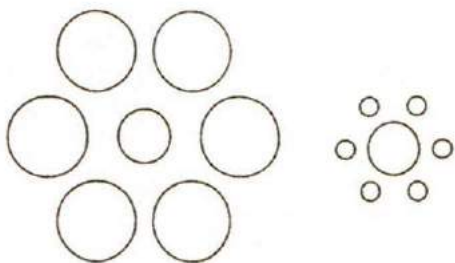
ここからは自然科学的なアプローチによる人の心理について話をしていきます。

☆自然科学的な心理学

ヒトの心理学の中は自然科学的な心理学で、感覚・知覚心理学の領域があります。

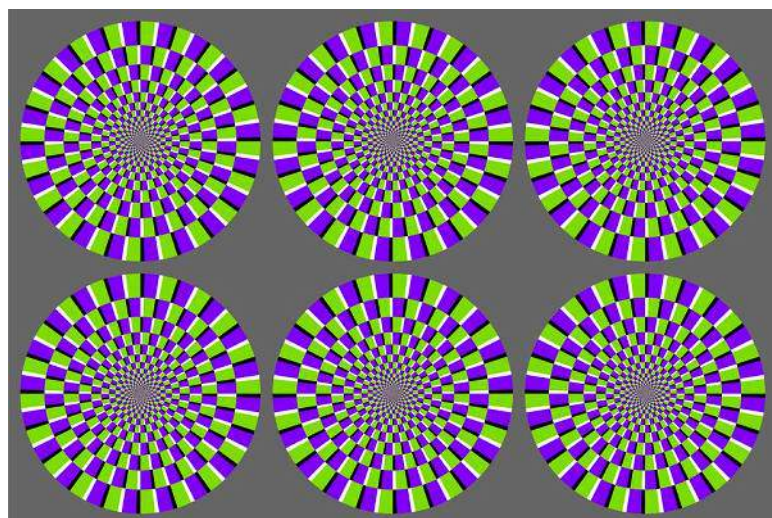
感覚・知覚というのは人間と同様、動物にも備わっています。わりと科学的な方法で行う領域になります。

図を見て下さい。



真ん中の円の大きさはどちらが大きいですか？実は同じです。周りに小さいものがあると大きく見え、周りに大きいものがあると小さく見える対比効果です。周囲の○の大きさを変えるとどのように見えが変わるのか、を実験すること

が可能になります。こうしたことは、ヒトとしての心理学の対象になります。なお、立命館大学には有名な北岡明佳先生がおります。この図はアニメーションではありません。その証拠に、どこか一部分だけ見ているとどこも動いていないことがわかります。

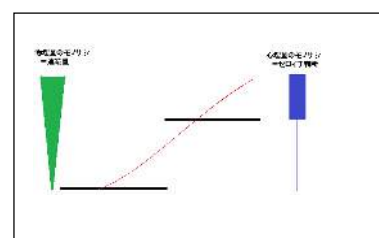


他にもいろいろあるので北岡先生の HP を見てみてください。

<http://www.ritsumeit.ac.jp/~akitaoka/>

あともう一つの話です。感覚と知覚で得られることは、0 と 1 しかないということです。

音を考えていただくと、音にはボリュームがあります。これは量で変換されます。ところが、聞こえる—聞こえないというのは、0 か 1 なのです。聞こえるまでは聞こえないわけで、物理量は連続的に増加しますが、心理量というのは、聞こえたかどうかの階段状態、0 か 1 ということになっています。皆様の周りで突然痩せる人や突然太る人、突然きれいになる人がいると思います。実は、体重は徐々に増減していますし、綺麗さも徐々に増しているのですが、^{いきち}閾値を超えない限り認識されないのです。綺麗になりたい、かっこよくなりたいというときに、自分は努力しているのに外からの評価が追いつかないということは良くあります。そのような時は閾値に達していないわけですから、閾値に達するように努力を続ける必要があるのです。



人間の感覚というのは0か1、つまり、質的に違っている事をこの機会に理解していただければと思います。

物理と心理は違います。心理学の理論の根本はそこにあるわけですし、心理が物理と完全に一致するなら心理学はいらないわけです。

☆発達プロセスの心理学

次に「ひと」の心理学、発達心理学ですが、発達とは量的な変化でしょうか。身長が伸びれば成長したと言えるのでしょうか。何が発達と言えるのでしょうか。

例えば、知能の発達というのは、あるところで止まるのか、もしくは衰えていくのだろうかという問いがあります。20世紀の心理学においては、頭の良さであるとか、理性的判断は30才ぐらいをピークに落ちていくと言う中年にとっては悲しい理論だったのですが、最近は変わりました。単純な記憶力みたいなものは確かに落ちていきますが、「知恵」みたいな

ものは年齢と関係がなく、職業で蓄積していくというのがあり、仕事の回し方等については年齢とは関係なく、むしろ増えていくことがあるということです。単に丸暗記や、数字を15桁覚えるみたいなことは、加齢と共に確かに衰えていく。しかし、先ほど言いつたような意味の理解とか知恵の働き方については生涯について発達していくというのが現代の心理学になっています。

☆社会の心理学

次に、社会心理学ですが、社会心理学の社会と言うのは、人と人との関係であり、まさに皆様がどのようなスペースで座っているか、どのような姿勢をとっているのかということも、社会心理学です。また、意味をどうとるのかということとも社会によって影響される側面があります。同じモノでも違った意味に取ることがある、というのは日常生活では良く知られています。私たちは物の意味をどのように取っているのかという問題を考えてみましょう。意味というのももちろん心理学の課題になり、その時に文脈主義という考え方があります。

ある「こと」や、ある「もの」の意味を考える時に、そのことだけを見誤る可能性があります。

例えば、図の左側のモノですが、これはなんでしょう。おそらく今皆さまは意味づけをしていると思いますが、笑顔のように見えるかもしれません。しかし、もし右の図のような文脈があればBと読むことになると思います。その時、意味はどこにあるのかと言うと、真ん中の文字にあると答えることもできますし、この文脈があることにより意味が分かるということもできると思います。アルファベットを知らない人は、Bと読めないわけですから、これは社会的に構成された意味づけの問題だということになります。



物事の意味を取る時には、有ることだけを見たり考えたりしているだけではだめで、その周囲の文脈と一緒に考えることが大事なのです。紛争はたいがい、お互いの文脈を理解することで小さくなる、というのが社会心理学の提案です。

3 暮らしの中の心理学

少し話題を変えて、日常で少し役に立ちそうな話題について考えていきましょう。心理学には応用心理学があり、心身が不調になった場合の対応や支援を考える分野があります。こういう話題について話していきます。自分の事として聞いていただいても構いませんが、部下がおられる方や自分のお子さんがおられる方は、その方々に役立てるために聞いていただいても構いません。

☆緊張しないにはどうするか

試験や試合の時に、あがってしまう、ご自身でなくても、お子さん等が緊張してしまつてうまくできないからどうしよう！ということはあるでしょう。これは、心理学的に極めて簡単な解決方法があります。聞くとなんだというぐらいの簡単な話です。

リラックスすればよいのです。

それができれば苦労しない、というかもしれませんが、実はこれがポイントなのです。

緊張したくないと考えたら逆に緊張してしまいます。そうではなく、緊張とは両立しないことをやれば良いと考えればよいのです。たとえば口は食べることと話すことに使います。1つのことをしている時はもう1つはできない。このような関係を、拮抗関係と呼びますが、緊張と拮抗関係にある行動を行えば、原理的に緊張しなくなります。

緊張したくないのであればリラックスすれば良いわけです。緊張したくないのに、緊張すると思えばますます緊張するだけです。おそらく皆さまは、リラックスなんて自分でできるのか？それができないからこそ問題だ！と思っておられると思います。

リラックスは行動だと思うことが大事です。**行動**であればできるのです。**状態**と思うからできないのです。リラックスというのは、状態ではなく行動でできる！ということが心理学の工夫と言うことになります。

リラックスという行動をするためにどうするのかと言うと、たとえば深呼吸。皆さま深呼吸は息を吸う方からだと思いますが、吐く方から始めます。呼吸を吐いて苦しくなります。この状態は緊張状態です。その状態で息を吸うとホッとしますよね。この感覚がリラックスです。自分でいつでもできるようにも成ります。ちゃんとした訓練を受けないとできませんが、訓練を受ければできるようになります。

さらに、ルーティーンと呼ばれるような行動の連鎖を工夫することもできます。最近、有名になりました五郎丸ポーズですが、心理学の立場から見ると、完璧です。

このポーズは指先に力が入っていると思われがちですが、①掌を合わせて、②肘を閉めて、③腰に力が入り、④膝がクッションになっている。まさにリラックスしている状態を作り出しています。よって次に力が発揮できるのです。こういう型を行うことにより、リラックスをするポーズを作るということは、完璧だと思います。

なぜこれをルーティーンと呼ぶのでしょうか。常々やることによって平常な行為連鎖のスタイルを作るということです。時間的に連鎖した行動を安定的に行うことによって平常心を保つことができるのです。未来に起きることは誰もわからない。だからこそ、未来に向かう際の行動を安定させて、未来の結果を安定的にしようというのがルーティンの役割なのです。スポーツでも仕事でも、こういったルーティンを作ることを是非、部下やお子さんに教えていただければと思います。

☆眠れないときどうするか

次に、疲れているのに眠れないということを取り上げましょう。みなさんは睡眠を**状態**と思っていると思います。睡眠は**行動**だと思ってみましょう。睡眠は行動だ、と思うと眠れないときの対処方法が見えてきます。

まず睡眠が行動だとするなら、疲れている時は寝られないのは当然です。若い時分は14時間くらい寝たりできたと思いますが、それは若くて体力があるからです。しかも14時間睡眠の後は疲れていたと思います。それは、睡眠が行動だからです。疲れているから眠れないのではなく、眠れないから疲れていると思うことが大事なのです。

では、眠れない場合どうするかというと、単純です。疲れているということです。対処方法の一つは、疲れが取れるまで横になっているということです。眠れない時は疲れているのです。だから寝るのではなく、早めに床に入って疲れをとるのです。疲れが取れると眠れるようになります。他の対処方法は今の逆です。今日は疲れてもう走れない、という時でも一生懸命やれば走れるということがありますよね。それと同じで気合で寝る！というやり方もあります。どちらかというとな疲れを取る方が良いと思いますが、どちらが良いのかは、人によって異なります。

さて、夢見が悪い、つまり悪夢で起きてしまうことについて話をしましょう。これは夢のせいで起きてしまう、と考えがちですが、実は逆です。夢は、皆さまを起こさないために物語を作っているのです。自分では気づいていないでしょうけれど、夢が作っている物語によって起きずにすんでいることの方が多いのです。夜中に物音（救急車のサイレンとか）がした時、夢は辻褄合わせの物語を作ってくれているのです。どうしても夢の物語が破たんしてしまう時には、起きざるを得ません。したがって夢で起きたときは必ず夢見が悪いのです。その時、夢のせいで起きたと思わず、起こさないように努力していた夢の力に感謝してください。

☆自分で抱えきれない問題がある時にはどうするか。

自分で抱えきれない恋愛問題や金銭トラブルなど自分のせいで起こした問題にせよ、社内抗争に巻き込まれて問題を抱えた時にせよ、自分で抱えきれない時には、爆発しそうになってしまいます。その時にどうするか？この答えも当然ながら簡単です。

相談相手を探すことです。

それができたら苦労しないし、そういう相手がいらないことが、悩みを倍化させることになります。近しい人だけが相談

相手かといえそうでもありません。少し距離が遠い人とか、中学校の恩師等、誰でも構いませんが、相談する相手を見つければ、悩みの半分は消えていると思います。

もちろん、相談ができれば苦労しないわけです。できないのであれば、小出しするやり方が有効です。絵を描く、踊る、歌う、日記を書く。これは、子どもの心理療法で使用する手法です。地震が起きたときお子さんが眠れないと言う例があります。子どもは地震がきたから怖くて眠れないと思わないですし、思ったとしてもしゃべりません。「○○ちゃん、どうしたの？」と聞いてもしゃべれないのです。そういう時、子ども相手の心理カウンセラーというのは、絵を描いてみようか！などと言って絵を描いてもらうのです。描くことによってどのような色使いをするのかを見ると同時に、描くという方法ですから、発散になるわけです。

あるいは、踊る、歌うということですが、私がおすすめるのはカラオケで歌うことです。これをするによって、平穏性は取り戻せますし、これをしないとどんどん不眠になったりして、不眠になると疲れやすい、疲れると増々不眠になるということになりますので、悩み事があるときは、まずは相談、できない時は発散、ということを是非やってほしいと思います。

4 コミュニケーションの基礎

☆コミュニケーションは意味の共有

次にコミュニケーションの基礎に移りましょう。コミュニケーションとはどういう意味なのかというと、「共有」が語源です。複数の人が意味を共有するというのがコミュニケーションなのです。コミュニケーションというのは、色々ありますが言葉によるコミュニケーションが基礎の1つです。しかし、コミュニケーションできた、というのは言葉だけではなくて、非言語コミュニケーションも存在します。言語かしぐさか、というのはコミュニケーションのチャンネルの話であって内容とは異なります。

今ではSNSがブームになって、発信がすごく簡単になりました。実はそこが罠でして、発信はしやすいけども受信されにくい時代になっているという事実があります。発信すれば受信してもらえないわけではないのです。対面でコミュニケーションするのがなぜ大事か（部下と上司のコミュニケーションでも、親子のコミュニケーションでも）、と言え、やはり面と向かって伝えることで、何が伝わって、何が伝わっていないのかを理解することができるからなのです。言語以外のチャンネルも使ってコミュニケーションできるので、対面コミュニケーションは豊かなコミュニケーションが可能になるのです。

言語以外のコミュニケーションについて、ミツバチはコミュニケーションしているのかを研究した学者がいました。このフリッシュという人は、ミツバチが仲間に対して蜜のありかを教えるのにダンスをすることを明らかにしました。蜜が遠くあるときは8の字ダンスをして、近いときは円を描くダンスしてコミュニケーションをとっている。言葉以外のコミュニケーション、非言語コミュニケーションといいますが、先ほど申しあげました、顔の表情、ジェスチャー、身体的距離、文字/記号なんかのコミュニケーションもあるわけです。

☆言葉によるコミュニケーション

言葉のコミュニケーションについてもう少しお話ししますと、情報伝達においては、非言語コミュニケーションより言語コミュニケーションのほうが主流となっています。関係によってこれも変わってきますが、「ねえ取って」で通じると仲が良く、「それ取って」で文脈が理解されている。「本取って」いう、具体的にしなければならぬほど、関係が深い場合には、「ねえ取って」みたいなコミュニケーションになる。

言語と言うのは面白い現象です。世界の切り取り方そのものなのです。日本人で、稲、米、ごはんを混同する方はおられないと思います。しかし英語だとライスです。電車の中から外を見て稲穂が見えた時、で、「ごはんだ！」と叫んだら大変

なことになります。よほど、おなかが空いていることになってしまいます。しかし、外国の人は、これはライスだ！ライスは何か、ごはん！となって、電車から稲穂を見て「ごはん！」と言うことが起きてくるわけです。

なお、これは日本人だから言葉が繊細だ、というわけではなく、それぞれの言語により、それぞれ繊細な部分があります。

さて、言語というのは音声と文字からなっています。音声と言うのは、揮発性で今この場所にあつて、学習は容易で、ピッチであるとか、音の大きさであるとか等、付属情報が多いわけです。それに比べて文字は、保存できて、紙を持ち上げることができますが、読み書きの学習が困難です。例えば私たちにとってアラビア語などは、どこで区切れているのかわかりませんね。したがって、音声と文字とうまく使い分けることが大事となります。

また、言語コミュニケーションの特徴として、言葉には「感情価」と言うのがあります。同じ意味の言葉でも褒め言葉と貶し言葉があります。○○ちゃんの彼氏神経質だよねと、○○ちゃんの彼氏繊細な人だよね、とは違うわけです。お父さんであると、娘に彼氏ができたときについ、悪く言ってしまう。そういうつもりがなくても、言葉を選ばないと、かえって娘の感情を害することが発生します。「お前の彼氏、少し見たけど神経質だったな」と言うのか、「繊細でお前にも合っていると思うよ」と言うかで、娘さんの父親の見る目が全然違ってくるわけです。

☆記号によるコミュニケーション

次に、記号によるコミュニケーションの例ですが、韓国の大学院生からメールをもらいました。

I was deeply appreciative. ありがとうございます:)

末尾の「:)」は絵文字、専門用語だと Emotion+icon で Emoticon エモティコンと言います。私たち日本人は(^_^)のようなものを使います。

:) と ^_^

何が違うのでしょうか。縦横だけでしょうか？それだけではなく、笑顔の表現を目でやるか口でやるかが違うのです。西洋の人は笑顔は口で表現するので、日本人が見ると味気ない物を送信してくるわけです。逆に、海外の人にとっては、日本の笑顔は口が平板なので笑顔には見えず、不愛想なメールを送られてきた！ということになってしまいます。

☆コミュニケーションのまとめ

前述のように、コミュニケーションとは、意味の「共有」です。したがって、発信しているだけではコミュニケーションではないのです。上司と部下のコミュニケーションが取れているはずだと思っても、自分は喋っているかもしれませんが、相手が受けて止めているのですかという話になります。コミュニケーションには言語と非言語があつて、言語だけ正しいことを言ったとしても、非言語では全然違うことを伝えていることもあります。非言語コミュニケーションは人間以外にも可能ですし、先ほどパーソナルスペースで見たように、割と動物的にやることがあります。そういうことも無視できない事だと思います。

5 リスクについて

リスクについて考える前に、一般語である危険について考えてみましょう。一言で危険と言っても、3つの側面があります。その3つとは、ハザードとリスクと危険、です。ハザードというのは、客観的な危険のことです。それに対してリスク及び危険とは何かというと、人とハザードの関係を含む概念です。ハザードに対する態度が受動的な場合、(狭い意味での)危険(danger)と呼びます。ハザードに対する態度が能動的である場合、リスクという概念で考えます。リスクは、危険と異なり、ハザードに対する主体側の能動的姿勢が込められています。

そもそも広い意味での危険(danger)というのは、13世紀に現れた言葉で、大雑把な概念でした。それに対して、リスクは保険などが出てきた、17世紀になって生まれた概念になります。

Risk はイタリア語の Risco に由来する言葉で、「あえて～する」という意味をもちます。例として、「危険をかえりみず」に船を出す。江戸時代、紀伊國屋文左衛門が大嵐の時に江戸にみかんを持っていったので、大商いになったという話は皆さんご存じだと思います。大嵐で船が難破する危険はあるが、品薄になっている所にみかんを持っていけば、皆に喜ばれるし、商売もうまくいく、という考え方の根本にあるのがリスクという概念になります。リスクをとる、という表現はこのことを良く表しています。

何らかの能動的なアクションをしようとするときに、「今これこれをしたら、何割の確率で失敗するかも」という表現はリスクの表現ではありません。確率的危険性の記述ですから、ハザードなわけですが。客観的危険性の評価の上になってもかかわろうとした場合はリスクになります。考えるまでもなく危険だからやめよう、というのは単なる danger です。

皆さま方のお仕事は、ある危険物について、その危険度を客観的に理解するということと、素人さんがリスクをとりにつたりしないようにすることが大事なのだと思います。

「混ぜるな危険」的なコミュニケーションがまず大事になってきます。

有無を言わず「ダメ！絶対」的なコミュニケーションが大事な時もあるはずです。

それでも、危険なことが起きることを想定することは大切です。日本の原子力発電行政が、安全神話を振りかざし、福島ひいては日本を大きな危機に陥れたことは記憶に新しいことです。危険物を取り扱う方々は、起こりうる様々な客観的危険を想定内に置き、安全が破れたときに、「リスクを取って安全に復旧する」ことを考えないといけない尊い仕事だと思います。素人だと何かあればすぐに逃げる事になりますが、それが起きたときにどのようなリスクを取れば、抑えられるのかを考えていかなければいけない仕事だと定義することができます。

天災が起きたから、自分たちが保有・管理していた物質が、災害を引き起こしたという考え方は受け身的なものであり、管轄する危険と天災との関係を、シミュレーション的にリスクとして捉えることが求められているのです。

皆さまご存知の通り、福島第一原発事故においては、がれきを処理するロボットも作らせていなかったことが問題になりました。日本は、言霊（ことだま）神話があります。危険なことを口に出すと本当に起きてしまうから、口に出さないほうがいい、ということになります。事故が起きたときの対処法を作成すると、それにより言霊さまが出てきて、本当に事故を起こすので口に出したり準備をしたりするのはやめろというのが言霊神話の悪い面です。

東京電力福島第一発電事故以降は、「がれきを処理するロボットは作らなくて良いのだ、なぜなら絶対に安全だから」というような安全神話で考えることはできなくなりました。関係者が「想定外の天災だから責任は及ばない」というような考えを持っていたとは驚きですが、今後はむしろ、どのようなリスクをとれば安全に復旧できるのか、を想定しておくことが重要になるでしょう。

最後にアタマの体操。「虎穴に入らずんば虎子を得ず」というのは、danger ですか？risk ですか？「混ぜるな危険」というのは、danger ですか？risk ですか？「虎穴に入らずんば虎子を得ず」はrisk についての表現。混ぜるな危険というのは狭い意味での danger、についての表現です。

6 エリートパニックとウワサの法則

次にエリートパニックという話題に移ります。これも東京電力福島第一発電事故の例を出しましょう。SPEEDI の件です。緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム（SPEEDI）というのがあり放射性物質拡散をかなり正確に予測していたにもかかわらず、そのデータが公表されなかったことが後に分かった事件です（外務省を通じてアメリカ軍には知られていたことも大きな問題になりました）。

これは大変なことです。原発事故が発生した時、どの方向に放射能物質が拡散するのかを予測することが目的のシステ

ムが、原発事故に際して使われなかったというのですから。そもそも、こうしたシステムを使うまでもなく、放射性物質は、地形と風の影響を受けることは明白です。事故の直後は南東の風も吹いていたため、北西に流れていきました。もし、真冬で、常に北風が吹いていたなら良い悪いは別として、放射性物質は南の方へいつていたかもしれません。たまたま、南東の風が吹いていて、それがかなり影響した。そうすると放射性物質というのは風に乗りますので、北西に行くわけです。しかもどのようなところを通るのかというと、低いところ。つまり必ず川沿いを通るのです。

相当なお金をかけて開発した SPEEDI という国のシステムを、肝心な時に使わなかったのはなぜでしょうか。理由のひとつとして、様々な前提のもとで計算したものにすぎないデータを公表すると、人々を混乱させ、パニックを引き起こしかねない、ということが言われていました。

しかし、社会心理学的には、仮にデータを公表してもパニックにはならなかったと思われます。パニックになる状況というのは、人が沢山いて、出口が一か所しかないような場合です。出口が沢山ある場合や、逆に、飛行中の飛行機の中のように出ることが全く不可能な場合にはパニックはほとんどおきません。要は、中途半端に出口がある場合はパニックになり、人はどこでも逃げることができる場合、実際パニックになることはないのです。東京電力福島第一発電事故に関しては、SPEEDI のデータ情報があれば、「原発から半径 20Km 以上なら安全」のような考えにはならなくてすんだはずなのです。

むしろ、この情報が無かったせいで、原発の北側の浪江町などに住んでいた多くの人が移動しやすいという理由で請戸川沿いを上流に移動していき、20 キロ以上離れた場所で一泊したのです。遠いから安全だろうと考えたため、実際には放射性物質が拡散しているようなところで夜を明かすということになってしまったのです。私の立場から申し上げますと、放射性物質がある方向に逃げるようなことが、情報を隠したことによって引き起こした人災だと言うことすら可能です。

このような事態のことを社会学者のキャスリーン・ティアニーはエリートパニックと呼びました。

つまり、情報を持っている人だけがパニックになってしまい、パニックになったらどうしようとパニックを起こしているだけだということです。危険物の管理者はそのようなエリートパニックに陥らず、情報を適切に流していく必要があります。正しい情報ほど、効く薬はないのです。正しい情報があれば人はそれほど混乱しないのです。皆さまは、危険物取り扱いのエリートですので、1 つアドバイスをしますと、「何かを隠した方が良い」と思ったら、「自分はいまパニックになっているのではないだろうか」と考えてみる必要がある、ということになります。

正しい情報は、パニックを起こしません。社会心理学にはウワサの法則というものがあるので、それを説明してみましょう。この法則を提唱したのはアメリカの心理学者・オルポートです。彼はウワサの流布量について、「 $R \sim I \times A$ 」という仮説的な式を提唱しました。この式で、 R =ウワサの流布、 I =情報の重要さ A =情報の曖昧さです。「 $\sim$ 」は比例するという意味を表しています。この「 $R \sim I \times A$ 」という式の面白いところは、“曖昧さ”か“重要さ”がゼロなら、ウワサは流れない、ということを述べている点にあります。

曖昧だけれど重要ではないことは、ウワサになりません。例えば、「どの歯ブラシが良いか」などがそれにあたります（だから、そうした情報を多くの人に伝えようとすれば、広告・広報が必要になるのです）。重要だけれど曖昧ではないこともウワサになりません。例えば「選挙の結果（得票数）」がそれにあたります。得票は一票単位で正確に発表されますが、この細かい正確さが重要なのです。もし選挙管理委員会からの情報が「△△候補、約 1 0 0 0 0 票で次点に約 2 0 票差で当選」というものだったら、多くの人が憶測を流すことになると思います。重要な情報に空白が起きると、人はそれを埋めようとして憶測を始め、その憶測を人に流します。それがウワサというものになるのは、重要だからこそです。

そして、ウワサを拡散しない、パニックを防ぐ、という立場にある人は、ウワサの法則を常に考慮し、常に、重要な情報が曖昧にならないように心がけるべきだと思われます。情報を隠してウワサやパニックを防ぐことはできないと心得るべきだということを、心理学者たちは主張しているのです。

7 釜石の奇跡、石巻の悲劇

再三の震災ネタで申し訳ありませんが、釜石の奇跡と言われている事例があります。これは、釜石市において約 3 千人の小中学生の生存率が 99.8%だったという事例です。これの何がすごいのかと言うと、群馬大学の片田敏孝教授が以前から防災教育のプログラムを実施していて、その成果が出たということです。また片田先生は「災害で人が死なない」という目標を立てていました。その際、全員をどうにかするというマス（大量）で考えるのではなく、一人一人が確実に生き延びることだと再定義し、生き延びることを小中高生に教えたということです。津波の場合、生きるためにどうするのかというと、それは避難になります。

しかし、今回の震災の例を見るまでもなく、それが極めて難しい。その難問に対して、片田先生は、3つの原則を作って防災教育を行っていたのです。私は片田三原則と呼んでいます、それは以下のようなものです。

第1に想定にとらわれるな。

第2に最善をつくせ。

第3に率先して避難者になれ。

これを見ると三番目だけが地震・津波に関係することです。第1、第2はむしろ一般的なキャッチフレーズです。

想定にとらわれるな、という言葉は極めて重いものです。片田先生がおっしゃっていることは、想定するな、ではありません。訓練も想定もし尽くしたうえで想定にとらわれるなどと言っているのです。だからすごいわけです。想定にとらわれずに、その場所で最善を尽くしましょう。そして率先して避難者になれというわけです。皆様方の職場でも職場によって異なってきますが、想定をやり尽くしたうえで、想定にとらわれずに最善を尽くすというのが原則です。

そして、片田先生がさらにすごいのは、小学生、中学生、保護者にそれぞれ違うやり方で防災教育を実施しているところです。小学生に対しては、波は時速 115km で来るとしたら（これは、東北大震災の時の陸地に近い場所での実測値）、30分で何キロ近づいてくるでしょうというような計算をさせるのです。中学生に対しては、お前らがキーなんだ。お前らが最初に逃げるんだ。逃げていれば後でみんな付いて行くから、などと鼓舞します。

保護者にはどのように説明したのか。親に紙を配って何か言ったところで誰も真剣に読まないことは明白です。なので、授業参観の時に防災教育を組み込んだのです。時速 115 キロの津波がきます。〇〇ちゃんのうちは海岸から何キロ離れますか？などという問題を出すわけです。先生が、〇〇ちゃん地震が起きたらどうしますかと尋ねます。「お母さんから、まず家に帰りなさいと言われてる」などと答えるわけです。お母さんの仕事場は家から何キロはなれていますか？車が渋滞したらどうしますか？津波が来るのと、お母さんが戻ってくるのはどちらが早いですか？などという問答をすると、津波のほうが早いということがわかります。ではどうなるかということを聞けば、「津波にのまれて死んじゃいます」ということにならざるをえない。子どもたちが、そこまで言うと親も「子どもを家に戻しちゃ危ない！」と気づくわけです。「地震が起きたら、それぞれ逃げよう。落ち合う場所を決めてここで会おう。お母さんも必ずそこに行くから、あんたもここにきなさい」などという話を家族ですればみんな避難できるようになるのです。

心理学の概念に「宛先」という概念があります。みなさんのメールとかハガキも住所（アドレス）がしっかり書かれていないと、届きませんよね。それと同じで、小学生という宛先には、小学生に伝わるように伝えなければいけないのです。保護者という宛先には保護者に届くようなやり方で伝えなければならない。コミュニケーションと言うのは、宛先に応じて、形を変えていかなければならないということを、ナラティブ心理学（語りの心理学）という領域では強調しています。片田先生の実践は、宛先ごとに異なる手法で内容を届けていたので、結果として 99.8%の生存率ということになったのだ

と思います。

もちろん、この地域にもハザードマップがありました。しかし、その想定は 100 年に一度程度の地震が対象でした。その想定で避難所などが設定されていました。実際は 1000 年に 1 度の津波が来たので、想定を遙かに超えて津波が内陸まで押し寄せました。もし、釜石の生徒達が、想定にとらわれていたら、おそらく多くの人が流されてしまったと思われます。しかし、先ほどの片田先生の三原則の第一は「想定にとられるな」でした。そして次に「最善をつくせ」さらに最後に「率先避難者になれ」でした。ひとりひとりが、逃げた結果、ほぼ全員が助かった、という事例だったのです。

この事例は防災教育のなせる成果であり釜石の「奇跡」ではないということも可能です。ある TV 番組のインタビューで中学生が「これは奇跡じゃない、当然だ」というようなことを答えていた場面がありますが、それも頷けます。

逆の例をお話するのは気が重くなりますが、石巻の悲劇というのもあります。大川小学校です。児童 74 人、教職員 10 人が死亡または行方不明となりました。小学校という最も安全が保証されなければいけない場にしながら、全校生徒 108 名の約 7 割にあたる 74 名が死亡・行方不明になってしまったのです。

2012 年 1 月、石巻市教育委員会によるマニュアルの不備を認めた記者会見があったのですが、そのマニュアルには「近隣の空き地・公園等」とだけ書かれていたそうです。2011 年 3 月 11 日の午後 2 時 46 分に地震が発生しました。まずは最初の想定どおり校庭に皆が出てきました。点呼をとりました。寒い日だったそうです。(当日は校長が不在のため) 教頭以下が校舎内で、どこに避難すべきか検討していたといいます。マニュアルには高台に逃げるとなっていたましたが、当日雪が降っていたので、裏山を上るのは滑ったりして危ない、木が倒れてくると危ない、などといって裏山には行けずにいました。そして 50 分間ほど協議をした後、校庭より高いところに逃げることになり、近くの川の堤防に逃げることになったというのです。まさか、津波が来るとは思っていない。事前の想定ではそのように想定にされていないから、川の堤防は高いから安全だろうということで移動したらしいのです。

これはマニュアル不備の問題でしょうか？マニュアルの不備が問題というよりは、手順主義でやるのが問題なのだと思います。群馬大学の片田先生による三原則は「想定にとられるな」が最初にあったことを思い出してください。マニュアルは当然あるべきです。しかし、マニュアルは手段にすぎない。原理原則のない小手先の事だけを書いているのはダメなのです。命を守るということが本当に考えられたマニュアルだったのか、また、それをどのように使うことが命を守ることになるのか、が問われるわけです。

マニュアルがあっても、手順主義ではなく、原則主義であれば、臨機応変にできるのです。原則主義というのは良くないように思われるかもしれませんが、ここでは 1 人 1 人の命を守る、ということです。釜石の奇跡の例に戻ります。子どもたちのインタビューを読みますと「避難所に指定された所に来たけれど、下を見てみると津波が来ている。ここだってヒビが入っている、だからさらに安全なところに行こう」などということが沢山でできます。

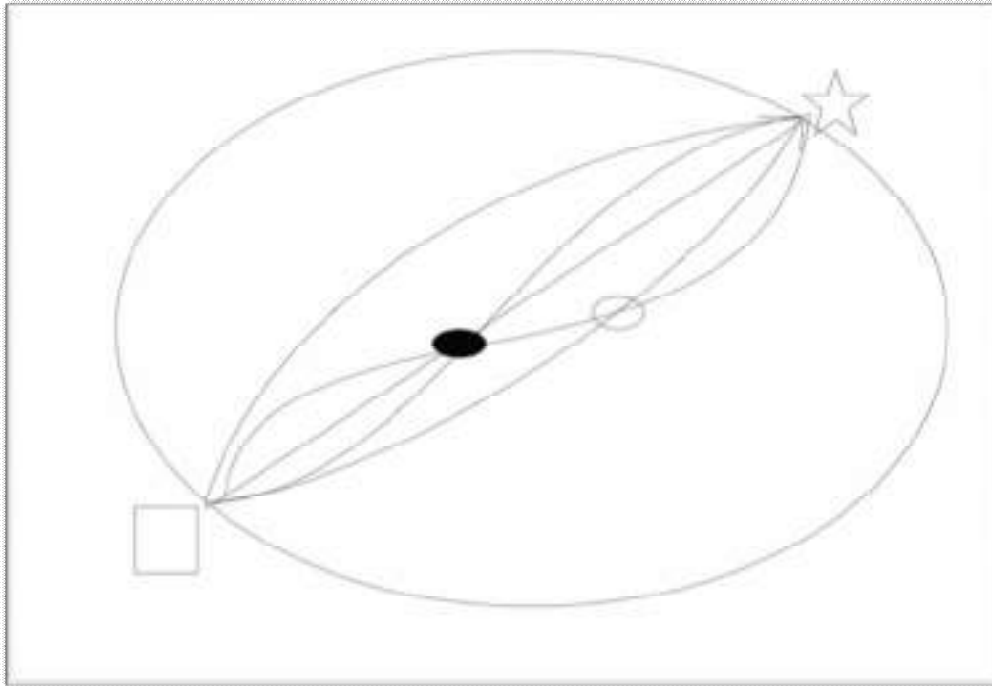
釜石の奇跡と、石巻の悲劇から学ぶことは、理念や原則をしっかり立てると言うことだと思います。近ければ近いほどブレてしまうわけで、遠くを見てると、ブレないというわけです。

8 北極星的展望を持て！

いよいよ最終コーナー。北極星的展望を持て！ということを最後に申しあげたいと思います。北極星的展望とは、より遠い目標のことです。私たちは、ややもすると手段と目的を間違えてしまいます。例えば、良い高校に行くなど、それは何かの手段でしかないのに、我が子に「良い高校へ行け！」などと、それを目標にしてけしかけてしまうのです。会社に行くことも同じですが、出世したいとか給料を沢山もらいたいということも、手段であるはずなのに、それらを目標にしてしまうことがあり、そうするとすぐく視野が狭くなってしまいます。部下やお子さんの指導をするときも、手段が目標になっていて視野狭窄を起こしていることが結構あります。目標を到達するための道と言うのは、様々な道があり、手段

の一つがダメになったからといっても、他にもあるということを考えることが大事ではないでしょうか。

下の図で見ると☆が北極星。たとえば最短の道を行こうとした時に行き止まりだったらどうするか？図では●で表して見ましたが、そういう時、遠くを展望することができれば、あたふたすることなく、他の道を探ることができるでしょう。



目の前に何か障害物があるとき、遠い目標を持っていれば他の道がかならず見つかるはずです。

人生も同じで、北極星的展望として、皆さまそれぞれライフステージがあると思いますが、遠くの視点に立てばたつほど、複数の経路が見えてくると思います。人生ですので、道からそれることもあると思いますが、また、目標をもっていれば、戻ることもできます。目標を見失うと、ちょっとしたことで道に迷ってしまいます。人生においても危険物取扱についても遠い展望を持っていただいて、複線的な経路を想定して、リスク管理をしていただきたいと思います。

対人援助学 & 心理学の縦横無尽

(2 0)

TEA(複線径路等至性アプローチ)、世界を駆ける(4)

2016年7月横浜 ICP、9月ポーランド、10月イタリア、11月ノルウェー

サトウタツヤ (総合心理学部)

1 前口上

TEA (複線径路等至性アプローチ)、世界を駆けるというシリーズはこれまで3回、不定期に発表させてもらってきた。

「世界を駆ける(1)」は2012年のイタリア、ブラジルであった。「世界を駆ける(2)」は、2013年の活動報告でイタリア、デンマーク、イギリスでの活動であった。「世界を駆ける(3)」は、ブラジル、デンマーク、オランダ・デンマークでの活動であった。いずれも主題は TEA (複線径路等至性アプローチ) である。

複線径路等至性アプローチとは、システム論に基づく質的研究法的一种である。おかげさまで国内外から関心をもってもらうことができおり、本誌でも既に3回関連した活動記録を掲載させてもらっているのご参照いただきたい。

2012年1月イタリア、3月ブラジル

<http://www.humanservices.jp/magazine/vol8/16.pdf>

2013年3月イタリア、デンマーク、5月イギリス

<http://www.humanservices.jp/magazine/vol13/17.pdf>

2014年3月ブラジル、4月デンマーク、8月オランダ、デンマーク

<http://humanservices.jp/magazine/vol18/17.pdf>

2015年度はなぜきちんとした活動ができていなかったのか、ということについては個人的にも内心では忸怩(じくじ)たる思いがある。しかし、それは置いておいて、2016年度の活動をまとめておきたい。

2 2016年7月横浜 ICP

2016年7月24-29日、パシフィコ横浜で第31回国際心理学会(ICP)が開催された(大会委員長・繁樹算男帝京大学教授)。日本では1972年に引き続いて2度目の開催である。

7/25、イタリアのセルジオ・サルバトーレ教授が企画した「Cultural differences and social development」においてコメンテーターを務めた。

7/26には、デンマークのヤーン・ヴァルシナー教授が企画した Thematic Session 「Development of qualitative psychology in Japan: What can we contribute to the world?」において、「Trajectory

Equifinality Approach (TEA)」について発表した（実は、どうしても抜けられない事情があり、関西大学・木戸彩恵准教授に代読してもらった）。



なお、時間は前後するが、ICP の直前 7 月 22 日（金）に立命館大学 OIC において【総合心理学部開設記念セミナー・文化心理学の新展開；デンマーク・オールボー大学ヴァルシナー教授を迎えて】が開催された。デンマーク・オールボー大学 Jaan Valsiner 教授やイタリア・サレント大学 Sergio Salvatore 教授を迎えての記念シンポジウムである（ちなみに両教授ともかつて立命館大学の特別招聘教授として大学院の授業を受け持ったことがあり、立命館大学への親近感も多大なものがある）。これに対して立命館大学総合心理学部は安田裕子准教授が司会を務め、サトウタツヤ教授（私です）が解説を行い、森岡正芳教授、齋藤清二教授がコメントをするという布陣。この他にも川野健治教授や衣笠総合研究機構のやまだようこ教授、政策科学部の稲葉光行教授、教育推進機構の山口洋典准教授が参加した。

懇親会は、佐藤隆夫学部長による挨拶で始まった。総合心理学部の 1 回生数名もシンポジウム・懇親会に参加してくれたことは特筆に値する。





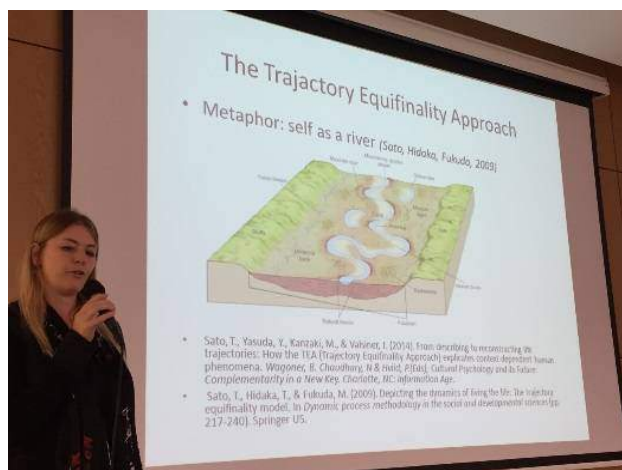
3 9月ポーランド・国際対話的自己学会

この国際学会は2年に1度開かれるもので、今回はポーランドで開催された。対話的自己理論の創始者であるハーマンズ先生がウェルカムスピーチをするのが一種の名物である。



さて、この学会では、招待シンポジウムを企画するという荣誉に恵まれた（単に名誉であるだけでなく、参加費も半額にディスカウントされている）。

このシンポジウムではアグニエスツカ・コノプカさんが独自の解釈で、川メタファーとしての TEA（複線径路等至性アプローチ）という説明をしてくれた。西洋の理論は一般に何かを積み上げていくようなものが多いが、コノプカさんは川メタファーでうまく TEA（複線径路等至性アプローチ）を説明してくれた。



さて、ポーランドの学会ということもあり、学会会場がある Lublin の近くのマイダネク収容所を訪ねることになった。第二次世界大戦時のドイツのユダヤ人収容所としては、アウシュビッツが有名だがマイダネクもなかなかの収容所であったようだ。



人類の負の遺産を身近に感じた私たちにできることは何なのか、色々と考えさせられた。

4 10月イタリア Idiographic Approach to Health

10月にはナポリ。イタリア・サレント大学のセルジオ・サルバトーレ教授に誘われて「健康への個性記述的アプローチ」という研究集会に参加した。

「See Naples and Die(ナポリを見て死ね)」という程の風光明媚な土地なのだが、天候に恵まれなかった。ゴシック様式の教会。



天井はこんな感じ。そしてピザ！でかい！



学会は University of Naples Federico II で行われた。歴史を感じさせる非常に重厚な大学であった。初日はあるセッションの司会と指定討論を任された。



二日目は講義室のようなところに場所を移し講演。私は研究発表をした。東京電力福島第一原発事故によって避難を余儀なくされた方の話を交えながら健康への個性記述的アプローチについて発表した。



そして、その日はある教授のお宅でパーティィ。



院生さん達（彼女達はほぼタバコを吸っていた）と一緒に記念写真。

5 11月ノルウェー 社会&コミュニティ学会

トロンハイムにあるノルウェー科学技術大学（Norwegian University of Science and Technology; NTNU）で行われた。トロンハイムはノルウェー中部に位置するノルウェー第3の都市で、ノルウェー王国最初の首都である。この学会は国内学会でありながら、様々な国の研究者が発表するし、学部生も発表したりする不思議な学会であった。私は記号と文化心理学について講演した。



初日の懇親会はピザパーティ。しかもアメリカンピザの店、そしてアルコール抜き！パレスチナからの研究者と知り合いになったのは、大きな出来事でした。

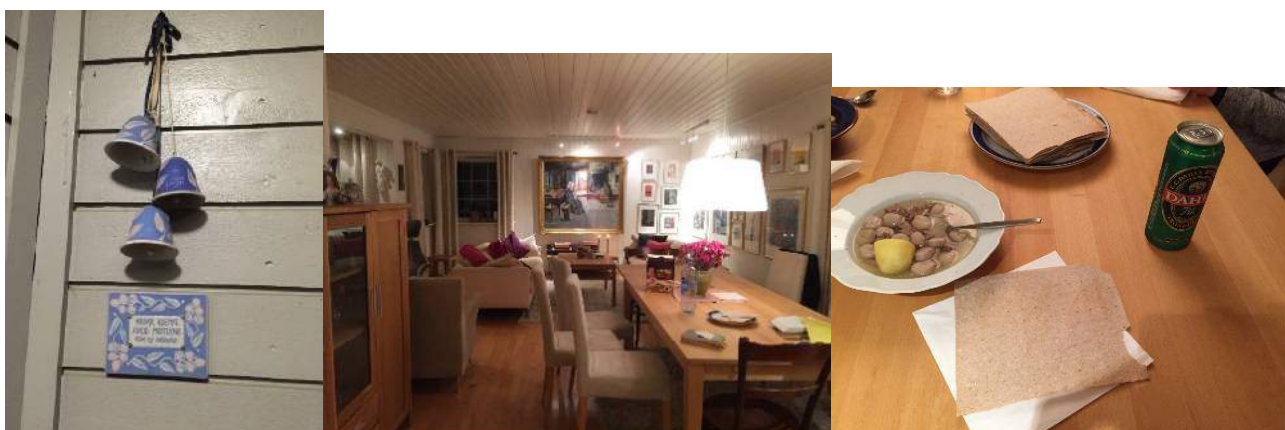


ロシアからの研究者たちとも仲良くなりました。ノルウェーの院生たちとも仲良くなりました。



口が油っぽすぎて、ワインでも飲まずにはいられない！ということでホテルに戻ってきてからロビーで二次会。ワインを一杯。私の対面にいる女性はコペンハーゲン大学准教授の村上享子さん。

二日目の夜は、Hroar・Klempe 教授のご自宅でホームパーティ。ノルウェーの伝統料理であるスープ料理一品というシンプルなパーティでしたが、ビールは沢山あり、大いに盛り上がりました。

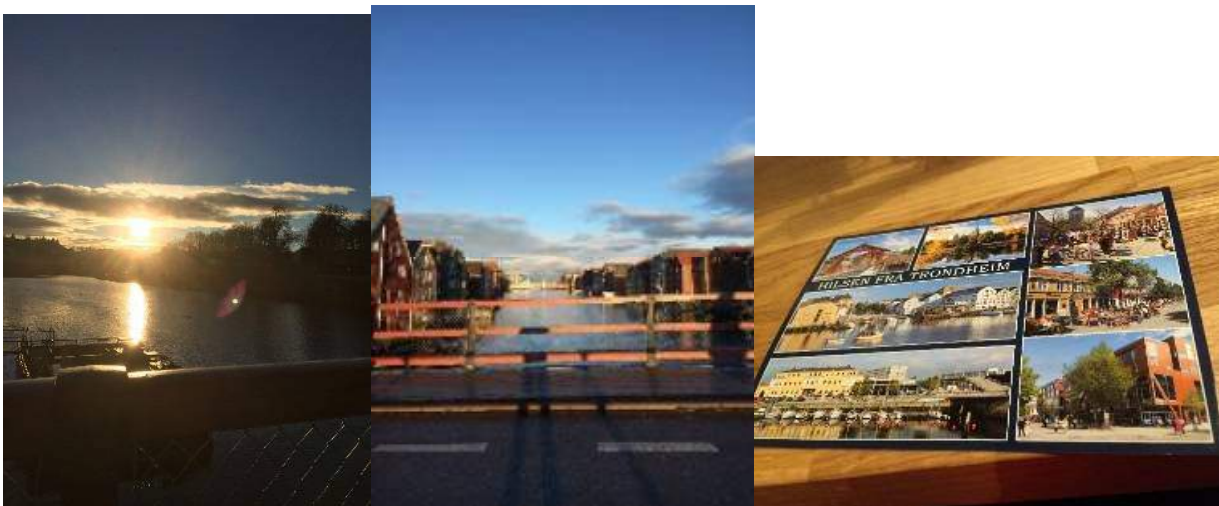


このパーティで、とある人と一緒にレジリエンスとは何か、ということについて考えました。メモの写真を載せておくが、この図のポイントはV字回復モデルでなくていいという点。そして、分岐点を設定することができれば他の事例における介入のモデルとなるだということである。今後考えていきたい点である。



最後に記念写真！

帰国の日、ちょっと周辺散歩。ノルウェーは緯度が高いので午後1時過ぎであるにもかかわらず、太陽はこれくらい低い。



6 まとめに代えて 文化的道具と記号

ノルウェーで見つけたこれは何？





卵立てなのである。私たちは私たちの周りの事物をそのものとして見るよりは記号を介して見ているものなのだ、というのが文化心理学の基本的考え方である。そしてこの考えは、ロシアの心理学者・ヴィゴツキーの考えに基礎を持っている。目の前の物質がどのような道具なのか、ということは記号の働きによるものであり、記号の働きを共有することが文化なのである。

7 蛇足

なお、2016年度の非常に大きな出来事として、TEA（複線径路等至性アプローチ）に関する英語の著書が刊行されたので紹介しておこう。

Sato, Mori and Valsiner (2016). *Making of the Future: The Trajectory Equifinality Approach in Cultural Psychology*. Information Age Publishing.

<http://www.infoagepub.com/products/Making-of-The-Future>

初めて TEA（複線径路等至性アプローチ）に関する研究を行ったのが 2014 年 1 月 25 日。

英語で本を出すようになるとは思ってもよらなかったが、心理学や人間科学の方法論に 1 つの可能性を提唱することができて、率直に嬉しく感じている。



この日のシンポジウムについては下記を参照されたい。

<http://www.ritsumei.ac.jp/mng/gl/koho/headline/topics/2004/01/ningenkagaku.htm>

蛇足の蛇足ながら TEA のサイトもリニューアルされているので参照されたい。

<https://sites.google.com/site/kokorotem/whatistem>

対人援助学 & 心理学の縦横無尽

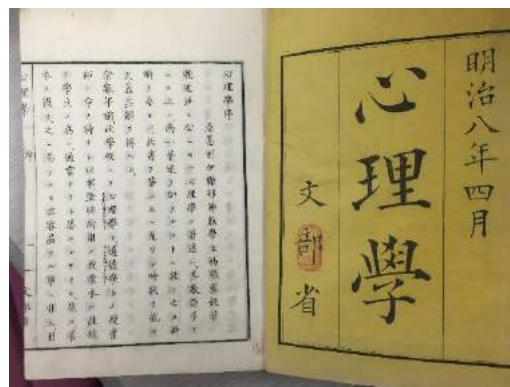
(21)

日本で最初の『心理学』という本を入手した！ 20年来の悲願達成！

—日本で最初の心理学の本は？心理学だけどPsychology じゃない！

サウタツヤ（総合心理学部）

タイトルの通りで、これ以上は特に言うことも無いのだが、日本で最初の『心理学』という本を入手することができた！日本の心理学史に関心を持ち始めてから、とにかく入手したいと願っていた。過去に一度、とある古書店のウェブサイトでこの本を見つけて購入を申し込んだことがあるが、その時は既に売り切れてしまっていた。だから、今回も実際に買えるという連絡をもらえるまでは、かなり緊張していた。本当に入手できて感無量である。ちなみに、この本の内容は既に国会図書館でデジタル・アーカイブ化されているので簡単に読むことができる。したがって内容について新しいことを知れるわけではない。実物を手に入れることにこそ価値があるのである。思わず記念写真を撮りたくなるウレシサなのである。



さて、今の日本では誰も知らない人がいないという心理学という学問名。この心理学というタイトルが付いた最初の本は、文部省から発行された『心理学』である（そのまんま！）。1875（明治8）年のことであった。この本はアメリカの本の翻訳書で、西周（にし・あまね）が翻訳者であった。

しかし、この「心理学」はPsychologyの訳ではなかった。

日本で最初の『心理学』という名前の本(1875)はHaven's **Mental Philosophy including Intellect, Sensibilities, and Will** (1857) である。著者のヘヴンはアーマスト大学の知識・道徳学教授であり、『Moral Philosophy (道徳哲学)』『History of science and modern philosophy (科学と近代哲学の歴史)』などの著書がある。

西周は冒頭の注において、書名は「メンタル、フィロソフィー、インクリューゼンク、インテルレクト、センシビリチース、エンド、キル」と題し知情意三部を包括せる心理哲学という義なり今約して心理学と名く（西、1875）と、記していたから、彼が Mental Philosophy を心理学と訳したこと、また、その意図は明白である。

では、西周はPsychologyをどのように訳していたのだろうか？

彼はこの書においては、「Psychology」を「性理学」に対応させていた。

ここで言う「Psychology」は近代心理学以前の心理学である。つまり、心について哲学的に考える学問としての「Psychology」である。西周はこの日本にとって新しい学問である「Psychology」を従来から日本にあった朱子学的な伝統で理解して性理学と訳していたのである。性理学は今の日本人にこそ馴染みは無いのだが、幕末から明治初期にかけてはよく知られた語であった。なお、当時の性にはSexという含意はあまりなく、むしろNature(性質)などの意味が強かったから、西は人間の性質を考える学問としてPsychologyを捉えていたことが分かる。そして、知情意に関する哲学を心理学という新しい言葉で訳したのである。

さて、この本はその後、1878（明治11）年に同じく文部省から洋装本も出版されている。

1878（明治11）年 『心理学』 文部省 洋装本

である。もちろんHaven's **Mental Philosophy including Intellect, Sensibilities, and Will** (1857) である。

そして、洋装本（上下二巻）も、古書店から入手することができた。うれしい。あまりのウレシさに和装本と洋装本をセットで写真撮影してみた。ほとんどマニア！



これらの合計5冊の本は、やがて立命館大学おおさかいばらきキャンパス（OIC）総合心理学部の陳列棚に飾られることになるだろう。

次なる野望は Haven'~『**Mental Philosophy including Intellect, Sensibilities, and Will**』x の原書を入手すること。もし洋書の現物を入手できれば、コレクションとしては完全になるだろう！！

最後に、西周(にし・あまね；1829-1897)について紹介しておこう。

彼は、幕末の人。津和野藩士→脱藩→幕府役人→明治政府官僚という道を辿った。なお、江戸幕府の役人として津田真道(1829-1903)らと共に 1862 年からオランダ留学(9 月出発、翌 4 月着)、ライデン(Leiden)大学教授フィセリング(Vissering, S;1818-1888)に師事して「国家学(Staatswetenschappen)」の基礎として自然法、国際法、国家法、経済学、統計学の「五科」の講義を受けたことから、海外の思想を日本に導入する役割をとることになった。軍人勅諭・軍人訓戒の起草者として戦後の一時期は(悪)名が高かったが、近年再評価の機運がおきている。日本に海外思想(特に哲学)を導入するのに力を尽くした。彼が作った訳語は数知れず。たとえば Induction を帰納、Deduction を演繹と訳したのは彼である。彼が作った訳語は日本人のみならず、中国・韓国など東アジアの人たちが西洋思想を知るために大変役に立ったと言われている。



写真はウィキペディアより、。

[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A5%BF%E5%91%A8_\(%E5%95%93%E8%92%99%E5%AE%B6\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A5%BF%E5%91%A8_(%E5%95%93%E8%92%99%E5%AE%B6))

対人援助学 & 心理学の縦横無尽

(22)

TEA(複線径路・等至性アプローチ)から見たキャリアの捉え方 注1

サトウタツヤ・川本静香

1 径路としてのキャリア

キャリアという概念であるが、私見によれば、能力的に捉える考え方と経験の総体として捉える考え方が存在する。そもそも、日本ではカタカナでキャリアと書いた時の原語は二つある。1つは **carrier** でありもう1つは **career** である。前者は何かを持つ、運ぶという意味に近く、運輸業や空母がキャリアと呼ばれることや、携帯電話などの回線業者がキャリアと呼ばれること、さらにはキャリアバッグなどの連想から、人口に膾炙している。後者についてはキャリア官僚やキャリア形成などの用例があるものの、このキャリアが **career** であって **carrier** とは異なる語だということが一般的に良く知られているとは思われない。

キャリア官僚と言う時のキャリアは前述のように **career** である。この語は後に述べるように経歴という理解が最も正しいと思われるが、日本では国家公務員におけるキャリア（国家公務員I種試験等に合格した幹部候補生の俗称＝エリート）という語のイメージが強く、アタマの良い人＝知的能力がある人、と理解されていることも多い。この場合のキャリアの対義語はノン・キャリアであり、キャリアが経歴であるとは理解しづらい要因を作っている（能力であればノンをつけても意味は通じるが、経歴だとすると経歴が無いということが理解しづらい）。

繰り返すが、キャリア官僚やキャリア形成という語のキャリアの原語は **career** であり、経歴なのである。この語はラテン語の **Carraria**（馬車などの乗り物の通り道＝轍）が語源であることを知るとそのことはよく分かる。轍という意味から経歴とか資格という意味に転じていったのである。詩人・高村光太郎がその詩「道程」において、「僕の前に道はない／僕の後ろに道は出来る」と高らかにうたいあげたが、これはまさに **career** としてのキャリアを表現したものに他ならない。曲がったり迷ったりしても、自分が歩いてきた道こそがキャリアなのである。厚生労働省が2002（平成14）年7月に発表した「キャリア形成を支援する労働市場政策研究会」報告書においてキャリアは「一般に「経歴」、「経験」、「発展」さらには、「関連した職務の連鎖」等と表現され、時間的持続性ないし継続性を持つ

た概念として捉えられる」とされている。

さて、キャリアを経歴として捉える大前提は職業選択の自由とある種の流動性である。たとえば日本の江戸時代（封建制）においては国民の8割が農民であったし、幕府の重要役職（将軍や老中）は世襲制であった。このような時代においてキャリアを考える意義はないことは明らかであり、キャリアを考えるのは極めて近代的な出来事であることがわかる。心理学史に目を転じれば、職業指導のカウンセリングという形で職業生活に関心がもたれるようになったのは、アメリカ・ボストンに職業指導室が設置されカウンセリングが行われたのが嚆矢である（1908）。その後、スーパーが独自のキャリア発達理論の考案に至った。彼は、職業の発達ではなく、キャリアの発達という考え方を重視し（Super, 1980）、ライフ・キャリア・レインボーというアーチ型のキャリアの捉え方を提唱した。

2 プロセスとして理解するものとしてのキャリア；デザイン・ドリフト・トランジション

キャリア概念には様々な広がりが見られるが、若林（2006）によるとキャリア概念は以下の4つに分類される。

- 1 昇進や昇格の累積
- 2 医師・教授・法律家・聖職者など伝統的な専門職従事者
- 3 生涯を通じて経験した一連の仕事
- 4 職業に限らず個人が経験した社会的役割や地位の系列

これらの定義はいずれも、キャリアを時間軸の上で連続的なものとして捉えていることがわかる。Herr & Cramer (1984) も、キャリアの見方について、Super の職業的発達理論の提唱をもって、静態的（スタティック）な「職業(Occupation)モデル」から動態的（ダイナミック）な「キャリアモデル」へ変貌を遂げたと評価している。

キャリアが、職業の獲得やその遂行ではなく、人生上の一連の流れとして位置づけられるのであれば、その移行も問題になる（Transition＝トランジション）。また、よりよい移行を可能にするための準備や支援も必要となってくる（Design＝デザイン）。ただし、こうして準備したものが必ずしも首尾良く実現されるとも限らないし、ましてや準備をしていなければ、周囲にながされるだけになってしまう（Drift＝ドリフト）。

かくして、キャリア・トランジション（移行）、キャリア・デザイン（計画）、キャリア・ドリフト（漂流）ということが、キャリアの実践や研究で重要な概念として注目されるようになってきたのである。これらの概念は、キャリアを社会や会社が決めるのではなく個人の側が決めるという意味も含まれている。キャリア・ドリフトにしても、流されるということと消極的な意味が大きくなるが、流れに乗っているという意味の積極的な意味も

ある。金井（2002）は、キャリア・デザインにおけるデザインは節目節目のことであり、実際には、ドリフトしていることもあるし、そこには積極的な意味もあるとしている。なお、トランジションには、「フルタイムの 学校教育を修了して、安定的なフルタイムの職につくこと」という限定的な定義もある（溝上・松下 2014）。この場合には、学校／学生という状況から社会／労働者への移行に特に焦点が当てられていることになる。

金井（2002）がその執筆中に直接会って話を聞くことでその考え方に影響を与えたのが、クランボルツ（Krumboltz and Levin, 2004）による計画された偶発性理論（Planned Happenstance Theory）である（金井、2010）。計画された偶発性理論とは、キャリア形成の実に 8 割までが偶然に起きた出来事によって差配されると考える考え方で、これにはクランボルツ自身の人生経験が投影されている。すなわち彼は、心理学者になるにあたって、全く計画などしておらず、「専門を決めないと退学だ」という警告を受け取った時に、当時熱中していたテニスのコーチに専門の選択を相談したのであるが、そのコーチが心理学を専攻していたため、クランボルツ本人も専攻を心理学に定めたというのである。その後の彼がたゆまぬ努力をして大学教授の職を得たことは想像に難くないが、その選択においては偶然が支配していたということを彼は強調したいのである。

3 TEA プロセスを理解して記述する質的研究法

キャリアを主体的で時間的に連続するものとして捉えるのであれば、そのトランジションをどのように捉えればよいだろうか？従来は、職業に対する適性を調べるために、一種の適性検査が開発され、結果として、キャリア適性は内的で能力的なものとして見なされがちであった。こうした見方は、プロセスとしてのキャリアを捉えるためには不十分であることは論を俟たない。プロセスを描く研究法が必要となる所以である。そして、そこで使用する研究法は、デザインもドリフトも偶然の示唆も描くことが可能であることが望ましい。

TEA（複線径路等至性アプローチ）は「複線径路等至性モデリング（TEM）」、「歴史的構造化ご招待（HIS）」「発生の三層モデル（TLMG）」を統合・統括する考え方である（Sato, Yasuda, Kanzaki & Valsiner, 2014）。TEA のフラッグシップ（旗艦）にあたるのが TEM である。TEM はヴァルシナー（Valsiner）が、発達心理学・文化心理学的な観点に等至性（Equipfinality）概念と複線径路（Trajectory）概念を取り入れようと創案したもので、人間の経験を時間的変化と社会的・文化的な文脈との関係で捉え、その多様な径路を記述するための方法論的枠組みである（サトウ・安田・木戸・高田・ヴァルシナー、2006）。

TEA については既に 10 年以上の時間的積み重ねの中で日本語英語で様々な文献を読むことが可能であり（サトウ、2009；安田・滑田・福田・サトウ、2015a, b；安田・サトウ、2017 印刷中）、本稿では TEM に絞って、キャリア研究との接点を論じておきたい。TEM には様々な概念ツールが有り、それを用いて人生の径路を描くことが可能である。

非可逆的時間・分岐点・等至点・社会的助勢・社会的方向づけについて簡単に説明して

おこう。このうち、非可逆的時間・分岐点・等至点の最小のユニットとなる。

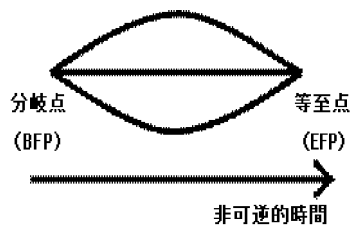


図1 TEMの基本ユニット

非可逆的時間は、時間は決して後戻りしない持続的なものとして捉える考え方であり一時間について他の捉え方もあるとはいえ、TEMの根幹をなす時間の捉え方である。

分岐点は、選択肢が現れる時点であり、そのことについて時間が発生する時であり、記号の内化ポイントでもある。つまり、分岐点は経験が分かれるポイントであり、等至点は経験が収束するポイントである。分岐がなければ複線径路もないし、結果として等至点という概念も必要ではなくなる。また、分岐点において複数の選択肢が現れることになるが、その際に、自分が望む方向へ支援してくれる様々な力を社会的支援(SG)として表し、自分が望む方向から遠ざけようとする様々な力を社会的方向づけ(SD)として表す。SGやSDは、最終的な等至点に対する相対的なものであるから、クランボルツによる計画された偶発性理論が扱うような、その時点においては本人にも意味づけが分からないような「偶然」の出来事なども径路を描く時にうまく取り込むことが可能になる。

4 キャリア研究とTEA

キャリア研究とTEAの接点は大きく二つに分かれる。一つはある個人の職業生活（特に専門職）のあり方を時間とともに見ていく研究である。教師、看護師、など一専門職に就くことだけがキャリアではないことは前述した通りだが、こうした専門職を全うする人生のあり方を描くことがキャリア研究に資することは言うまでもない一専門職に就いた人々が、その人生において、専門性との格闘を通じて人生を紡いでいく様子をモデルとして描くものである。もう一つが、キャリア・デザインやキャリア形成の支援にTEAを用いるというものである。

前者については、TEAを用いた多くの研究が当てはまり、枚挙にいとまがない。保育者の成長プロセスに焦点をあてた香曾我部(2012)の研究、サッカー指導者が海外での貢献事業に参加した際の経験を描く松山・土屋(2015)の研究、心理臨床家の成長モデルを描いた上倉ら(2016)の研究、大卒新人看護師の臨床1年目の経験のプロセスを可視化した山本・中本(2017)の研究、日本語教師の海外教育経験と教師としての成長について異なる2

つのモデルを描いた北出（2017；印刷中）の研究がある。

後者については、デザインという語が文化心理学にとって重要な意味を持っていることも指摘しておく必要がある。デザインの語源はデッサン(dessin)と同じく、“計画を記号に表す”という意味のラテン語 *designare* なのである。いくつかの研究を紹介しておく。キャリア・カウンセリングに TEA を組み込むことでキャリア・アイデンティティ・ワークを提案する番田（2015）の研究、社会人がビジネススクールで学ぶことに焦点をあてた豊田（2015）の研究、ある大学の情報系学部のゼミ出身者の在学中ならびに社会における能動的学習者として振る舞いながらのキャリアの軌跡を描いた岸・久保田（2017）の研究、人材開発論の講義やアクティブ・ラーニングに TEA がもたらす効果を考察した加藤（2017）の研究、などがある。

現在の日本では、高校卒業後、何らかの上級学校への進学が8割以上となっており、大卒後のキャリアや就職後のキャリアのあり方に注目があたりがちである。また、社会人が大学院に進学した際のキャリア形成にも注目が集まりつつある。一方で、高校を卒業して社会に出る人々のキャリアについての研究は少なく、今後取り組まれる必要がある。また、人生の初期における社会的不利をどのように回復していくのか、というような研究もキャリア形成の研究として取り組まれていく必要があるだろう（河合・窪田・河野（2016）の研究はこうした側面に光を当てている）。適性や能力を測定するのではなく現実存在する（実存）個々人のキャリアのあり方についてモデルを作って理解することが当人はもとより後続の人々の参考になるような研究が、TEA によってなされる必要があるのである。

注1 本稿は2017年6月9日（金）法政大学・キャリアデザイン研究会での講演のために準備した内容を元に執筆されたものである。

文献

- 番田清美(2015). キャリア・アイデンティティ・ワーク. 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ(編)(2015), TEA 実践編—複線径路等至性アプローチを活用する—, 新曜社 229-239.
- Herr, E. L. dan Cramer, S. H. (1984). Career Guidance and Counseling Through the Life Span: Systematic Approaches. Boston: Little, Brown & Company.
- 上倉安代・齊藤翔悟・佐藤真理奈・野村規雄・入軽井悦子(2016). 心理面接における初学者の不安への対処と乗り越え方および成長—複線径路・等至性モデル（TEM）による分析— 立正大学臨床心理学研究, 14, 41-54. (Retrieved from http://repository.ris.ac.jp/dspace/bitstream/11266/5739/1/bulletin14_p041_kamikura_etal.pdf)
- 金井壽宏(2002). 働くひとのためのキャリア・デザイン PHP 新書
- 金井壽宏(2010). キャリアの学説と学説のキャリア 日本労働研究雑誌, 52, 4-15.
- 加藤雄士(2017). TEA を活用した アクティブ・ラーニングに関する一考察（1）人材開発論の講義における TEA の活用事例 ビジネス & アカウンティングレビュー, 19,

- 97-115. (Retrieved from
http://www.kwansei-ac.jp/iba/journals/review/BandA_review_vol19_p97-115.pdf)
- 岸磨貴子・久保田賢一(2017). 大学のゼミ活動とキャリア形成：卒業生のライフストーリーから 情報研究：関西大学総合情報学部紀要, 45, 1-22. (Retrieved from
<http://hdl.handle.net/10112/10897>)
- 北出慶子(2017 in press). ネイティブ日本語教師の海外教育経験は、教師成長を促すのか？
 安田裕子・サトウタツヤ(2017 in press) TEMでひろがる社会実装；ライフの充実を支援する 誠信書房
- 香曾我部琢(2012). 小規模地方自治体における保育者の成長プロセス—保育実践コミュニティの形成プロセスに着目して— 東北大学大学院教育学研究科『研究年報』, 60,125-152 (Retrieved from
<http://www.sed.tohoku.ac.jp/library/nenpo/contents/60-2/60-2-08.pdf>)
- Krumboltz, J. and Levin, A. S. (2004) . Luck is no accident: Making most of Happenstance in your life and career. Impact Publishers. (花田光世・大木紀子・宮地夕紀子(訳) (2005) . その幸運 は偶然ではないんです！ ダイヤモンド社)
- 河合直樹・窪田由紀・河野荘子(2016). 児童自立支援施設退所者の高校進学後の社会適応過程—複線径路・等至性モデル (TEM) による分析— 犯罪心理学研究, 54, 1-12.
- 松山博明・土屋裕睦(2015). 海外派遣指導者の異文化体験とレジリエンス：アジア貢献事業による初めて赴任したサッカー指導者の語りから スポーツ産業学研究, 25, 231-251.
- サトウタツヤ(2009). TEM ではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして 誠信書房
- サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・ヤーン＝ヴァルシナー (2006). 複線径路・等至性モデル - 人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して 質的心理学研究, 5, 255-275.
- Sato, T., Yasuda, Y., Kanzaki, M., & Valsiner, J. (2014) From Describing to Reconstructing Life Trajectories: How the TEA (Trajectory Equifinality Approach) explicates context-dependent human phenomena. Wagoner B., Chaudhary, N. & Hviid, P. (Eds.) . Culture Psychology and its Future: Complementarity in a new key (p. 93-104) . Information Age Publishing.
- Super, D. (1980) . A life-span, life-space approach to career development. Journal of Vocational Behavior, 16, 282-296.
- 豊田香(2015). 専門職大学院ビジネススクール修了生による生涯学習型職業的アイデンティティの形成：TEA 分析と状況的学習論による検討 発達心理学研究, 26, 344-357.
- 若林満(2006). 組織内キャリア発達とその環境 経営行動科学, 19, 77-108. (Retrieved from
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaas1986/19/2/19_2_77/_pdf)
- 山本純子・中本明世(2017). 新人看護師が臨床 1 年目の経験を通して活用した看護基礎教育の学び—学士課程卒新人看護師の 3 事例 日本看護医療学会雑誌, 19, 13-20.

安田裕子・サトウタツヤ(2017 in press) TEMでひろがる社会実装；ライフの充実を支援する 誠信書房

安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ(2015a). ワードマップ TEA 理論編 複線 径路等至性アプローチの基礎を学ぶ 新曜社

安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ(2015b). ワードマップ TEA 実践編 複線 径路等至性アプローチを活用する 新曜社

報告書

厚生労働省 (2002). 「キャリア形成を支援する労働市場政策研究会」報告書 2002 (平成14) 年7月。(Retrieved from <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2002/07/h0731-3.html>)